白隱和尚全集（全八卷）總目次

昭和九年五月二十日印刷
昭和九年五月二十五日發行

白隱和尚全集　第五卷
【奥附】

編纂代表　後藤光村
東京市赤坂區田町七丁目三番地

發行兼印刷者　草村松雄
京都市右京區花園妙心寺正法輪社內

編纂所　白隱和尚全集編纂會
東京市赤坂區田町七丁目三番地

發行所　龍吟社
電話赤坂(48)三四〇番
振替東京七〇〇〇〇番

（第一回配本）

と。

さし藻草卷二終

しく青きことを得んや。すべからく知るべし、日々に民を惠むは、日々に其本根を培ふものなり。日々に民を貪るは、日々に國家の根盤を發く者なり。大凡公卿より下庶人に到る迄に、工あり、商あり、巫醫藥師、百工の族迄に、千萬種の人類有れども、皆盡く農民の膏油を舐て立たざる者は半箇も亦無し。民微せば、我輩盡くそれ道路に餓死せんか。寔に知る、民は國家の大本なることを。是故に豐聰太子の如きは、百姓を百の御寶と呼ばせ玉ひけること有難けれ。然るに是れを貪り、是れを苦しめ、是れを惱まし、是れを害せば、千神憎み瞋り、百靈恨み睨んで、天、これに下すに災害を以てし、地、是れが壽算を奪ふて、武運も盡き果て、國脉必ず斷絕せん。子細に看來れば、盡く是れ酷吏の貪殘より起つて、倫臣の邪計より生ず。希くば列國の諸侯、諸方の國君、無聲に聞き、未形に察し玉はば、萬民懷くこと父母の如く、敬すること神の如く、寔に延喜天曆の御代にも劣ることなく、市にうたひ、野に拍つて云はん、嗟、樂いかな

刑にかゝつて、悲しむべし、相續し來る底の家財は盡く沒却して、四壁は伐られて竈下の薪となり、境內は鋤かれて佗人の田畑となり、先祖は是れより依る方なきの野鬼となんぬ。子孫乍ち斷絕す。寔に羨しからざる者は、村民の長家なり。去る程に仁君明主と稱せられ玉ふ人々は、何れも仁心厚くわたらせ玉ひ、御家人は申すに及ばず、遠境邊土の細民に到る迄、晝夜慈悲愛顧の遠慮を廻らせ玉ひ、最初より憍奢を制し、國家の費を恐れさせ玉ふ。奢る則は費多し。多き則は苛政を好む。苛政は常に民を貪り掠む。掠むる則は人民瞋り怨む。うらむる則は其の國必ず亡ぶ。養生書に云く、氣は民の如し。民衰ふる則は其國必ず亡ぶ。氣盡る則は其人必ず死すと。宜べなる哉、氣は一身の本元にして、民は國家の根軸なることを。譬へば此に千尺の老松有らんに、根盤三泉に徹し、枝柯九霄を拂つて、常に千秋の翠光を籠め、遠く十里の風聲を傳へて、龍吟し、蛟瞋るが如くなるも、日々に其本を掘り、時々に其根盤を發かば、老松夫れ久

走る。是れより憍心きざし起り、俄に所々室家を補修し、門閭を營建し、新敷和襪ふみかふて、衣類に付け、調度に付け、次第に榮耀に誇り、華麗を好んで、家財大に費ゆ。是れより竊に邪計を廻らし、奇籌を設けて烈敷細民を貪り掠む。細民憎み恨むと云へ共、各々堪へ忍んで、涙を含んで相隨ふ。外面は伏し隨ふに似たりといへ共、胸中の哀嘆悲傷、何れの處にか歸せんや。是故に民間に謎有り、云く、桶屋の正直なに、村民の長殿とはどうじや。はて村々を削り取るはさと。深山の熟柿なに、長殿の御家とはどうじや。はて人知らず果ては皆禿れて仕舞はさと。皆是れ衆民骨髓に透りて、瞋り恨みて云ひ出す底の暫時の戲言なれ共、村民の長たる人の先祖と、子孫の人々の爲めには、上も無き追善祈禱なるべし。何が故ぞ。長若しこの謎を聞いて恐れ愼しむ則は、子孫必ず相續せん。若し又乍ち仁心を起して尋常細民を憐み救ふ心有らば、子孫日を逐ふて大に繁榮せん。左なくば多くは彼の謎々に少しも違はず、天理に責められ、人

如く、劉項の秦を破るが如く、吾境に入り、吾國を治めて、逐一酷吏の輩を誅して、吾輩の貧困窮餓を助け玉へかし。吾輩の旦暮を安らしめ玉ひてよと、天に訟へ、神に祈る。斯く迄人心離れ背くを、是れを民散ずと云ふ。熟々顧ふに、世に羨しからぬ者は、村民の長家なるなり。五十年來、予が東西二十里が間、村民の長たりし人々の家、大凡數百家の末を見るに、多くは郎當落魄、盲人と成る有り、希有の難病を受けて癈人と成る有り、其中少しも衰滅無く相續し繁昌しもて行くもの纔に八九家、是れは定めて勤役の中少しも貪り掠むる事無き善き仁德の人々の後なるべし。其餘は多くは根を斷ち、葉を枯す。纔に殘り止まる者あるも、多くは白盲靑瞽の類多し。最も傷み悲しむべきは、彼の長家の先考祖家なるめり。其初め微なりし時、苦寒を侵し、煩暑を凌いで許多の艱辛を喫し盡して、歲月を重ね、漸く家業を盛大にす。其盛大なるに及んで、衆民是れを選び勸めて、終に村民の長とす。此において、遠近來り賀し、親眷悅び

は、衆民恨み背きて老ひたるを負ひ、幼きを携へて、佗國に走るを云ふにあらず。境を越えず、佗國へも行かざれ共、民心疎み離る。是れを民散すと云ふ。民聚るとは、衆民悅び慕ふて、佗國を離れ、簞食壺醬して我國に來り聚るを云ふにあらず。民心懷き悅ぶ、是れを民聚ると云ふ。君、仁德有りて萬民を憐み救ひ、酷吏の輩を忌み遠け、毫釐も民を貪り掠め玉はざる則は、衆民悅び懷き、市に謠ひ、野に拍つて云く、我が侯願くば萬歲なれや。此の君の爲めにぞならば、白刄をも踏んづべし、黑火にもまた投じつべし。我が侯願くば萬歲なれやと、民心斯の如く貴び懷く。是れを民聚ると云ふ。若し又國君貪歛にして、專ら酷吏を貴び用ひ、民を貪り掠め苦しめ、金銀を夥しく貯へ納め、國家を困窮せしむるのみならず、左右の近臣までをも逼迫せしむ。此において民衆恐れ憎むこと怨鬼の如く、恨み背き、瞋り罵り、市に哭し、野に悲んで云く、嗟願くば仁人あれや。願くば多く豪傑の武臣を卒して、競ひ來りて文武の紂をうつが

蜂の如くに起ち、怨み叫んで先づ彼の長家を圍んで、門閭を破却し、家財を粉碎す。若し彼の長を捉へば、必ず裂いて食はんとす。其勢折くべからず。果ては城中に込み入り、狼藉せんとす。此において、領內の寺院を傭て、誑し騙して是れを治む。靜謐の後、竊に狗を廻はして彼の張本をさぐり捉へて、或は二十、或は三十、或は磔し、或は誅して、爛骸野に遍し。特に知らず、張本は民にあらず、却て吏と村民の長となることを。譬へば此細民有りて、五箇三箇伴を結んで遠く佗國へ行かんに、佗國の民若し本國の侯を指して、或は罵り、或は謗る事有る則は、彼の細民大に嗔り叫んで、打果す事もまた顧みず、諸國の民皆然り。吏若し先代の仁吏に習て、年の凶豐を考へ、民の否泰を察して、上下利を同うし、高鄙苦樂を共にせば、國君に對して、豈に此の凶態あらんや。窮鼠却て猫を咬むと云はんか。然らば卽ち張本は民にあらず、吏と長とにあらずして何ぞや。故に云く、財散する則は民聚り、財聚る則は民散すと。民散と

多くは郎當落魄して、道路に餓死す。四十年前何某の處の役所に酷吏有りき。人民大に憎み恐る。久しからずして人禍有りて俄に其職を剝がれ、改易せられて牢落す。父は和樂を歌ふて袖乞し、子は軍書を讀んで人の門閭に立つとかたり終て慘然たり。或人の云く、酷に兩般あり、謂ゆる奢と貪となり。奢より出る者は公なり、貪より出る者は私なり。私は多く、公は少し。公は恐るゝ所なし。公然として是れを奪ふ。私は恐るゝ所多し。必ず密に村民の長と語ひ、志を同うし、計を定めて、而して後に官命なりと稱して、恣に貪り掠め、日々に奪ひ、月々に掠めて、終に其利を二つにして、吏と長と是れを分つて公は預からず。是故に長家は月々に繁興して、康藝が高厦を構へ、石崇が堂奧に坐し、絃歌遠く傳へて、轂車轟き鳴る。細民は日々に衰へ、月々に悴けて、妻拏もまた養ふこと得ず。家々に苦しみ哭し、戶々に衰へかしげて、窮餓相煎ず。野に菜色多く、怨恨內に迫る。此において、或は二萬、或は三萬、蟻の如くに聚り、

し。君侯の威權を假借して濫に民を貪歛し、濫に民を惱害し、濫に民を掠め奪ふ。大凡仁義あらん武士の假初にも爲すべき業かは。忘れても有るべき事かは。嗟夫れ儞の後を如何。豈に特り他の國祚を害し、他の國脉を斷つて、而して後に休する者ならんや。人の臣として君の國家を亂る。不忠是れより甚しきは無し。人の臣として君の國祚を斷つ。罪過是れより大なるは無し。死後には必ず無間焦熱の惡處に墮して、倶底恒沙の苦患を受け、火血刀の辛酸を嘗めん。熟熟顧ふに、侯吏品殊に、尊鄙事異なりと云へども、誰か其祖宗なからん。若し其れ果して祖宗あらば、各々泉下に在て、儞が官吏にうつるを見ば、必ず大に啼泣して云はん。焦穀芽なく、酷吏後無し。我が輩久しからずして、必ず祭奠なきの閑神と成り、依る方なきの野鬼とならん。嗟願くば酷吏なれや、順吏に成ることなかれと。顧ふに仁酷並び立つと云へ共、否泰遙に霄壤あり。大凡世の吏たる人の後を見るに、仁吏の種族は後來必ず盛大なり。酷吏の部類は向後

を列ね、妖嬙を聚む。あつむる則は財用足らず、たらざる則は、百端を究めて是れを求む。財の物たる、木に就ても得べからず。越において酷吏の老けき者を擇んで、是れを民間に放つて、黎民の財利を掠め奪ふ。うばふ事烈しく、得る事の多きを愛して、以て賢なりとし、以て忠節なりと稱して、是れに授るに官を以てし、是れに賜ふに爵を以てす。此において吏族大に眉をひらきて、飛廉が肩を瞋らし、惡來が臂を張り、王莽が眸を凝らし、董卓が頭を掉つて、賦稅に事寄せ、官租に擬へ、民の穀帛を掠め奪ふ事、枯骨を絞つて汁を求むるが如し。越において國衰へ民疲る。冬暖なれども、兒は凍えたりと號び、年登れども、妻は飢えたりと泣く。而して後に衆民盡く瞋り恨み愁ひ背く。そむく則は其國必ず天禍あらざれば、人刑有り。國夫れ久しからざらんか。是故に云ふ、鳥の將に死なんとする時、其鳴くこと悲し。國の將に亡びんとする時、其の貪ること烈しと。寔に恐るべし、吏もまた自らよろしく自ら計りて恐れ愼しむべ

の主たらん人々の恐るべきは酷吏なり。是れ卽ちさきに謂ゆる酷吏、代々先君の宗廟をして荆棘の野となし、狐兎の栖家とし、酷吏は代々先君の神靈をして祭奠なきの閑神とし、依る方なきの野鬼とするの現證なり。譬へば此に賊臣有りて祕計を廻らし、奇籌を設けて、其國を亂し、其家を破り、其君を害ひ、其群臣をして東西に分離せしめ、終に其國脉を斷たんと計らば、闔國人皆盡く瞋り憎んで、鼓を鳴らして是を責め、油もて煮、牛もて裂くと云へ共、飽き足ること無けん。殊に知らず、酷吏は寔に是れより甚だしきことを。酷吏は外面は忠節に事寄せ、萬民を貪り、國家を苦しめ、三代相恩の主君をして此天誅を招かしむ。其中には人知らぬ私曲有り。然るを是れを愛し、是れを用ひば、國夫れ久しからざらんか。寔に危いかな。時に一僧あり、勃如として頭を掉つて云く、否なり、酷は奢の影なり、奢は聲の如く、酷は響の如し。予が曰く、何と云ふことぞや。原ぬるに夫れ暗君國を得る則は、必ず奢る。奢る則は多く妃嬪

必ず三年にして斷絕せん。儞が輩、是れを見よと云ひ了つて死に就く。天色朦朧として草木慘然たり。誰か計らん、其侯未だ一兩日を經ざるに、乍ち心痛の重痾を發せんとは。百藥寸功なく、針灸しるし無うして、衆醫手をつかね、終に死亡を見る。一城大に慟哭す。嗣子四歲なりけるを、傳奏所へ奏し、願ふて家督を續がしめんと、家中の故老相添ひ、遙に武陵に趣く。着府未日あらずして、是れ又俄に早世す。悲しむべし、十萬石餘の大家、乍ち根を斷ち、葉を枯し、數千人の家中、老幼尊鄙、東西に分離し、南北に奔波して、一城乍ち空墟となりぬ。是れ彼のさきに謂ゆる酷吏の國家を亂り、國脉を斷つ現證なり。後來、寶永丁亥の春、予行脚して錫を其城下に留む。一日、持鉢の次で、道友三五輩、伴つて彼の侯の師檀の寺に入りて、先の城主の宗廟を見る。香華久しく道絕えて、鬼哭し、神悲しむに似たり。各々額を攢めて嗟悼して云はく、嗟已んぬる哉、唯是一箇酷吏の苛虐より起つて終に此荒蕪を見る。一國の君、一城

で、咸陽の高臺を築き、阿房の廣宮を構へて、大に誇る。是故に財用足らず。俄に酷吏を放ちて天下の財利を奪ふ。倉禀充ち溢れ、生民瞋り恨む。久しからずして咸陽燒かれ、阿房燼す。桀紂幽厲の暴君暗主、各々酷吏を愛し用ひて、民をして塗炭の中に苦ましむ。果して四海の富を失ひ、萬乘の貴階をくだる。須らく知るべし、民は國家の本なることを。民は一身の元氣の如し。是故に云ふ、氣盡くる則は人死し、民衰る則は國亡ぶ。諺に是有り、云く、天將に雨らんとする時は、山色必ず近く、國將に亡びんとする時は、民間先づ苦しむ。元祿の初め、中國の內、何某の侯の家に酷吏有り。大に民を貪り掠め、生民悲しみ哭す。村民の長たる者有り、爭ひ諫めて強く利害を說く。酷吏大に瞋り憎んで、竊に訟へ讒して、彼の村民の長を誅す。長、誅せらるゝに及んで、天を仰いで長嘆して云はく、我若し罪の誅せらるべき有りて、我を誅せば卽ち止まんぬ。若し又罪無うしてわれを誅せば、倆見よ。君侯必ず三年の治を得ん。國脉

臣とす。其の奪ひ盗む事、智、君子に過ぎたり。故に云ふ、聚歛の臣有らんよりは、寧ろ盗臣有れと。賄賂あるの訟は、水に石を投ずるが如く、賄賂無きの訟は、水を石に投ずるが如し。譬へば張三と李四と共に爭ひ訟ふる事有らんに、其初め理非を辨ぜず、混然として日をかさぬ。張是れを愁ひて、竊に寄する事有る則は、李が空處を探つて少しく是れを呵す。李大に驚き恐れて、竊に寄する事有る則は、又張が空處を捉へて少しく是れを呵す。張李共に互に驚き恐れて、代る〴〵相寄すと云へ共、金鍮辨ぜず、玉石分たず、或は五年、或は十年、寄せ〳〵て、遂に財盡き、力窮りて、一向寄すること能はざる者を捉へて、終に是れを負所に擠す。是故に民の酷吏を恐れ憎むこと、惡虎の聚落に在るが如く、疫鬼の國中に流行するが如し。往々に世の邦君國主は夢だも知し召さず、自らおもへらく、國豊に民康しと。いつしか君を桀紂の君にし、民を桀紂の民にす。謂つべし、吏は民を惱する官なりと。昔、秦檜奢を恣にし、威權を恃ん

て天皇富めりと云ふことはと。皇后御手をつかせ玉ひ、貴ふとやな、有難やな。君は正しく漢家にも、本朝にも比類もおはせぬ仁君にてわたらせ玉ふ嬉しさよと、御涙せきあへさせ玉はざりける由。寔に千歳の美談ならずや。古來世間の暗君庸主は卽ち然らず、內には苦諫を擎ぐる老臣なく、外には國家を愁ふる賢佐無きが故に、獨り自ら富貴を恃み、威權に誇りて、徒に日々人欲の私勝ちて、驕奢を究むるを以て自家の勤めとし、稼穡の艱難を顧みず、國家の窮困を察せず、黎民の油を絞つて、美酒嘉肴、殿中に溢れ、嘉果珍饈、堂上に滿つ。娥眉列り遶り、美質紅顏前後に圍む。絲竹管絃の音、晝夜に斷ゆることなく、簫笛琴鼓の響、蚤暮に息む時なし。其の浮費、秦楚の富と云へども足るべからず。此において多くの酷吏の輩を尋ね擇び、是れを民間に放つて國中を貪り掠め、黎民を責め苦しむ。恰かもしめ木を扣いて油を絞るが如し。賦稅は年々五分三分宛切り上げ、課役は月々二種三種宛觸れ增す。萬民の悲泣は叫喚焦熱の衆生の

炊煙浮び續る。七年夏四月、辛未の朔、二見山に天皇自ら登らせ玉ひ、遠く民間を望み見させ玉ふに、祥煙連り浮び、瑞靄遶り圍む。天皇限り無く御歡喜ましく〳〵、打笑ませ玉ひて、御製有り。云はく、高き屋に登りて見ればけむり立つ民の竈は賑ひにけりと。卽ち浪華の御殿に還り入らせ玉ひ、皇后に對し御仰せ有りしは、悅ばせ玉ひてよ。朕、今既に富めり。何の愁る所か是れ有らんと。皇后答へて申し玉はく、宮垣破れて髮毛盡く風に枯れ、殿屋破れて衣襟露に曝さる。何の富めりと宣玉ふ御事か是れ有らんと。天皇重ねて勅し玉はく、夫れ天の君皇を立て置かせ玉ふ事は、百姓を安んぜんが爲めなり。然らば卽ち天下に君たらんず人は、百姓を以て本とす。是を以て古の聖主は、國中一人も飢寒する者有れば、盡く是れを顧み、是れを聞き、是れを問ひ尋ねて、身を責め、吾を辱しめて、天に謝し玉ふ。今百姓貧しきは則ち是れ朕が貧しきなり、百姓の富めるは則ち是れ朕が富めるなり。神代より以來未だ有らじ、百姓貧しうし

く皆天皇に擎げ奉る。只今飢えて死すとも惜しむ所なし。況んや大道の爲め、萬民の爲めなるをや。道のため、民のために饑寒を忍ぶに、何の恐るゝ所か是れ有らんと。君臣相議して、初めて三年の法を定め、諸國萬民の宅に配して、田租の半を賜ふ。天皇も大臣も是れより麁衣麁服、黐衣鞋履弊れ盡きて而して後に作り、溫飯暖羹酸餒して而して後に易ふ。君臣上下共に携へて、嘉肴美酒を禁じ、妃嬪妖嬙を退く。民間の窮餓を救ひ、國家の艱辛を蘇せんが爲め、自家の榮耀を制し、互に節儉を守り、限りも無き困苦を嘗め玉ふ事、上も無き陰德行ならずや。上下いつしか面上覺えず菜色を浮べ、互に相見て計らず涙痕を帶ぶ。日々各々淸閑無事を樂しませ玉ふ。越においていつしか宮垣傾き崩るれ共修せず、茅茨壞れおつれ共、さらに以て葺かず、風雨すきまを穿つて卿衣の袂沾ゝ、星辰屋壁を穿つて霜露床蓐に滿つ。不思議なる哉、其後年々風雲時に順つて五穀豐なり。未だ三年を經ざるに、民間盡く豐饒なり。頌音野にみちて、

りて、遠く民間を望むに、遠村近里斷えて煙氣起らず、是れ百姓都て貧窮にして家に一粒も炊く物無きの致す所に非ずや。古聖德の君王の御代を傳へ聞くに、萬民盡く富み榮えて、日々に君王德澤の遍きことを賛歎し、家々盡く康らかなる哉と歌ふとこそ聞け。朕いま卽位三年、歌頌の聲終に耳に入らず、炊く煙幽にして斷え〲なり。卽ち知る、五つの穀物登らず、百姓已に窮乏なることを。封畿の內すら斯の如し。況んや畿外においてをや。三月朔己酉、群臣を召して嘆き詔して曰く、今より後三年、悉くに課役を除いて、調貢を納めず、百姓の辛苦を休へしめよ。夫れ熟々天理を考れば、天皇は國民の父母、大臣は國民の兄みなり。國民の爲めに身をくるしめよ。若し然らずんば、理に當らじ。儉約を守らずんば、何ぞ三年を保たん。朕と群臣と心を一つにして、身を苦しめ、節儉を守り、勤めて萬民を救はん。誠に是れ國家の父、萬民の兄みの道なりと。時に大臣及び群臣大に悅んで、皆落涙して前み奏して申さく、臣等が身命は盡

に歸す。人の死を免じ、人の難を解き、人の患の救ひ、人の急を濟ふ者は德なり。德の有る所は天下是れに歸す。人と憂を同うし、樂を同うし、好きを同うし、惡きを同うする者義なり。義の有る所は天下是れに赴く。凡そ人死を惡んで生を樂しみ、德を好んで利に歸す。能く利を生ずる者は道なり。道の有る所は天下是れに歸す。文王再拜して曰く、允なる哉、敢て天の詔命を受けざらんやと云つて、載せて俱に歸りて、立てゝ師とし玉ふと。我朝仁德天皇の如きは、御卽位二年春二月己未、葛城二見山の岑に上らせ玉ひ、遙に民間を望み見させ玉ふに、前後の數村窮困して煙氣起らず、喟然として悲嘆して勅して玉はく、朕は貧しき哉、朕は乏しき哉。左右奏して申さく、貴き事天位に在す、富、六合を保ち玉ふ。何ぞ貧乏の愁ひましまさんや。帝勅して曰く、今是れ國民貧し、何ぞ六合を保ちて利と云はん。今是れ百姓乏し、何ぞ天位に在りて高しと云はんと。夫れより浪華の御殿に歸らせ玉ひ、群臣に勅して玉はく、朕、高き山に登

農を務めしむるに若くは無きのみ。癸卯晦日、日食する事あり。帝曰く、群臣悉く朕が過失を思議して以て朕に啓告せよ。乃公、賢良方正よく直言極諫する者をあげて、朕が及ばざる所を匡さしめよと。昔唐の太宗貞觀二年．蝗あり、上苑中に入つて蝗を見る。數枚を掇つて此を祝して曰く、民は穀を以て命とす。而るを汝是れを食ふ。是を食て萬民を悲歎せしめんより、寧ろ朕が肺腸を食へと云て、手をあげて是れを呑まんと欲し玉ふ。左右諫めて申さく、惡物なり、必ず疾を成さん。上曰く、朕、民の爲めに災を受く。何の疾か此を避けんと。遂に是を呑み玉ふ。是歲蝗災を爲さず。上曰く、良君は將に善を賞し、淫を刑して、民を養ふこと一子の如く、此を蓋ふこと、天の如し。昔呂望、文王に告げて申さく、天下は一人の天下にあらず、卽ち天下の天下なり。天下の利を同うする者は卽ち天下を得。天下の利を擅にする者は卽ち天下を失ふ。天に時有り．地に財有り、能く人と是れを共にする者は仁なり。仁の有る所は天下是れ

子孫を累ぬること數十世、是れ天下共に聞く處なり。又曰く、一日も國家の主として民の父母たらんず人々は、尋常愼しみ恐れて、萬民の心を考へ知し召すべし。民は何事をか苦しみ、何事をか悅び、何事をかうらみ、何事をか瞋ると、此義を考へ明に祭し玉ふを、是れを仁君明主と名け、此義をつゆちり知り玉はぬを、是れを暗君庸主と云ふ。民の瞋り恨むは、賦稅の重きと課役の繁きなり。民の悅び樂しむは、賦稅の輕きと仁澤のおこなはるゝなり。仁君明主はながく天下國家をあはれむ。詔に曰く、禍は怨みより起る、福は德より起る。百官の非はよろしく朕が身に由るべし。いま秘祝の官、禍を下にうつす。朕甚だ是れを取らず。それこれを除け。夫れ人の性たる、一日に再食せざれば饑ゆ。終歲衣を制せざれば寒し。腹饑れ共食することを得ず、膚寒むけれ共衣ること得ずんば、慈父と云へども其子を保つこと能はじ。朕安んぞよく民をやすんずることあらんや。是故に明君は五穀を貴んで、金玉を輕んず。方に今の務め民をして

べくんば、即ち常に是れに乘ることを得ん。其舟に乘るを見る時は卽ち曰く、水は舟を載する所以也。民は猶ほ水の如し。君は猶ほ舟の如し。民を憐み、國家を貪り苦しむることなくんば、長く福貴を保ち、王位を失ふこと無けん。愼まずんば有るべからず。漢の孝文帝、詔して窮をすくひ、老を養ふの令を定む。其民を憐むに切なるの意を見る。未だ一年に及ばざるに、帝の善政蓋し已に班たり。記しつべし。漢地の興ることそれ宜べなる哉。上、毎朝郎從の官、書疏を上つるや、未だ曾て輦を留めて其言を受け玉はずんばあらず。詔して曰く、農は天下の大本なり。民の恃んで以て生ひする所なり。民或は其本を務めずして末を事とす。故に生ひとげず。今玆に群臣を率ゐて農以て是れを勸む。其民に田租の半をたまふ。又曰く、天下は大器なり。今の人器を置くに、是れを安き所におけば安く、是れを危き所に置く則は危し。天下の情と器と以て異なること無し。天子の是れを置く所に在り。湯武は以て天下を治めて禮樂に置く。

萬乘の貴き、四海の富を以て、猶ほ以て足らずとすることは何ぞや。其始めの貧賤を忘れ、欲大にして窮り無ければなり。此を以て周公書を作て以て成王の常に萬民稼穡の艱難を知り玉はずして、驕逸ならんことを恐れ玉ふ。帝又曰く、朕、兆民の主として、日々に是れをして富貴ならんことを欲す。役を輕うし、賦稅を薄うし、是れをして各々生業を治めしむる則は、民間必ず皆富貴ならん。もし夫れ家とみ、人たらば、朕、管絃を聞かずといへ共、樂みまた其中に在るらくのみ。上又侍臣に謂て曰く、大凡人は銅を以て鑑として以て衣冠を正すべし。朕は古を以て鑑として以て興替を知り、民を以て鑑として以て治亂を知り、人を以て鑑として以て得失を明む。朕常に此三鑑を保て、以て己れが過を防ぐ。今魏徵沒す。朕一鑑を失ふと。或時、上侍臣に謂て曰く、朕、太子を立てゝより物にあふ每に卽ち誨ふ。其飯するを見ては卽ち曰く、汝稼穡の艱難を知らば、卽ち常に斯飯あらん。其馬に乘るを見て卽ち曰く、汝其勞を知り、其力を竭す

治を致すの要也。陛下願はくば終を愼しみ玉ふこと、始めの如くし玉はゞ則ち善けん。君は人を知るを以て明とす、臣は職に任ずるを以て良とす。君、人を知る則は、賢者其學ぶ處を行ふことを得。臣其職に任ずる則は、不賢者苟くも朝に入ることを得ず。上、侍臣に謂て曰く、朕、二喜一懼有り、民間比年豐稔、斗粟三錢なるは一つの喜びなり。北虜久しく服して、邊鄙慮り無きは二つの喜びなり。天下治安なれば驕侈生易し。驕侈なれば危亡立處にいたる。是れ一つの懼れなり。上曰く、甲兵武備誠に闕くべからず。然るに煬帝が甲兵豈に其れ足らざらんや。卒に天下を亡せり。若し夫れ公等力を盡くして、百姓をして豐安ならしめば、此れ卽ち朕が兵なり。帝曰く、萬民國家の爲めに人を擇ばゞ、造次にすべからず。一君子を用ゆる則は君子皆到る。一小人を用ゆる則は、小人盡く競ひ進む。類を以て集る習ひなる故に。又曰く、富んで貧きを忘れざる則は、能く其富を保つ。貴うして賤しきを忘れざる則は、能くその貴を保つ。夫れ

ること未だ精しからざるを見て、天下の理を知ること全くつくすことあたはざることを知し召して、常に臣に問ひ自ら用ひ玉はず、此れ其興る所以なりと。魏徴が曰く、古人の曰く、禮と云ひ禮と云ふ。玉帛をしも云はんや。樂と云ひ樂と云ふ。鐘鼓をしも云はんや。樂は誠に人の和と民間の豊なるとに在るらくのみ。聲音の間には在らじ。帝曰はく、近頃群臣に見るに、往々に衣を擎げて祥瑞を賀す。夫れ家給し民足らば、縱ひ祥瑞は無く共、堯舜たるに恐れ無けん。民苦しみ、百姓怨みなば、縱ひ祥瑞は數々見ゆ共、桀紂たるに違ひなけん。太宗曰はく、朕が爲めには民を憐み養ふ者は、只都督と刺史に在るらくのみ。朕其名を屛風に書して坐臥に是れを觀る。其官に在て善惡の跡皆名の下に註して以て黜涉に備ふ。帝侍臣に謂て曰く、人盡く言ふ、天下至尊にして、懼る所なしと。朕は卽ち然らず。上皇天の監臨を畏れ、下群臣の瞻仰を憚る。兢々業々として猶ほ天道に副はず、人望に合はざらんことを恐る。魏徴が曰く、是れ誠に

らずや。漢の孝宣帝四年、大司農耿壽昌に命じ玉はく、今歲より邊郡皆倉を作らしむべし。穀賤き時は、價を增して糴して以て農を利せよ。穀貴き時は、價を減じて糶して以て民を利せよ。名けて常平倉と稱すべしと。至れる哉。唐の太宗皇帝曰はく、朕若うして弓矢を好む。良弓十數を得て、自ら謂らく、以て加ふること無しと。卽ち良工にしめす。工の申さく、皆是れ良材に非ずと。朕、其故を問ふ。工の曰く、本心直らざれば脉理皆邪なり。弓は强しと云へ共、發して大に直ならずと。朕、初めて悟る。向きに是れを辨ずること猶ほ未だ精しからざりしことを。朕、弓矢を以て四方を定む。是れを知ること猶ほ未だ盡す能はず。況んや天下の務め其能く偏く是れを識らんや。京官五品以上に命じて、中書内省に宿せしめ、數々延きまみえしめ、問ふに民間の疾苦を以てし、及び政事の得失を持論せさせ玉ふ。傳に曰く、國の將に興らんとする時は、君子自ら以て足らずとせさせ玉ひ、其將に亡びんとする時は、餘り有るが如し。太宗弓を知

て是れを殺戮せんとす。豈に臣佐の道ならんや。不忠是れより大なるは無けん。遂が曰く、是れを爲さん事如何。帝曰く、大凡國家を治るの至要は、賦程を引下げ、課役を寬うし、自身は專ら節儉を守るより外、縱ひ堯舜禹湯の君と云へども、別の秘計是れ有るべからず。帝卽ち移書を制して遂に授け玉ふ。遂卽ち傳に乘じて渤海の堺に到る。群民盡く兵を發して遂を迎ふ。遂遙に一見して書を移して吏官を引替へ、賦稅を引下げ、課役を寬うすべき等の王勅を傳ふ。群民盡く天を仰で泣哭し、從上の苛政は、皆盡く酷吏の所爲にして、君王の御心に非ることを悟りて、隨ふこと水の如く、懷くこと父母の如し。此に於て遂心に任せて仁德を施し、永く渤海を治めて、終に一人を戮せずと。寔に貴ぶべし。後漢の武帝、臣董仲舒に命じ玉はく、縣令は民の師仰なり、承流して宣化せしむる所なり。列侯郡主をして、各々吏民の賢なる者を擇んで、歲每に各々三人を貢せしむべしと。是れ又萬民を憐愍せさせ給ふ宸襟より指し起りたる勅命な

三年、宮室園囿車騎服御等に到る迄、華麗は必ず民を助る備に非ずと御仰せ有りて、減少せさせ玉ふ所多く、增益せさせ玉ふことなし。御寵妃愼夫人御小袖地に曳くことを禁じ玉ひ、又或時の御仰に、椒房の婦人は、國家を護する備にあらず。盡く是れ民を貪り、國家を苦しむるの本根なりとて、大半捨て退け玉ひけるとぞ。一年、群臣衆議して露臺を造立せんことを勸め奉る。上卽日良工を召され、はからしめ玉ふに百金と答ふ。帝曰はく、百金は卽ち中民十家の產なり。露臺豈に國家を治め、萬民を救ふ功能有らん哉とて、停止せさせ玉ひけるよし。貴ぶべし。漢の孝宣帝四年、渤海の地凶年相續き、民間皆苦しむ。吏更に是れを憐まず、賦稅を責め貪る。生民瞋り恨みて國中大に亂る。上卽ち龔遂を選び擧げて是れを治しむ。龔遂が曰く、是れを治るの要、彼の兆本を捉へて逐一是れを誅戮せむより外、奇計是れ有るべからず。帝曰く、汝知らずや、黎民は盡く是れ我が赤子なることを。然るを人臣の身として、主君の赤子を捉へ

節なるべし。縱ひ天下の貴僧高僧を集めて、千部萬部の大法秘法を行じ盡くしたりとも及ぶべきことかは。昔漢土に羊祜と云ひし人、襄陽と云ふ所の刺史なりけるが、天性仁恕の心厚くおはし、常に酒色を遠け、浮費を制して、其餘を散じて以て窮民を安撫せられければ、襄陽次第に富み榮えたりけり。萬民其德を感じて、羊祜遠逝の後、峴山に石碑を立て置きけるに、其邊を往來する國民は、伏し拜みて感涙を落しける故、今の世に至る迄、墮涙の碑と稱して、仁德を慕ひ、祭奠怠ることなしと。一日も民の父母たらんず人々は、羨むべきの芳躅ならずや。昔子產、鄭に相たり。其卒するに及んで、國民巷に哭し、商人市野を罷めて、哀んで涙を流して、三月琴竽の聲をきかず。郊野を傾けて哭し悲しみけるとぞ。是れ又仁德の致す所にあらずや。漢の孝文帝の如きは、狄國より千里の駿を献ず。帝、上覽ありて打笑ませ玉ひ、此馬千里の能有りと云へ共、黎民を蘇するの才無しと綸言有りて、卽ち路費を與へて返しめ玉ふ。御卽位二十

能く萬民の禍を護る者は、必ず天下の福を獲。故に澤、萬民に及ぶ則は、賢人盡く是れに歸す。雌の不才なるは、其卵必ず孵ゆ。其君不才なるは、其民必ず窮すと。寔に恐るべし。又云く、天下は一身の如し。臣佐は譬へば肱の如く、萬民は股の如し。强暴酷剝、聚斂不祥の臣佐有りて、萬民を貪り掠め、責め苦しむるは、肱の力を假りて、股の肉を殺ぎ落し食ふが如し。腸胃は能く太く肥へ脖るべけれ共、股の肉盡きなば、其人必ず立つこと得じ。立つこと得じとは、民衰へ國亡るを云へり。昔後漢の時、侯覇と云ひし人、暫く淮平と云ふ所を治めたりしに、天性仁德厚くおはして、萬民懷くこと父母の如し。國替の時、百姓共老幼相携へて車をさへぎり、道路に臥し、號哭して云く、我が君侯何事ぞ我輩をすてゝ、何國へ行かせ玉ふやらんと嘆き悲しみける由。寔に貴ぶべし。此等の人々の如きは、梵釋鎭へに其頂を撫で、天神天祇盡く擁護の眸を垂れ玉ひて、王基鞏固、國泰民安、御當家御代長久の祈禱の爲めには、上もなき大忠

哭す。哀音聞くに堪へず。夫子、子路をして是れを問はしめて曰く、子が哭することや、重ねて憂ひ有る者に似たり。曰く、然り。昔舅、虎に害せられて死す、吾夫もまた同じく虎に死す、吾子もまた同じく死す。其悲泣比すべからず、心も言葉も及ぶべきことかは。夫子曰く、胡爲ぞ去らざる。一件去り難きこと有り。曰く、何ぞや。此處苛政なし。夫子曰く、小子是れを記せ、苛政は虎よりもたけきことを。苛政とは何をか云ふや。異國にもせよ、本朝にもせよ。暗君庸主は自らの分量を計らず。妄に自ら驕奢をきはむ。此において財用たらず、たらざる則は、多く酷吏の輩を擇び揭げ、是れを民間に放つて賦稅を重くし、課役を重ねて國家をせめ苦しめ、民間を貪り掠む。是れを苛政と云ふ。卽ち是れ亡國の大兆なり。虎は纔に一人二人を害す、苛政は國中萬民を苦しむ。果は國家を滅亡するに到る。寔に恐るべし。古に云く、夫れよく萬民の危きを救ふ者は、天下の安きに據る。よく萬民の憂ひを除く者は、則ち天下の樂を享く。

是れ寔に至無欲なり。熟々顧ふに、天、王位を定め、君皇を居え置かせ玉ふ事は、逆徒を随へ、國家をしづめ、萬民を安撫せしめんが爲めなり。是れ寔に仁智備はらせ玉ふ聖君明主にして、暗君庸主の及ぶべき所にしあらざる故なり。誠に至無欲なり。賢を選んでその位を譲り玉ふは至公なり。至無欲至公の德を以て天下に示し玉ふ。是故に賞せずして民勤め、罰せずして民畏るゝこともまた然り。今君、天下の政務を領し玉ひて、初より賞罰嚴重なるのみ。全く民間の否泰を察し玉はず、歳の凶豐を顧み玉はず、稼穡の艱難を知し召さず。越において黎民旦暮に欲有り、且つ内外の私多し。是れ君が懷く所の者は私なり。百姓是れを知て貪り、爭の端此より競ひ起つて、民心離れ背き、德日々に是れより衰へ、刑是れより多からん。われ是れを見るに忍びす、是故に野に處して耕す。今君何事ぞ我を見る。君行け、吾事を留ることなかれと云つて、耕して顧みず。記の檀弓に曰く、孔夫子、泰山の側を過ぎ玉ふ時、夫人有り、墓の側に

さし藻草　巻二

何國何某の君侯殿下近侍の諸賢の需めに應じて書せし草稿

劉向が新序に曰く、堯、昔天下を治め玉ひし時、伯成子高封せられて諸侯たりき。堯、天下を舜に授け、舜、禹に授け玉ふに到て、伯成子高諸侯たることを辭して、窃に民間に隱れて、朝夕に田疇を耕して以て生計す。禹、微行して行きて是れを窺ひ見玉ふに、耕して野外に在り。禹、趨て下位について問ひ玉はく、昔堯、天下を治め玉ふ時、吾子立て諸侯たりき。其後堯、天下を舜に授け玉ふ時、吾子猶ほ存して諸侯たりき。今寡人位につくに及んで、久しからずして諸侯を辭して、窃に耕作するものは何ぞや。伯成子高が曰く、昔堯の天下を治めさせ玉ふ時、常に國家を愁ひさせ玉ひ、萬民の窮困を憐愍せさせ玉ひ、太子はおはせど、賢德の人を擇んで、天下をあげて是れを大舜に傳へさせ玉ふ。

性智大勇。拈起金剛王寶劍。一刀兩斷沒商量。此時特四弘誓在。常侍心王護法城。全無六賊窺宮牆。稱曰御垣守宜哉。以此趣能利益人。上求下化盡圓成。老來强非好文術。唯願利濟無緣人。世上若好陰德人。竊印施此偈利衆。此偈若有行世上。盡利虛生浪死人。利人菩薩大善行。此外更無菩提心。願以此功德普及於一切。我等與衆生皆俱成佛道。

寶曆第十庚辰歲小春。少林忌齋後。

さし藻草卷一終

皆盡指此處。言高間原神止在。儒門道明德至善。一以貫之能新民。道家曰守一無適。或又言四達四通。此時心王上寶殿。天上天下唯獨尊。時有魔軍竊競起。煩惱業障報所知。部屬有八萬四千。六賊動牢過宮牆。此偈稱御垣守。何。須知法盛魔亦盛。時有魔軍竊競起。稱言破順障善道。竄賴耶含識之中。部屬八萬四千在。隨貪瞋癡逆徒。卒放逸無愧賊兵。吹暗鈍昏愚毒霧。捲慳愛妬害臭煙。心王驚動失所在。四維上下盡魔界。時有文武征夷將。稱道大智慧到彼。見此暴亂大憤發。激忠膽義膓精兵。列本有圓成大旗。鳴悉有佛性頁鐘。備實相無相正兵。伏圓頓難思奇兵。先陣卽上求菩提。後軍則下化衆生。時根本無明大王。走七識摩那奏者。促邪見斷無諸將。卒貪欲瞋怒雜兵。煩惱業苦旗推立。走罵詈惡口先手。備叫喚悲泣後陣。黑繩無間根城在。殺盜邪淫箭先揃。塵勞無明螺吹立。石炮捧砲包祿炮。勝敗兵家不可期。時純圓獨妙王子。乍煥發大圓鏡光。震平等

唯在一念子。爲懈怠懶墮衆生。涅槃涉三祇百劫。勉旃莫錯過一生。可惜無人求此術。空打失難受人身。雖士太夫及庶人。纔積三日功。立成。恨今無眞正指南。出人無越向上關。老僧有隻手小關。出人大凡不記數。各了畢音聲大事。而有萬重玄關鎖。士太夫若成菩提。尋常須勤定主心。太公望三略卷四。主心不定恐悲起。恐悲人無必忠節。不能立主君專途。喜怒憂思悲驚恐。名之曰客塵煩惱。客塵盡則主心立。主心中心無兩般。中心直是見忠字。宜哉主心不定人。外面似文武兼備。內心全是無忠節。國君多養育武臣。非爲行列飾外面。茲者大事指起時。爲成一(ヒト)小口(コグチノ)堅(カタメ)也。若主心不定武臣。恰如老婆挾二刀。或又似法師貯櫛。有敵來取圍主君。恐戰遁走不能顧。腰間國光將何用。何時報主君重恩。主心專武士所貴。定主心須止至善。至善中心中心忠。知止而後若有定。直是一粒大還丹。丹成長生久視人。上下四維全無敵。初佛身充滿法界。直是諸佛大禪定。禪家

誑貪欲賡緇。建大伽藍大供養。多費國家苦萬民。是邪法全非菩提。以其財用救萬民。稱堯舜君不可誣。武帝問達磨大師。建寺度僧有功德。祖師直答無功德。雖此語非無子細須知癡福三生寃。祖遙凌萬里波濤。留梁魏間凡九年。專勸見性無佗事。若人欲成菩提心。特無越見性大事。玆有一擧兩得術。養生與見性二全。勤力須錬大還丹。還丹一粒本有性。錬丹秘訣無餘蘊。只在勇猛一念心。昔有仙人吳契初。親告石臺先生曰。凡錬神丹有至要。須元氣聚丹田間。聚元氣要在凝心。心凝丹田則氣聚。氣聚則神丹乍成。丹成則主神先全。主神全則壽算長。直是不死大神仙。是故古人曾有曰。可貴還丹一滴粒。轉鐵圍山爲眞金。須知山河及大地。立地現出法王身。此時初成大菩提。可貴一粒大還丹。直是價直三千界。草木國土悉皆成。龍女献佛一顆珠。王母進君千年桃。神仙壽量不可及。天上善果不如之。見性在直進不退。昔世尊告阿難曰。爲勇猛精進衆生。成佛

切諸經論中。何專不示悟後修。老僧二十四歲時。在越英巖乍打發。從此慢幢如山聳。見一切人如草芥。自謂凡三百年來。如予打徹亦復稀。不計謁正受老人。擧惡毒數段因緣。使予乍喪身失命。卽震勇猛大精心。咬破多少惡毒話。不覺竊幷吞諸方。後來二十七歲時。在荒井龍谷隱寮。竊讀沙石大恐怖。碎予慢幢如累卵。昔日春日大神君。告笠置解脫上人。凡拘婁孫佛以來。一切智者及高僧。無菩提心。墜魔道。於此不覺寒毛卓。其後久疑菩提心。世間何事非菩提。讀誦書寫是菩提。禮拜恭敬是菩提。況又於智者高僧神慮定有所指揮。後來四十二歲時。決定菩提四弘輪。若其無春日神慮。我輩盡皆入魔道。可貴春日大神君。本地地藏願王尊。初似利解脫一人。後來閉幾人邪道。自愧無力報神恩。神恩遙超過佛祖。粉骨碎身不足酬。徒空望西禮三拜。無智者多聞此偈。必言不宜士太夫。士太夫豈不死人。君子豈不求菩提。君子行善有邪正。多爲名聞利養走。或欺

結口長念珠。逢人說無念無心。全不說世間是非。行則低聲唱佛名。於此在家信男女。盡言肉身佛菩薩。四事供養如泉涌。胸中臭煙毒霧深。似繩絞下黑暗谷。死必墜黑繩地獄。是依最初信邪法。錯了一生。寔可憐。偶打失難受人身。永沈惡趣。誰所爲。可恐施主一粒米。果成萬石熱鐵丸。誓避此等惡部屬。擇眞正抱道善友。共走善知識輪下。鑿破八識荒田畠。信受向上奪命符。劈裂無明黑暗坑。撞着惡毒熱鉗鎚。碎萬重玄關鎖。而後莫得小爲足。必誓休正位取證。永發不退大勇猛。常精修菩薩大行。徧集無量大法財。尋常勤行大法施。永鞭四弘誓願輪。利濟一切苦衆生。同共成無上菩提。虛空盡弘願無盡。是名當家眞種草。道勸發菩提心偈。古人不知此意多。不知此意落邪道。縱雖一回打發去。不聞眞正指南。故虛豁豁地空蕩々。更無一法可掛懷。從此發斷無惡見。有憍慢心。無所作。盡墮天狗道部類。不知悟後修所致。傳燈會元廣續燈。碧巖虛堂宗鏡錄。及一

得苦生老死。有此八風八苦故。動生厭離穢土心。果發欣求淨土願。誰計衆苦交煎內。幸有佛法僧三寶。唯恨澆末僧寶內。無慚無愧贋緇多。外面智行兼備僧。內心劣在家奴僕。依過去宿善行力。福貴自在高官位。日窮憍奢誇榮耀。拍手老幼皆奔波。纔瞋上下盡戰栗。空送光陰無慚愧。不看經兮不坐禪。見性悟道全無望。見人善事盡誹謗。聞催法會動障碍。不恐死後墜三塗。況於法施利濟事。恁麼稱入三寶數。來世必入八難數。九族生天隔雲泥。十類各墜泥梨底。是非生如是不祥。盡依老婆禪指南。婆禪常教其徒言。無法可說無可修。素木地儘立儘佛。一生歇得馳求心。求心歇處卽是佛。尋常無智無學去。諸方愚魯癡瞎禿。聞之皆謂眞正道。並坐列睡學無心。掉長竿如掃雲煙。勤學無念皆有念。力求無心皆有心。似展隻手遮河流。重歲月全無寸功。志倦體疲發虛勞。未到三十多物故。其內爲心無遺方。有運世智求名利。求名利善巧方便。看板第一殊勝貌。收目

具三明六通德。是故全無三世說。曾無因果報應變。況地獄天堂輪轉。忝如吾大覺調御。娑婆往來八千度。其中辛勤精修功。具足三明圓四智。徹見三界如掌果。山河大地唯一人。無能見兮無所見。無一法爲人可說。越發無緣大慈悲。爲利濟一切衆生。且說半滿諸經論。滿字無相平等法。十方無大地虛空。芥納須彌針鋒海。半字差別無量法。地獄天堂佛界魔。梵天帝釋四大天。天龍夜叉八部衆。盡聚會靈山會上。瞻仰尊顏歸命禮。可惜三代以前時。佛法未涉東漢地。八萬四千妙義內。若一法有到唐土。伏義神農堯舜禹。周公孔子莊老列。總爲有道君子人。何人不信受奉行。然近代世智辯聰。如朱晦庵韓退之。偏執邪智斷無見。入拔舌泥梨部屬。三代前後佛前人。又云三惡趣人乎。可憐邪智斷無見。誇爾纔小智小見。空打失難受人身。人不恐來生苦。不異馬牛犬豕類。茫々六趣輪廻中。天堂地獄餓鬼畜。特指人身爲貴何。利衰毀譽稱譏苦。愛別離苦怨憎會。求不

微笑見二外面一已。時童子擎二茶菓一來曰。庭上積並赤何。用心雨具合羽籠。師聞呵々大笑曰。晴宵夥御用心哉。侯曰用心國不レ亡。天若不レ雨即止矣。驟雨烈洒將來時。和尚如何差排給。上下盡七顚八倒。可レ立二忍木蔭一亦無。師曰無二餓鬼趣一止。若有佛倫大善事。無二地獄一即是可也。牛頭撚二鐵鞭一奉レ待。君侯如何廻避給。恐可二立忍一木蔭無。用心國不レ亡。不レ言健時君侯宜二用心一。侯且低頭合掌已。寔千歲不二美談一哉。如二梶原平三景時。死後獨駕二白馬一來。入二建長水陸會裡一語二地獄苦患一乞レ救。且又如二敏行朝臣。死後來二紀友則一許。乞二供佛齋僧追福一語二三塗舂磨苦患一。正三因果物語曰。遠州濱松邊一女。死後托二其妹娘一來。涕泣說二地獄苦患一。予向所二編集一印施。十句經靈驗記中。駿西葦島於蝶事。備前座頭緣都靈。且又地藏靈驗記。其外宇治拾遺等。及多少假名物中。記所逐一擧無レ暇。莫レ言三代前後時。且又秦漢以前書。一向無二地獄沙汰一。皆是異端之妄說。伏羲神農堯舜禹。備二生智安行聖德一。未

打寄圍責散鬱憤。回頭貞任兄弟者。率徒黨一屬來訟。時空中有大圓光。
可貴觀世大薩埵。忽然來下告閻王。彼被誅戮自業果。剩欲叛逆奪寶祚。
上令義家行誅罸。初非義家私所爲。義家幸壽算未盡。俱歸閻浮修萬善。
閻王合掌低頭曰。大慈薩埵大慈念。我豈毫釐奉違背。大士歡喜告義家。
善哉儞速歸閻浮。常勤精修萬善行。憤發勇猛大忠節。守護王位扶萬民。
於此不覺蘇息來。語了及落淚數行。聞人皆悲嘆合掌。危哉流石義家卿。
若夫非大士加護。闇々獨爲貞任囚。乍無念可被責惱。御生涯信心厚空。
關東獨御發向時。以黄金鑄大士像。御髻内結籠置給。尋常假初御物語。
流石弓箭取身者。信心社有間欲皃。隨儞等世智指南。佛像經卷棄擲給。
豈其斯大幸增在。寔武門好手本哉。昔元祿初頃歟豐。阿州侯先君忌日。
詣城下慈光禪林。堂頭南山老古佛。且對坐熟語序。侯問只今見佛殿。夥
佛餉靈供膳在。幽魂盡來享否哉。師微笑吹煙管已。又問地獄實在否。師

古人有言實誠哉。有四足者必無翼。有頭角者必無牙。遲筆者必字形正。
頓書者必筆勢亂。面前譽者背後謗。世智勝者必邪見。辯才好者必無實。
錯了自見須任偏。導人邪見將何心。其罪勝五逆重罪。多敎壞善信人故。
死必墜拔舌泥梨。及入無間焦燒底。盡言天堂地獄說。異端虛無寂滅敎。
動說三途六趣苦。及談五戒十善異。徧搜索五典三墳。無此無義荒唐說。
須知浮屠落魄族。爲口糊四方所設。其現證開闢以來。依生前罪障深重。
今墮三途受苦惱。捨文一送者全無。一人自冥府歸來。談地獄苦者誰在。
是盡無地獄現證。若有事跡試擧看。寔憐偏輩甚無知。若以無智輕忽智。
燕雀睨視鳳鸞類。跛鼈望禹門者也。漢土不知本朝內。自冥府歸來甚多。
八幡太郎義家卿。自冥府歸來語曰。吾不計見閻王廳。王命善惡兩部童。
點檢吾一生作業。時階下多罪人在。競來敖訴閻王曰。伏願義家賜我輩。
彼昔獨發向關東。殺戮吾黨數萬兵。我輩冥府待彼久。王若此者賜吾輩。

勸發菩提心偈 附タリ 御垣守

熟觀世無常迅速。見飛華墜葉有感。恰如常在火宅內。況於其餘五趣中。
剩聽正法有八難。此時不恐勤待何。地獄鎮碍春磨苦。餓鬼永劫惱饑渴。
畜生愚癡無餘念。修羅瞋恚鬪諍在。天上耽歡樂無暇。特指人間最爲貴。
悲其中有三惡趣。聾啞及世智辯聰。且又佛前佛後人。今時世智辯甚多。
世間若儒家者流。或又神家者流類。纔看讀三五卷書。且聽五七座賣講。
乍超斷無惡邪見。不知來生不如意。況復地獄道苦患。無智將其何似哉。
馬牛犬豕豺狼麋。奴婢僕從屠貼販。尋常對人亂說曰。人自二氣良能生。
魂歸冥漠魄歸泉。死了燒了更何在。供佛齋僧何揑怪。茶湯香華寔可笑。
生死涅槃兎角技。煩惱菩提眼裡華。盡是浮屠虛誕說。佛像經卷須棄擲。
聞之在家信男女。盡言之被僧家欺。父母塚墳亦不拂。盂蘭盆供亦不設。

無常を感ぜず、地獄を恐れず、菩提を求るに暇なし。火宅の中に在りて、推付生死到來することをも知り玉はず、三塗六趣などの苦患は、露塵顧み玉ふことなし。寔に惜むべし。故に拙偈一篇を賦す。題して勸發菩提心の偈と云ふ。

天上の善果に勝れる人間界に出生したれば、浮木の龜や優曇華の華、待ち得たる心地なるはとて、飽まで食ひ、暖に着て、看經せず、坐禪せず、善友の提携にも隨はず、智者高僧の法施の席にも臨まず、因果有ることも知らず、來生三塗の苦患有ることをも恐れず、徒に放逸無慚にして一生を送らば、外面は受け難き人身を受けたるに似たりと云へども、內心は悲しむべし、牛羊犬豕の無智昏愚なるに異なること無きことを。只今世間此等の類多し、をしむべし。受け難き人身を受けながら、心は全體畜生道に在るを、寔に憐むべし。六趣の中に在りて、取分け人間の貴きことは、來生有ることを知り、地獄有ることを恐れ、菩提を求るに便り有る故なり。中に就て貧窮下賤の者共は、苦患の事多き中にすむ故に、敎へざれ共自然に無常を觀じ、來生を恐れ、菩提を求むる者多し。高官尊貴の人々、福貴高位の出家の如きは、動もすれば來生有ることを知らず、惡趣を恐れざる人々多し。萬事心に任する故に、福貴にめで、威權に誇りて、

り、地獄、餓鬼、畜生、修羅及び天上界に至るまで、五趣の衆生は、其の趣類に隨つて、思ひ〳〵の障碍有りて具足することを得ず。如何となれば、地獄は種々の苦患にさへられ、餓鬼は饑渴にさへられ、畜類は愚癡にさへられ、修羅は刀兵の瞋恚にさへられ、天上は飛行遊戲の歡樂にさへらる。故に了緣の二因を缺く。二因なければ、正因佛性は、大事に本くことを得ず。去る程に光音梵輔等の諸天も、前生多少萬善の福力つくるときは、果して下界に生下し來て、故の凡愚の衆生とむまれ、或は直下に衆合等活等の惡趣に墮す。是故に云ふ、生天の福は箭を仰で虛空を射るが如し。勢力盡るときは、箭却つて落つと。人界は卽ち然らず、若し人纔に菩提心を起し、次第に進み進んで退かざるときは、いつしか聲聞緣覺の二階を超過し、圓頓菩薩の階位に登り、果して果滿妙覺の十力を成就す。卽ち受け難き人身は、遙に天上の善果に勝れる現證ならずや。蓋し斯く云へばとて、我々は遙に餓鬼修羅等の四趣をも超過し、光音梵輔等の

とて皆盡く戀ひ求め玉ふ。去る程に一子出家すれば、九族天に生ずと說き置かせ玉ふにあらずや。人界若し其れ遙に天上に勝れる事多くば、何の天上の善果を求るに足らんや。大に怪しむべしとならば、大凡一切の人類正了緣とて、三因佛性の妙義を具足する故なり。一に凡有心者是正因種、二には隨聞一句是了因種、三には彈指散華是緣因種、是れを因三佛性と云ふ。大凡の高貴位より下賤貧窮の細民及び牛羊狐兎狸狢の畜類に至る迄に、正因佛性の大事を具足せずと云ふことなしと云へ共、善友の提携に隨ひ、眞正の知識に見えて、一句半偈の敎戒を受け、乍ち大勇猛の精心を憤起し、一旦豁然として見性了悟の正眼を開く。是れを了因佛性と云ふ。彈指散華是緣因種とは、佛像祖像及び諸佛の寶塔等の前に香華を擎げ、佛道の正因を結ぶ。是れを緣因佛性と云ふ。三因佛性の中、正因佛性は、六趣の衆生同じく共に具足し、十方世界、有情非情、草木國土まで、皆盡圓融圓偏充滿せりと云へ共、了緣の二因は、人間界を除いてよ

云へ共、隻手の聲を聞き得、音聲を止め得、見性の眼を開き得玉はざらん限りは、成佛は存じも寄らず。淨土の片端も亦見付け玉ふ事能はじ。然れども前生にて積み置き玉ひたりける萬善萬行の功德は、少しも滅せず、高位高冠、福貴自在の身と生れ、福貴を恃み、威權に誇りて、萬民を貪り苦しめ、美女を貯へ、憍奢を窮めて、有らぬ樣なる罪障を積みかさねて、死後には必ず三塗の難所に墮す。是故に云ふ、癡福は三世の寃なりと。癡福とは何ぞや。譬へば玆に信心の後世者有らんに、見性得悟の願心なく、四弘誓菩提心を發せず、唯單々に自利の善行のみ有りて、佛を求め、祖を求めて、多拜多禮して、萬善行を修す。是を癡福と名く。三世の寃也。向に謂ゆる六趣輪廻の内には、人身程得がたく、大切成る事は是れ無く覺え侍り。寔に天上界の善果にも遙に勝れりと社(こそ)覺え侍りとは、如何なる仔細ぞや。返す〴〵も心得難き事にこそ有るめれ。如何となれば、大凡古今の智者高僧及び世間の限りも無き後世者達まで、生天の福報を

綾羅錦繡を重ね纒ひて、止むことなき雲の上人におはせど、罪深き所は、民間竈下の奴婢臭婆の類には遙に劣れりと云はんか。世間の人君國王もまた宜しく心得おはすべき事なり。自己の暫時の榮耀をきはめ、自身の淫樂を極めんが爲めに、罪なき人の子を集め抱へて、黎民の膏油に飽かしめ、暖に着せ、恣に臥さしめ、吝惜嫉忌妬害種々の大惡業を積み重ねしめ、果ては叫喚焦熱、紅蓮、大紅蓮の大難所に墮在し、永く舂磨の大苦患を受けしむ。其初め是れ何人の所爲ぞや。其罪誰が身のうへにか集らんや。恐れても恐るべきは、六趣輪廻の受苦、悲しんでも悲しむべきは、三途八難の厄惱。誰か計らん、今の世の高貴高位、王侯貴人、福貴自在の人々の前身は、盡く是れ過ぎし世の勇猛精進、信心堅固の後世先達の再生し來り玉ふなることを。前の世に在りては、淨土にむまれん、成佛をとげんと、持齋し、持戒し、長坐し、不臥し、難行し、苦行し、秩父なるは、坂東なるは、西國三十三所なるはなど、種々精神を盡くし玉ふと

なり。縦ひ兩三人と云へ共、心得有るべき事なり。年の頃五十以上、隨分長低くて色黒く、鼻ひしげ、ほゝ先き高く、見苦るしきお多福と云へる美人を撰びて、二三人に過ぐべからず。此外は八九歳の兒女子なり共、一人も椒房の邊へ寄せ近づくべからず。是れ卽ち椒房不斷無事安樂、御主君御壽命長久大秘密の定法なり。譬へば此に層臺飛殿有りて、石崇が富貴に誇り、始皇が驕奢を窮めて、歌臺の暖響春光融々たり。舞殿の冷袖風雨凄々として、李娘は紫錦の裳、角婢は紅羅の襪、華質紅顏袂を連ね、蛾眉翠黛裳をかゝげ、簫笛琴鼓響を揃へ、美酒嘉肴器を並べて、縱ひ歡樂極まるも、盡く是れ民間の油ならずや。其樂み光音化樂の諸天にも越え、梵輔梵衆の歡樂にも勝りつべく見ゆれど、胸中は刀兵災の時の衆生より嫉吝妬害の心多く、憎愛嫌擇の恨みを結んで、藤壺の胸の焰を燒き上げ、祇王が袂の涙を滴てゝ、限りも無き無量の罪障を積み累ね、果ては燒熱無間の惡處に墮して、無量劫數の苦患を受く。打見たる所は、

じて、宮女三千同時に放逐し玉ふと。希有なる哉、玉體日ならずして快復ましまし、次第に健康にして、仁政萬民を救ひ、德功四海を蓋ひ玉ひけるとぞ。實に貴ぶべし。蓋し斯く云へばとて、陰陽兩儀の世の中なれば、夫婦の配遇は缺くべき事にしあらず。去りながら、神代の昔より二柱の御神と申し傳へ、父母は天地の如しとも語り傳へ、男女室に在るは、人の大倫なりと云へる金文も有るからに、一男一女にして事足らんのみ。天に二つの天なく、地に二つの地なき故に。然るをいつの頃よりの習はせにや、二地三地、四地五地、十地百地、數千地に到れども、飽足る事無きもの丶如し。斯くては中々長壽は保ち難かるべし。豈に是れ君子の志ならんや。豈に是れ仁人の樂みとする所ならんや。椒房の人にも亦宜敷心得是れ有るべき事なり。天下國家の爲め、萬民豐饒富樂の爲め、主君の御壽命長久の爲めにぞならば、椒房は常に人少く物さびしきに越えたる事は是れ有るべからず。近習の召し使ひも、兩三人にして事足るべき事

位久しからずして、不慮に難治の重症を發す。衆醫眉をしばめ、力を盡すと云へ共、百藥寸功なし。時に周南の傍に神醫有り、何れの所の人と云ふことを知らず。氏姓もまた無し。壽算三百七十歲、能く人の病性を察し、死生を見る。帝遙に使を發して、召して診候を窺はしむ。老翁一見して容を改め、額を攢めて曰く、大難々々。諸君の種々藥劑を盛り揃へて、陛下に擎げ玉ふは、譬へば此に蘭陵の美酒有らんに、一口の破瓶を居え置き、盛湛へて納め貯へんとするが如し。久しからずして必ず涓滴もまた無けん。今此破瓶、天下に滿つ。公卿太夫及び士庶人をさへに、共に合せ並べ貯へて、資産總に盡き、室家あれ傾けども、すべて顧みず。破瓶は常に人の壽算を縮め、人の榮衞をうばひ、人の身財を損ひ破る。破瓶は國家を治るの才なく、破瓶は萬民を助け救ふの德なく、破瓶は逆賊を防ぐの備にあらず。破瓶大に人に害あり。破瓶は豪釐も人に益なしと云つて、暫く眉を皺めて坐す。帝深く其の意を感じ玉ひ、卽日、群臣に命

けて御不足の御病症には、第一の禁物の若き女中衆抔、御近所に被指置候事、堅く御禁制可被成候。左も無御座候ては、透と御全快は計りがたき者に被存候。良藥は口に苦く、忠言は耳に逆ふと申す古言も侍るからに、少しは御心に障り申す事も侍るべけれ共、至極親切に存じ候故の事と被思召、御免可被下候。此等の趣も直談に申し演べ度、秋冬の間には出府仕り度存じ暮し候得共、種々無據故障多く、本意に任かせず、殘慮至極に令存候。來春は是非々々出府致し、御目に可懸候得共、夫れ迄を待ち兼ね、老眼を摩挲して、終霄燈下に書き認め令進覽候。老夫親切の程をも御考へ被成、隨分御愼み御養生、本の如くに御達者に御成り被成可被下候。千萬所希に御座候。唐書に曰く、唐の太宗皇帝、功、天下を蓋ふと雖も、身危きに幾し、玄齡如晦に賴つて策を決す。二賢詳に民衰へ國危きの大本を說く。此に於いて卽位の初め、勅して宮女三千人盡く放逐し玉ふと。寔に千歲の美談ならずや。又或る說に曰く、唐の太宗興國元年、帝卽

候ては、一箇の細民にも劣らせ玉ふ者には有之間敷候哉。偶々うけ難き人身をうくとこそ申し侍り。六趣輪廻の巷には、人身ほど大切なる事は無之覺え侍り。寔に天上の善果にも遙に勝りたる事共多き中にも、一國一城の太守とも生れ付かせ玉ふ事、千生にも萬劫にも逢ひ難き御身を持たせ玉ひながら、御覺悟惡敷、御養生の御心掛も無之、日頃勤め勵み玉ひたりし仁慈の御德行を、思召す儘に積み得させ玉ふ事も果させ玉はで、故の三塗の舊里へ闇々と立ち歸らせ玉はんは、如何計り殘念至極の事とは思召されず候哉。近頃何某の侯御遠逝のよし、是れも至極大切の仁君にて渡らせ玉ひけれ共、七旬に餘らせ玉ふ御老身にておはしける由。是非なき御事に侍り。殿下の如きは、未だ半百にも及ばせ玉はで、只今の盛の御身をもたせ玉ひながら、御不養生ゆゑ、病身にならせ玉ふぞやなど、世間の評判も苦々敷事に侍れば、萬事を愼み、萬緣を抛下し、御養生一片に御成可被成候。寔に薄氷をふむより危き御事に、乍陰氣遣敷存じ暮し候。別

罪障の輕からんが益し成るべし。是故に仁恕兼ね備はらせ玉ふ國君は、仁政を第一とせさせ玉ふ習ひに侍り。然るに此度、殿下へ進覽致し候法語には、養生を先きにし、仁政を第二に書綴り申候。仔細は先回久振にて高慮を得、御樣體を窺ひ申し奉り候所、先年よりは格別御顏色の樣子、軟弱に御見え被成候。是は定めて日頃御持病の痔疾の御痛み故と推察致し候へ共、昔の五人力の御元氣は透と相見え不申、第一は水分御不足と見請け候。寔に一髮千鈞至極御大切之時節にて候。隨分萬事御愼み、御養生第一なるぞと御覺悟可被爲成候。尋常並並の國主にておはさば、其分の御事に侍れど、殿下は格別御仁德厚く涉らせ玉ひ、常に萬民を赤子の如く憐愍せさせ玉ふ由。日頃承り侍れば、陰ながら至極御大切に存じ暮し侍るものを。萬一の義にても是れ有り候ては、御家中は申すに及ばず、御領內萬民の悲嘆は如何すべきぞと被爲思召候。過去の萬善萬行の功德に依つて、縱ひ今世には梵漢和三國を所領せさせ玉ひたり共、御壽命無之

にし、賦稅を輕くし、課役を寬め、窮民を助救ひ、國家を安撫し、第一酷吏の輩を忌み棄て玉ふ事を勸め奉るを以て至要とす。然るに此に一人の仁君おはして、如何計り仁政を施し、萬民を利濟被成度大望おはすと雖も、若し夫れ多病短壽ならば、中々叶ひ難き事に侍り。去る程に第一には仁政、第二には養生を御勸め可申事に侍り。去りながら暗君庸主の類ひ有つて、內觀と養生と共に並はせ雙べ貯へて、彭祖が八百の壽算をたもち、浦島が五百の歲時をかされ玉ひたり共、徒に仁恕の御德行もなく、日々に驕奢を窮め、多くの婢嬪の妖色を貯へ、歛臣酷吏の盜臣を愛し、貴び用ひ、聚歛酷剝、萬民を貪り掠め、國家をせめ苦め、左ながら虎狼の山岳に靠り威猛を長じ、長壽を保ちて、生命を殘害するに異なることなく、果しも無き大惡業を作り重ねて、死後には必ず無間焦熱の難所に墮して、無量刧數の苦患を受く。然らば卽ち長壽を保つて、限りも無き罪障を積み重ねるより、一日も早く根の國、底の國に歸つて、少しなりとも

さし藻草　卷一

何國何某侯の殿下近侍の諸賢の需めに應じて書せし草稿

增々御機嫌よろしく御在府被爲遊候條、珍重此御事に候。老夫無難に罷在候。先可申上は、先回は能社被爲思召出、見苦敷草廬御尋ね被爲遊被下、久振にて高慮を得奉り、老來の怡悅不過之令存候。尋常の人君にて渡らせ玉はゞ、左計り悅入存ずる事も有之間敷候へども、殿下の義は、天性仁恕の御志厚く渡らせ玉ひ、御領内の萬民をも殊の外御憐愍被爲遊、御家中の諸賢をも、常々御愛賞被爲遊候事、當時無雙の評判承り及び、如何計り悅入り、終に默止すること能はず、尋常纔に憶持し記持する所の古の仁君賢士の遺言性行、既に十數紙を書す。筆を留めて熟々顧ふに、君子に對し、片言隻字を進むるに、必ず急緩有り、先後有り、一國の主として萬民の父母たらんず君子は、最初第一に仁政を專ら

藏の虎の卷物に少しも劣らぬ田舍三略の兵書なるぞと思ぼして、繰り返し高覽可給候。若し又一向筋なきことに侍らば、草卒彼の竈下に尋常相勤め罷在候丙丁童子に可被仰付候。穴賢。惟時．寶曆第四甲戌歲。

邊鄙以知吾卷之下終

得なりとも書當てたらましかば、御政務の寸助にもなることもやと書き續けたるにて、利用を世波の底につるにしあらず。豈に聲名を塵苑の畦にさしはさむ者ならんや。一年、國清練若において見參しまいらせしより、折ふし愚老が噂仰出され候由。遙かに承及、感じ入り、高慮に契ふべき事とは存ぜずながら、心の及ぶだけ書載せたるにて侍り。さもおはさずば、七旬に及び老いさらぼいて、本の露、末のしづくにも劣りて、朝夕を計らざれば、世間の望みは一向におもひ絕へたるものを、何の追從輕薄にか、終夜老眼を摩挲し、孤燈を挑げて、斯くまでは書綴り侍るべきや。あしかれと祈らぬ小山田のいたづらならぬ僧都なりけりいなや。且又禹は善言を聞きては拜すと申すことの侍り。昔年の大禹と申奉るは、生知安行の大聖人にておはしけれども、樵漁奴隸の輩の語といへども、善言を聞かせ玉ひては拜し玉ひ、唯きくことのおそきを愁ひさせ玉ひけるる由。閣下も又林下野人の語といへども、政務を助る所あらば、彼の義經の秘

百萬石の若殿樣をば、玉簾金屛の中、錦帳繡幕の奧、雲井のあなたに休ませまし置、大切なるべくば、高かみにおかず、危き處を嫌ふ如く、自身は今日より引き下げ、仁政孝慈の使はれ者になりて、山海遙かに隔たりたる卑官奴僕のあさましき下郎におちぶれたると覺悟せさせ玉ひ、しかと主心を居へ定めて、かりそめにも大身主君の貌曲をせず、朝夕の膳部も一菜に過ぎず、夏冬の衣類も多くは綿布にして、人目を忍びては、庭の掃地や、てうづの水、或る時は輿に乘じたる貌にて、たのふだ人の御馬のすそ、見馴れぬ下郎の業までも仕習ひ手馴れ、內證は、大樹神君の聖慮を主意とし、仁澤を生民に施させ玉はゞ、天是に賜ふに長壽を以てし、地是にさゝぐるに多福を以てし、彼の仁者は壽しと云へる本文に少しも違はず、浦島が長壽を保たせ玉ひ、萬世の後までも明德至善の名大將なりしにと仰がれさせ玉へかしとの寸志斗り。君子も千言すれば一失あり、小人も千言すれば一得ありと申す古き言も侍れば、小人の千言若しや半

立處に金剛堅固、不老不死の大神仙とならせ玉ふ秘訣の指南にて侍れば、かほど目出度法要は是あるべからず。死の字は、第一武士の決定すべき至要なり。死の字を參究せざらむ武士は、身心ともに怯弱にして主心終に定まることあたはず。こゝはの大事の場になりては、思ひの外に臆病未錬にして、主人の專途に立つこと能はず。是故に云ふ、驚怖みだりに起るは、主心定まらざる故なりと。縱ひ平生武術を精錬して、太刀は九郞、鎗は眞田ほどつかひ得たりとも、主心定まらざる人は、まさかの時に臨みて、おくれふるへて、一向用に立つこと能はず。然らば則ち萬能にすぐれたるは、主心なるべし。若しそれ主心を定めんとならば、專一に死の字を決定し玉ふべし。死の字纔かに決定する則は、主心定まり立つこと盤石などをゆり居へたるが如しと謂つべし。厚重山の如く、寬大海の如しと。死の字纔かに決定したらん人は、見性得悟の一大事は掌上を見るが如けん。唯返すぐ〳〵も主心をゆり居へ、朴實に身を治めさせ玉ひ、只今迄の

侯の往來にさび箭一筋射かけたる者これなけれ。仁者は敵なしと申せば、隨分仁澤を施し、生民を憐み、國家を治め玉ひ、眞箇用心のためぞならば、譜代相傳の善き人々を前後に十騎召しつれ玉はゞ、輕薄追從のかきあつめたる雜人原千萬人召しつれ玉ひたるより、利方は遙かに强かるべし。去ながら、大福力おはして生民をいため苦るしめ玉はずば、何萬騎召つれさせ玉ふも御心まかせなれども、何國の沙汰を聞きても、物の哀れは萬民にとゞまればなり。若し又佗日參禪見性の望是あるにおいては、第一に死の字を參究し玉ふべし。死の字は如何參究すべきぞとならば、死し了り、燒き了る時、主人公何れの處にか去ると、動中を嫌はず、靜中をとらず、行住坐臥の上において間もなく疑はせ玉はば、一夜二夜乃至五日三日の中には、必定決定、大歡喜を得玉ふべし。法要も多く、指南もおほかる中に、死の字は何とやら底氣味あしく忌まはしき事に思ぼすべけれども、死字乍ち透過是あるにおいては、いつしか生死の境を打越へ、

ら天晴大福德備はらせ玉ひ、金銀に持ち溢れさせ玉ひてならば、兎も角もなれども、さはなくて多くは千石の所領にして二千兩の借義を負ひ、萬石の所領にして二萬兩の借義を負ひ重ねて、こゝはの大事有らん時に、箭面に立ち塞がり、粉骨碎身、主君の一命にも代るべき譜代相傳の家臣は目も見やらず困究させしめ、苦るしましめ、まさかの時に當て、合羽箱かつぐ事さへ叶はぬ人々に金銀を費やし、畢竟憐むべく悲しむべきは領內の萬民ならずや。一身の榮耀を極むとて、多少の人々を痛め苦るしめ玉ふは、如何なる心ぞや。後の世は如何かならせ玉ふべきぞ。寔に恐るべし。扨て又列國の諸侯參覲交代の行列を見奉るに、先きそなへ、あとそなへ、長柄何筋、鎗何筋、武具、馬具、旗竿、幕串夥しき人數にて通行せさせ玉ふ。去る程に、かりそめの川つかへにも、家がらに依りて千兩二千兩の費は間々これ有る由。是は定めて天正文祿時代の天下未だ靜かならざる時節、こゝはの大事の用心の格式なるべし。大樹神君世を治め玉ひて、諸

の涙をそゝがせ、果は地獄の衆生とす。少しも仁心有らん人の有るべき事かは。貞女兩夫にまみへずとは、あまり片おちなるしをきならずや。願くば賢夫兩婦を養はずともせまく欲しき事よ。昔し大相國淸盛に祇王祇女姉妹二人つかへし内は、事靜かにむつまじかりき。佛の前、獨りさしくはゝりたれば、朝夕に口をしき事のみ多くて、あるにもあられず、城中を忍び出で、二人とも尼になりけるとぞ。兎角椒房は人すくなに靜かなる程好き事はこれ有るべからず。智慧あらん人々は、こなたより請ひ願ひ玉ひてなりとも、人をへらし、事すくなに、靜かに暮し玉ひて、暇あらば後の世の事など穩密に營み玉ひたらんは、如何ばかり目出度かるべし。往々に三百五百の金銀を指出し、上國より舞子白人とかや云へるたはれ女を買取、よび下し、二三年も玩びては又は取かへ、引かへ、扇子か煙管など取かゆる樣に心易く覺へ玉ふ諸侯も是有るよし。去る程に一家中一年諸色の入り目三分一は椒房の入用につ いゆる御家も是有る由。去りなが

して餘計あらば、民をあはれみ惠み玉ふ事、第一の德行なるぞと覺悟是あるべし。古來の聖經賢典を披覽するに、盡くみな王道を以て第一と說おかせ玉ふ。王道を論ぜざるは、聖經賢典にあらず。王道は何を以てか主意とし玉ふぞとならば、第一に仁澤を施し、萬民を憐み救ひ、國家を治むるより外佗事なし。今の世に當て仁澤を施し、萬民を憐み救ひ玉はんとならば、憍奢を禁じ、費を制し、近頃申惡き事ながら、椒房の人を減少し、萬事を省略し玉ふより外、別の手段あるべからず。椒房の人々も當分は物さびしく、有る甲斐もなく心細き事に思ぼすべけれども、君のため、國家のため、萬民のため、且は後の世の爲めにてならば、智慧有らん人々は、など得心し玉はざることの有るべき。椒房は人數多き程、悋嫉妬害に片時も心の穩しき事なく、罪深き事のみにて、後の世のためあしき事こそ多けれ。主君もまた心あるべき事なり。かれもまた人の子なる者を、榮耀に誇り、自由をはたらき、班女が閨の恨を懷かせ、藤つぼの夜半

妾にならせ玉ひ、法王と稱せられさせ玉ふ事は何ぞや。雲鬟霧鬟の人々には、萬里眞如大德、千代野．中將姬、祇王祇女、佛御前、慧春尼。文臣武夫には、萬里小路の中納言藤房卿．最明寺入道時賴、刈茅入道重氏、佐藤兵衞憲淸、熊谷庄司次郎直實、遠藤武者盛遠、岡部六彌太忠澄、其餘の英雄豪傑の人々及び古今の智者高僧をさへに辭しがたき爵祿を辭し、棄てがたき恩愛をふりすて、あらぬさまなる艱辛を經させ玉ふ事は何ぞや。將た狂とや云はんか、將た顚すと云はん。將又未だ天堂地獄なきことを知り玉はずとせんか。佛法中には因果を信じ、來生あることを知り、苦報を恐るゝを以て大智慧とす。夫れ人を萬物の靈と稱して、馬牛犬豕、豺狼麋鹿に異なるゆゑんは、來生有ることを知り、苦報を恐るゝを以てなり。儞等が所見に任せば、一切の人をして馬牛犬豕、豺狼麋鹿に齊しうして而後にあき足る者ならんか。縱ひ閣下世を治め、國を守り玉ふ事、百年にもせよ、五十年にもせよ、隨分恐れ愼ませ玉ひ、華奢を禁じ、浮費を制

なりとし、妄談なりとして、手を拍して大笑して云く、人は二氣の良能にして、死すれば燈などの消うするが如くなるものを。何の天堂かあり、何の地獄かあらむと。是はこれ斷見外道の所見にして、恐るべきの惡見なり。昏愚是より甚しきはなし。小智は菩提のさまたげとは、是等の輩を云へり。若し其果して地獄なく天堂なくんば、普天の下、王土にあらずと云ふことなし。何の佛場神區をか留めん。率土の濱、王臣にあらずと云ふことなし。何の沙門僧尼をか容るさん。然るに天竺に祇園精舍あり、竹林精舍あり、逝多林那蘭陀寺あり、漢土において五山あり、十刹あり。吾が日域は云ふに及ばず、多少の法窟靈場あり。若し其天堂なく、地獄なくんば、果して是何の用ぞ。佛像經卷何の閑家具ぞ。且又古來萬乘の尊貴、袞龍の珍御を脱し玉ひて、圓顱方袍の形をやつさせ玉ふも、其限り有るべからず。遠くは妙莊嚴王、淨藏淨眼、悉多太子、近くは華山の聖天子、其餘の歷代の至尊、十善の帝位をすべらせ玉ひては、剃髮染衣の御

さし出して、ぶる〳〵とふるへわなゝく有り。是は八十年以前の伊豆の去る役所の人々なるよし。其邊りを見廻せば、木蔭に立ち並らびたる牢獄は古きも有り、新しきも有り、數も限りも無き中に、貴くをさ〳〵しき人の見馴れぬ裝束し玉へるが、苦るしげに首うちかたげて坐しねむり玉ふも有り。また虎鬚はへわかれておそろしきかほくせしてかゞまり居たる有り。唐土日本において國王にもせよ、大臣にもせよ、情けも無く非道に民を貪り苦るしめ玉へる人々なるよし。其外處々の獄處の有様を思出しては、身の毛だちておそろしく侍りと、むせかへり〳〵物語しけるを聞侍りては、夜とてやすく寢られ侍らね。助かるべき道しあらば、敎化せさせ玉へや、彼の娘にて侍る者も飛立つばかり詣で度き心には侍れど、長病の身、中々一足も叶ひ侍らず。我々ばかり右の物語を聞きもあへず、恐ろしさに思ひ立ちて、さまよひ來りたるにて侍りとて、名號など乞ひ求めければ、書てあたへ侍りき。今時往々に斯る物語りを聞きては、虛說

き獄卒の種々の罪人を引立々々出で入るは引きも切らず、彼の城門の中をおづおづさしのぞきたるに、方量もなく廣き大庭に、かずもかぎりもなき罪人共の、ぐれ石の上にひし〳〵と蹲り居て泣き悲しむは、目も當てられずなん有りけり。彼の者どもの口々になん云へるは、娑婆にて斯く恐ろしき處ありと露しらざりし悔やしさよ、法談などに說教ゆるをば、ゑ知れぬ尼法師原が物もらはんと筋なき事のみ云ひ散らすぞと譏り輕ろしめたりし勿體なさよ。何れの日、何れの月にか、斯る處を遁れ出ることのあるべき。淺猿の今の有樣やと泣き悲しむ聲は、肝に答へて恐ろしかりき。其外叫喚大きゆうくわん、焦熱大しやうねつ、黑繩衆合とかや聞へし處々の地獄の有樣は、心も言葉も及ぶべきことかは。また古き木森の蔭のほの暗く物すごき處に、古き牢獄の朽ち腐さり破れ傾むきたる中に侍がましき者七八輩、疲せ衰へたるが、袴肩絹も破れ果てたるを引きかけ苦るしげに屈まり居て、人影を見付ては物乞ふ風情にて、をがらの如くなる手

打泣々々物語しけるは、扨ても過ぎし頃、我は怪しき人々に引立てられて、谷際の如くなるほの暗くおそろしき處を十里ばかり行くよと覺へて、堪へがたく苦るしかりしに、地獄とかや云へる恐ろしき世界を彼方此方へまはりたるに、四面眞暗にして、月日の光はなくて、無間焦熱の焔のどゞともへ上る中に、わゝと聞ゆるは、罪人共のせめなやまされて泣き叫ぶ聲なり。尊貴も、高位も、乞食非人も、一處に追ひ籠められて、目も當てられぬ苦患をうくる。中には日頃見知りたる人々も多かり。出家沙門なども打まじり責めさいなまるゝも有りけり。又見かすむばかり廣き野原に、がきやみとか云へる者なりとて、人の形にはあれども、黒くもへぐいの如くなるものゝ痩せからびたるが、幾等ともなく屈まり居て、ひゝと泣き悲しむ有り。斯る處をはるぐ〵と行き過けるに、十丈も疊み上げたる鐵の城門にたどり着きぬ。見上ぐれば二丈ばかりも有るべき大きなる額を打たり。是は閻羅大城と云へる文字なりと教へ玉ひき。けたゝまし

ば、事足らぬなど存じもよらず。近頃乞食非人を憐み、老病を惠み救ふ程の事は、苦にもならず侍りと仰られければ、高野の御室は感じ入らせ玉ひ、漢和の才の優かに渡らせ玉ふをさへ浦山しくあをぎ申たるに、世間の事までも斯く賢く渡らせ玉ふ御事よと、感涙せきあへさせ玉はざりけるとぞ。寔に千載の美談ならずや。去ぬる寛保己巳の夏にやはある、むくつけなき老女七八輩、予が室を扣いて、告て云く、我々は是より十里ばかり北なる桂山と云へる人里もつゞがぬ山里の賤の妻どもに侍り。不思議の子細ありて、是までは尋ね詣でたるにて侍り。慈悲と思ぼして鹿猿にも劣らぬ我らが耳に入らんず御法を一言なりとも教化せさせ、永き闇路を照らさせ玉ひてよ。且又是なる老女が娘にて候者、去年の冬より重痾に罹りて臥ししづみ侍りにたるが、次第によわりつかれて事切れ侍りにたるに、胸の邊りの少しく暖かに侍るからに、野邊の送りも墓々しくせざりけるに、斯くて十日斗りも過ぎにたるに、一夜風と蘇息し起き來て、

さてもかたいなかのすまひは、萬づ心にまかせぬ事のみ多く、殊に所領もうすく侍るからに、あさゆふに事足らぬ勝にて、面白からぬ月日を送り侍りと語りもあへさせ玉はず、御目の中うるみて打しほれさせ玉ひにたれば、京の御室の御仰に、さればとよ、世上の人々の有樣を見聞き侍るに、乏しき事も、事足らぬ思ひも、何れもすき好み玉ふ樣に見請け侍り。是は御仰とも覺へぬ事を承るものかな。誰やの人か人心地有らん者の身の貧しく事足らぬを數寄好む者の侍るべきや。去ればとよ、憍奢を恣にし、華麗を好むは、畢竟貧賤をすき好む者なり。三人にてすむべき從者をも五人も召伴れ、五人にてすむべき被官も十人も召かゝへ、衣類につけても、調度につけても、徒步にてすむべき假初の物詣にも、輿よ車よなどのゝめかせ玉はゞ、萬戶侯に封ぜられさせ玉ひにたりとも、事足らせ玉ふ御覺はおはすまじきぞ。おのれなどは、とてもすて果てたる出家遁世の身なれば、一尺をば五寸にしゞめ、一丈をば五尺に省略しもて行き侍れ

し、持齋し、持戒し、讀誦し、書寫し、種々精神を苦るしめ盡し玉ひにたりし貴僧高僧及び一切の修行者達の再來し玉へるならむとは。縱ひ三界の秘密を行じ盡したりとも、見性の眼ひらけず、菩薩の大行を行ぜざらん限りは、成佛はかなひがたき事なり。然れども前生多少萬善の功動空からず、尊貴高位、福貴自在の身に生れ、隔生卽忘とて、宿昔の菩提、慈善の志は忘れ果て、福貴を恃み、威權にほこりて生民を苦るしめ、賦税を貪り、際限もなき惡業をつみかさねて、死後には必ず惡處に墮す。此故に云ふ、癡福は三世のあだなりと。兎にも角にも政務に御錯りなき樣第一の謹みなるぞと御覺悟是あるべく候。縱ひ何れの國主なりとも、仁澤を施し、生民を憐み惠み玉ふ事は力及ばずとも、華奢を禁じ、浮費を制し、堅く節儉を守り玉はゞ、民をむさぼり苦るしめざる程の事は、かたからめやは。昔し高野の御室と京の御室と御連枝にて渡らせ玉ひけるが、或時京の御室へ入御ならせ玉ひ、來し方、行く末の盡きぬ御物語りに、

るを是を秘し、是をかくして、空しく蠹魚の腹の中に葬らば、かならず神君の冥慮に違せんか。當時天下の武士たらんず人、神君の冥慮に違せば、不忠是より甚しきは無けん。貴國は御先祖より數代以來、仁德あつくおはして、仁慈恭謙の君子多く、忠勇廉潔の人傑足りて、各々王佐の才を備へて、代る〲仁政を輔け佐く。此において國肥へ、民純にして、農に餘まんの粟あり、婦にあまんの布有りて、纔かに境に入れば、山光水色俄かに觀を改む。遠村近里、祥煙列り浮ぶ。謂つべし、東海の君子國なりと。是故に苛政の謗を終に世間に惹き玉はず。熟々おもふに、閣下もまた宿福厚くおはして、斯る目出度仁義の國の太守と生れさせ玉ふ事、前生多少戒德の致す處なり。猶々恐れ謹ませ玉ひ、宿昔萬善萬行の廣福をつかひつくして、罪障業苦の惡因に仕かへさせ玉はぬ樣の御心掛肝要に候。誰か計らむ、今生の天子將軍、大名高家等の福貴自在の人々は、盡是前生多少の後世者達の淨土に生れん佛にならんと兩生三生、難行し、苦行

甚しく因果を嫌ふ。僧の因果を說くを悟んで、其衣を民にし、其居を廬にせしに齊し。後來世の佞臣賊士の如きは、此書の世に行れんことを悟んで、必ずみ[云カ]ん。苟くも吾が大樹神君、明德至善の遺言、豈にかろ〲しく世間に流布して、鄙俗の手に觸るゝものならむや。唯是十重に包裹し了て、文庫の底に納め藏して、人をしてみだりに披覽せしむべからずと。若し果して然らば、吾が十力調御の如來の如きは、種姓は卽ち五印度の主、淨飯大王の太子、威德は卽ち三界六趣の敎主、梵釋掌を合せ、龍天是を戴く。尊貴は大凡是より盛なるは是有るべからず。然るに其所說の經卷、民間をゑらばす、市鄽をすてず、只其流行することの普からざらむことを恐る。是故に卷をひらけば、多くは流通分を見る。奴隷僕御の輩といへども、或は手に觸れ、或は讀誦するを以て貴しとす。此書の世を利し、民を救ふこと、荒旱の膏雨の如く、野渡の船筏に過たり。慈悲を萬の本として菩薩の大行に齊しき、神君豈に其利益の廣きをいとひ玉はん。然

ひ世を利する心あるも、薄福暗短、此書の力に及ぶべきかは。是故に其人を見て此書を讃す。此書若し一國に行はるれば、卽ち一國の大幸ならくのみ。をしむべし、世に劍を知る人なければ、大阿も凡鐵に混ずることを。後來必ず此書の世に行はるゝを悅び敬すること、玉炬を夜途に拾ふが如く、南針を霧海に得るが如くなるものあらむ。後來此書の世に行はるゝを見て、憎み恐るゝこと、疫鬼に狹路に逢ふが如く、惡虎を幽谷に見るに齊しきものあらん。如何にや人の君たると、人の臣たると、此書を悅び敬せざる者の有るべき。如何にや人の君たると、人の臣たると、此書を憎み恐るゝ者有るべき。云く、此書を敬し此書を悅ぶは、禹湯文武の明主、周公召奭の賢臣、此書を恐れ、此書を憎むは、殷紂夏桀の暴君、趙高李斯の賊臣、秦火もまた計るべからず。昔し秦苛政を恣にして、趙李其政柄をとる。貪斂劫奪、大に聖經賢典に違す。違する則は謗を千載の後までに惹かんことを恐れて、儒を坑にし、書を焚く。唐武暴逆にして、

得る事叶はぬ農工商の類ひは、家々の持佛堂に一卷宛納めおきて、朝夕におし戴きたらんには、上もなき家內安全の祈禱なるべきぞ。人あり必ずみ(云カ)ん。鵠林俄かに此書を讃して六經にも越へたりと、何ぞ考へざるの甚しきや、此漢必ず諂ひ求る處あらんと。若しそれへつらひ求むとならば、奇籌妙算、百端千端、何ぞ必ずしも此書に限らむ。予もまた竊かに諸君の考へ玉はざるの甚しきを笑ふ事あり。譬へば良醫の藥を調合するが如し。纔かの木通一味なれども、便通などさしつまりたる十死一生、重病難治の人のためには、附子、人參、黃蓍、砂參も及ばざる奇功を發する事あらむ。此時人々賞歎して、木通は附子、人參にも勝れたりと云はんを、考へざるの甚しきと云はんや。此書の如きは、今の世の附子、人參なる事を知らずや。諸君何ぞ考へ玉はざることの甚しきや。縱ひ又邪計を設けて諂ひ求め得るも、命日已に崦嵫に逼る。果して幾時をか見んや。予が如きは、寔に緇林の稗稊なれども、世を利する心なきにしあらず。縱

下泰平、御世長久の祈禱のためには、此書に過たる經陀羅尼は是有るべからず。武士にも似合はぬ經長念佛し玉はんより、此書を貴びよみ玉はゞ、現當二世の利益を得玉ふべきぞ。如何なる金持たる後世者もあれかし、梓に命じて此書を壽ふし、普く世間に印施し、取分け武士たらんず人々の讀み玉ふ様にせまほしきことよ。然らば卽ち如何なる堂塔伽藍をおびたゞしく立てひろげたるより廣大の善根なるべきぞ。沙門釋氏は吾々が先祖の佛の說きおかせ玉ひにたる御法なればとて、朝夕に讀誦する如く、當時日本の武士の爲めには、佛神にも、先祖にも、神君に越へたる事や有るべき。然らば則ち人々の貴び玉ふべきは、第一に此書にあらずや。武士にも限らず、萬民にもかぎらず、出家沙門、乞食法師の類ひまでも、堯年舜日の恩澤に預る事は、大樹神君、慈悲を萬づの本とし玉へる萬古不易の善政の威德ならずや。幸ひなる哉、かな物に書留めさせおかせ玉ふこそ有難けれ。如何なる不文字なる武士も、法師もよみゑ易く、一向讀み

にも過たまふ金言なりとこそ覺ゆれ。纔かに百紙に足らぬかな物なれども、當時日本の武士の爲めには、如何なる海藏龍宮の金文にも勝れ、諸史百家數萬卷の書藉にも越へたり。專なき史記や左傳を讀み覺へて、物知りだて仕玉はんより、家を治め、身を治むるには、此書に過たる事や有るべき。一國一城の主たらむ人々は、朝夕の看經誦經の代りと思ぼしてよみ玉へかし。此書を貴び讀まんず國は、神明とこしなへに鎭護し、佛陀も擁護の眸をたれ玉ひて、其國必ず水旱疾疫の災難なけん。殊更當時泰平の御世には、一日も欠くべからざる金文なり。此書を貴びしたがはんず國は、其國必ず繁榮ならむ、兒孫かならず久長ならむ。此書にそむき隨はざらん國は、其國かならず災害あらん。國脉必ず久しからじ。惜むべし、此書の空しく故紙堆中に在る事。譬へば和氏の璧、照乘の美玉の泥土の底に在るが如し。彼の連城の美玉の如きは、千顆萬顆つみかさねたりとも、立處に國を利し、民を救ふ事、此書の力に及ぶべきことかは。天

きを忘れず、治に居て亂を恐るゝは名將の習ひなれば、晝夜に怠らず武術をはげみ好んで油斷なきを家業とすべし。毫釐を爭ひ、賦稅をしぼり取り、民のしむらをそぎ落して、金銀に仕かへて、公義の藏へおさむるを忠節なりとす。不忠是より甚しきはなし。忠節とは善き者を勸め上げて、主人に用さするを肝要とし、慈悲を萬の本として民を憐み、諸人安堵して、其國治まる樣にするを第一の忠孝とはするぞと仰られたり。近頃不慮に神君の御遺訓を披覽し奉り、且つ驚き、且つ悅ぶ。誰か計らむ、大樹神君斯くまでに仁德厚くおはして、聖智斯くまで優かに渡らせ玉はんとは。仁政の美、治世の式、三台四海を照し、五緯中央を鎭して、天下を泰山の安きにおく。寔に漢高四百年の洪基にも越へたり。開闢より以來、比類こそおはせね。如何樣是は尋常にてはよもおはさじ。法身意生の佛菩薩の末代の衆生を憐ませ玉ひ、かりにしばらく宰官の身を現し玉ふにやある。大凡漢家にも本朝にも類ひもなき寶訓、六經にも勝さり、論孟

邊鄙以知吾　卷之下

然るに大樹神君の如きは、あくまで仁德厚くわたらせ玉ひ、民を憐み天下を愁ひさせ玉ふ事は、大凡漢土にて聖人君子と稱せられ玉ひにたりし人々よりは、遙かに勝れさせ玉ふとこそ覺ゆれ。常々の御仰に、善政を天下に施さんとならば、忠諫廉直の賢臣を近づけ用ひ、追從輕薄の佞臣を遠ざけ棄て、朝暮に萬民の凍餒を畏ぢ恐れ、稼穡の艱難を憐み愁ひ、武術を怠らざるを第一とすべし。脉を取て死生を知るが如し。憍奢の國主は必ず貪り、貪斂の國家は必ず亂る。武家に武道のたゆるは、卽ち一身の死脉と知るべし。民を貪り苦るしめ、ひたすらに身の榮耀をのみ好むは、唐の太宗は民はわれと同體なる者を、是を貪り、是を苦るしむるは、我が股をさきて、我が腹をこやすが如しとたとへられたり。縱ひ腹は肥へたりとも、股の肉盡きなば、我が身立つべきやは。安きに居て危

邊鄙以知吾　卷之上終

起つて、偷臣の邪計より生る。悲むべし、列國の諸侯の諸方の君子、夢にも是を知り玉はず、常に自ら謂へらく、國泰民安。寔に延喜天曆の御代にも劣らずと。嗟危いかな。

にして、民は國家の根軸なることを。譬へば此二千尺の老松有らんに、根盤三泉に徹し、枝柯九霄を拂て、常に千秋の翠光を籠め、遠く十里の風聲を傳へて、龍吟し、蛟瞋るが如くなるも、日々に其本根を堀り、時々に其根盤を發かば、老松それ久しく青きことを得んや。須らく知るべし、日々に民を恵むは、其本根に培ふものなり。日々に民を貪るは、日々に國家の根盤をあばくものなり。大凡公卿より下庶人に到るまでに、工あり、商あり、巫醫、樂師、百工の族までに、千萬種の人類あれども、農民の膏油を舐て立たざる者は半箇もまたなし。民微せば我が輩盡く斃れ、道路に餓死せんか。寔に知る、民は國家の大本なることを。是故に豐聰王子の如きは、百姓の百の御寶とよばせ玉ひけるこそ有難けれ。然るを是を貪り、是を苦るしめ、これをなやまし、是を害せば、千神憎み嗔り、百靈恨みにくむで、天此に下すに災害を以てし、此是が壽算を奪て、武運も盡き果て、國脉必ず斷絶せん。子細に見來れば、盡く是酷吏の貪殘より

るまで墮涙の碑と稱し、したひ悲むとぞ申し傳へ侍り。三國の時、西蜀の關羽將軍と申は、荊州と云處の刺史なりけるが、純朴を常とし、憍奢を禁じ、儉約を守り、浮費を制して、天性王佐の才をそなへ、賦稅を輕ふし、聚歛を遠ざけ、生民を撫育し、毫釐も民を貪り苦しめ玉ふ事なかりければ、荊州の民懷づくこと父母の如く、敬すること神の如し。將軍遠逝の後、民其德をしたひ、大社を營み、關將軍の廟と稱して祭奠怠ることとなし。一日も民の父母たらんず人は、羨むべきの芳躅なり。去る程に仁君明主と稱せられさせ玉ふ人々は、仁心厚くわたらせ玉ひ、御家人は申に及ばず、遠境邊土の細民に到るまで、晝夜慈悲愛顧の賢慮を廻らさせ玉ひ、最初に憍奢を制し、國家の費を恐れさせ玉ふ。奢る則は費多し。おほき則は苛政を好む。苛政は常に民を貪りかすむ。掠る則は、人民嗔り恨む。恨むる則は、其國必ず亡ぶ。養生書に云く、氣は民の如し。民衰る則は國家必ず亡ぶ。氣盡る則は人必ず死すと。宜なる哉、氣は一身の本元

とはどうじや。人知らず果は皆つぶるゝはさて。是皆家民骨髓にとほつて憤り恨みて云出す、暫時の戲言なれども、村民の長たる人の先祖と子孫の人々の爲めには上も無き追善祈禱なるべし。何が故ぞ、長若し此謎を聞て恐れ愼む則は、子孫必ず相續せん。若し又乍ち仁心を指起して、尋常細民を憐み敬ふ心あらば、子孫大に繁榮ならん。多くは彼の謎々に少しも違はで天理に責められ、人刑にかゝつて、悲むべし、相續し來る底の家財は盡く沒却して、四壁は伐られて竈下の薪となり、境内は鋤かれて佗の田畠となり、先祖は是より依方なきの野鬼となんぬ。子孫乍ち斷絶す。寔に羨しからぬ者は、村民の長家なり。昔し漢土に羊祜と云へし人、襄陽と云ふ處の刺史なりけるが、天性仁恕の心厚くおはして、常に酒色を遠ざけ、費を制し、其餘を散じて以て窮民を安撫せられければ、國家富み榮へにたりけり。萬民其德を感じて、羊祜遠逝の後、峴山に石碑を立おきけるに、其邊りを往來する國民ふしをがみて感涙を落しける故、今の世に到

て行く者纔かに八九家。是は定て勤役中少しも貪り掠むる事なき善き人々の後なるべし。其餘は多くは根を斷ち、枯をからす。纔かに殘り止まる者も、必ず白盲靑瞽の類多し。尤も傷み悲むべきは、長家の先考宗祖なるあり。其初め微なりし時、苦寒を侵し、煩暑を凌いで、許多の艱辛を喫し盡して、歲月を重ねて漸く家業を盛大にす。其盛大なるに及んで、衆民是を撰び勸めて、終に村民の長とす。此において遠近來り賀し、親眷悅び走る。是より憍心きざし起り、俄かに所々室家を修補し、門閭を營建し、新しき和襪蹈みかふて、衣類につけ調度につけ、次第に榮耀に誇り、華麗を好んで、家財大に費ゆ。是より竊かに邪計を廻らし、奇籌を設けて、烈しく細民を貪り掠む。細民憎み恨むといへども、各々堪へ忍んで淚を含んで相隨ふ。外面は伏し隨ふといへども、胸中の哀嘆悲傷何れの處にか歸せんや。是故に民間に謎あり、云く、桶屋の正直なに、村民の長殿とはどうじや。はて村々を削り取るはさて。深山の熟柿なに、長殿の御家

願くば萬歳なれや。此の君の爲めにならば、白刄をも踏んづべし、黑火にも投じつべし、我が侯願くば萬歳なれやと。民心斯くの如く貴び懐づく。是を民聚ると云ふ。若し又國君貪歛にして專ら酷吏を貴び、民を貪り掠め、苦るしめ、金銀を夥しく貯へ納め、國家を困窮せしむるのみにあらず、左右の近臣までをも逼迫せしむ。此において家民恐れ憎むこと虎の如く恨み背き、瞋り罵り、市に哭し、野に悲んで嗟く。願くば仁人あれや、願くば競ひ來て、文武の紂を討つが如く、劉項の秦を破るが如く、吾が境に入り、吾が國を領し、我が國を治め、吾國を靜め、逐一酷吏の輩を誅し、吾が輩を救ひ、我が輩を蘇せよ。我が輩をして旦暮を安からしめよ。嗟願くば仁人あれやと、天に訟へ、神に祈る。斯くまで人心離れ背く、是を民散ずと云ふ。熟々おもふに世に羨しからぬ者は、村民の長家なるめり。五十年來、予が西東二十里が內、村民の長たる家、大凡數百家の人々の末を見るに、多くは郎當落魄す。其中少しも衰滅なく相續しも

に細民有て、五箇三箇、伴を結んで遠く他國へ行かんに、他國の民若し其侯を指して或は罵り、或は謗ることある則は、細民大に嗔り叫んで打果すこともまたかへり見ず。諸國の民皆然り。吏若し先代の仁吏に傚て、年の凶豐を考へ、民の否泰を察して、上下利を同し、尊卑苦樂を共にせば、國君に對して豈に此凶態あらんや。窮鼠却て猫を咬むと云はんか。然者卽ち張本は民に非ず、吏と長とに非ずして何ぞや。古へに云く、財散る則は民聚て、財聚る則は民散ずと。民散ずとは、家民恨み背きて、老たるを負ひ、幼きを携へ、啼泣して境を越へ、他國へ走るを云ふに非ず。境をも越へず、他國へも行かざれども、民心疎み離る。是を民散ずと云ふ。民聚るとは、衆民悅び慕て他國を離れ、簞食壺漿して我が國に來り聚るを云ふにあらず、民心悅び懷く、是を民聚ると云ふ。國君仁德有て萬民を憐み救ひ、酷吏の輩を忌み遠ざけ、毫釐も民を貪り掠めざる則は、衆民悅び懷き、市に謠ひ野に拍て云く、我が侯願くば疾病なからんか、我が侯

長を語らひ志を同し、計を定めて官命なりと稱して、恣に貪り掠め、日々に奪ひ、月々に掠めて、終に其利を二つにして、吏と長と是を分て、公は預からず。是故に長家は日々に繁興し、康藝が高厦を構へ、石崇が堂奥に坐す。絃歌遠く傳へて轂車轟き鳴る。細民は日々に衰へ、月々に悴けて、妻孥もまた養ふこと能はず、家々に苦しみ哭し、戶々に衰へ悴けて、窮餓相煎ず。野に菜色多く、怨恨内に逼て、死亡もまた顧みざるにいたる。こゝにおいて或は二萬、或は三萬、蟻の如くにあつまり、蜂の如くに起つて恨み叫んで、先彼の長家を圍んで門閭を破却し、家財を粉碎す。若し彼の長を捉へば、かならずさいて食はんとす。其勢折るべからず。果ては城中に込み入り狼藉せんとす。此において領内の寺院を傭て、だましすかして是を治む。靜謐の後ひそかに狗をまはして其張本を探り捉らへて、或は二十、或は三十、或は磔し、或は誅して、爛骸野にあまねし。特に知らず、張本は民にあらず、却て吏と長となることを。たとへば此

の辛酸を嘗めん。熟々おもふに俟吏品殊に尊卑事異なりと云へども、誰か其祖宗なからん。若し其果して祖宗あらば、各々泉下に在て儞が官吏にうつるを見ば、必ず大に啼泣してみん。焦穀牙なく、酷吏後なし。我輩久からずして必ず祭奠なきの閑神となり、依る方なきの野鬼とならむ。嗟願くば仁吏なれや、酷吏となることなかれと。おもふに仁吏並び立つといへども、否泰はるかに霄壤なり。大凡世の吏たる人の後を見るに、仁吏の種族は後來必ず盛大なり。酷吏の部屬は向後多くは郎當して道路に餓死す。四十年前、何某處役所に酷吏ありき、人民大に憎み恐る。久しからずして人刑有て俄かに其職をはがれ、改易されて牢落す。母は和樂をうたふて街市に袖乞し、父は戰書を讀むで人の門閫に立つと語り了て慘然たり。或人の云く、酷に兩般あり、謂ゆる奢と貪となり。奢より出る者は公なり、貪より出る者は私なり。私は多く、公は少なし。公は恐るゝ所なし。公然として是をうぼふ。私は恐るゝ所多し、必ず密かに村民の

て、賦税に事よせ、官租になぞらへ、民の穀帛を掠め奪ふこと、枯骨を絞て汁を求るが如し。此において國衰へ民疲る。冬暖なれども兒は凍へたりと號び、年登れども妻は飢へたりとなく。而後に衆民盡く恨み背く。そむく則は其國必ず天禍あらざれば人刑あり、國夫久しからざらむか。所以に云ふ、鳥の將に死なんとする時、其鳴くこと悲し。國の將に亡びんとする時、其貪ること烈しと。寔に恐るべし。吏もまた宜しく自ら計て、恐れ愼むべし。君侯の威權を借て、妄に民を惱害し、妄に民を掠め奪ふ。大凡仁義あらん武士の假初にも爲すべき業かは。忘れてもあるべきことかは。嗟夫儞の後を如何。豈に獨り佗の國祚を害し、他の國脉を斷て、而後に徒に休する者ならむや。自家もまたかならず儞の繼嗣を斷たんか。豈にそれ儞の繼嗣をたつのみならむや。人の臣として君の國家を亂る、不忠是より甚しきはなし。人の臣として君の國祚を害す、罪過是より大なるはなし。死後には必ず惡處に墮して倶底恒沙の苦患を受け、火血刀

西に分離せしめ、つひに其國脉を斷たんと計らば、闔國人嗔り憎んで鼓を鳴らして是を責めて、油にて煮、牛にて裂くと云へども飽き足ること無けん。殊に知らず、酷吏は寔に是より甚しきことを。然るを是を愛し、是を用ひば、國それ久しからざらむか。寔に危いかな。時に一僧あり勃如として頭を掉て云く、否なり、酷は奢の影なり、奢は聲の如く、酷は響の如し。予が曰く、何といふ事ぞや。原（たづぬる）に夫暗君國を得る則は必ず奢る。おごる則は多くは妃嬪を列らね嫂嬙を聚む。あつむる則は財用足らず、たらざる則は、百端を究めて是を求む。財の物たる、木についても求むべからず、水に就いても得べからず。こゝにおいて酷吏の尤（本ノマヽ）けき者を擇らんで是を民間に放て、民の財利を掠め奪ふ。うばふ事烈しく、得る事の多きを愛して以て賢なりとし、以て忠節なりと稱して、是に賜ふに爵を以てし、此に授るに官を以てす。此において吏族大に眉をひらいて、飛廉が肩を瞋らし、惡來が臂を張り、王莽が眸りを凝らし、董卓が頭を掉

ずして、是又俄かに早世す。悲むべし、十萬石餘の大家乍ち根をたち葉をからす。數十人の家中、老幼尊卑、東西に分離し、南北に奔波して、一城乍ち空墟となんぬ。寔なる哉、天將に雨ふらむとする時は山色必ず近く、國將に亡びんとする時は、民間先づくるしむと。是彼の嚮きに謂ゆる酷吏の國家をみだり、國脉を斷ず現證なり。後來寶永丁亥の春、予行脚して錫を其城下に留む。一日持鉢の序で、道友三五輩、ともに彼の侯、師檀の寺に入て、侯、先君の宗廟を見る。香華久しく道たへて鬼哭し、神悲むに似たり。各々顙を攢めて嗟悼して云く、嗟已哉、唯是一箇酷吏の苛虐より起て、終に此荒蕪を見る。一國の君一城の主たらむ人のおそるべきは酷吏なり。是卽ち向きに謂ゆる酷吏は代々先君の宗廟をして荆棘の野と成し、狐兎の栖とし、酷吏は代々先君の神靈をして祭奠なきの閑神とし、依る方なきの野鬼とする現證なり。譬へば此に賊臣有て秘計をめぐらし、奇籌を設けて其國を亂し、其家を破り、其君を害し、其群臣をして東

大に亂る。咸陽やかれ、阿房燼す。桀紂幽厲の暴君暗主各々酷吏を愛しもちひて、民をして塗炭の中にくるしましむ。果して四海のとみを失ひ、萬乘の貴階を下る。元祿の初め、中國の內、何某の侯の家に酷吏あり、大に民を貪りかすむ。生民悲しみ哭す。村民の長たる者あり、爭ひいさめて利害を說く。酷吏大に嗔り憎んで、窃かに侯に訟へ讒して、彼の村民の長を誅す。長、誅せらるゝに及んで、天を仰で長嘆して云く、我若し罪の誅せらるべき有て、我を誅せば卽ちやんぬ。若し又罪無ふして我を誅せば、儞君侯かならず三年の治を得む。國脉必ず三年にして斷絶せん。儞が輩これを見よと云ひ畢て死に就く。天色朦朧として草木慘然たり。誰か計らん、某侯未だ百日を經ざるに、乍ち心痛の重痾を發せんとは。百藥寸功なく針灸しるしなふして、衆醫手をつかねて、終に死亡を見る。一城大に慟哭す。嗣ぐ子四歲なりけるを、傳奏所へ奏し、願て家督を繼がしめんと、家中の故老相添ひ、はるかに武陵に趣く。着府いまだ日あら

事有らむに、其初め理非を分たず、勝敗を辨ぜず、混然として日を重ぬ。張是を愁て、窃かに寄する事有る則は、李が空處を探て、少しく是を呵す。李大に驚き恐れて、ひそかによする事ある則は、又張が空處を捉らへて、少しく是を呵す。張李互に驚き恐れて、代る〴〵相寄すと云へども、金鍮辨ぜず玉石分たず、或は五年、或は十年、寄せ〳〵して遂に財盡き力究て、一向寄すること能はざる者を捉へて、終に是を負處に推す。是故に民の酷吏を恐れ憎むこと、惡虎の聚落にあるが如く、疫鬼の國中に流行するに齊し。往々に世の邦君國主夢にも是を知り玉はず、自らおもへらく國豐かに民やすしと。いつしか君を桀紂の君にし、民を桀紂の民にすと。謂つべし、吏は民を惱する官なりと。憎んでも惡んずべきは酷吏なり。昔し秦、憍奢を恣にし、威權を恃んで、咸陽の高臺を築き、阿房の廣宮を構へて大に誇る。是故に財用足らず、俄かに酷吏を放て天下の財利を奪ふ。倉廩みてあふる。民いかりうらむ。久しからずして、天下

に曰く、吏は民を治る官なりと。異に云く、吏は民を惱する官なりと。蓋し吏に仁吏あり、酷吏あり。仁吏は常に民の利害を考へ、土の穠瘠を察し、稼穡の艱難を憐み嘆き、凶年饑歳には賦税をはぶき使役を寛めて、民をして飢凍にくるしまざらしむ。國祚を堅剛にし、君をして苛政のそしりを千載の後までもひかざらしむるを以て、己が急務とす。是故に生民是になづくこと、爺孃の如しと、謂つべし民を治る官なりと。敬しても敬しつべきは仁吏なり。仁吏は寔に用ひつべし。酷吏は大に是に反す。蓋し酷とは刻剝の義なり、民を貪り苦るしむる事刻むが如く、財産をかすめ取る事剝ぐが如し。酷吏は歳の凶豐を管せず、民の凍餒をかへりみず、徒に自ら奪ひ貪るを以て、己が忠節とす。昔人是を聚歛の臣とす。其奪ひ盜むことの智、君子に過ぎたり。是の故に云ふ、聚歛の臣あらむよりは寧ろ盜臣あれといへり。賄賂あるの訟は、水に石を投ずるが如く、賄賂なきの訟は、石に水を投ずるが如し。譬へば張三と李四とともに爭ひ訟る

を見ることは土塊の如く、追從諂戀の佞臣を近づけ愛し、忠諫潔白の賢臣を忌み遠ざけ、飽き足れもなき賦稅を貪り掠め、罪もなき物命を苦るしめ害し、果てしもなき罪障を積み重ねて、死後には果して三塗八難の惡處に墮す、寔に恐るべし。古來明德至善の君子、仁澤を天下に施さんと企て玉ふとき、最初に專ら仁吏を擇び用ひ、酷吏を恐れ遠ざけ玉ふことは何ぞや。酷吏の國祚を害し、國脉を斷つこと、鴆羽一片、河水に投じて、魚鼈皆斃れ、水銀一滴、本根に入て、松柏俄かに枯るゝが如し。酷吏は代々先君の宗廟をして荆棘の野となし、狐兎の栖とす。憎んでも惡くんずべきは酷吏なり。酷吏は代々先君の神靈をして祭奠なきの閑神とし、依る方なき野鬼とす。恐れても惶るべきは酷吏なり。是故に明君聖主は、酷吏を忌み棄て玉ふ事、屍穢の如く、酷吏を憎み遠ざけ玉ふ事、糞汚の如くす。暴君暗主は、專ら酷吏を貴び用ふ。所以に云ふ、聖主出で酷吏ひそみ、暗君立て酷吏眉をひらくと。吏は作麼胡爲（そもなん）の者とかするや。彙

を救ふは、武士の習ひなるものを。常に美ふくにともなひ、美酒をのんで、ゑしれぬ遊藝に耽り、軍馬の調練は夢にもしらず、武藝は拙く弓箭は手馴れず、若し夫れ國家の大事有て、火砲を飛ばし戈戟を列ねて、兵刄已に交る時に當て、日頃習ひおかざる御經は、齋法事有りとて、俄には讀れぬ如く、何の備へ有てか、一支へもさゝゆる事を得んや。重代高恩の主君は敵陣に取かこまれ、乳哺深恩の父母は、雜兵の手にかゝつて責め屠らるれども、かへり見ることさへ叶はで、混震(ひたふる)へにふるへて、肌脊なる馬にはひのりて、あてどもなく遁げ走て、笑を千載の後までに殘すことは何ぞや。是唯尋常武備を怠り、文術を好まず、仁恕の道の貴きはかへり見ることなく、武運を養ふ等の大事は夢にも知らず、油斷不覺の致す所にして、主心片時も定ること無き者のなれの果てなり。國を守り家をおさむること、縱ひ彭祖が八百の歲華を保つも、暫時の夢中の戲れなるものを、福貴を恃み、權勢にほこりて、財帛を見ることは泥沙の如く、生民

命もながく、氣宇寛大にして、國家を治めさせ玉ふ事、順水に舟を棹さすが如けん。古へより家をみだし、國を失ひ、身を亡すべき愚將は、武運を養ひ、仁澤を施し、萬民を憐みすくひ、國家を治る等の大事は存じもよらず、〻身上にも似合はず憍奢に誇り華麗を好み、百石の所領にして千石の羽振をなし、千石の所領にして萬石の威勢を張り、武士にも似合ぬ綾羅絹布を目ざましく着かざり、男女室に在るは人の大倫なりとて、一人にてすむべき妻女を五人も召しかゝへ、娼にほこり寵を恃んで、內證は嫉忌妬害に一日も靜かなる事なし。益なき錢財を費し盡し、領內の百姓を非道にむさぼり掠め苦るしめ、酒色におぼれ、筋なき遊藝亂舞に貴き正心正意をとりみだし、身體は日々に衰へ悴しげ、果は種々難治の重病さしおこりて、身命もまた保ち難きに到る。皆是定てそなへたる明德を淺猿しき人欲の私に蓋ひ奪はれ、主心つひに定まることなきが致す所なり。後の世の報ひまでおもひやられてあはれにこそ覺ゆれ。千日養はれて一朝の急

當て、太刀鍔本より折る。外の太刀を取かへけるに、三腰までをれてければ、檢使驚き立より、子細やはあるとたづぬ。しか〳〵の樣をかたりにたれば、扨てはとて赦るさる。其より此經を高皇觀音經となづく。しかしてより以來、信仰し讀誦する人、僧俗男女をゑらばず、或ひは難病を治し、或ひは災難を遁れ、剩さへよむ人必ず長壽を得。閣下もまた行住坐臥の上において、毎日二三百返程宛讀ませ玉ひね。子細は武家も出家も無病息災にて壽命長からでは諸道成就することかたし。殊更一方の大將たらんず人は、天下の大事有らむ時に、六韜を旨とし、三軍をしたがへ、西戎東夷を嫌はず、南蠻北狄を擇ばず、踏み込みかけ入り、逆徒を碎き朝敵を挫じく事、大斧を提て枯木を裂くが如く、威雄を八蠻の外までに震ひ、聲價、四海の中を動して帝都を守護し、萬民を安ずる大任なれば、晝夜に怠らせ玉はで、武術を精錬し、內觀と信力と兼勤めさせ玉ふ內にも、此經を讀ませ玉はゞ、自然と佛神の加被力に依て、武運も強く、御壽

ても枕上にても、行住坐臥の間におゐて、間斷なく唯讀み得るを貴しとする由。何程御用しげき奉公人衆にても、自由に勤めらるゝことに侍ると、別而御家中の老人達に逐一御あたへ被成候と、御家中上下の祈禱に罷成り、閣下廣大の德行に罷成る事に侍り。衆善奉行諸惡莫作は諸佛の通戒にて、善事ならば假初の事にても、人は告げず勸めずとも、取かゝりすてをかず相勸め、惡事ならば、芥子計りの事にても、不通と思ひ切り、二度び行ぜざる、是一切の戒行を保つも、同斷の事に侍り。昔し漢土に高皇と申す者常々信心なる者なりけるが、如何なるしおちやは有る、既に誅戮にきはまりたりける前の夜、親切に觀世大士を念じ申けるに、夜半ばかりに、大士の尊容目のあたり出現せさせ玉ひ、夜中に觀音經千卷讀み得たらましかば、命はたすけ得さすべきぞと御告ありしに、高皇中さく、もはや夜半にて侍るものを、如何にや千卷までは讀み得侍るべきぞ。然らば此經をよみてよとて、口づから授けさせ玉ふ。翌日、誅せらるゝに

人先に遁げ竄れて、先祖の武名をけがし腐すは、尋常こざかしく口利て侠立する大不覺者の常の業なり、奥の手なり。良將は安きに居て亂を恐るゝと申す事の侍れば、片時も武術を怠らせ玉はで、貴體勇健に目出度國家を憐みすくひ、仁澤を千載の後までに殘しつたへ玉へかしと祈るばかりに侍るからに、先頃見參の刻み、密かに勸めまいらせんと存じ付き侍りにたれど、草卒の仕合せ、本意に任せず、此度の幸便に延命十句觀音經と申を誂へ進覽致候。此經は大唐日本の間において、奇妙の靈驗是ある經にて、文句も短く侍れば、閣下は申に及ばず、近侍衆中迄も毎日二三百返程宛讀誦せられよかしの寸志計に候。子細は物の矯めしに侍れば、重病歟または不慮の災難に逢はれ候人々に御あたへ、慰に御覽是あるべく候。眞實にさへよみ侍れば、驚入たる靈驗は必定是あり。第一の調法は、此經を讀誦する人は、至極無病にて、長壽をたもち候。誰々にも相談致度物に侍り。扨て此經を保つ者は、場所を擇ばず時節を嫌はず、馬上に

僧も加持しあぐみたりける天子の御惱を弓のすひきして、弦音にて掻き拭ひたる如く治し奉り、一年せ、征夷大將軍の勅宣を蒙り、一寸八分の大士の金像を御髻の中に結ひこめおかせ玉ひ、唯一人奥州へ發向せさせ玉ひ、目にあまりたる大敵を易す〳〵と追ひなびけ、貞任を打取り、宗任を生捕、奴僕の如く召仕ひ、至尊の宸襟を休め奉り、美名を千載の後までに傳へ玉ふも、信心堅固の威德なるべし。坂の上の田村丸、大悲の弓に智慧の箭の威力に依て、手前もおろさずして、易す〳〵と鈴鹿山の惡鬼を亡ぼし、其外右大將賴朝、主馬の判官盛久、惡七兵衞景淸、楠兵衞正成、多田の滿仲卿の如きは、信力厚くおはして、老來六角堂において念誦せさせ玉ひけるに、汗と涙と御茵を打ち透しける由。末代の未錬不覺のうつけ武士の曲(くせ)に、如何にやさもしげに觀音抔の力をかる事のあるべき。手前相應に生れつきたる力なれば、他力のたすけに預ることはなきぞとよなど、いかめしげにわめき廻れど、こゝはの大事の場所になりては、

をやすんぜむがために、邦家を保重す。邦家を保重せんとならば、先須らく生民を愛顧すべし。民肥へ國ゆたかなる、是を强國といふ。强國の主として、王位を守護せんとならば、先須らく身財健康に壽算延長なることを計るべし。若し又多病短壽ならば、何の暇有てか帝都を守護し、邦家を治め、生民を愛顧することを得んや。身財健康、長壽を得んとならば、飲食を節にし、人欲の私を制して養生の至要を求むべし。養生の至要は、良醫を近づけ、內觀と信力と並べ備へて武運を養ひ玉ふべし。殊更一方の大將たらんず人は、强敵をしたがへ、帝都を守護し、萬民を安すんずる大役なれば、常に信心堅固にして武運を養ふを以て第一とし玉ふべし。去る程に源家の御先祖八幡殿の如きは、常に普門品怠らせ玉はず。常々の御仰に武運を養はんず武士は、物の命を妄りにとらぬ者なるぞとて、人は申に及ばず、虫螻の類ひまでも、むざとは殺し玉はざりける故にや、飽まで武運も强く御威德も勝れさせ玉ひけるにぞ、南都北嶺の貴僧高

たると、冬瓜のぶらりと下がりたるとのみ、あまりせんかたなさに種々工夫の中、先頃の御仰に、近き頃めづらしき假名物や書ける、然るべき法語や出來たるとの御尋を與風存じ出し、究竟の事こそござんなれと、叶はぬ例の田舍文章にて賤の緒環くりかへし、片腹いたく思さんも恐れあれど、仁政の一助にもなれかしの寸志ばかりに、へびいちごと云へる假名物一篇書き綴り進覽いたし侍り。蓋し蛇覆盆子は花も實も有ながら、春蘭秋菊の薫りもなく、黃蓍、沙蔘の藥能もなし、桂姜の溫にあらず、芩連の瀉にあらず、神農氏の聖顧にもれたれども、近頃、伊若水の本草には載せたり。列聖叢中尤鄙賤なる物をと、此法語に名づけたる事は、蛇覆盆子にも劣らぬ鄙賤の言の葉草なるぞと卑下の心なるあり。若し又或ひは邊鄙以知吾ならば、少しきは御政務の一助ならんか。然るに法語は古來參禪見性の指南、かな物はおほくは勸善懲惡の旨趣、勸善に急緩あり、見性に精麁あり、一國一城の主たらむ人は、第一に王位を守護し、萬民

邊鄙以知吾　巻之上

何某の國何城の大主何姓何某侯の閣下近侍の需に應ぜし草稿

先回者久しぶりにて不慮の面謁、歡踊淺からず。增道中御恙なく御在府の由、珍重この御事に候。老夫無難に罷在候。先申演ぶべきは、先頃者思しめしよらせられ、大切の寶薰一器手づからみづからこれを賜ふ香合もまた尋常の產にあらず、感荷のあまり、取あへず香盆を莊ひ、甎爐に爇向す。異香ほのかに草廬に薰徹して、梅檀の林に入るが如く、香積の世界に遊ぶかと怪しむ。或は且らく閣下に對して談笑する心地し侍り。此において寶裹し珍藏して、閑暇の時を得て、一點を挾むで物外の清閑を求む、怡悅誰にか說向せん。是故に此度の便りに、彼の寶香に少しも劣らぬ一品、高覽に備へ度、彼方此方見まはし立ちさはぎ侍れど、御覽の通りの野外草廬、茄子さゝげの外、夕顏のひねくりまがり

を辨じ、賢愚を見る。是を妙觀察智と云ふ。是より菩薩の威儀を學んで、臂に奪命の神符を掛け、口に法窟の爪牙を咬み鳴らして、往來諸方の雲水を毒害し、大法幢を立て、大法施を行して、普く一切衆生を利益し、佛祖の深恩に報答す。是を成所作智と云ふ。虚空は盡くることありとも、我が願は盡ること無けん。豈是眞正の禪流、當家の種草にして、貴ぶべし、圓頓菩薩の大行なることを。夫れ今時小をも得ずして足れりとして、厚面皮を張り、高廣座を設け、眞正向上の禪なりと稱して、鴉も亦顧みざる底の臭穢の狐涎を吐き散らして、穎伶の衲子を教壞し、諸方を誑惑し、人家の男女を魔魅する底の白盲靑瞽の輩、賤賣贋緇の族の夢にも曾て知れる處にしあらむや。畢竟如何、聖主は賢を愛し、暗主は佞を愛す。何が故ぞ、天將に雨ふらんとする時は、山色必ず近く、國將に亡びんとする時は、民間先苦しむ。

夜船閑話卷之下終

きなしと云て、高談大口す。殊に知らず、此は是れ二乘小果の所證に及ばざることを。未證謂證、未得爲得、增上慢の人とす。末代の悲しさは、此黨、麻の如く粟に似たることを。殊に知らず、有餘小果の深坑、相似涅槃の陷阱なることを。眞正の禪流の如きは、卽ち然らず。猶々進んで退かず、諸法實相の正觀、寶鏡三昧の眞修、晝夜に勤めはげむときは、早晩明暗雙々、理事不二、空手にして鋤頭を把り、長河を攪して蘇酪となす底の大事は、次第に了々分明なり。是を平等性智と云ふ。此時少しも足れりとせず、尋常の誓願輪に鞭うち、上求下化の精錬を重ぬ。此故に古人云く、平地上に死人無數、荊棘林を透得する者は、是好手と。往々に此平等無相の荊棘窠裡に陷墜して、進むこと得ず、退くことも得ず。恰も病鳥の籠裡に睡るに似たり。夢にも曾て第二重の荊棘叢あることを知らず。何をか二重の荊棘叢と云ふ。疎山の壽塔、牛窓櫺、鹽官の扇子、乾峰の三種、是等の大事を了畢すれば、智眼次第に圓明にして、能く人の利鈍

かき曇り、一村の雲落ち纏て、敵も味方も眞つしぐら、常夜の暗路、黒暗獄、兩陣互に仰天して、正氣を失ひ東西辨ぜず、電光いなづま只射違ふる箭の如く、呆れ果てたる處に、天も崩るる大雷一聲、軸も碎け裂くるが如し。敵も味方も膽魂を驚落し、大死一番、喪身失命、能見もなく、所見もなし。此時行者絶後に再び蘇り、圓解乍ち煥發して、手を拍して呵々大笑、目出度や、貴とや、有難や、夢なりけりな。嬉しさよ、生死涅槃猶如昨夢。天地一指、萬物一馬、日頃尋ねし隻手の聲は、目前に昭々として心上に煥爛たり。山形の拄杖子を拗折して、從來天地黑漫々、是を大圓鏡智といふ。人間天上の善果、何事か是に過ぎたるもの有るべき。皆是多年霜辛し、雪苦し、長坐し、不臥し、工夫相續、疑心凝結、軀命を惜まず、精彩を著け盡くしたる功動なりと、法喜禪悦、踏舞を忘る。行者往々に此處を以て法成就に到れりとし、諸佛頂上の禪なりと稱して、諸方を罵詈し、佛祖を併吞し、此外更に衆生の度すべきなく、禪の參すべ

末那七識の傳奏大臣、諂臣聚歛の宰相國、右の方には計名執取の六識將軍、慳愛嫉妬は副將たり。殺生邪婬の近習の奸臣、八顚四倒の外樣の面々、五邪命不淨の王膳を調和し、三毒五欲の大牢の美味、生死長夜の無明の酒盛、有爲住相の鈍根夜叉、亦有亦無、斷常外道、貪婬嫉妬の妖嬌妾婢、怨憎會苦の熱惱臭婆、分別思想散亂癡奴、都合其勢八萬四千騎、焦熱無間の猛火を吹きかけ、鑊湯爐炭の洋銅を練り上げ、七狂亂、八顚倒、破戒無慚の狂遊は、夜を日に繼いで飽き足らず。斯る處へ官軍は奇兵正兵、軍令正しく、次第々々に攻め近づき、魔軍の陣處を七重八重、大疑の矢叫び、話頭の凱歌、純一の貝鐘つき立て、もみにもんで攻めかゝれば、魔軍は大に驚き瞋りて、百千瞋恚の毒鼓を打ち、木戸さかもぎ押開き、入り亂れては立合ふなり。鶴翼はきびしく圍めば、魚鱗は瞋りて烈しく衝く。兩陣互ひに軀命を惜まず、危亡を見ず、毒戰數日を重ねければ、猛き心も力も弱り、技盡き、詞窮りて、理も亦窮る所に、不思議や俄に空

聳え、十惡八邪の稠林は、臭靄を籠めて列り立ち、其麓には、八識田のあらやしきを數千町切り開かせ、五蓋十纒の殿堂、門廡、閻羅大城の結構になぞらへ、夢幻空華の甍を並らべ、貪欲無慚の練塀、つり塀、偏見見取の矢觸を開かせ、廣劫無明の虛掘には、貪愛取着の愛河をせき立れ、充滿穢濁の毒よりは、臭煙を浮べ、毒霧をこめて湛へたり。驕慢邪見の幔幢は、斷常二見の業風に吹き靡かせ、煩惱業苦の高櫓、無慚破戒の突く棒、さすまた、兩舌惡口の鎗、長刀、つばなの如く立て列らね、寸善尺魔の木戸、逆もぎ、瞋恚のほむらの狼煙を焼き上げ、惡言誹謗の刁斗の聲、晝夜を分たず丁々たり。天眼童子には、小黠しく忍辱の袂を結んで、荷擔大法の肩に打掛け、善順柔和の裳を掲げ、八定四禪の盤陀石上に攀ぢ上り、事理圓融の眦を凝らし、遙に魔軍の並居たる堂上堂下を見渡せば、中央には根本無明、業識大王、賴耶含藏の玉座を構へ、想行識の龍衣の袂をかひつくろひ、さも憎く〲しく坐してあり。左は業轉三細太子、

斷惡修善の轡を含ませ、善順柔和の白漚はませ、精進勇猛は先陣に擇まれ、四德具足は後陣をまとめ、左備は正念工夫の老臣、右備は、純一無雜の勇將、上求下化の諸鐙、成所作智の諸將は、尸羅波羅密の幌蔽つらね、初發心地の若者どもは、便成正覺の鞍馬に鞭ち、色空不二の兩將は、鶴翼魚鱗の備を守り、無二無三の雜兵は、諸相非相の腹卷引きしめ、阿耨菩提の大弓には、理事無碍法界の鏑を付け、四弘誓願のかい楯を雌羽に突き立て、一乘唯有の大白牛車には、法門無量の法財を駕し、諸惡莫作の群馬を驅りては、少欲知足の兵糧を駄し、四正勤の正兵は、利行同事の諸卒を率ひ、平等性智の大路を進ませ、下化衆化の幽谷には、上求菩提の險處を隔てゝ、四神足の奇兵を伏せ置き、法喜禪悅の法螺を吹立て、寂滅爲樂の鐘撞き鳴らし、一勢々々隊伍を亂さず攻め近づく。妙觀察智の物見の武士は、天眼童子を案内にて、放身捨命の險處を涉り、敵陣魔軍の城壘を、古谷隔てゝ遙に望めば、高抗人我の嶮山は、月日を遮りて高く

戰負けて、戒定智慧の三軍も、戰疲れて起つことを得ず。上下四維、皆是邪魔黑暗の世界となんぬ。萬徳具足の心王も、身を隱すに處なし。實際理敎の深林に入り、法界無碍巖穴に潜んで、且らく法體を隱さんとすれば、舊習々氣の微細の流注、忍び入りて火を放つ。苦集滅道の小道を踏んで、二乘小果の幽谷にイみ、粗弊垢膩の衣を着け、鹿苑精舍に睡らんとすれば、欲愛住地の家賊は、忍び走りて邪黨を引く。常樂我淨の寶殿は、貪瞋癡慢の猛火に燒かれ、進むに寂滅の貴階を失し、退くに生死の幽關を隔つ。其後度々進んでは破られ、破られては又進む。力を用うること久うして、一朝乍ち王赫として斯に瞋り、止觀圓頓の殘兵を驅り集め、平等無相の勞臣を勵まし、諸法實相の大法をおし立てさせ、大圓鏡光の金甲を押戴き、珍御寶聚の袂を褰げ、金剛堅固の寶冑を打掛け、實相般若の利劍を帶し、三密瑜伽の油幕をかゝげ、六大四曼の軍營を離れ、不退圓成の長鎗を撚りて、無常迅速の駿馬を引立て、動靜不二の貝鞍置かせ、

精神を勵まし勤め進み玉ふべし。譬へば此に行人ありて、大憤志を抽んで、隻手の聲を聞かんとならば、至善の工夫に越えたる事は是れあるべからず。至善とは何をか云ふや。喜怒哀樂の未だ起らざる以前、惻隱羞惡の未だ兆さゞる始め、之を至善と云ふ。禪門には是を正念工夫と云ふ。君子百行の最上、佛道萬善萬行の樞要は至善なり。若人、正念工夫の精神を凝らし、至善に止ることを得んと欲して、勵み勤めんとならば、決烈勇猛の丹悃を抽んで、堅固精進の大丈夫に非るよりんば、輙く止り得ること能はじ。何が故ぞ、法盛んなれば、魔も亦た盛なり。此時に當りて、平生の心意々情、頭を競て集ひ起り、波の如くに爭ひ湧く。此時恐怖を生ぜず、一人と萬人と戰ふが如く、牙關を咬定し、面皮を冷却して、烈しく進んで破らんとす。如何せん、根本無明の衆魔、轉た攻むれば、轉た强きことを。三毒五欲の賊黨、雲の如くに爭ひ起り、十惡八邪の妖魅風の如くに瞋り吼ふ。千妖百怪、心田を侵擾し、法體を困勞す。心王乍ち

教へ導き、其當否を考へ、虛實を察して、極て退け棄つべきを見ば、智計を運らし、早く是を追退け、君臣ともに後難を遁れ玉ふべし。君のため、國家の爲め、人民の爲めにとならば、縱令武士に命じて捉らへ誅戮し玉ひたりとも、諸君心を合せ玉はゞ、何の憚る處か是あらん。邪臣も亦た自ら顧み恐れて、早く前非を改むべし。人の臣として、君の國家を亂り、君を亡ぼし、君の系嗣を斷つ。豈臣たるの道ならんや。果は自身も亦天誅に責められ、人禍にかゝりて、身の置處なきに至らむ。近くは甲陽の長阪跡部が輩の如き、誡しむべきの前車なり。閣下も亦た宜く自ら計りて、堯舜禹湯文武の君の勤め行はせ玉ひたりし仁恕の御政務及び古今の明君聖主の芳躅を踏ませ玉ひて、生民を安撫し玉ふべし。然らば卽ち天、君に賜ふに長壽を以てし、地、君に擎ぐるに爵祿を以てし、君臣ともに永く天澤に浴して、兒孫次第に盛大ならん。若し又日頃竊に心掛玉ひにたりし隻手の聲を聞き、見性得悟の御望み、今以て棄てざらせ玉はゞ、猶々

の斧なり。斯く云へばとて、閣下に斯る惡癖おはして、其を爭ひ諫めんとにはあらず。此迷は、如何なる賢人君子も溺れ易く、落入り易き道なれば、豫め無病を治する鍼灸なるぞと覺悟し玉ふべし。此故に氣を錬り精を養ひ、長壽を保たんと勤め守る人々は、第一最初に此一件を禁止す。ましてや國を守り、家を治め、黎民を愛育し玉はんず賢君は、第一に恐れ愼しみ玉ふべき一大事なり。次に願くば君民ともに志を合せ、良策を廻らし、倉廩願くば七年の糧を貯へ、凶年饑歲には、黎民愁ひ苦しむ色ある時、分ち與へて窮困を賑はし、救ひ玉はば上もなき仁德たるべし。云く、七年の糧は容易に貯へ積むこと能はじ、其良策得て聞つべしや。云く、是れ俄に賦稅を重くし、收斂を烈しうして、民の財利を奪ひ、之を藏め貯るにあらず。驕奢を禁じ、費を制し、歲月を重ねて、民凍餒の時を待たば、何の難き事か是あらむ。若し又君侯の左右、常隨侍の人々の其中に、出頭人と稱せられて、讒佞奸邪の聞あらば、諸賢心を付けて、再三

こと得ざるを、後なき不孝とするか。何が故ぞ。堯に丹朱あり、舜に商均あり。何れも後なきにあらず。然るに堯は舜を揚げて民を附し、舜は禹に附して民を愛育せしむ。寔に知る、聖人は萬民を以て、一子にも見かへさせ玉はざることを。然らば卽ち聖賢豈に夫れ後なき不孝を恐るとて、多く婢妾の輩を集めて、財產を費し、國を弱まし、萬民を苦しめ玉ふ者ならんや。動もすれば我は一國の君、一城の主なる者を、萬事心に任せざらめやはとて、恣に美女を貯へ、遊妓を集め、國衰へ、民疲れ、其身も亦た短壽にして得難き人身を空しく失ひ玉はんより、我は是れ一妻一夫にして歲月を送る底の三家村裡貧窮無福の細民なるぞと覺悟し玉ひ、身を責め、心を懲らし、萬事を省略し玉はゞ、一年には如何程の餘計なるべきや。夫を放ちて、萬民を憐み救ひ玉はゞ、飽くまで御壽命も長く、千歲の後までも、寔に賢明仁德の聖君なりしと仰ぎ貴ばれ玉はんこと、如何計り目出度かるべき。返へすぐ〵も忌み恐れ玉ふべきは、向きに所謂蛾眉

破り、國を失ひ、身を亡ぼし玉はんが故に、古人は美婦人を指して、蛾眉の斧と名づけ、忌み恐れ玉ひき。斧とは何ぞや。美色は人の正心正意を伐り斷ち、人の命根を殺ぎ縮むること、磨き立てたる斧鉞に過ぎたり。去る程に佛は是を不淨を以て淨とし、苦を以て樂とす。顚倒狂亂の至極なりと呵責し玉へり。昏愚の人の目には、不淨の妖色を見ては、春の花、秋の紅葉よりも麗はしと悅び愛し、愛執の思淺からず、往々に後無きを以て不孝とす、と云へる古言を執へて、好き身方なりとして、我は妖色などを愛する輩にはあらず、後なき不孝を恐るゝ者なりと云ひて、多く兒女子の輩を集めて、晝夜に混交して、後有る孝行をはげみ勤めて、總に民間の窮困を顧みず。果ては勞咳虛損など云へる難治の重病を發して、身を失ひ國を亡ぼす。豈後なきの不孝のみならんや。家系も亦た斷絕するに至る。熟々謂ふに、士庶人は知らず、上天子より諸侯に至るまで、民の父母たらんず人は、賢明仁恕の人を得て、萬民を附屬し安撫せしむる

各々心を一にし、時々に忠諫を擊け、毫釐も君に追從せず、忠貞賢明、老功の善士を擇び進め、常に君の傍に在りて、聖經賢典、王道の大義を講演せしめ、近侍の人々にも聽受せしめ、苟にも高談大笑婬陋鄙俗の事を談ぜしめず、酒宴遊興の邪遊を催さしめず、田獵鶉鷹の惡行を停止し、邪佞の盜臣をして、且らくも君の傍に近付かしめず、諍ひ諫めて、椒房の婢妾を減少して、無益の浮費を停止すべし。恐るべし、一城一年の雜用は、皆是黎民の膏油なることを。熟々謂ふに、椒房は一人有德の賢婦を居え定めて、小婢兩三輩を相添へ隱侍せしめば足れらくのみ。男女室に在るは、人の大倫なりといへば、必ず一婦ならくのみ。且又父母は天地の如しといへば、天に二つの天なく、地に二つの地無けん。賢臣二君に仕へず、貞女兩夫に見へざるを貴しとせば、賢夫も亦た兩婦を養はざらんか。近代は兩婦は扨置き、八婦九婦十婦にしても飽足らせ玉はぬ諸侯も、往々に是れある由。中々人間業とは見えず、是又不祥の兆なり。必ず家を

龍子あれば、奏し願ひて家督を續がしむる眞似して、時を窺ひて、密かに是を失ひ、己が子姪の間を引替へ、果して君の國祚を奪ふ。之を賊臣と云はんか、之を盜臣とせんか、憎みても憎むべきは、佞臣の奸計なり。是皆庸君暗主は、臣下の賢愚を察せず、邪正を分たず、己に諂ひ從ふ者を見ては、羽翼の賢佐なりと稱して、寵賞度に過ぎ、恩榮節を失し、譜代重恩の忠臣義士數多あれども、棄てたるが如く、總に顧みず。果ては國務を佞士一人の心に任せ、權勢を一人の手に歸せしめ、終に此災害を受け、國を亂し家を破り、身を亡し玉ふことは、總に是れ彼の出頭人と稱せられにし佞臣の所爲なり。天下往々に是あり。之に付ても、大樹神君慈悲を萬の本として、五老を擇び定め、天下の政務を一人に任せ委ね玉はざる事、寔に貴き聖慮ならずや。列國の諸侯の幕下、譜代重恩の老臣、謹愼忠烈の諸賢は、互に懷を開き、志を合せ、五箇七箇伴を定め黨を結びて、一紙の誓言を綴り、各々血印を居え、互に誓て忠義の丹悃を抽んで、

て急務とす。暗主は彼が追從を見て、無雙の忠臣なりとし、之に授るに爵祿を以てし、之に與ふるに冠蓋を以てす。此故に爵祿日々に增し、階位月に進んで、威權いつしか衆臣の頂を極む。夫佞臣の常たる、己に諂らひ隨ふ者をば、君に勸めて次第に昇進せしめ、己れに諂ひ隨はざる者をば、竊に君に讒して之を追ひ退く。此故に群臣尊卑彼に追隨すること、君侯の如く、彼を恐懼すること、斧鉞に過ぎたり。是において寵を恃み、權に誇りて、邪臣が心に竊に謂へらく、嗟夫れ願くば君侯なからんか。若し君侯微りせば、我夫れ一國の富貴を掌にせんものをと、之より肺肝を碎きて、奸策を廻らし、頭腦を惱めて奇計を蓄へ、彼の君侯の股肱を切り斷ち、君侯の羽翼を殺ぎ落して、近習も皆邪臣が心腹の人のみと成り濟したる時節を待得て、竊に君侯を誘ひ、隱密の處に誑かし入れて、或は弑殺し、或は鴆殺して、外面は卒中頓死と相觸る。左右皆彼が心腹なるが故に、都て是を漏泄せず、國中獨も此叛逆を知る者なし。若し彼の君侯の鳳孫

ず責めしめける程に、物の命を害する事、算數の外に超過せり。去程に佞臣と有驗の僧とは、共に鎌倉に在りしが、此事を傳へ聞きて、目出度し〳〵、心地好し。此人縱令前生にて持齋し、持戒し、讀誦し、書寫し、難行し、苦行し、有らゆる福聚を積み重ねたりとも、此度の逆罪に根も葉も殘らず殺ぎ落し、我願成就は面のあたり。我願成就するならば、必ず一區の精舍を營み、此大功に報ずべしと悦び勇むぞ情なき。之につけても國家を治むる名將は、邪佞の臣を恐れ玉ひ、急に忌み棄て玉ふべし。開闢より以來、天子より諸侯に至るまで、邪臣の奸計に罹りて、國を亂し家を破り、身を失ひ後を斷ち玉ひたる人々は、幾千萬といふ數を知らず。佞臣とは、其初め無雙の寵臣の果なり。寵臣とは、今の所謂出頭人是なり。古人云く、君の心を知らんと欲せば、其君の常に愛し近くる輩を見て、君の賢愚を知るべしと。是實に萬古不易の金言なり。賢君は常に賢人を近け愛し用ひ、暗主は常に佞臣を憐み寵す。佞臣は必ず追從輕薄を以

歳萬々歳、天晴仁恕の御政道やと悦びの色、面に溢れこぼれんとす。右幕下もいつに勝れて御氣色麗はしく、萬事は偏に任するぞと御座を立たせ玉ひけるは、一世一度の御不覺と知し召さゞりしこそ悲しけれ。邪臣は悅び勇み立ち、さて好き坪に驅り入れたり。其獲物羆にあらず熊にあらず、天下既に定まりぬ。執權々柄、手に入つたりと悅びあへるこそ恐ろしけれ。此事四方に隱れなく、次第々々に觸れ流がせば、城内城外騷ぎ立ち、馬、物の具の塵打拂ひ、大刀長刀の鋳押落し、上下ののめきあへりけるに、間も無く、右幕下佳日を擇び御出馬ありて、左備へ右備へ、先陣後陣嚴かに、隊伍を亂さず進發す。和田、秩父、千葉、小山の諸大名、思ひ〳〵の狩裝束、綺羅星を輝し、戈戟天を照らしければ、草木もうき立つ計りなり。程なく大駕、富士野の狩屋に御着座あれば、駿甲兩國の村民ども、鎌倉勢に指加はり、何萬といふ數を知らず。裾野をせましと、七重八重に追取卷き、貝を吹立て鐘打鳴らし、をめき叫んで、晝夜を分た

る事、兒女の輩の如し。此同斷大事ならむ時に、一虎口の固めも相叶ふべうも見え侍らず。彼等が手足の堅めにも侍れば、狩場に臨みて、嶮崖に驅り上せ、幽谷に追ひ下し、七縱八横かけまはらせ、諸將の勝劣、歩卒の强弱をも御覽あらば、是又武道の地に落ちざる一助なるべし。殊更萬民の悲嘆を救ふ御仁政なるものを、何の憚り恐れさせ玉ふ事か候ふべきと、左も有りそうに相演るは、仁義勇略兼ね備へ、四辯八音、瀧の水底つめたくも恐しと、知る人なきこそ憂てけれ。右幕下且らく冠を傾け御思案ありて、一切戒行の中の大禁戒、惡行の中の大惡行。是れを破る者は、子孫必ず斷絕し、死後には果して惡處に墮すと聞き及びたりければ、蚊虻螻蟻の類までも、妄に殺害したる覺なけれ。去りながら此度の一件は、小を殺して大を助くる仁政。殊には亦身を捨てゝ物を利するは、菩薩の大行なりと聞くものを、何かは以て苦しかるべき。時日を移さず發向せん。其旨宜く相觸るべしと上意あれば、邪臣は頭を疊に摺付け、殿下萬

煎して、野に菜色多し。久しからずして駿甲兩國の遠村近里、大半蓬蒿の野とならんとす。此故に老ひたるを負ひ、幼を携へて、盡く他國へ走らむとす。先祖の墳墓を叩きて悲泣する者あり、問ふも問はるゝも皆泣き、行き歸るも盡く涙を帶ぶ。此故に兩國の村民大小殘らず、東を望みて拜伏し、頭を叩きて悲泣して云く、謹み冀くば聖君大樹大駕を廻らし御出馬ありて、此の患難を救ひ扶け玉へかし。千萬御公儀の御慈悲を願ひ奉ると、血の涙を流して訟へ出るもの再三。中々見捨て難き大義にて侍り。今の代に當りて、此災患を救ひ玉はんず人は、我君にあらずして夫誰ぞや。殊更御治世以來、いつにも、させる御遊を催させ玉ひにたる覺えこそ侍られ。是を序に淺間の煙、富士の雪、其外田子の浦浪、三穗の松原など、目下に見おろさせ玉ひたらば、上も無き御遊興にておはすべきぞ。一は又幕下の諸將及び諸卒をさへに、御治世の後、四海波靜に侍るからに、上下皆美酒の惑ひに耽りて、箭柄取る事も打忘れて、手足の輭弱な

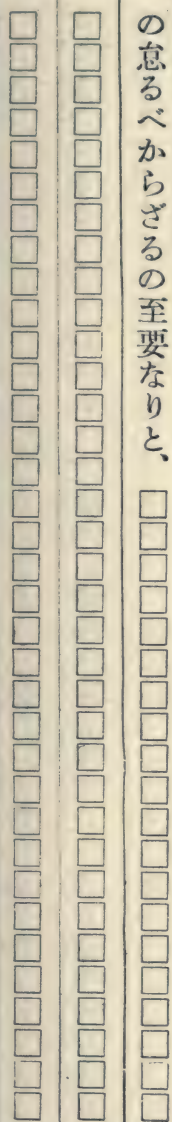
は、霜露の如く消え失せ、善神盡く見すて玉ひて、所望立處に成就すべし。左も無からん限は、歳月を重ねて呪咀したりとも、夢にも感應は是あるべからずと。臣の曰く、何をか大惡行と云ふや。僧の曰く、豈他あらんや、殺生の大罪業なりと。臣曰く、我若し他をして殺生を行ぜしめんは、易き間の願にぞあれと許諾し、來日、幕下に見えて、熟話の次、謹んで奏して云く、此程、駿甲兩國の村民ども、傳奏に膝行し、嘆願して云はく、扨も近年以來、駿甲兩國の間に猪鹿夥しく發興して、晝は富士野の木立の茂みに竄れて睡り、夜は村里に忍び寄りて田畠を蹈崩し、禾穡を狼藉する事、前代未聞なり。細民共種々方便を廻らし、晝夜に驅り逐ひ退くといへども、隻手を伸べて大河を決留めんとするが如し。氣盡き力究まれども寸功なし。御慈悲を以て、御上の御威勢を添へさせ玉はずば、輙く制し退く可らず。夫細民の恃む處は、田畠のみ。細民の命は、黍稷にあらずんば續き得べからず。然るに今此荒蕪を見る。民間次第に窮餓相

し、幕下を世に無き者にし奉らば、天下の權柄は必ず我が掌握に歸せんずものをと思ひ立ち、邪計を廻らし偸策を設け、幕下の親眷を蠧害し、股肱の良臣を讒し退け、羽翼の賢佐を罪し失ふ。獨り幕下に到りて、手脚を下すこと得ず。專諸が輩を募り招き、荊軻が族を傭ひ入れて、晝夜に忍び窺はしむといへども、近づくことを得ず。此において一員有驗の僧を請じて、晝夜に呪咀せしむといへども寸驗なし。一日、驗者竊に來り謁して告げて曰く、我數月、丹悃を抽んで、大法秘法を薫練し、百端を究めて精誠を凝らすといへども、半點の靈驗なし。此故に龜を燒き瓦を打して筮し考るに、此人の如きは、前生多少の大善行を修したる大福德の人なり。其上、蛭が小島に於ては、八百部の法華經を讀誦し、三島神社の靈社へ日參までし玉へる程の大善人なれば、千佛擁護の眦を垂れさせ玉ひ、萬神鎭衛の跡を示す、中々、我等が呪力の企て及ぶべき事にしあらず。去りながら、行人希代の籌策を設け、此人に大惡業を行ぜしめば、前世の宿福

計を定めて、膽を甞め血を啜りて、誓つて節儉を守り、其餘力を分ち、生民を安撫し仁澤を施し玉ふ事、三四年を歷ば、國夫れ再び蘇活せんか。此において以て足れりとせず、身を潛め心を苦しめ、專ら仁政を勤め行ひ玉はゞ、いつしか君を堯舜の君にし、民は堯舜の民たらむ。此時に當りて、天神鎭（とこしなへ）に鎭護し、地祇不祥を呵禁して、子葉繁茂し、孫枝發越して國脉必ず泰山の安きが如けん。大凡國家に主として、國家を全うせんとならば、廣く仁澤を施すに越えたる事は是あるべからず。大樹神君の御仰に、妄に人の國をめがけて戈戟を動すは、劫盜武士の業なりと。又古き文には、鶏鷹の逍遙を好み、無益の殺生を樂むべからずと。夫殺生は、國家に益なし、多くは民の農業を妨るが故に。諸侯に益なし、其人必ず短壽にして、子孫多くは斷絕する故に。來生に益なし、必定惡處に墮するが故に。古へ鎌倉の右大將家の左右に邪臣ありき。初は開國の功臣なりしが、久しからずして大惡願を發して、心に竊に謂へらく、我願くば良策を廻ら

横行せしめて、民の財利を掠め奪ふ。此くして終に國衰へ民苦しむ。是寔に狂政ならくのみ、仁政にはあらず。眞正仁澤を行ぜんとならば、宜しく自ら計りて驕奢を禁じ、浮費を制し、節儉を守り、枯淡を喫して、自家の餘分を與へて以て黎民を惠まば、謂つべし、仁政なりと。其澤、兒孫に傳りて、國脉必ず健康ならん。閣下の大幸には、天性仁慈の心おはして、賢を尊び諫に隨ひ、殊更幕下に善き人餘多得玉ふこそ、目出度けれ。各々忠恕の操履有りて、讒侫收歛の醜態なし。此故に領內は云ふに及ばず、遠村近里及び雲水の僧侶までに、房州侯の如きは、御身上には過ぎたる好き人々を持たせ玉ふもの哉と沙汰し侍る由。老夫も蔭ながら如何計り隨喜し侍り。中に就いて、尾氏、奥氏、近藤二藤、阿部の人々の如きは、勇皮あり、仁髓あり、寔に當世の人傑にして、房州幕下の五虎老將と稱して愧づべからず。其餘の老夫がいまだ面謁せざる處の近習外樣の人々も、亦定めて優劣なけん。願くば此嘉運に乘じて、君臣ともに志を合せ

□□□□□□□□□□讒諂追從の佞臣を追退け、明眸皓齒の婢妾を忌み棄て、夏冬の衣類も都て綿布にして去り、朝夕の膳部も常に一菜に過ぎず。萬事を省略して將ち去りて、其餘計を放ちて、窮民を救ひ老病を憐み玉ふより外、縱令堯舜禹湯文武の君といへども、別手段あるべからず。此に人あり、我は是れ施を行ずる人なりと稱して、猥に衆僧を供養し諸乞を集めて、日々に施し月月に與へて、田畠を賣り放ち、妻子も養ふこと能はざるに到らば、是れ狂施にして信施にあらず。空敷許多の錢穀を費して、功德も亦た無けん。若し夫れ眞正施を行ぜんとならば、實情の美志を發して、身をつめ心を苦しめ、儉を勸め約を守りて、自家の殘餘を分けて、一箇最下の乞人に與へば、是實に信施ならくのみ。功德も亦た限り無けん。譬へば一國一城の主たらむ人も亦然り、我は疾より仁澤を行ずべきぞと稱して、妄に施し、みだりに與へて、倉廩を傾け盡くして、果ては財用足らざるに到る。此に於て苛政を設け酷吏を放ちて、民間に

忠烈ならむ。豈に同斷の大事あらむを待て、箭表に立ち塞いで、主君の一命に代らんのみを、忠節なりとし、坐ながらにして此不祥を見すてゝ、其亡ぶるを待つ者ならんや。往々に其不善を知り、其不吉を見ながら、身上を顧み軀命を惜みて、心にも浮ばぬ侫言を吐き、今日の狩場には、稀代の御手際を一度も二度も見奉りしなど、片腹痛き追從輕薄して、終に片言の忠諫を捧げず、末は兎もあれ、只今日無事にして、妻子を養ふを以て足れりとする者あり。往々に當代の無智不覺のうつけ武士の曲(くせ)に、動もすれば、即ち謂へらく、夫武士たらんず者は、常に射獵を好んで、山野を馳せ廻りて、手足をかためざれば、國家の大事あらん時に、手足輭弱にして、一向動き働くことを得ず。此故に第一武士の怠るべからざるの至要なりと、□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

には子孫必ず斷絶す、恐れても怖るべきは殺生無慈悲の大惡業なり。と云うて、尋常虫けらの類までも、妄りに殺害せざる底の後世者も、官吏に責められ步卒に驅られて、思ひ寄らざる惡業を作り、未來永劫、肉抹骨磨の苦患を受く。是れ唯邪臣射獵を欲する細念より起りて、多少善心修福の人々をして、面白からず、心にも染まぬ惡業を積ませ、惡處に陷墜せしむるのみにあらず。剩へ有德慈善の主君を勸めて、上もなき罪累を修せしめ、生前無量萬善萬行の宿福を削り落し、心ならざる惡人とす。天神疎み離れ、地祇瞋り憎み、子孫必ず短壽にして、國脉も亦た斷絶するに至らしむ。制しても制しつべきは、殺生不仁の惡遊なり。亡國の前表、不祥の大兆、人禍あらずんば必ず天罰を受けん。智鑑高明の君子の目には、赤子の井に赴くを見るが如けん。若し夫れ幕下に貞正智德の賢臣、果敢忠烈の勇士あらば、五個三個、志を合せ、主心を居ゑ定め、軀命を顧みず、身上に替へても、爭ひ諫めて、此凶遊を禁止せしめば、寔に莫大の

に
ども、四面皆步卒なれば、出るに道なく、遁るに隙なし。戈戟に破られ箭先にかゝりて、頭腦盡く地に塗れ、流血山野をひたす。其苦患、地獄の衆生にも過ぎたり。禽獸の汝に於ける、何の咎かある。何の禽獸における、何の寃かある。其罪累何れの處にか歸せんや。近習外樣の中にも、因果を撥無し報應を忘れ、殺業を好む人々は、兒孫必ず短命にして、家系もまた多くは斷絕するのみにあらず、死後には果して叫喚焦熱等の大惡處に墮して、倶底恒沙の苦患を受くる事を忘れて、無益の殺業を好まざる人々も、君命に隨ひ、催促に應じて、好まむ戈戟を提さげ、面白からぬ矢聲を出して、步卒に隨ひて前驅す。領內の細民窮巷の貧士といへども、下々の人に、上々の智ある底は、乃ち云はく、夫殺生は、四重禁戒、十重禁の冠首、三百五百の戒體の本根なり。是を破る者は、三百五百の戒體を同時に破るに齊うして、破戒の中の破戒、惡業の中の大惡業なるが故に、永劫無間焦熱の地獄の底に墮して、果てしも無き極苦を受け、現世

に任かす。謂つべし、鸞鳳竄れて鴟鴞翼を展べ、賢良去りて佞士眉を開くと。佞臣若し夫れ酒を要する時は、君に酒宴を勸む。君侯少しく頷する色ある時は、自ら厨下に下りて、君命なりと稱し、珍膳を催し、佳肴美味を調へ、終夜飮宴して休まず、眦を收めて歌ふ者あり、聲を放ちて泣く者あり、齒を切りて瞋る者あり。君侯も亦た貴き正心正意を失ひ、共に歌ひ共に躍り、終に天明に至る。千態萬狀、狂するが如く顚するに似たり。終夜呑みて酒何石を費す。誰か計らん、盡く是れ百姓の肉、民間の膏なることを。之れ他なし、佞臣纔に酒を欲する一念より興りて、一城盡く此狂態を究む。實に憎むべし、邪臣一日射獵を思ふときは、奇計を設けて、君に射獵の事を慫慂す。君纔に頷する色あるときは、君命なりと稱して、近習を促がし、外樣を觸る。終に領内遠近の村民をかり立て、大に陣勢を張り、貝鐘を鳴らし、四方を圍みて、山野を責む。狐兎狸貉の類、禽獸麞鹿まで、周章恐怖して、度を失ひ、哀鳴悲號して、遁れ走るといへ

びて佐くと。若し夫れ一日賢明仁恕の明主に逢はゞ、身命を惜まず、忠丹を抽んで、宜しく輔佐すべきの時なり。人の臣たらん身の、何時をか待たんや。五賢も亦た互に誓ひ、貞亮を組みて以て帶とし、純素を束ねて以て履とし、仁道是勤めば、自然に國肥え民豐ならむ。然らば則ち人の臣たるの盛事にして、是に過ぎたる忠烈は之れあるべからず。恐れても怖るべきは、追從輕薄の佞臣なり。是等の邪黨は、片時も君の傍に立たしむべからず。邪臣、君の傍に在る則は、覺へず君をして邪徑に陷らしむ。正臣、君の側に在るときは、いつしか君をして正路に進ましむ。邪臣とは何をか云ふや。常に君の傍に在りて、忠貞の賢臣を憎み嫌ひ、時を窺ひ機に乘じて、或は謗り或は讒して、果ては是を棄て遠ざけんことを願ふ。暗主は臣下の賢愚を知らず、邪正を分たず、終に彼が佞言を信じて、果して彼の貞節仁恕の忠臣を忌み遠ざく。惜しむべし、悲しむべし。此において佞臣大に嘉運を開きて、上下盡く彼が掌に歸し、細大皆彼が心

そ怪しけれ。如何樣是は父子の間に天理にも背き玉へる程の政務の錯りありし故なるべし。一國一城の主たらむ人々の榮とし玉ふ所、何事か之に如かんや。熟々思ふに、大樹神君天下を一統せさせ玉ひて後、五老を据ゑ、五緯を擇みて、萬機を五老に打任せ、大樹は代々一向いろはせ玉はず。又執權の臣一人の心にも任せず、五賢互に正し定めて、仁恕を以て標榜とす。是を以て神君より以來、天下大に定まりぬ。貴ぶべし、堯舜禹湯の聖主といへども、思ひ付かせ玉はざる聖政、漢魏晋宋齊梁陳隋唐宋元明の間にも比類こそおはせね。閣下も亦た君臣位異に小大品殊なりといへども、願くは密に神君の明政を學び玉ひ、尾奥二藤等の五賢を擇び揚げ抽んで、彼の神君の五緯になぞらへ、萬事を五賢に打任せて、閣下は穆々として打坐し玉ひて、生民を扶け救ひ玉ふべき御工夫の外、一向思慮を加へ玉はず、只尋常默々として、何の望みもなく渉らせ玉はゞ、果して國夫れ安からん乎。古へに云はく、良禽は樹を擇びて栖み、貞臣は主を擇

王佐の才を抽んで、國泰民安の仁政を宗とし、古今治亂の書典を探り、六韜三略の奥義を考へ、百王百代の仁義を見渡し、民肥え國強く、君安く臣正しきを以て、政務の至要とす。是則文武兼ね備へ玉へる忠義の武士の第一の嗜なるべし。古昔、甲陽武田家の盛なりし時、尋常仁政を專一とし、民を憐み玉ひければ、民間次第に豐饒にして、國中皆堯年を樂みしかば、海内無雙の强國となりぬ。此時、列國の諸侯互に軛を爭ひけれども、甲州一國、籠阪古關等の四方の國境に、終に敵軍の駒の蹄を入れず。黎民終に刁斗の聲を聞かず。是故に海内盡く武田の勢位を恐る。是皆仁德の致す所にして、鐵砲戈戟の功にはあらず。去る程に甲陽多少の諸將の中、武士の嗜なりとて、玉藥を腰に挾み、似合はぬ鐵砲を肩に打かけ、いかめしげに喚き叫びて、野山をかけ走り玉へるは、一人も聞及ばず。斯くては果して子孫次第に繁榮して、漢家四百年の富貴を保ち玉ふべきに、子息勝頼に至りて、新羅殿より二十八代の家系を敢なく失ひ玉へるこ

ならずや。兎にも角にも、諸大將の恃みにし玉ふまじきは、似合ぬ鐵砲の賤術なるべし。六韜に云はく、兵は不祥の器なり、止むことを得ざれば用うと。譬へば荒旱の時民皆蓑笠を被して雨を乞ふに、久しからずして、天必ず雨ふるが如く、太平の時鹿狩り鷹野と名付けて、黎民修農の節を妨げ、耕作の邪魔して民間の悲嘆に管せず、不祥の戈戟を動し火砲を放たば、必ず久しからずして止む事を得ざるの兵亂あらんか。民若し猪鹿の害を苦しみ、萬一射獵を願ふ事あらば、宜しく諸卒を遣はし、狩り逐はさば足れらくのみ。尋常射獵を數寄好ませ玉ふ諸將の獨もおはさぬ山里も、世間には數限りなけれど、夫とても粟稗に事缺きて、飢え渴へたる村里もなく、諸將の御情にて、折々弓鐵砲にて狩り逐ひ給はせ玉ふ村里とても、格別に富貴にも見え侍らず。諸君の御蔭にて、粟稗に持ちあぐみたる取沙汰もなし。然れば、卽ち玉藥を費し、强に諸君の世話やかせ玉ふも、詮なき事ならんかし。太平の時、諸將の嗜み、心掛け玉はんず武道は、

せん人々は、盡く是譜代重恩の老從、智勇兼備の執權にして、賤小鄙微の歩卒の族には、遙に異なり。五人にもせよ十人にもせよ、彼の甲陽の二十四將と稱せられ玉ひし人々の如く、一騎當千、萬一國家の大事あらん時、何れも鞍馬に跨りて、或は五百騎、或は千騎を率して、一虎口の固めの大將軍たるべし。其餘は、主君の左輔右弼、先陣後陣の副將たるべし。斯る貴き諸將の身として、賤しき雜兵に交り、歩卒に混じて、日頃狩場にて修錬し置きたる武道なるは、是見よと云はぬ計りに、正兵奇兵の備も知らず、足には泥土の切れ草鞋はきしめ、肩には賤しき鐵砲をいがめしげに打掛け、主君の本陣は、野とならんも山とならんも顧みず、正體もなくかけり行き、敵に若し其智計有りて、引ては支へ、支へては引き、究竟の殺處におびき入れて、玉も藥も盡き果てたる坪を見込み、横合より奇兵を出して道を切らば、不覺の戰死は必定なるべし。萬一宗徒の諸將の中、一騎を失ふ者ならば、諸軍大に頽氣を失して、味方上なき弱味

夜船閑話 卷之下

何某之國何城之大主何姓何某侯の閣下近侍の需めに應ぜし草稿

當春は龍津練若において維摩會中、毎度緩々と高慮を得せしめ怡悦淺からず存ぜしめ候。増々御機嫌よろしく御在府の旨、珍重此御事に候。老夫隨分無事にて御發駕の後方に首尾よく相勤め、漸く四月下旬に歸院致候。當夏は別而大坂御勤番の御支度に依而公務□□□是を掠虚の妄談と云ふ。若し又雄略兼備へさせ玉ふ名將おはして、此等の癡言を聞かせ玉はゞ、腹を抱へて大笑し玉はんか。何が故ぞ。狩場に臨み、君侯の左右を圍みて、進退聚散、影の如くに追隨

明譽了岸大姉

施者 眞觀居士

夜船閑話 卷之上 終

餘動ならんか。云ふことなかれ、鵠林半死の殘喘、多少無義荒唐の妄談を記取して以て佗の上流を誑惑すと。是宿に靈骨有て、一槌に既に成ずる底の俊流の爲めに設るにあらず。癡鈍予が如く、勞病予に類ひする底、看讀して子細に觀察せば、必ず少しき補ならんか。只恐る、別人の手を拍して大笑せんことを。何が故ぞ。馬枯箕を咬んで、午枕に喧すし。

惟時寶暦丁丑孟正二十五蓂

追　修

明譽源入居士

仙室壽間大姉

行譽宗慰居士

流水に隨ひ下らば、必ず白河の邑に到らむと云て、慘然として別る。且らく柴立して幽が囘步を目送するに、其老步の勇壯なること、飄然として世を遁れて羽化して登仙する人の如し。且つ羨み且つ敬す。自ら恨む、世を終るまで此等の人に隨逐すること能はざることを。徐々として歸り來て、時々に彼の內觀を潛修するに、纔に三年に充たざるに、從前の衆病、藥餌を用ひず、鍼灸を假らず、任運に除遣す。特り病を治するのみにあらず、從前手脚を挾むこと得ず、齒牙を下すこと得ざる底の難信難透、難解難入底の一着子、根に透り底に徹して、透得過して大歡喜を得るもの、大凡六七囘、其餘の小悟、怡悅踏舞を忘るゝもの數をしらず。妙喜の謂ゆる大悟十八度、小悟數を知らずと。初て知る、寔に我を欺かざることを。古へ二三緉の襪を着るといへども、足心常に氷雪の底に浸すが如くなる者、今旣に三冬嚴寒の日といへども、襪せず、爐せず、馬齒旣に古稀を越へたりといへども、指すべき半點の小病もまた無きことは、彼の神術の

歳、世人都て知ることなし。其中間を顧るに、恰も黄粱半熟の一夢の如し。今、此山中無人の處に向て此枯槁の一臭骨を放て、太布の單衣纔に二三片を掛け、嚴冬の寒威、綿を折くの夜といへども、枯腸を凍損するにいたらず、山粒すでに斷へて穀氣を受けざること、動もすれば數月に及ぶといへども、終に凍餒の覺へも無きことは、皆此觀の力ならずや。我今既に公に告るに一生用ひ盡さゞる底の秘訣を以てす。此外更に何をか云はんやと云て、目を收めて默坐す。予も亦涙を含んで禮辭す。徐々として洞口を下れば、木末纔に殘陽を掛く。時に屐聲の丁々として山谷に答ふるあり、且つ驚き且つ怪んで畏づ〳〵四顧すれば、遙に幽が巖窟を離れて自ら送り來るを見る。卽ち曰く、人迹不到の山路、西東分ち難し。恐くは歸客を惱せん。老夫しばらく歸程を導かんと云て、大駒屐を着け、痩鳩杖をひき、巉巖を踏み、嶮岨を陟ること、飄々として坦途を行くが如く、談笑して先驅す。山路遙に里許を下て彼溪水の處に到て卽ち曰く、此の

が如し。此觀をなすとき、唯心所現の故に、鼻根乍ち希有の香氣を聞き、身根俄に妙好の輭觸を受く。身心調適なること、二三十歳の時には遙に勝れり。此時に當て積聚を消融し、腸胃を調和し、覺へず肌膚光澤を生ず。若其勤めて怠らずんば、何れの病か治せざらむ、何れの德かつまざらむ、何れの仙か成ぜざる、何れの道か成ぜざる。其功驗の遲速は、行人の進修の精麁に依るらくのみ。百端を窮むといへども、救ふべきの術なし。此において上下の神祇に祈て、天仙の冥助を請ひ願ふ。何の幸ぞや、計らずも此の輭酥の妙術を傳受することを。歡喜に堪へず綿々として精修す。未だ期月ならざるに、衆病大半消除す。爾來身心輕安なることを覺ゆるのみ。癡々兀々、月の大小を記せず、年の潤餘を知らず、世念次第に輕微にして、人欲の舊習もいつしか忘れたるが如し。馬年今歲何十歲なることもまた知らず。中頃端由有て若州の山中に潛遁する者大凡三十

を開くが如けん。此時人に尋ねて路頭を指すことを用ひず。只要す、尋常言語を省略して、爾の元氣を長養せんことを。是故に云ふ、目力を養ふ者は常に瞑し、耳根を養ふ者は常に飽き、心氣を養ふ者は常に默すと。予が曰く、酥を用るの法、得ん聞いつべしや。幽が曰く、行者定中、四大調和せず、身心ともに勞疲することを覺せば、心を起して應さに此想を成ずべし。譬へば色香淸淨の輭蘇鴨卵の大さの如くなる者、頂上に頓在せんに、其氣味微妙にして、遍く頭顱の間にうるほし、浸々として潤下し來て、兩肩及び雙臂、兩乳胸膈の間、肺肝腸胃、脊梁臀骨、次第に沾注し將ち去る。此時に當て胸中の五積六聚疝痾塊痛心に隨て降下すること、水の下につくが如く、歷々として、聲あり。遍身を周流し、雙脚を溫潤し、足心に至て卽ち止む。行者再び應さに此觀を成ずべし。彼の浸々として潤下する所の餘流積り湛へて暖め蘸すこと、恰も世の良醫の種々妙香の藥物を集め、是を煎湯して浴盤の中に盛り湛へて、我が臍輪已下を漬け蘸す

ばかりも欠缺の處なからしめんことを要す。是生を養ふ至要なることを知るべし。彭祖が曰く、和神導氣の海當さに深く、密室を鎖し、牀を案し、席を煖め、枕の高さ二寸半、正身偃臥し、瞑目して心氣を胸膈の中に閉ざし、鴻毛を以て鼻上につけて動ざること三百息を經て、耳聞く處なく、目見る處なく、斯の如くなる則は、寒暑も侵かすこと能はず、蜂蠆も毒すること能はず、壽三百六十歳、是眞人に近かしと。又蘇內翰が曰く、已に飢へて方に食し、未だ飽かずして先止む。散步逍遙し務めて腹をして空からしめ、腹の空なる時に當て卽ち靜室に入り、端坐默然として出入の息を數へよ。一息よりかぞへて十に到り、十より數へて百に到る。百より數へ將ち去て千に到て、此身兀然として此心寂然たること虛空と等し。斯の如くなること久ふして一息おのづから止まる。出でず入らざる時、此息八萬四千の毛竅の中より雲蒸し、霧起るが如く、無始劫來の諸病自ら除き、諸障自然に除滅することを明悟せん。譬へば盲人の忽然として眼

す。但病を治するのみにあらず、大に禪觀を助く。蓋し繋緣諦眞の二止あり、諦眞は實相の圓觀、繋緣は心氣を臍輪氣海丹田の間に收め守るを以て第一とす。行者是を用るに大に利あり。古へ永平の開祖師、大宋に入て如淨を天童に拜す。師一日密室に入て益を請ふ。淨曰く、元子坐禪の時、心を左の掌の上におくべしと。是即ち顗師の謂ゆる繋緣止の大略なり。顗師初め此の繋緣內觀の秘訣を敎へて、其家兄鎭愼が重痾を萬死の中に助け救ひ玉ふことは、精しくは小止觀の中に說けり。又白雲和尙曰く、我つねに心をして腔子の中に充たしむ。徒を匡し、衆を領し、賓を接し、機に應じ、及び小參普說七縱八橫の間において、是を用ひてつくることなし。老來殊に利益多きことを覺ふと。寔に貴ふべし。是蓋し素問に云ゆる恬憺虛無なれば、眞氣是にしたがふ。精神內に守らば、病何れより來らむと云ふ語に本づき玉ふものならむか。且つ夫れ內に守るの要、元氣をして一身の中に充塞せしめ、三百六十の骨節、八萬四千の毛竅、一毫髮

て以て腎に交ゆ。是を補と云ふ。既濟の道なり。公先に心火逆上して此重痾を發す。若し心を降下せずんば、縱ひ三界の秘密を行じ盡したりとも起つこと得じ。且つ又我が形模、道家者流に類するを以て、大に禪に異なる者とするか、是禪なり。佗が打發せば、大に笑つべきの事有らむ。大觀は無觀を以て正觀とす。兩觀の者を邪觀とす。向きに公多觀を以て此重症を見る。今是を救ふに無觀を以てす、また可ならずや。公若し心炎意火を收めて丹田及び足心の間におかば、胸膈自然に清涼にして一點の計較思想なく、一滴の識浪情波なけん。是眞觀淸淨觀なり。云ふことなかれ、しばらく禪觀を抛下せんと。佛の言はく、心を足心にをさめて、能く百一の病を治すと。阿含に酥を用るの法あり、心の勞疲を救ふこと尤妙なり。天台の摩訶止觀に病因を論ずること甚だ盡せり。治法を說くことも亦甚だ精密なり。十二種の息あり、よく衆病を治す。臍輪を緣して豆子を見るの法あり。其大意、心火を降下して丹田及び足心に收るを以て至要と

氣血或は滯碍することなからむか。幽微々として笑て云く、然らず、李氏云はずや、火の性は炎上なり、宜しく是を下らしむべし。水の性は下れるに就く、宜しく是をして上らしむべし。水上り火下る、是を名づけて交と云ふ。交る則は既濟とす。交らざる則は未濟とす。交は生の象、不交は死の象なり。李家が謂ゆる淸降に偏なりとは、丹溪を學ぶ者の弊を救はむとなり。古人云く、相火上り易きは身中の苦しむ所、水を補ふは、火を制する所以なり。蓋し火に君相の二義あり、君火は上に居して靜を主どり、相火は下に處して動をつかさどる。君火是一心の主なり、相火は宰輔たり、蓋し相火に兩般あり、謂ゆる腎と肝となり。肝は雷に比し、腎は龍に比す。是故に云ふ、龍をして海底に歸せしめば、必ず迅發の雷なけん。但し雷をして澤中に藏れしめば、必ず飛騰の龍なけん。海か澤か水にあらずと云ふことなし。是相火上り易きを制するの語にあらずや。又曰く、心勞煩する則は、虛して心熱す。心虛する則は、是を補するに心を下し

道なし。蓋し五無漏の法あり。儞の六欲を去け、五官各々其職を忘るゝ則は、混然たる本源の眞氣彷彿として目前に充つ。是彼の大白道人の謂ゆる我が天を以て事る所の天に合する者なり。孟軻氏の謂ゆる浩然の氣是をひきいて臍輪氣海丹田の間に藏めて歳月を重ねて、是を守一にし去り、是を養て無適にし去て、一朝乍ち丹竈を掀飜する則は、丹外中間、八紘四維、總に是一枚の大還丹。此時に當て初て自己卽ち是天地に先つて生せず、虛空に後れて死せざる底の眞箇長生久視の大神仙なることを覺得せん。是を眞正丹竈功成る底の時節とす。豈に風に御し霞に跨がり地を縮め水を踏む等の瑣末たる幻事を以て懷とする者ならんや。大洋を攪いて酥酪とし、厚土を變じて黃金とす。前賢曰く、丹は丹田なり、液は肺液なり。肺液を以て丹田に還へす。是故に金液還丹と云ふ。予が曰く、謹で命を聞いつ。且らく禪觀を抛下し、努め力めて治するを以て期とせん。恐るゝ所は李士才が謂ゆる淸降に偏する者にあらずや。心を一處に制せば、

一歳を全ふするが如し。五陰上に居し、一陽下を占む。是を地雷復と云ふ。冬至の候なり。眞人の息は是を息するに踵を以てするの謂か。三陽下に位し、三陰上に居す。是を地天泰と云ふ、孟正の候なり。萬物發生の氣を含んで百卉春化の澤を受く。至人元氣をして下に充たしむるの象、人是を得る則は、營衞充實し、氣力勇壯なり。五陰下に居し、一陽上に止まる、是を山地剝と云ふ。九月の候なり。天是を得る則は、林苑色を失し百卉荒落す。是衆人の息は、是を息するに喉を以てするの象、人是を得る則は、形容枯槁し、齒牙搖ぎ落つ。所以に延壽書に云く、六陽共に盡く則は、是全陰の人死し易し。須らく知るべし、元氣をして常に下に充しむ、是生を養ふの樞要なることを。昔し吳契初、石臺先生に見ゆ。齋戒して錬丹の術を問ふ。先生の云く、我に元玄眞丹の神秘あり、上々の器にあらざるよりんば、得て傳ふべからず。古へ黃成子是を以て黃帝に傳ふ。帝三七齋戒して是を受く。夫大道の外に眞丹なく、眞丹の外に大

するの烝民なく、境を侵すの敵國なし。國、刁斗の聲を聞くことなく、民、戈戟の名を知らず。人身もまた然り、至人は常に心氣をして下に充たしむ。心氣下に充つる則は、七凶内に動くことなく、四邪また外より窺ふこと能はず。營衞充ち、心神健なり。口終に藥餌の甘酸を知らず、身終に鍼灸の痛痒を受けず。庸流は常に心氣をして上に恣にす。上に恣にする則は、左寸の火、右寸の金を尅して、五官縮まり疲れ、六親苦しみ恨む。是故に漆園曰く、眞人の息は是を息するに踵を以てし、衆人の息は是を息するに喉を以てす。許俊が云く、蓋し氣下焦に在る則は、其息遠く、氣上焦に有る則は、其息促まる。上陽子が曰く、人に眞一の氣有り、丹田の中に降下する則は、一陽また復す。若人始陽初復の候を知らむと欲せば、暖氣を以て是が信とすべし。大凡生を養ふの道、上部は常に清凉ならんことを要し、下部は常に溫暖ならんことを要せよ。夫經脉の十二は、支の十二に配し、日の十二に應じ、時の十二に合す。六爻變化再周して、

と三寸、晝夜に一萬三千五百の氣息あり、脉一身を巡行すること五十次、火は輕浮にして、つねに騰昇を好み、水は沈重にして常に下流を務む。若人察せず觀照或は節を失し、志念或は度に過る則は、心火熾衝して、肺金焦薄す。金母苦しむ則は水子衰滅す。母子互に疲傷して五位困倦し、六屬凌奪す。四大增損し各々百一の病を生ず。百藥功を立することと能はず、衆醫總に手を束ねん、終に告る處なきに到る。蓋し生を養ふことは國を守るが如し。明君聖主は常に心を下に專にし、暗君庸主は常に心を上に恣にす。上に恣にする則は、九卿權に誇り、百僚寵を恃んで、曾て民間の窮困を顧ること無し、野に菜色多く國餓莩多し。賢良潛み竄れ、臣民瞋り恨む。諸侯離れ叛き、衆夷競ひ起つて終に民庶を塗炭にし、國脉永く斷絕するに到る。心を下に專らにする則は、九卿儉を守り百僚約を勤めて、常に民間の勞疲を忘るゝこと無し。農に餘まんの粟あり、婦に餘まんの布有て、群賢來り屬し、諸侯恐れ服して、民肥へ國强く、令に違

藥の三つの物を恃んで而して後に是を救はむと欲せば、扁倉力をつくし華陀頷を攢むるも奇功を見ること能はじ。公今既に觀理の爲めに破らる、勤めて内觀の功を積まずんば、終に起つこと能はじ。是彼の起倒は必ず地に依るの謂なり。予が曰く、願くは内觀の要秘を聞かん。學びがてらに是を修せん。幽肅々如として容をあらため、從容として告て曰く、嗚呼、公の如きは問ふことを好むの士なり。我が昔聞ける所を以て微しく公に告げんか、是養生の秘訣にして人の知ること稀なり。怠らずんば必ず奇功を見ん。久視もまた期しつべし。夫大道分れて兩儀あり、陰陽交和して人物生る。先天の元氣中間に默運して、五臟列り經脉行はる。衞氣營血互に昇降循環する者、晝夜に大凡五十度、肺金は牝藏にして膈上に浮び、肝木は牡藏にして膈下に沈む。心火は大陽にして上部に位し、腎水は大陰にして下部を占む。五臟に七神あり、脾腎各々二神を藏くす。呼は心肺より出で、吸は腎肝に入る。一呼に脉の行くこと三寸、一吸に脉の行くこ

て苦膏を流して、漸く彼の蘆簾の處に到れば、風致淸絕實に物表に丁々たることを覺ふ。心魂震ひ恐れ、肌膚戰栗す。且らく巖根に停て數息する者數百、少焉つて衣を振ひ襟を正して、畏づ〱鞠躬して、簾子の中を望めば、朦朧として幽が目を收めて端坐するを見る。蒼髮垂て膝に到り、朱顏麗ふして、棗の如し。大布の袍を掛け、輭草の席に坐せり。窟中纔に方五六笏にして全く資生の具無し。机上只中庸と老子と金剛般若とを置く。予則ち禮を盡して苦ろに病因を告げ、且つ救を請ふ。少焉、幽眼を開いて熟々視て、徐々として告げて曰く、我は是山中半死の陳人、櫨栗を拾ひ食ひ、麋鹿に伴つて睡る。此外更に何をか知らんや。自ら愧づ、遠く上人の來望を勞することを。予卽ち轉々咨叩して休まず。時に幽恬如として予が手を捉らへて、精く五內を窺ひ九候を察す。爪甲長きこと半寸、慘乎として額を攢めてつげて云く、已哉、觀理度に過ぎ、進修節を失して、終に此の重症を發す、實に醫治し難きものは、公の禪病なり。若し鍼灸

いへども、百薬寸功なし。或人曰く、城の白河の山裡に巖居せる者あり、世人是を名けて白幽先生と云ふ。靈壽三四甲子を閲みし、人居三四里程を隔つ。人を見ることを好まず。行く則は必ず走て避く。人其賢愚を辨ずることなし。里人専ら稱して仙人とす。聞く、故の丈山氏の師範にして精く天文に通じ、深く醫道に達す。人あり、禮を盡して咨叩する則は、稀に微言を吐く。退いて是を考ふるに大に人に利ありと。此において、寶永第七庚寅孟正中浣、竊に行纏を着け濃東を發し、黑谷を越へ直に白川の邑に到り、包を茶店におろして、幽が巖栖の處を尋ぬ。里人遙に一枝の溪水を指す。卽ち彼の水聲に隨て遙に山溪に入る。正に行くこと里ばかりに、乍ち流聲を踏斷す。樵徑もまたなし。時に一老父あり、遙に雲烟の間を指す。黃白にして方寸餘なる者あり、山氣に隨て或は顯はれ或は隱る。是幽が洞口に垂下する所の蘆簾なりと。予卽ち裳を蹇げて上る。巉岩を踏み、蒙茸を拔けば、氷雪、草鞋を咬み、雲露、衲衣を壓す。辛汗を滴

夜船閑話 卷之上

山野初め參學の日、誓つて勇猛の信心を憤發し不退の道情を激起し、精錬刻苦する者既に兩三霜、乍ち一夜忽然として落節す。從前多少の疑惑根に和して氷融し、曠劫生死の業根底に徹して漚滅す。自ら謂らく、道、人を去ること寔に遠からず。古人二三十年是何の揑怪ぞと、怡悦踏舞を忘るゝ者數月、向後日用を廻顧するに、動靜の二境全く調和せず。去就の兩邊總に脫洒ならず。自ら謂らく、猛く精彩を着け、重ねて一回捨命し去んと、越いて牙關を咬定し雙眼睛を瞪開し、寢食ともに廢せんとす。既にして未だ期月に亘らざるに心火逆上し肺金焦枯して雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲の間を行くが如し。肝膽常に怯弱にして、擧措恐怖多く、心神困倦し、寤寐種々の境界を見る。兩腋常に汗を生じ、兩眼常に淚を帶ぶ。此において遍く明師に投じ、廣く名醫を探ると

夜船閑話序終

即ち予が眞丹成る。丹成る則は形固し。形固き則は神全し。神全き則は壽（いのちな）がし。是仙人九轉還丹の秘訣に契へり。須らく知るべし、丹は果して外物に非ざることを。千萬唯心火を降下し、氣海丹田の間に充たしむるに在るらくのみ。住菴の諸子此心要を勸めて、はげみ進んで怠らずんば、禪病を治し勞疲を救ふのみにあらず。禪門向上の事に到て、年來疑團あらむ人々は、大に手を拍して大笑する底の大歡喜有らむ。何が故ぞ、月高して城影盡く。

惟時寶暦丁丑孟正廿五蓂

窮乏菴主飢凍炷香稽首題

今既に二百衆に近かし。其中間方來の衲子、勞屈疲倦の族、或は心火逆上し正に發狂せんとする底を憐み、密かに此內觀の至要を傳授し、立所に快癒せしめ、轉々悟れば轉々進ましむ。馬年今歲古稀に越へたりといへども、半點の病患なく齒牙全く搖落せず、眼耳次第に分明にして、動もすれば鬖鬡を忘る。每月兩度の法施終に怠倦せず、請に佗方に應じて三百五百の海衆を聚會して、或は五旬七旬を經に錄に雲水の所望に隨て胡說亂道する者大凡五六十會に及ぶといへども、終に一日も罷講齋を鎖さず。身心健康氣力は次第に二三十歲の時には遙かに勝されり。是皆彼の內觀の奇功に依ることを覺ふ。住菴の諸子各々悲泣作禮して云く、吾が師大慈大悲、願くは內觀の大略を書せよ。書して留めて後來禪病疲倦吾が輩の如き者を救へ。師卽ち頷す。立處に草稿成る。稿中何の說く處ぞ。曰く、大凡生を養ひ長壽を保つの要、形を鍊るにしかず。形を鍊るの要、神氣をして丹田氣海の間に凝らしむるにあり。神凝る則は氣聚る。氣聚る則は、

そかに思惟すらく、生きて此憂に沈まんよりは、如かじ早く死して此革嚢を捨んにはと。何の幸ぞや、此の內觀の秘訣をつたへて全快を得ること、今の諸子の如し。至人の云く、此は是神仙長生不死の神術なり。中下は世壽三百歲なるべし。其餘は計り定むべからず。予則ち歡喜に堪へず、精修怠らざる者大凡三年、心身次第に健康に氣力次第に勇壯なることを覺ふ。此において重ねて心に竊に謂へらく、縱ひ此眞修を修し得て彭祖が八百の歲時を保ち得るも、唯是一箇頑空無智の守屍鬼ならくのみ。老狸の舊窠に睡るが如し。終に壞滅に歸せん。何が故ぞ、今既に獨りも葛洪鐵枴張華費張が輩を見ず。如かじ四弘の大誓を憤起し菩提の威儀を覺ひ、常に大法施を行じ、虛空に先つて死せず、虛空に後れて生ぜざる底の不退堅固の眞法身を打殺し、金剛不壞の大仙身を成就せんにはと。此において眞正參玄の上士兩三輩を得て、內觀と參禪と共に合せ並らべ貯へて、且つ耕し且つ戰ふ者蓋し玆に三十年。年々一員を添へ二肩を增し得て、

が本來の面目、面目何の鼻孔かある。我が此の氣海丹田、總に是我が本分の家鄉、家鄉何の消息かある。我が此の氣海丹田、總に是我が唯心の淨土、淨土何の莊嚴かある。我が此の氣海丹田、總に是我が已身の彌陀、彌陀何の法をか說くと、打返し〳〵常に斯くの如く妄想すべし。妄想の功果つもらば、一身の元氣いつしか腰脚足心の間に充足して、臍下瓠然たること、いまだ篠打ちせざる鞠の如けん。恁麼に單々に妄想し將ち去て、五日七日乃至二三七日を經たらむに、從來の五積六聚、氣虚勞役等の諸症底を拂て平癒せずんば、老僧が頭を切り持ち去れ。此において諸子歡喜作禮して密々に精修す。各々悉く不思議の奇功を見る。功の遲速は、進修の精麁に依るといへども、大半皆全快す。各々內觀の奇功を讚美して休まず。師の曰く、儞が輩心病全快を得て以て足れりとすることなかれ。轉々治せば轉々參せよ。轉々悟らば轉々進め。老僧初め參學の時、難治の重病を發して其憂苦、諸子に十倍せり。進退惟谷まる。尋常心にひ

命を顧みざる底の勇猛の上士にあらざるよりんは、何の樂み有てか、片時も湊泊することを得んや。是故に往々に參窮度に過ぎ、精苦節を失する族は、肺金いたみかじけ水分枯渇して、痀癖塊痛難治の重症を發せんとす。是を憐み是を愁て、師不豫の色有る者連日、乍ち忍俊不禁にして雲頭を按下し、老婆の臭乳を絞つて是に授るに内觀の秘訣を以てす。乃ひ云く、若是參禪辨道の上士心火逆上し、身心勞疲し、五内調和せざることあらんに、鍼灸藥の三つを以て是を治せんと欲せば、縱ひ華陀扁倉といへども、輙く救ひ得ること能はじ。我に仙人還丹の秘訣あり、儞が輩試に是を修せよ、奇功を見ること、雲霧を披いて皎日を見るが如けん。若し此秘要を修せんと欲せば、且らく工夫を抛下し話頭を拈放して先須らく熟睡一覺すべし。其未だ睡りにつかず眼を合せざる以前に向て、長く兩脚を展べ、强く踏みそろへ、一身の元氣をして臍輪氣海、丹田腰脚、足心の間に充たしめ、時々に此觀を成すべし。我此の氣海丹田、腰脚足心、總に是我

魚の腹中に葬らるゝ者中葉に過たり。諸子卽ち訂正傳寫して、既に五十來紙を見る。卽ち封裹して以て京師に寄せんとす。予が馬齒一日も諸子に長たるを以て其端由を書せんことを責む。予も亦辭せずして書す。云く、師、鵠林に住すること大凡四十年、鉢嚢を掛けしより以來、雲水參玄の布衲纔かに門閫に跨れば、師の毒涎を甘なひ痛棒を滋（うまし）として辭し去ることを忘るゝ者或は十年或は二十年、鵠林々下の塵と成る事も亦總に顧みざる底あり。盡く是叢林の頭角、四方の精英なり。各々西東五六里が間に分れて舊舍廢宅、老院破廟、借て以て菴居の處として精苦す。朝艱暮辛、晝餒夜凍、口に投ずる者は菜葉麥麩、耳に觸るる者は熱喝垢罵、骨に徹する者は瞋拳痛棒、見る者顙を攢め、聞者肌汗す。鬼神もまた涙を浮べつべく、魔外もまた掌を合せつべし。其初め來る時は、宋玉何晏が美貌有て、肌膚光澤凝れる膏の如くなる者も、久しからずして恰も杜甫賈嶋が形容枯槁、顏色憔悴するが如く、或は屈子に澤畔に逢ふが如し。參玄軀

夜船閑話序

窮乏菴主饑凍選

寳暦丁丑の春、長安の書肆小川の何某とかや聞へし、遠く草書を裁して、吾が鵠林近侍の左右に寄せて云く、伏して承る、老師の古紙堆中夜船閑話とかや云へる草稿あり、書中多く氣を錬り精を養ひ、人の營衞をして充たしめ、專ら長生久視の秘訣を聚む、謂ゆる神仙錬丹の至要なりと。是故に世の好事の君子是をおもふこと荒旱の雲霓の如し。偶々雲水の徒侶竊かに傳寫し來るあるも、秘重し珍藏して、人をして見せしめず。天瓢むなしく櫃におさめて匿したるが如し。願くば是を梓に壽がふして以て其渇を慰せん。聞く、老師常に人を利するを以て樂しみ玉ふ。若夫人に利あらば、師豈に是を吝しみ玉はんや。二虎含み來て師に呈す。師微々として笑ふ。此において諸子舊書櫃を開けば、草稿、蠹

さりながら皆是讃佛乘の緣にて侍れば、詮なき事とな嫌ひ玉ひぞ。是を序でに參禪學道の人々の勇猛精進の助にもなれかしとの寸志計りに候。唯だ返へす返へすも是非々々一回隻手の聲を聞居け、永劫不退の願輪に鞭うち、菩薩の大行を行じて法成就に到るべきぞと、間斷なく御精出さるべく候。在家にもせよ、出家にもせよ、永劫不退の大誓是れ無くては、如何程の萬善萬行を行じ候ても、畢竟生死の內を出でず、菩薩の威儀をだに了知し侍れば、生死即ち是れ出離なるぞと覺悟可有之候。少分にても隻手の聲を御聞居けられ候覺之れ有るに於ては、書中を以てなりとも可被仰聞候。心に浮びもて行く事ども、前後を顧みず、夜中相認め侍れば、文言も拙く字跡も見苦しく候へば、他見は憚入候。穴賢。

藪柑子終

みず、誓つて佛祖不傳の關棙子を蹈飜し、難入難透の荊棘林を拔却し、禪門向上の堂奧に端居し、臂に奪命の神符を掛け、口に法窟の爪牙を咬み鳴らし、普ねく西東の衲子を惱害して、再び已墜の眞風を挽回し、祖庭孤危の春色を發揚せんことを。

老夫昨夜感ずる處ありて、燈下に獨り此法語を書す。書して此に到り覺へず手を拍して失笑す。如何となれば、初めは貴姉の爲めに親しく見道得力の指南を書き出して、夜深け人靜かに半睡半醒の時に至り、覺へず祖道衰滅の悲嘆を書すること數十行、是れ市人は常に愛して利を談じ、山人は常に愛して山中の事を說くものにして、老夫もまた然り。昨大唐の寺院一字も殘らず頹廢する事を聞き、且驚き且悲しみ、懊々として樂まず、終に計らずも別調の中に吹かれて其の亡ぶる所以の端由を書す。恰も愁人の寐語にも愁語を說くに似たり。老夫平生嗟悼し慨念する處の閑妄想、是を愁ふる事深し。故に此を說く事切なり。

碎け落ちて其餘見るに足らざるのみ。大唐佛道の斷滅豈に怪しむに足らんや。須らく知るべし、禪は果して容易ならざることを。昔し吾初祖達磨大師の如きは、八歳にして殿上に親しく、驪珠を辨得して群を驚かし、衆を動かし玉ひし程なるすら、後來出家、般若多羅に隨侍すること二十年にして、深く蘊奥を究め玉ひき。禪は果して容易ならず、此故に佛の言く、我が弟子大阿羅漢、此義を解すること能はず、唯大菩薩のみありて、正に此義を解すべしと。寔に此事は難信難入、難透難解なり。さる程に片言を出す事、大火聚の如く、隻字を吐く事、生鐵橛の如し。英伶豪傑の上士ありて、見道得悟の後二十年の精神を盡す者にあらずんば、たやすく涯際を測ること能はず。然るを今時杜撰の禪徒は、外に參玄の功なく、内に見性の眼無うして、種々殊勝の風情を成して、口には時々念佛して、我は是れ禪にして淨土を兼ぬる者なりと。笑ふに堪ふ可けんや。伏して希ふ所は、忠勇傑烈の上士、義氣憤發の英雄、軀命を惜まず、身財を省

なりし時、法幢堅高、規矩尊嚴、喝雷魂を奪ひ、棒雨膽を裂く。王侯蓋を列らね、緇素踵を接ぐ。嗟吁、時乎命乎、未だ二三百年を經ざるに、胡爲れぞ其れ此の極に到るや。是れ天にあらず、是れ命にあらず、灰心泯智、禪門念佛等の邪黨に傷賊せられ、默照邪禪、無念無心等の魔風に吹倒せられて、遂に此の荒蕪を見る。熟ら〳〵顧ふに、此等の部類は盡く是れ眞風衰滅の大兆、佛道斷滅の大前表、寔に三武の暴逆に過ぎたり。三武は外より責む、此故に久しからずして囘復す。七流は內より潰ゆ。此故に佛手も醫すること能はず。譬へば傷風と內症との如し。我が日域佛道の衰滅漸く久しかるべからず。云ふこと勿れ、禪にして淨土を兼ぬるは、虎にして翼を挾むものなりと。錯々、此に人あり、重痾を膏肓の間に結ばんに、其人必ず久しからずして死せん。禪若し淨土を兼ねば、其の禪必ず久しからずして亡びん。嗚呼、禪乎禪耶、西四七、東二三、的々相承し來りて、實に八宗の綱梁たり。譬へば北に一字の廣廈あらんに、梁棟若し

曰く、近來我が日域、洞濟兩徒の禪徒、默照枯坐、無念無心の部屬の如き、老來七句に近き族に專唱稱名せざるは半箇も亦侍らず。然るを獨り彼の禪徒を責むる事、胡爲れぞ其れ甚しきや。予が曰く、原ぬるに夫れ我が日域禪門念佛の濫觴は、實に彼れ泯水なり。泯水塞がざれば、楚江猶深し。云ふことなかれ、鵠林半死の殘喘、何の求むる處ありてか、俄かに他の一流の禪徒を呵すと。予が心上哀嘆沈欝忍びざる處ありて、驚悲の餘り覺へず此の苦言を吐く。譬へば草木の聲なきも、風是を動かせば鳴るが如し。昨日一僧あり曰く、大唐禪林の名藍巨刹たる徑山、天童、興聖、淨慈、江西、南岳、牛頭、報恩、其の律院教寺に至るまで、盡く皆頽廢亂壞、一字も殘らず、寶場鋤かれて細民の畬となり、磬鐘は鑄られて農夫の犂鍬となりぬ。其餘の佛像經卷纖塵を留めず、獨り慈□の深禪師の遺蹤のみ纔に殘るといへども、屋壁碎け落ち廊廡傾き頽る。荊棘列り生い、藤蔓しげり纒ふ、閑神晝悲しみ、野鬼曉哭すと。嗟吁、古へ禪門の盛

若し今時の所見に任せて足れりとせば、世尊如來の如きも轉輪の王位を辭せず、三千の愛妃をもすて玉はで、恣まゝに五印の福貴を受けつくして、老來稱名念佛して淨土に生ぜば足れらくのみ。十九出家の悲嘆、雪山六年の苦辛、胡爲れぞ其れ拙きや。其餘の五百の大弟子衆等、日中一食樹下一宿、脇尊者の如きは、四十年脇、席に着かず、二祖は臂を斷ち、白崖は四十年脚、閾を越えず、玄沙は脚を傷ひ、臨濟は三度問を發して三度打たれ、雲門は左脚を逼折し、慈明は股に錐す。胡爲れぞ其れ拙きや。盍んぞ稱名して淨刹に往生せざる。且夫れ達磨大師の如きは二三行の書を漢土に送り、專唱稱名、淨刹に往生せよと言はゞ足れらくのみ。何んぞ許多の艱險を喫し、十萬里の波濤を凌ぎて此の見性の法を傳へん。將た其れ古へ多少の賢聖未だ淨刹ある事を知り玉はずと云はんか。怪哉、古は大に艱く今時は大に易き事や。古の難きが是ならば、今時の易きは非ならん。今時の易きが是ならば古の難きが非ならん。時に管城子といふ者あり、

は、中下の機を救はんが爲めに、彼が唱へ〳〵て一心不亂の處に到りて、いつしか唯心の淨土に投入して、往生の大事を決定せしめんが爲め、且らく此の一門を設け玉ふが如し。此故に彼の專稱稱名淨業の宗趣の如きは擱いて論ぜず。爾等身は禪門に在りて、肩に心宗の法衣を掛け、口に一員の禪徒なりと稱して、內には竊に稱名念佛して、禪門を汚辱し宗趣を混亂することは、何たる事ぞや。若し眞正淨業を追慕し佛名を信受するぞとならば、何ぞ明白に淨家の一員淨業の上人と成りて、總盤を張り、木鉦を居え、普く四衆を勸化し、晝夜に高聲念佛して、大事を決定せざる。胡爲ぞ其怪しきや。他の獅子皮を着けて却て野干鳴を成す者とせんか。恰も蝙蝠の鳥にもあらず鼠にもあらざるが如し。動やもすれば禪門宗匠の眞似して麈拂を擧揚し、竹篦を拈し、拄杖を引く。是れ何れの用處ぞ。專唱稱名の人、一箇の木鉦を居うれば足れらくのみ。何ぞ者般の閑家具を用ひん。法印の〇を貯へ、盲母の鏡を愛するに似たり。熟ら〳〵顧ふに、

種殊勝の境界を現じて世上を誑惑し、在家に追從して、許多の禮拜供養を受くと雖も、來世は必ず惡種の底に墮して、肉抹骨磨の苦患、洋銅鐵丸の受報を如何。子細に思念すれば、寒毛皆よだつ。此に於て卽滅無量罪の佛誓を賴みて、袖裡に竊に念珠をつまぐり、口中ひそかに稱名念佛して、淨刹の迎生を願ふ。寔に憐むべし。是れ向きに所謂一點見性の筋力なきの現證なり。是れ向きに所謂一點透過の氣血なきの靈驗なり。恁麽にして傳燈歷代の祖と稱して可ならんや。見よ、西天の四七、東土の二三、及び傳燈千七百個の賢聖、江西、濟北、南泉、長沙、黃檗、汾陽、慈明、楊岐、眞淨、黃龍、息耕、大慧の諸老、其餘の實參實悟の俊英、破口にも往生淨土の事を說かず、專稱迎生の事を求め玉ふは、半個も亦無し。何が故ぞ。初め見性得悟の一刹那に、南隣北舍、總に是れ七種寶樹の淨刹、張三李四盡く是れ無量壽尊、紫磨金の全身なるを見徹すればなり。是れ卽ち開佛智見道の靈證なり。此外更に何をか求めん。彼の龍樹大士の如き

國王大臣有力の檀越をして佛法ある事を知らしめん。悲い哉、大雅枯れて桑間湧き、古曲啞して鄭衛震ふ。百年以來眞風一變して禪徒醜態を成す。禪にして淨土を兼ぬる底麻の如く粟に似たり。昔は外現是聲聞、內秘菩薩行。今は外現佛心宗、內秘は卽ち淨土行。恰も一器にして水乳倂せ盛るが如し。進んで曲彔木牀上を望めば、紅羅の大帽を着け、紫錦の方袍を掛く。白拂裊々として煙を捲き、金鴨亭々として霞を吐く。形容凜々、威儀森々、十力の調御の如く、四果の聖者に似たり。見る者覺えず腰を屈むるあり、掌を合するあり、頭を叩くあり、淚を垂るゝあり、眞正的々相承底の活祖師、恰も佛魔も近傍し難き者に似たり。財產を聚め收むる事は、目連の神通あり、在家を諂縛する事は、滿慈の辯才あり。正眼に看來れば、一點見性の筋力なく、一點透過の氣血なし。此故に進むに寂滅の樂なく、退くに生死の恐れあり。又聞く、僧と成りて理に通ぜざれば、身を復して信施を還へす。長者八十一、其木茸を生ぜずと。今世は種

上求菩提の爲めに下化衆生の大法施を行ず。須らく知るべし、佛法は海の如く、漸く入れば漸く深く、佛法は山の如し、轉た登れば轉た高きことを。悲むべし澆季末代の習ひ、法滅盡時の驗にやあらむ、多衆圍繞の宗匠碩德、高名の耆舊も、徒に空しく無念無心、灰心泯智の死法を以て禪門向上の宗旨とし、寂默枯坐、古廟裡の香爐にし去りて、祖師眞修の寶處とす。頑空無記、暗鈍昏愚を以て、大事了畢の堂奧とす。點檢し見來れば、一丁字も亦知らざる底の臭瞎禿、破凡夫、何の力有りてか法城を鎭護し、宗旨を扶起し去る事を得む。又或は一般世智辯聰の大癡人あり、空見に誇り小智を恃んで、卽ち曰く、佛祖も是れ空寂無相、古則公案皆是れ空文にして、一法の執るべき無しと。佛祖を併呑し、諸方を罵詈す。恰も狂狗の聲を限りに吠ゆるが如し。拘下して取るに足らず。唯是れ一肩無賴の頑陋、奴賤瞎夫、食堂に放ちて粥飯を貪餮せしむる外、半點の所能なし。何の備有りてか、識量寬大、智鑑高明の士太夫をして歸降せしめ、

精粗あり遠近ある事に侍れば、老僧が膝下に於て舊参親しく穿鑿を歴たる僧を尋ね求め玉ひて、親しく證據し決定し玉ふべし。假令如上の因緣を證據し了知し玉ひたりとも、以て足れりとして容易に休罷し玉ふべからず。古來出格の見地ありて知勇兼備の智者高僧も、佛國土の因緣、菩薩の威儀を知らざる時は、五派七流の大事を空盡したりとも、計らず二乘小果の臼窠に墮し、或は隔生卽忘の故に思ひ設けぬ受生を引く。斯く言へばとて、今時諸方頑空無記の修行者達の如く、灰心泯智、斷滅空の深坑に陷墜するの謂にはあらず。何をか佛國土の因緣、菩薩の威儀といふぞとならば、是れ卽ち二乘小果の空谷を超越して、大乘菩薩の寶處に赴く善巧なり。此故に維摩經に曰く、慧なきの方便は、足有りて目なきが如し。方便なきの慧は、目ありて足なきが如し。目足互に相扶けて終に寶處に到ると。大凡十方の賢聖、古今の智者、法成就に到らんがために、常に願輪に鞭うつ。此故に普賢に七十の願あり、彌陀に四十の願あり。何れも

をや。縱令又神仙の齒算ありて、八萬の歳時を守るも、空華遮り、野馬隙を過ぐ。況んや若輩蜉蝣の保ち難き命、水泡の堪へ難き身をや。末の露、本の雫にも劣りたる物を、いつまで待つとて、盲驢の足に任せて行くが如く、半日の行持をだに保たで、寔に貴ぶべき月日を徒らに明し暮しもて行くやらん。何の頼みありてか、狂猿の心に任せて飛びめぐる如く、惜むべき身命を、一善の覺もなくて、空しく老い朽ち果つる事ぞと深く慚愧の心を起し玉ふべし。熟々流轉常沒の世の有樣を顧るに、天堂に生ずべきには福力足らず、地獄に墮すべきには罪業足らず、ゆくりなくも此の娑婆穢土の受生を引く。此故に尊鄙あり、貧富あり、賢愚あり、利鈍あり。須らく知るべし、皆是れ前生の作業善惡の影像なる事を。尊貴は天上の福力足らず、凍餒は地獄の罪業足らず、恐るべし愼むべし。各々勤めはげみて、露命消へざる程、身體破れざる間に於て、驚き恐れ玉ひて、隻手の聲を聞居け玉ふべし。其後一切の音聲を止め得玉ひたりとも、

普天の下、王土にあらずと云ふ事なし。何の佛場神區をか留めん。率土の濱、王臣にあらずと云ふ事なし。何の沙門僧尼をか容るさん。古、吾が本師世尊の如きは、五印度の主、淨飯大王の太子にて渡らせ玉ひたるすら、六趣三塗の苦難を深く恐れさせ玉ひ、金輪の寶位、萬乘の貴階を抛下して、あら〳〵しき仙人に責め使はれ、後雪山に入りて六年端坐、絲もて瓦を編みたてたる如く瘦せ衰へさせ玉ひ、初て金剛の正眼を開かせ玉ひて、終に三界の導師とならせ玉ひき。又中將姫の如きは、殿上殿下に比類もなくあでやかの御形なりければ、天子の中宮にかしづき奉らんとて、人々のゝめきあへりけるに、玉簾の中も火宅の外ならずとて、夜半に帝都を忍び出でさせ玉ひ、雲雀山に入りて目もあてられぬ難行を歷させ玉ひ、上もなき法眼を開かせ玉ふ。其外貴介公子、英雄富豪の人人の來生春磨の苦患を恐れて、身命を抛ち、恩愛を見捨てゝ、出家遁世せられけるは、數も限りもなき事に侍り。然るを況んや我輩塵芥の微軀、鄙賤の殘質

倶底恒沙の苦患を受く、寔に惜むべし、寔に悲むべし。厭ひても厭ふべきは、娑婆穢土の塵垢、恐れても恐るべきは六趣三塗の苦果、佛法中には因果を信じ苦難を恐るゝを以て大智慧とし、自心を了知し、自性を見徹するを賢聖佛祖とす。悲むべし、世間多少世智辯聰の大癡人あり。纔に三五卷の書を讀み、三五座の讀講を聞く時は、自ら智者なりとし、自ら俊傑なりと稱して、因果を破し、三世を無みするを以て自ら賢なりとし、自ら智なりとして、人の因果を信じ、來生ある事を恐れて誦經し、作禮し、慈善を行ずるを見て、手を拍て大笑す。あゝ何んの心ぞや。大凡人を萬物の靈と稱して、馬牛、犬豕、豺狼、麋鹿に異なる所以は、三世ある事を信じ、來生ある事を信じ、苦難を恐るゝを以てなり。儞等が所望に任せば、一切の人をして馬牛、豺狼、麋鹿に齊しうして飽き足る者ならんか。古の賢聖、古今の智者及び賢臣明主と雖も、因果を信じ、苦報を恐れ玉はざるは半箇も亦た無し。若し夫れ因果を撥無し、三世を毀廢し玉はゞ、

の法界、法華の唯有一乘、空手にして鋤頭を把り、步行にして水牛に騎る。穢土を轉じて淨土となし、凡身を變じて佛身と成す等の大事、燦然として目前に充塞す。是を淸淨の神境通といふ。隻手纔に耳に入る時は、自心、他心、親戚心、佛心、神心、衆生心、一見に見透して疑惑なし。是を淸淨の他心通といふ。隻手纔に耳に入る時は、人々本具の心上一點の無明なく、一點の生死なし。廣大圓明、高閑虛凝、是を淸淨の漏盡通といふ。此時に當りて、百千の法門、無量の妙義、世間所有の功德聚、世間所有の寶莊嚴、盡く自己の心上に具足して、毫髮ばかりも欠闕なし。初て知る、六度萬行、體中に圓なる事を。人間天上の善果、何事か之に勝らん。三賢四果の歡喜も豈に此に過ぎんや。嗟吁、其の得がたく、受け難き者は人身なり。逢ふ事まれに、聞く事希れなる者は佛法なり。今に既に受け、今既に聞くといへども、空しく夢幻の名利を慕ひ、空華の貪愛におぼれて、徒爾として一生を過して懲りもなく險難三途の舊里に立ち歸りて、

知を離れて單々に行住坐臥の上に於て、透間もなく參究しもて行き侍れば、理盡き詞究まる處に於て忽然として生死の業根を拔翻し、無明の窟宅を劈破し、鳳、金網を離れ、鶴、籠を抛つ底の安堵を得。此時に當りて、何時しか心意識情の根盤を擊碎し、流轉常沒の幻境を撥轉し、三身四智の實聚を運出し、六通三明の神境を超過す。貴ぶべし隻手纔に耳に入る時は、佛聲、神聲、菩薩聲、聲聞聲、緣覺聲、餓鬼聲、修羅聲、畜生聲、天堂聲、地獄聲、世間所有の一切の音聲毫釐も聞殘す事なし。是を淸淨の天耳通といふ。隻手纔に耳に入る時は、自界他界、佛界魔宮、十方の淨刹、六趣の穢土、一見に見徹して掌果を見るが如し。是を淸淨の天眼通と云ふ。隻手纔に耳に入る時は、廣大劫來輪轉昇沈の跡、塵點劫後往復遷流の影、昭々焉として寶鏡に對するが如し。是を淸淨の宿命通といふ。隻手纔に耳に入る時は、喫粥喫飯、運動施爲、是れ修得底にあらず、學得底にあらず、人々本具の活三昧なる事を徹了す。此時に當りて華嚴の四種

四歲の春、越の英巖練若に於て夜半鐘聲を聞いて、忽然として打發す。夫れより今年まで四十五年が間、朋友親戚を擇ばず、老幼尊卑をすてず、何卒一回大事透脱の力を得られよかしと、或は自己に付いて疑はしめ、或は無の字を參究せしめ、種々方便を廻らし、提携敎諭しけるに、其中間、少分の相應を得て歡喜を得たる人々は、大凡數十人に及ぶべく覺へ侍り。此五六ケ年以來は、思ひ付きたる事侍りて、隻手の聲を聞届け玉ひてよと人每に指南し侍るに、從前の指南と拔群の相違ありて、誰にも疑團起り易く、工夫進み易き事、雲泥の隔有之樣に覺へ侍り。是に依りて唯今專一に隻手の工夫を勸め侍り。蓋し隻手の聲とは如何なる事ぞとならば、卽今兩手打合せて打つ時は丁々として聲あり。唯隻手を擧る時は音もなく香もなし。是れ彼の孔夫子の所謂烝天の事といはんか、將又彼の山姥が云ひけん一丁空しき谷の響は、無生音をきく便り成るとは此等の大事にや。是れ全く耳を以てきくべきにあらず、思慮分別を交へず、見聞覺

は必ず三塗八難の惡趣に墮す。然らば卽ち前生の千難萬苦の善業は、今生の富貴榮耀と成り、今生の福貴榮耀は、來生の鐵床火坑の苦患と成る。此故に癡福は三世の寃とも申し置かれ侍り。大凡後世菩提の指南は數も限もなき事に侍れど、多くは方便の說を出でず。最上至極の指南は、特り此見性得悟の眞修に越へたるは必定決定なき事に侍り。さる程に法華經にも、三世古今の敎主の如來は、一切衆生をして佛智見道の眼を開かしめんが爲めに世に出現し玉ふと說き置かせ玉ふ。されば大覺調御も娑婆往來八千度の生死を歷させ玉ひたれども、最後雪山に入りて開佛智見見道の望を遂げさせ玉ひて、初めて無上正等正覺を唱へさせ玉ふ。此故に三世古今の間に見性せざる佛祖なく、見性せざる賢聖は半箇も亦無き事に侍り。然らば則ち無量恒沙の萬善萬行も此の見性の一法に越へたる事も無き事なりと覺悟之れ有るべし。老夫初め十五歲にして出家、二十二三の間、大憤志を發して、晝夜に精彩を着け、單々に無の字を擧揚し、二十

實相の眞理現前の當位を生といふ。此等の眞理に達せず、世間の數限も無き後世者達の佛にならん淨土に生れんと難行し、苦行し、持戒し、持齋し、誦經し、書寫し、種々の善行をはげみ玉へども、多くは天上の善果を受け、人界にては天子將軍、公家殿上人乃至大名高家等の富貴自在の身に生れ玉ふより外、成佛は叶ひ難き事なり。如何となれば、心の外に佛なく、心の外に淨土なきが故に。然るに彼の人間天上の善果は羨しからぬ事こそ有なれ。生天の福は、天を仰いで箭をいるが如し。勢力つきぬれば、箭却て落つといへり。彼の天人の如きは、前生修福の力に依りて、一旦天上に生ずといへども、過去の福報を受け盡しぬれば、五衰等の醜相を現じて、果ては下界に下り、或は惡處に墮す。況んや人界に於て富貴自在の人をや。過去の善根力に答へて、今世の富貴を得たる事は、露ちり忘れ果てゝ、尊貴を恃み、勢位に誇りて、民を貪り苦しめ、物命をいため害し、あらぬ樣なる罪障を積み重ね、果てしもなき惡業を作り添へて、來生

大疑の下に大悟ありと申して、唯今此文を披覽し、或は笑ひ或は談論し、萬緣に應じて、夫れ〱に働きもて行く底、是れ何物ぞ。是れ心なりや是性なりや、青黃赤白なりや、內外中間に在りやと、是非々々一囘分明に見屆けずば置くまじきぞと、十二時辰、三四威儀たけく精彩をつけ、間もなく勵み進み侍らば、いつしか妄想思量の境を打越へ、前後際斷の工夫現前して、男にあらず女にあらず、賢にあらず愚にあらず、生ある事を見ず、死ある事を見ず、唯一向空洞洞地虛潤々地にして、晝夜の分ちを見ず、心身ともに消へ失する心地は、幾たびも有之事に候。此時、恐怖を生ぜず、間もなくはげみ進み侍れば、いつしか自性本有の有樣を立處に見徹し、眞如實相の慧日は目のあたり現前して、三十年來未だ曾て見ず、未だ曾て聞かざる底の大歡喜は求めざるに煥發せん。是を見性得悟の一刹那とも名づけ、是を往生淨土の一大事とも相傳する事にて、自心の外に淨土なく、自性の外に佛なし。一念不生前後際斷の當位を往と云ひ、

致し、翌朝、牌前へ手向け申候。處々落字等も多く、文字の顚倒も間々相見へ候へども、此度進覽致候。管々しき拙語、他見は憚入候へども、近侍の人々には內々にて御讀み爲聞被成候へば、法施にも罷成べく、是亦菩薩行の手習ひなるぞと思して、時々御讀み可被成候。先づ可申述は、縱ひ老僧御望に任せて內典外典を考へ合せ、種々の法理を際限もなく書付け進候とも、門より入る物は家珍にあらずと申傳へ侍りて、生死透脫の助けには更々罷成らざる事に侍り。唯願はくば自性本有の有樣を一回分明に見得し玉ふに越へたる事は侍らず。彼の自性本有の有樣は如何にして見屆くべきぞとならば、大凡番々出世の如來、三世古今の賢聖智者たちの頓漸半滿顯密不定等の法理を、數限りもなく說き置かれ侍れど、只肝心の處は行者勇猛の志をはげまし、直に進んで退かず、囫地一下の歡喜を得ざらん限は、必定決定退惰の心を生ずまじきぞと覺悟し玉ふより外別の子細候はず。蓋し彼の囫地一下の歡喜は如何して得べきぞとならば、

藪柑子

岡城大侯隱君の侍側　富郷賢姨の需に應ず。

卯月二十七日の御文、五月初めに落掌、貴命之通、過し頃は法雲精舍に於て圖らざる見參、怡悅淺からず令存候。其後、大侯隱君其外何れも恙なく御歸城增御健康の旨珍重此御事に候。其節被仰置候には、道情をも助け增し、見道の指南にも罷成るべき法話一篇書進候樣にとの御事、御奇特千萬の御所望感入存候へば、努々御如才には不存候へども、彼是取紛れ延引に打過ぎ申候。昨五月二十七日は愚母五十年の遠辰に相當候へば、追善の爲め何をかなと考へ見合せ候へども、誦經書寫禮拜恭敬等の佛事も老來叶ひがたく侍れば、是を幸に貴姉日頃御所望の法語一篇書き認め候て、法施供養の一助とも罷成らば、何よりの追福ぞと、廿五日の暮方より取りかゝり、同じき廿六日の夜半過ぎ迄に急に淸書

今上皇帝聖躬萬歲ならんことを。次に冀くば、兩宮簾下、心身勇猛、衆病悉除、壽算は彼の若州八百歲の尼公にあやからせ玉はんことを。穴賢。

維時寛延第四辛未之曆仲秋三五之佳辰。

於仁安佐美終

右管々しき繰言、御披見も六ケ敷思さんも憚り入り侍れど、是を次でに近習常隨の尼僧上﨟達、及び世間初心の修行者達の工夫の一助にもなれかし。且又此文を一見したらん人は、直下に勇猛不退の信心を煥發して、同じく共に種智を圓にせんことをと、彼の誓願度の方寸に侍り。老僧親切の微志をも思召されなば、何返も御熟覽遊され、御机の上に線香一炷を添へさせ玉ひ、法喜禪悅の御營みと思召され、說法敎化の代りに、近習の尼僧上﨟達にも、高々と御讀み聞かせ、法施の一助になされなば、經にも一切功德の中には、法施の功德を第一とすと說き置かせ玉ふからに、之に過ぎたる菩薩の威儀は侍るべからず。然らば則ち自然に佛國土の因緣に御契ひ成され、速に法成就に到らせ玉へかしの寸志にて侍り。且又如上の顚言倒語、如し讃佛乘の因緣にも相契ひ侍るべくば、願くは此の功德力に依りて、

皇國鞏固、佛日光輝ならんことを。特に祈る、

於仁安佐美

透りて、佛手も亦た醫し難き者に似たり。此を爲ん事如何。既に是れ病因を見る。豈夫れ此を救ふの靈劑なからんや。予曰く、玆に換骨の靈方あり。此等の重痾を救はんが爲めに、古德且らく此の善巧を設く。一切の行人佛祖所證の田地に到らんと欲せば、諸方婆禪の涎唾を舐らず、相似禪徒の教化を執らず、白盲に自己に就いて參究し、或は隻手の音を聞得て、眞正一回見性の眼を開くべし。而して後、此の難透の話頭に參せよ。宗峰妙超大師曰く、終日肩を交ふ我何似生。本有圓成國師曰く、柏樹子の話に賊の機ありと。二大士の語話、分明に徹見することを得ば、乾峯三種の病、五祖牛窓欞の話、鹽官犀牛の扇子、翠岩夏末の話、必ず掌上を見るが如けん。而して後自ら點檢して看よ、何の重痾の除くべく、藥餌の求むべきかあらん。此に於て、無緣の大慈を起して、菩薩の威儀を學び、大法施を行じ大に人を利して、以て佛祖の深恩に報答す。是を眞正の佛子、當家の種草と云ふ。

にして、盤に和して托出す夜明珠。彼の潛行密用。唯だ能く相續するを主中の主とする底の內秘の大事にして、寔に秘中の秘訣なることを。近代立ち枯れ禪法達の禪堂の本尊にせまく欲しきことよ。寶鏡三昧に曰く、潛行密用、唯能相續するを主中の主とすと。是亦動中の工夫を云へり。潛行密用とは、物靜かなる處に潛み竄るゝことには侍らず。千差萬別の塵務の上、七縱八橫の世波の間に於て、正念工夫相續間斷なからんとは、佛祖も計り知り玉はじの心にて侍り。斯く云へばとて、七縱八橫の中に、珠數貫ける絲の如く工夫せよとの心には侍らず。大乘圓頓の參學は、千差萬別の塵務、取りも直さず、直に是れ潛行密用の大事。七縱八橫の世波の儘にして、總に是れ正念工夫の全體なるぞと、行往坐臥の上に於て、親切に參窮する、是れ肝心の秘訣に侍り。時に一僧あり、問ふて曰く、師從頭禪病數段の本根、利害の深淺を教示せらる。中に就いて心源湛寂、默照枯坐、灰心泯智、寂滅空溝。此等の痼疾の如き、膏肓に入り肺腑に

に轉ぜらるゝを下とすと。斯れ此の謂なり。譬へば彼の神龍の苦鹹の海水を捲き上げ、甘露の膏雨となして洒ぎ將ち來りて、荒旱の稼苗を蘇するが如し。此等の趣を能く〳〵勘辨せさせ玉ひ、動靜二境の利害を思し召し分けられ、北野又祇園淸水など、人立ち多かる所へも、時々詣でさせ玉ひ、法成就をも祈らせ玉ひ、又物の騷々しき處には、正念工夫相續間斷ありや否やを辨へさせ玉ひ、今時澆季の衰風に傚つて、片時も死水裡に浸殺せられ玉ふべからず。老僧若年の時、眞言宗の寺に入りて、初て東方降三世等の五大尊の像を見けるに、心に大に怪しみ謂へらく、狼藉なる風情の佛やはある。獨相撲の守神か、當て身やはらの本尊か。何にもせよ、無公義なる佛なるぞと笑ひたりしが、近頃思へば行者勇猛精進の一機を標して貴とぶべきの靈像なり。四尊勇猛の精進力に守護せられて、中尊大聖不動明王は嚴然として立たせ玉ふなるめり。つら〳〵顧ふに、四尊惡毒瞋怒の風標は、誰か計らん、諸佛無上の大禪定、金剛無作の戒體

松は、二葉より風に煽られ潮に揉まれ習ひたるが故に、如何なる荒き風波に逢ふても、少しも痛める氣色なきが如し。此故に宗峰妙超大師動中の工夫を詠じ玉ひて、見るや如何に加茂の競ひの駒くらべ驅けつかへすも坐禪なりけりと。又彼の默照枯坐を呵し玉ひて、佛にもなり固まればいらぬもの石佛等を見るにつけてもと詠じ玉ふなり。固まればとて、念を生ぜじ心を動さじと思ひ籠めて、劫毘羅が石になりたる如きをいふ。さる山寺には、默照僧の石になりて、其石を見たる人々の物語を、目のあたり聞侍りき。此等の病を救はん爲めに、眞珠庵主の法語に、煎茶摘むべからず、坐禪すべし。看經すべからず、坐禪すべし。掃除すべからず、坐禪すべし。馬に乘るべからず、坐禪すべし。納豆作るべからず、坐禪すべし。茶の實種うべからず、坐禪すべしと。是は一向に萬緣を抛擲却して、坐禪せよとの心には侍らず。談笑戲論、動足擧手、一束に束ねて換轉却し將ち來りて、一枚の禪定三昧とす。岩頭の所謂物を轉ずるを上とす。物

頓の菩薩の如きは卽ち然らず。五塵六欲の上、七顚八倒の間に於て、逆順の境界を擇はず、淨穢の二法を見ず。畜生の修羅の惡趣に入りて、一列を利益せんが爲めに千萬種の善巧を現ずれども、常に道場を離れず、正念工夫も間斷なき、是を菩薩の威儀といふ。動中の工夫は、靜中の工夫よりは、工（本ノマヽ）と際捗行かぬ樣に覺えらるゝものに侍れど、動中の工夫は、一寸修し得れば、一寸の得力にして、一生の受用を助く。靜中の工夫は、縱ひ一丈を修得たりとも、僅の塵事に觸るゝ則は、忽ち總に打失して、半寸の功をなさず。此等の族を二十年糞穢を除く底の修行者とす。三祖の欲に在りて禪を行ず火裡の蓮と言ひ置かれしも、動中の工夫を讚歎し玉ひたる言葉にて侍り。彼の水より生じたる蓮は、火氣に逢ふては乍ち枯れ凋む習なるに、火裡より生じたる蓮は、火氣に逢ふては轉た色香を增すが如し。風に破られ潮に痛めらるゝは、世間の草木の習なるに、伊豆田子あたり、又は松島や御島の濱の磯邊なる岩の岩根に生いそだちたる磯馴

否泰を論ずる底、少れなることを。夫れ三乘の階漸は、佛道の大綱にして、行者最初に辨別すべきの至要なり。此の大事を顯はさんが爲めに、久遠の古佛及び大權の諸大士、假りに且らく身子滿慈、善吉、慶喜等の鄙賤小果の身を現して、如來の呵責を受け、或時は尊重讃嘆し、或時は涕涙悲泣す。是を內秘菩薩行、外現是聲聞と云ふ。豈夫れ輕々の事ならんや。然るを近代天下の宗師、叢林の善知識なりと歸仰せられ、江湖の舊參、頭角の衲子なりと稱せらるゝ底の族も、奴郎辨ぜず、玉石分たず、往々に背地裡に在りて、心に窃に謂へらく、所謂聲聞二乘とは、古への頑賤無智昏愚の輩ならくのみ。覺得下して、總に胡爲の者といふ事を知らず。恰も盲驢の足に任せて行くに似たり。誰か計らん最初より身の其山中に在ることを。昔は知つて、此の山中に入り、今は迷ひて此の山中に在り。夫れ六塵を避け嫌ひ、寂靜の處を好んで、死坐して深く禪味に耽着する、是を二乘小果の人とす。是は佛祖も忌み嫌はせ玉ふ禪病に侍り。圓

薄き氷を蹈み、蜘蛛の絲もて、萬斛の船を繋ぎ留めたる心地し侍りき。大に驚き大に恐る。此故に罷り上り侍りて、其度毎に專ら此の禪病の事を持論し侍りき。然るに間もなく全快に赴かせ玉ふ御事、愚老に限らず、近習外樣の人々までの歡踊、筆も及ぶべきことかは。此上猶々御養生肝心の御事に侍り。簾下御一人の御惱は、五人や十人の心痛に罷り成るべきことかは。此故に此度の書通も何卒御再發ましまさぬ樣にと祈る計りの方寸にて侍り。去り乍ら只今迄御心を盡くされし御修行を透きと休めさせ玉へ、只今迄の御工夫を捨てさせ玉へと申には侍らず。三乘の賢聖、古今の智者、正念工夫の大事を離れて、法成就に到りたるは半箇も亦た侍らず。是を不忘念智と名付けて、果滿の曉に到るまでに、片時もすて離るべからざるの大事にて侍り。然れども其の進趣の間に於て、少しき賢愚利鈍なきに侍らず。其等差を分け利害を辨へしめんが爲めに、調御且らく聲緣菩三乘の階位を設け、其の優劣を立つ。惜むべし、二三百年來此の

告げて曰く、唯此の一生を抛擲下して、深山岩崖人迹不到の處に入りて、其の山の草木と共に朽ち果てんとするより外、一法の施すべきなしと。予深く此語を信じて、禮拜して泣々出づ。予卽ち香を燒いて大誓を發して曰く、我若し此の邪坑を透脫することを得、眞正の所證を得ば、誓つて此の邪黨を破せん。我如し此の邪坑を透脫することを得ば、誓つて此の禪病の人を守護せん。我若し此の邪坑を透脫して、眞正の所證を得ば、誓つて禪病予が如き人を救はんと。後來明師に投じて漸く病根を拔くことを覺得す。所證未だ十分ならずと云へども、後生晩進の輩、此の病因の芽ざすを見る則は、赤子の井に赴くを見るが如し。精神を奮つて以て之を救はんと、危亡を顧みず軀命を惜まず、天下の人の貶剝するに一任す。邪坑とは何ぞや。紫野國師の、三十あまり我も狐の穴にすむ今ばかさるゝ人もことはりと詠じ玉ふ黑暗の塵坑是れなり。つら／＼考ふるに、簾下の御不例も亦た少しく是の禪病をかねさせ玉ふと見うけ奉りたれば、

が如し。一日諸經要集を一見し、此の一件に撞着して、大に前非を悔ゆ。故に繁文を省みず、併せ書して以て進覽す。悲い哉、今時天下の禪流、此等の流類少しとせず。老僧四十年前、業風に吹倒せられて、此の暗窟に陷墜して、進むこと得ず、退くこと得ず、右に突き、左に當ると雖も、全く透脫の力を得ず。常に好んで暗室に默坐す。兩脚氷雪の底に浸すが如く、雙耳、溪聲の間を行くに似たり。起居恐怖多く、兩眼常に淚を帶ぶ。塊痛あり毬子の如く、常に胸膈の間に在りて上下す。點檢し看來れば、總に是れ有氣の死人、心火燿々として二税を缺ける百姓の如し。晝夜に嗟悼し懊惱すといへども、救ふべきの心術なし。生きて世間に在ることを好まず、常に心に竊に謂へらく、早く丘壑に餓死して、此の憂惱を遁れんと。來生の不如意は總に顧みざりき。此に於て竊に行纒を着け、告げずして出づ。西の方尾濃泉河の間を往來して、數員の知識に見ゆと雖も、只だ各々同病相憐れむのみ。如何ともすること能はず。一老宿あり

山に入る人山にてもなほ憂き時はいづち行くらんといへる古歌を打ち吟じて、わゝと泣き叫びけるが、憤然として歸り來り、遂に彼の潭中に投じて死す。乍ち一箇の大白獺となりて、潭中を驅り廻ぐること七縱八横、盡く鯉魚を捉らへて、頭を咬んですつ。萬頃の碧潭俄に變じて血となりぬ。時に群鷺兒あり、空中を列り過ぐ。獺一見して大に瞋り、乍ち舊願を覺得して空中を睨らんで大吼一聲、兩翼直下に張り、長空を翔けること縱横無碍、閃電を鈍しとし、石火をおそしとす。逐一彼の群鷺を攫んで、頭を咬み捨つ。鮮血雨の如くに長空に洒ぎ、鷺羽雪の如くに廣野に飛ぶと。恨むべし、無上菩提を求めんが爲めに、許多の苦行を行して、永劫惡趣に墮す。是他なし。最初惡知識の教化を信じて、心源湛寂の處を自已本有の佛性なりと相心得、寂靜無事の處に竄れて、想念を空し盡くし、灰心泯智、木人石女の如くし去つて、以て菩提を成ぜんとす。大に錯り了れり。老僧初め此の流類に墮し、懊惱するもの三年。身を置く處なき

於仁安佐美

亦た領すべきの徳あり。彼の樹頭の愚鷺が類にはあらず。嗟々鯉魚儞如し心あらば、且らく我が片言を聞け。吾は寂寞の處を求めて禪定を修する者なり。今此の岩窟大に吾が心に適へり。然るを儞が輩水面に躍跳して大に吾が道業を妨ぐ。吾が心甚だ之を患ふ。儞も亦た罪なきにあらず。願くば今日より妄に躍出することを止めよ。我をして速に法成就に到らしめよ。然らば則ち儞が出離の正因ともなるべきぞ。愼しめや鯉魚、再び躍ること勿れと祝し了りて湛然として默坐す。鯉魚依然として躍りて止まず。此に於て憤然として又捨てゝ他方に行かんとす。卽ち潭中を睨み、合掌して惡願を發して曰く、儞が鯉魚、吾が道業を妨ぐ。此故に此岩窟を捨て既に今他方に行く。我が儞に於ける何の怨かある。我如し道業を成就すること能はずんば、必ず死して鐵爪金牙の獺となりて、逐一儞が部屬を捉らへて裂いて食すべし。儞鯉魚其れ之を記取せよと。泣々亦岩窟を出でゝ行く。行くこと數十歩にして悄々としてそぼろだち、世を捨てゝ

成就に至らしめよ。叉再び來ることなかれと祝し畢つて默坐す。已に日沒の比に到りて、衆鷺叉來り集ること、依然として每夜止まず。此に於て憤然として彼の樹蔭を捨て去り、終に他方に行かんとす。乃ち彼の樹蔭を睨んで惡願を發して曰く、儞等鷺兒、大に吾が道業を妨ぐ。我儞等と何の寃かある。我今正に此樹蔭を捨去りて他方に行く。儞等鷺兒能く記取せよ。我如し果して道業を成ずることを得ずんば、死して必ず鐵爪金牙の鷲となり、逐一儞等を捉らへて、裂いて食ひ盡すべきぞ。其時我を以て寃とすること勿れと祝し了りて、泣々立ちて他方に行く。行いて一の岩窟に到る。前面は萬丈の碧潭藍の如し。窟中正に一榻を入るべし。彼の僧は喜躍して曰く、天我に究竟寂默の處を賜ふと。定坐する者累日、鯉魚あり數十口、晝夜に潭面に飜跳して、甚だ道念を驚かすこと、彼の樹頭の群鷺に異なることなし。卽ち潭中を望んで合掌して祝して曰く、鯉魚よ〳〵、儞は是れ鱗中の長にして、果して池中の物にあらず。他日雲雨も

て顙を攅めて哀吟し、眉を皺めて懊惱す。死に到るまで勞して功なき者は、二乘小果の修行なり。昔し羽翼を帶びたる獺になりし修行者も、此等の部屬なり。日古へ一僧あり、修行すること多年、禪味心に染み、空閑情に適ふに隨つて、日日に擇んで寂靜無人の處に入る。轉た求むれば、轉た騷々しく、轉た尋ねれば、轉た喧し。此に於て終に遙に深山裡に入りて、老樹の下に到る。是れ實に究竟淨極の靈地なりとして、包を下ろして默坐す。大に歡喜し大に踊躍して曰く、眞に終焉の處を得たりと。暮に及んで、鷺兒數百、樹頭に來り宿して、終夜騷雜にして休まず。大に道情を妨ぐ。既にして、東方將に明け、鷺兒將に去らんとする頃に至り、合掌して高聲に祝して曰く、鷺兒、汝心あらば、且らく吾が片言を聞け、我は是れ寂靜の處を求めて禪定を修する者なり。汝が宿する林樹は世間に際限あるべからず。吾が求むる禪寂の地は、此の樹蔭に越えたるはなし。願はくば此の老樹をすて去つて、吾に與へよ。吾をして此の樹蔭に於て法

の猪肉案頭、普化の紅塵堆裡、盡く是れ此の玄樞を撥轉す。是を金剛寶戒無相心地具足の戒體と云ふ。慈明は是を以て此を楊岐に傳へ、楊岐は白雲に傳ふ。應菴、密庵、松源、運庵、息耕、横嶽、紫野、花園、的々相承し來る底の向上の秘訣、眞正の命脈なり。今時相似の禪徒、夢にも曾て知ることを得んや。二乘は道場に在りて威儀を現ずること能はずとは、今時昏愚の流輩の如き、心源湛寂、空間無爲の處を道場なりと死執し、目を閉ぢ齒を切りて、徒らに日々淵默死坐、恰も七村裡の土地の如し。眼を開けば道場を打失し、耳を側ばだつれば道場を打失し、喫茶喫飯、屙屎放尿、道場を打失せずといふことなし。此故に朝より暮に至るまで首も亦た動すこと得ず。さる程に粥飯の二時も他人の口を傭ひて人に咬ませて呑ぬ計り、水も亦た手づから汲むことをせず、面も亦た自ら洗ふに懶く、動もすれば、大小の二便も、人を傭つて行ぜんとす。縱ひ恁麼にし去つて、歳月を重ぬといへども、道場に住し得ることを果さず。此に於

にて侍りとて、名號など乞ひ求めければ、書て與へ申しき。如上の次第に侍れば、縱ひ見地透脫、古人に過ぎたる作用ありとも、菩薩の威儀に依らずんば、必ず魔道に落つべし。維摩經に曰く、菩薩は道場を離れずして能く威儀を現す。二乘は道場に在りて威儀を現ずること能はずと。道場とは空廓虛凝寂滅現前底の大事。威儀とは下化衆生の四儀。上求菩提の行持をいへり。古へ百丈、黃檗、臨濟、興化、歸宗、麻谷等の諸老、毎日作務普請の鼓を鳴らして、搬石搬土、水薪菜蔬、七顚倒、八狂亂、千變萬化の上に於て、正念工夫、毫釐も打失せず、其綿密の行持、直に是れ諸佛の大禪定。佛祖も窺ふこと能はず、魔外も計ること得ず。是を不離道場の行持といふ。此故に妙喜曰く、動搖の上六塵の間に於て、時々に須らく點檢すべし。那時か是れ打失の處、那時か是れ不打失の處と。是を正念工夫不斷坐禪の法と云ふ。所謂動中の工夫は靜中に勝ること百千萬億倍すと。此れ斯の謂なり。臨濟の喝、德山の棒、汾陽の瞋怒、金牛の舞、盤山

ず暖かなり。貪は入息の義、その氣必ず冷かなり。若人瞋怒俄に起る則は、面熱し眼赤く、毛髮逆立ち上りて、さながら烈火の炎え上がるが如し。八熱の報又宜べならずや。慳貪鄙吝の人の如きは、じはり〱と常にしめよせて、冷氣の肌骨に砭りするが如し。蛟脚虫臂といへども共に藏め並べ貯へて、腐鼠死蠅といへども、人に施すことを好まず、彼の層氷の朽木破笠子、纔に少しく凍合する則は、萬夫も奪ふこと能はず、八寒の報亦宜べならずや。高位の貴人、尊貴の出家などの、やごとなき御有樣にて責め惱まされ玉ふは、一入御痛ましく見請け申侍りき。其外處々の獄所の事ども、思ひ出せば、身の毛立ちて、恐ろしく覺え侍りと、絶え入り〱語りにたるを、見聞はべりては、夜も安く寢ねられ申さず。あはれ助かるべき道しあらば、一言なりとも教化させ玉へや。彼娘にて候ふ者も、飛び立つ計り詣で度き心には侍れど、長病の身の中々一歩も叶ひ侍らず、我等ばかり右の物語を聞きもあへず、思ひ立ちて尋ねまゐりたる

べき湖水の中へ罪人を數限もなく追ひ浸して、存分にいて凍らしむれば、頭も肌も七華八裂さけ破れ、全身血に染みて、さながら咲き亂れたる蓮の如し。之を紅蓮大紅蓮の地獄といふ。罪人とは誰をかいふや。尊貴にもせよ高位にもせよ、富貴自在の人にもせよ、今の世に於て、慳貪吝嗇、半錢寸紙といへども、人に施すことを好まず。譬へば仲冬嚴寒の氷の萬物を凍合して、萬里一條の鐵の如くし去つて、塵芥糞穢といへども、漫りに放過せざるが如し。故に此苦果を感ず。問ふ一切の惡種の如き、叫喚無間焦熱阿鼻、總に是れ烈熔猛火を以て成就す。特り紅蓮大紅蓮の獄所に至つて、專ら層氷を以て責むることは何ぞや。是を責むるに烈焰を以てせば、烈焰にして其れ足れらくのみ。是を責むるに嚴寒を以てせば、嚴寒にして其れ足れらくのみ。氷焰並べ用ゐて、寒熱大に隔てたる者にあらずや。曰く、惡因少しく殊にして惡果大に隔たる。八寒の獄所あり、八熱の獄所あり、其初め貪瞋の二泡を以て本とす。瞋は出息の象、其氣必

き市町の如くなる處を通りたるに、人多く立ちさはぎて、家毎にそれ〲の稼業を勵み勤むるよと見えて、如何にも騷々しき中に、罪人と思しき者を高手小手にいましめ、引立々々出で入るは、家毎に引も切らず、悲々と泣き叫ぶ聲の夥しく聞えければ、さし覗き見けるに、大きなる石盤の上に罪人を打伏しに取り推し伏せ、厚み二三尺もあるべき大石の板を其上に打ちのせ、獄卒ども多く打寄り、くゝと推しつくれば、流るゝ血、瀧の如し。又ある家には、五六尺ばかりの柱を間も無く立て列べて、罪人を盡く縛り付けて、鐵鋏をもて舌を拔出し、寸分々々と切取もあり。又或家には、大釜をあまた居ゑ並べ、熱鐵の湯玉も跳び散る計り沸きかへらせて、罪人を取りては投げ入れ、投げては取り入れ、散々に煮たゝらかすもあり。又二町も三町もあるべき大爐に炭火を夥しく煽ぎ立て、鐵の魚串に罪人を突き貫きて、打返し〲炙るもあり。或は罪人を刀爼にかけて切り刻むあり。臼にて擣くあり。天秤にかくるあり。又方百里もある

あの中には大名高家も大福長者と云はれし者も、富貴高位の出家なども多かり。何百年にも水一滴飲むことさへ叶はで、飢え渇へてのみあるに、剰さへ火の雨の時々ふりそゝぎて、遁げかくるべき處もなくて、わゝと泣き叫ぶあり。又古き木森の蔭のほのぐらき物凄き處に、古き牢獄の朽ちくさり、破れ傾ぶきたる中に、侍がましき者七八輩瘦せ哀へたるが、裃肩衣も破れ果てたるを引きかけ、苦しげに屈がまり居て、人かげを見ては物乞ふ風情にて、苧からの如くなる手さし出して、震へわなゝくあり。是は百年程以前に伊豆のさる處の役人なるよし。其邊りを見廻せば、木蔭に立ち並びたる牢獄は古きもあり、新らしきもありて、數限もなき中に、尊とく長々しき人の見なれぬ裝束し玉へるが、瘦せ衰へて苦しげに首打傾け、坐し眠り玉ふもあり。又虎ひげ生へ分れて、恐ろしき貌曲して屈がまり居たるもあり、麗はしき女中の貴とき裝束し玉へるもあり。又紫衣黃衣の貴とき出家なども多かり。又大きなる家居の立ち並びて、賑はし

るは罪人どもの責め惱やまされて、泣きさけぶ聲なり。尊貴高位も乞食非人も一所に追ひ籠められて、目もあてられぬ苦患を受く。中には見知りたる人々も間々之れ有り。又或る處には出家沙門なども夥しく集り居て苦患を受る處もあり。如何にや後世助からんとて、斯くなりたる人々の苦患は如何なる事にやと尋ねにたれば、さればとよ、無智にて少しも見性の智德なく、外持律の風情を現し、高蹈殊勝の僧形をかざりて、在家信心の男女を魔魅し、種々の供養を受け、或は不淨說法とて、勝他の爲めにし利用の爲めにして、妄に佛法を賤賣し、乃至惡智惡覺とて斷滅空の見解に誇り、破戒無慚の族は云ふに及ばずと敎へ玉ひき。又見かすむ計り廣き野原に餓鬼阿彌とかやいへる者なりとて、人の形にはあれども、黑く燼株の如くなる者の瘦せからびたるが、幾等ともなく苦しげに蹲まり居て、泣き悲しむあり。父母を孝養せず、乞食非人を憐れまず、慳貪の心深く、欲心のみ強くて、情もなく一生を送れる者どもの、なれの果なり。

得の衆生とす。去年の夏の頃なりき。むくつけき老女七八輩、予が室を叩いて告げて曰く、我々は是より十里計り北なる桂山といへる人里もつゞかぬ山里の賤の女どもに侍り、不思議の事にて是迄は尋ね詣でたるになるが、慈悲と思して、我等が耳にも入らんずる御法を一言なりとも示させ玉ひて、永き闇路を照らさせ玉ひてよ。且又是なる老女が娘にて候者の、去年の冬より重病に罹りて伏し沈み侍りにたるが、此五月半に次第に弱く疲れて、事切れ侍りにたるに、胸のあたりの少しく暖かに侍れば、野邊の送も墓々しくせざりけるに、斯くて十日程も過ぎ行きけるに、一夜思はずも蘇息し起き來りて、息もつきあへず打泣き〳〵物語しけるは、我は過し頃、怪しき人々に引立てられて、谷際の如くなる物すごき處を十里計も行くよと覺えて、堪へがたく苦しかりしに、地獄とかやいへる恐ろしき世界を彼方此方とへめぐりたるに、四面眞つくらにして、月日の光はなくて、無間焦熱の烈火の焰どゞともえ上がる其中に、わゝと聞ゆ

恐れ、惡來も眉を皺むる底の亂行惡作。さながら今時諸宗の法師原が彌陀の力にて後世は助かるべきぞ。法華經の德に依りて、來世は恐るゝ事はなきぞと言つて、在家塵俗の人々たるも恐れて作し得ざる底の、目に餘りたる惡行を行じて、袈裟をかけながら、阿鼻焦熱の焰に咽ぶ輩に少しも違はず。地獄に入らざれば必ず魔道に墮つ。小智は菩提の妨げと、此等の輩を云へり。寔に恐るべし、彼一旦の得悟はなきにしあらざれども、所謂初心の見道は、さながら閃電の拂ふが如くなる者にして、悟後の修行を假らざる時は、從前の舊習々氣、依然として盡くすことを得ず。此を了事の凡夫といふ。此重痾を救はん爲めに、調御且らく下化衆生の方便を設けて、無緣の大慈を起し、一切衆生と共に種智を圓にせしむ。是を菩薩の威儀といふ。淨名經に云く、方便なきの慧は、目ありて足なきが如し。慧なきの方便は、足ありて目なきが如し。此等の故實に達せず、妄に暫時の了解を恃んで佛像を塊看し、聖教を泥視す。此を未證謂證、未得爲

らん百年は恨むべきの百年なりと申置かれ侍り。行持とは何をか言ふや。上求菩提下化衆生の方便なるべし。或人の曰く、三塗の苦域を遁れ、六趣の輪轉を免れんとならば　見性得悟の一路に超えたる事はあるべからず。千辛を經盡くし萬苦を甞め盡くして、六塵を忌み嫌はず、動靜を擇らびすてず、果して正念相續し疑團凝結して、忽然として一旦破家散宅の所望を遂ぐる則は、三千世界海中の漚、一切の賢聖電拂の如し。天地一指、萬物一馬、度すべき衆生なければ、說くべき一法なし。此故に華嚴に曰く、淨極の光り通達して、寂照虛空を含む。却り來つて世間を觀ずれば、猶ほ夢中の事の如しと。已に是れ夢中、何の上求菩提とか說き、何の下化衆生とか論ぜんと。予が曰く、嗟々子來り進め。古來は恁麼の所見の族を惡種空の輩との給ふ。往々に此の一旦の小智を得るときんば、自ら謂へらく、佛道の堂奥を極め、禪海の源底を盡し、天堂の羨むべきなければ、地獄の恐るべきなしといつて、飲酒肉食、婬房酒肆、飛廉も驚き

きと呟きながら立出でけるを、八歲になりける女子抱きすがりて泣き留めければ、緣より下に突き落し、世をすつるすつる我身はすつるかは捨てぬ人をぞすつるとは見ると咏じて、泣く〳〵走り出でけるが、東は奥州出羽の果て、西は筑紫博多の浦までも、殘る隈なく行ひすまし、今の世までも目出度遁世の聖なりけるとて、木に刻み繪にかゝるゝ計り貴とまる。これなん北面の武士佐藤憲淸にて、後に西行と呼びなせる法師なり。此等の人々も目にもかへじ、命にもかへじといとをしく昵まじかりし妻子眷屬を芥の如く見捨て、出家遁世し玉ひける時は、油をもて煮られ、牛もて裂かるゝも、物の數かは。如何計り堪へ難く苦しくおはしつらんなれども、六趣の巷にさまよひ、三塗の底に泣き苦しまんことの淺猿しく恐ろしく、斯くは計らひ玉ひしならむ。此等の人々の佛道の爲めに受け盡くし玉ひたる一日の艱辛刻苦は、今の人の百日千日の勤も屆くべきことかは。永平の開祖も行持あらん一日は貴とぶべきの一日なり。行持なか

の友則が許に來りて、救を請はれけるよし。唐の武宗の如きは、富四海の内を保ち、貴とき事、天下の人主たれども、冥土黃泉の巷に在りては、鐵梁の責を受く。秦の莊襄王の如きは、位萬乘の尊貴を踏み、雄威八蠻の夷狄の邦まで恐れ隨ひたりけれども、死して三塗の底に墮して、果てしもなき苦患を受け、千歲の後、嵩岳の玄圭禪師の許に來りて、悲泣して救を請ふ。其臣白起は梟勇、廉來も恐れ屈み、籌略、孫吳も畏ぢ戰のく程にて、當る處破らずといふことなく、觸るゝ處碎かずといふことなかりしかども、死して糞泥地獄の底に沈みて、永劫出離することを得ず。梶原平三景時が如きは、右大將家の權柄を掌にして、威武、鎌倉の大小名を刼かしたりけれども、閻王の使に縛られ、死して餓鬼趣の中に墮して、飢渴の苦惱に堪へ兼ね、二百年の後七月、水陸會の齋後、白馬に駕し來りて、建長の勝藍に入りて施食を乞ふ。恐れても懼るべきは、阿鼻焦熱の受苦、厭ひても厭ふべきは穢惡充滿の娑婆なり。何つの別れか嬉しかるべ

し、高野の山に入りて行ひすましき。四の黨の旗頭熊谷の庄司次郎直實と云ひし武士は、人々にも恐れられたる無雙の勇士なりけるが、一の谷の合戰に源平の目を驚かす働して、敵味方の膽を冷やし、拔群の軍功を顯はしたりけれども、敦盛の最後を忘れかね、阿育が七寶も壽命を買ふ事なく、須達が十德も無常を免かるゝこと能はずと言つて、黑谷に入り入道して蓮生坊と名乘り、目出度く行ひおほせたり。有爲轉變の火宅の巷に、夢幻空華の身を宿して、本の露、末の雫にも劣りながら、萬戶の富も何にかせん。天下の三聖人と稱せられさせ玉ひたりし延喜天曆の君だも、焦熱の煙に咽ばせ玉ひ、いふならく奈落の底に沈みては刹利も須陀もかはらざりけりと咏じ玉ひて、袞龍の錦の御袂をしぼらせ玉ひたるを、簫が岩屋の日藏上人は目のあたり拜し上りぬ。敏行朝臣は詩歌の達者にして、而も手迹うるはしくおはして、法華經四百部まで書寫し玉ひたれども、道心うすくおはしけるにや、惡趣に墮し玉ひて、其苦患に堪へかね、紀

かく言へばとて、菩提を求めん人々は、誰々もみな夜半になく〳〵走り出で玉へ、丸裸になつて豆腐箱提げ玉へといふにはあらず。總じて參玄の上士は、大丈夫の氣象ありて、勇猛精進活達脫洒の氣概なくては、骨に付き皮に粘して、一生妄想の魔網を破ること能はず。去る程に慧春（理庵カ）比丘尼も次第に見地明白にして、拔隊も亦無き者に思ぼしける。萬里小路藤房卿の如きは、和漢の才優かに、王佐の德兼ね備はらせ玉ひ、後醍醐帝の左右に仕へて、並びも無き寵臣なりしが、世の無常を觀じ玉ひ、闍王豈に金魚を佩びものにする事を恐れんやと、呟きながら御髻を切りすて、忍び出で玉ひ、行き方知れさせ玉はざりけるが、果して生死の命根を踏斷して、息耕五世の正燈を挑げ、授翁の宗弼禪師と稱せられ玉ふ。菊萱重氏は、筑後筑前肥前肥後大隅薩摩六ケ國の大將なりけるが、櫻の花の散りて盃に入りたるを見て、夢幻空華の理を觀じ、愛別離苦をも悟り了りて却て愛し、怨憎會苦をも悟り了りて却て憎むと獨言して、妻子をすて入道

るに、火箸を燒き赤めて、御顏に推し當てさせられける時、血煙のくわつと上りけるに、面てをば恨みてぞやく鹽の山あまの煙りと人やいふらんと詠じ玉ひ、動もすれば名聞くるしき心ざし起りて、胸中を攪き濁すこと多し。かくては中中法理に相叶ふ事は及びもなき事なるべしとて、寸絲かけず丸裸になりて、豆腐箱ひつさげ、油樽打ちかたげて、如何にも人立ち多かる市町を、無人の曠野を行く顏ばせにて、幾度も行き通ひ玉ひける由。謂つべし、佛法中の大勇參學の精神なりと。今の人々の人情の、阿師老婆のやからの教に隨ひ、名聞利養の中に在りて、新婦子の禪を學びて、妄念を盡くさん無心にならんと、如何にも殊勝に愛らしき顏曲して、寂靜の處を擇んで狸の虛睡りして、寒灰枯木の如くならんとす。二乘敗種の灰心泯智の修行なり。氣力次第に衰へ疲れて、苟且の塵事にも胸塞り肌汗し、人の高聲すと聞きても、股戰き膽震ふ。かくては中々下化衆生の作用は存じもよらず。上求菩提の望を遂げんとは及びもなき事なり。

へて忘れても人にばし語りぞと宣ひければ、病者もぢ〳〵と這起きて、皇后の御顏をつく〴〵と打目守りて、光明子よ、相構へて忘れても、阿閦佛の血膿を吸出しにきと人にばし語り玉ひぞと、云ひも敢へず、阿閦如來紫磨黃金の肌、赫爍として大光明を放ち、異香室內に薰じわたり、雲霧などの如く、次第に消え失せ玉ひければ、皇后も人々も、涕淚悲泣して禮拜恭敬し玉ひけるとぞ。濃州廣見の如大和尙と申上るは、貴とき公卿の姬君なりけるが、後世助からんとて、賤の女に御身を窶させ玉ひ、さる尼公に仕へ玉ひ、水を汲ませ玉ふ時、桶の底の脫却せるを見させ玉ひ、自家の桶底も亦脫却して、飽くまで御得力の强くおはしけるにや、其後渡唐し玉ひけるに、唐の天子も甚だ尊信し玉ひけるとぞ。鹽山の慧春（理庵カ）比丘尼と申奉るは、貴とき高家の息女なるが、拔隊和尙の法幢の高きを聞き及ばせ玉ひ、遂に甲陽に忍び行かせ玉ひ、剃度を請はせられけるに、御容の並びもなくあでやかに麗はしくおはしければ、出家の許容なかりけ

人の全身うみ潰えたるが、杖にすがりて、呻き〳〵よろほひ來るなりけり。人人うるさがりて、一人も殘らず遁げ散りたりけるに、彼の病者會釋もなく、湯槽の內に這入り、且らく在りて、皺枯れたる聲にて、垢かき給ひてんや、斯く淺ましき異例のものをば忌み嫌はせ玉ふことにやと、高々とわめきければ、皇后頓がて出で向はせ玉ひ、無遮の大施なるものを、如何にや爾とて忌み嫌ふことのあるべきと、此こ彼しこ、阿もなく搔き洗はせ玉ひけるに、全身腫れ爛れて、膿血の流れ出ること、ひきも切らず。病者の曰く、膿の痞へたまりて、堪へ難く痛み侍るに、處々吸ひ出したびてんやと。易き間の事なるぞとて、彼の臭氣の骨に透り肝に銘じて堪へ難き臭穢を忍び堪らへて、殘らず吸ひ出ださせ玉ふ。難行とや云ふべき苦行とや申すべき。今の後世者達の其儘が好きぞ、立ちの儘木地の儘が好きぞとて、そら睡りする人々の及ぶべきことかは。斯くて皇后の仰せに、如何にかたゐよ、光明子が癩瘡の膿血を吸ひ出しにきと、相構

山に入り玉ひてより、堪へ難き艱苦を歷玉ひ、貧窮無福の身なれば、盜賊の恐も無し。山中燈火なければ、眞如の月を燈火とす。迷ふ則は十萬億土、悟る則は去此不遠と口ずさみ玉ふ。眞如大德と申上るは、親王にておはしゝが、自ら御飾を下ろさせ玉ひ、御求法の爲めにとて渡唐せさせ玉ひしも、唐土には御心に叶ひたる知識なしとて、渡天遊ばされ、流沙といへる處にて身罷らせ玉ひけるよし。光明皇后と申上るは、聖武帝の御后にて、大智慧德相並び備はらせ玉ひけるが、菩薩の大行を思ひ立たせ玉ひ、無遮の施浴を行ひ、尊卑を擇ばず、老幼を分たず、千人の垢を搔きて、三寶に供養し奉らんとて、高廣嚴麗の浴室を構え、水に薪に御手を下ろさせ玉ひ、湯女の妾に御身をやつし、脛高くかゝげ、玉の襷甲斐々々しく、少しも撓ませ玉ふ御氣色もなく、毎日何十人宛の垢をかゝせ玉ひけるに、既に千人に滿たんとせし時、室內俄に腥さき風吹來りて、何となく穢らはしく惡しき臭しける程に、人々如何やと怪しみ見る處に、癩病

上の事まで賢くをさ〳〵しく渡らせ玉ふ御事よとて、御衣の袖をしぼらせ玉ひしとか。寔に千載の美談といふべし。昔悉達太子は、五印度の主じ、淨飯大王の御子にておはしけれども、深く世の無常を恐れさせ玉ひ、十九歳にて耶輸多羅倶夷女等の美夫人達を見捨てさせ玉ひ、夜半に王宮を忍び出で、仙人の奴とならせ玉ひ、あらぬさまなる艱辛を歴させ玉ひもし、皆是れ生死旋火の苦輪を恐れさせ玉ふ故ならずや。華山の法皇の如きは、無常の殺鬼は、萬乘の君をし恐れ奉らぬ事を、かねて知ろしめされけるにや、十善帝位をふりすてさせ玉ひ、勿體なくも玉體を乞食法師の身にやつさせ玉ひ、那智熊野などいへる恐ろしき山路を、召しも習はぬ御草鞋に御足は切れ損じ、染めぬ草木も無かりけりなど、今の世までも語り傳ふ。中將姫の如きは、殿上にも殿下にも比類もなく麗はしき御よそほひおはしければ、天子の中宮に進め立てまつらんとて、崇め貴ばれ玉ひしも、玉簾の中も火宅の外ならずと、泣く〳〵夜半に忍び出で玉ひ、雲雀

に封ぜられ玉ひたりとも、御心に充ち足らせ玉ふ事はおはすまじきぞかし。現なる假の火宅の宿りなれば、純素を貴とび枯淡を樂しみ、萬事輕く數ならずげに渡らせ玉ひたりとも、普天の下王土にあらずといふことなく、率土の濱王臣にあらずといふことなしと申し侍るからは、竹の園生の末葉なるものを、誰かさげみし慢り侍るべきや。況して世の中を思ひ絶ちたる出家遁世の人などの、時を得顏に似合ぬ綾羅絹布を賢しこげに引きそろへて着かざりたるは、戒律にもはづれ、罪深く淺ましき有樣に見ゆれど、我も人も名利の風には吹き敷かれ易く、口惜しく愧がましき風情に侍り。書寫の上人も、道念濃厚なれば、世念輕微なり。世念濃厚なれば、道念輕微なりと申し置かれしものを。誰々が身の上も、世念の濃厚に道念の輕微なるこそ、返へすぐ〵もうたてく侍れと、漏る方も無き御物語に、高野の御室も感じ入らせ玉ひ、三教の理に暗らからせ玉はで、漢和の才優かに渡らせ玉ふを、常に御羨ましく覺え上りにたるに、斯る世

更所領も薄く侍るからに、心に任かせたる覺えは少しも侍らで、思出もなき月日をばすご〱とのみ明かし暮らし侍りと語り了らせ玉ひて、御目の中うるうるとかき曇りけるを見させ玉ひて、諸共に打ち悄れさせ玉ひけるが、京の御室の御仰せに、つく〲と思ひやり侍るに、多くの人々は皆盡くすき好みてこそ、乏しき目にも事足らぬ目にも逢はせ玉ふことかと覺え侍り。高野の御室の仰せに、此は御仰せとも覺えぬ事をうけ玉はる者哉、人心地あらんもの、誰れとて人の事足らぬを數寄好む者の侍るべきや。さればとよ、世上の有樣を見聞侍るに、乏しきをすき好むにはあらねど、己が分を知れる人こそ見え侍らね。五人召し伴れてすむべき人をも、十人も召連れ、五人召し使ひてすむべき從者をも十人も召し抱へ、五尺にてすむべき事を、一丈にも取りはだて、徒歩にてもすむべき假初の物詣でにも、輿よ車よなどどよめきわたり、家居に付けても調度に付けても美麗を好み、負けじ劣らじと人並〱にのゝめかせ玉はゞ、萬戸侯

禪定、次第に想念も盡き果て、いつしか動靜不二、明暗雙々底の大事に契はせ玉ひ、自然に智鑑高明識見寛大にして、彼の臨濟の所謂、一切處心異ならざる是を活祖と名付くる等の境界は、求めざるに現前して、心身健康、生鐵鑄成す底の天下の蔭凉樹ともならせ玉はゞ、人間天上の善果も之に過ぎたる事は侍るべからず。返へす〳〵も修行者は、修行成熟せざらん限は、尋常枯淡を甘なひ、純素の樂、一點驕奢の心を交へず、毫釐も勝他の心を容れず。若し夫れ佛國土の因緣、菩薩の威儀のためにならば、縱令ひ天下の大叢林を坐斷し、三萬二千の大衆ありて、梵釋並び列りたりしも、少しも屈せず、不朽の大願輪に鞭うち、無遮の大法會を展開し、塵沙劫を歷盡して曾て退轉せず、恒沙の衆生を利益して終に疲倦せず。之を眞正佛子といふ。昔京の御室と高野の御室と御連枝にてわたらせ玉ひけるが、或時入洛せさせ玉ひ、京の御室に入御ならせまし、來し方行末の盡きぬ御物語に、扨ても片田舍の住居は、萬事足らぬ事のみ多く、殊

は其あはひにも御門の外までも御掃らひなされ、世間は兎もあれ角もあれ、毎日動き働き、大義に閙しきのが、淨藏院內一流の不斷坐禪なるぞと、規矩を御定めなされ、精彩を着けさせ玉はゞ、作務普請のうへ取りも直さず、自然に七炷八炷の坐禪に少しも違ひなき御覺えは、我知らず現前致すべく侍り。是れ古人眞正修錬の體裁にして、近代は廢れ果てたる芳躅に侍り。作務掃地等且らく御勤め、晝休みの間は、厚く坐物を布き、玉案上に官香一縷を挾み、皆々を召し集め、圍み坐せしめ、扨此の文を高らかに御讀聞かせなされ、其間は正念工夫相續間斷ありやなしや、又聽受の人ありやなしやを一向に管せさせ玉はず、只是れ下化衆生の手習ひ、上求菩提の稽古なるぞと思して、初の中は讀み惡くきものに侍れど、ひたよみに讀み慣れさせ玉ふ程、次第に御調子も高く、外より見聞き侍りても、堪へがたく貴とく相聞えて、上もなき法喜禪悅の樂、如何なる佛事作善にも增さり、如何なる無遮の法施にも勝り、直に是れ好個一流の大

人死すと。信なる哉、豈夫れ徒に坐を以て坐とし、靜を以て靜とする者ならんや。古人は動用を以て靜とし、四威儀を以て坐とす。近來さる老宿の許へ人來りて、法語又は墨跡など請ひ求むる者あれば、樂は苦の種、苦は樂の種といへる六語を書して與へられける由。其語鄙俗に似たりといへども、當代の學者の爲めには、相應の靈劑なるべし。掃地勤行は、叢林の舊規なるものを。斯く計りの叢林に歷々の尼僧達はおはしながら、掃地は下郎奴僕にのみ任かせ置かせ玉はんは、舊規にもはづれ、德行にも違はせ玉はんか。昔の雲井の御住居にて涉らせ玉はゞ、申上ぐる筋なく、恐れ入りたる事に侍れど、今更出家遁世の御身として、叢林に入らせ玉ひ、淨藏院裡の御丈室にてわたらせ玉へば、古人住職の古風を慕はせ玉ひ、動搖作務の定力を學ばせ玉ひ、身心も健康に長壽を保たせ玉はん御養生の爲めにならば苦しからず。もし相なるべき事に侍らば、願くば簾下を始め奉り、其外の尼僧達も、外帚一本づゝめしつかせ玉ひ、六齋又

隨近侍の諸君までも、朝暮隨逐、進退揖讓の上に於て、片時も怠惰なく、正念工夫、相續第一の行持なるぞと、勇猛の大信根を推立てもて勵み勤めさせ玉ふべし。最も修行者の恐れ愼しむべき禪病にて、束の間も物靜かなる處が心の底にも澄み渡りて、面白き境界ぞと樂しみに思ぼす了簡さし起らば、是は修行者の爲めには禪病に耽着すとて、夥しき障碍の魔境なるぞと、早く抛擲着して、毎日一と砌りづゝ、しば〳〵と汗の出る程御動きなさるが、殊の外なる養生にて、拔群定力を扶け增し、身心堅固の方便にて侍り。地下の者の渡世の爲め、毎日手足を痛め苦しむる輩に、頭痛疝氣、勞咳つかへなど云へる病氣持ちたる者は更々なき事に侍り。古へ孔門三千子の第一德行には、顏淵、閔子騫と許可せられ玉ひにたりき。顏子などの十九にして髮白く、三十にして早世せられけるも、陋巷の室に在りて、坐亡なりとて日々枯坐して氣竭き體勞れたるなるべし。醫家には所謂氣は民の如し。民衰ふるときんば國亡び、氣盡くるときんば

を恐れ愼しみ玉ひき。古へ巖頭、雪峰、欽山三人、伴を結びて湘西より江南の方へ行脚せられけるに、溪水を渉りける時、菜葉の流れ通るを見て、欽山曰く、此奥に遁世住庵の人ありと覺ゆるぞ、尋ね訪はんと。巖頭目を瞋らして曰く、儞の智眼大に濁れり。他日如何か人を辨ぜん。彼れ德を惜しまず、住庵して何の用をか成さんと。果して老僧の裳を蹇げて、彼の菜葉を追ひ來るありけりと。古人德を愼み玉ふ事斯くの如し。さる程に、百丈大師だにも、一日作さゞれば一日食せずと、勵み勉めさせ玉ひしものを。末代の出家などの他人の艱辛して織り紡ぎたる衣服を惜しげもなく着重さね、他人の刻苦して種ゑ耕したる米穀を會釋も無く食ひ膨れて、蒙昧昏愚さながら病馬の立ちすくみたる底にて、辨道工夫なりとて、徒に日々そら眠りして、在家信心の男女に仰ぎ貴とばれんず。勿體なく空恐ろしき浮世の慣らはせに侍り。後の世の事どもは如何か覺悟しけるやらんと、努々油斷せさせ玉ふべからず。特り簾下のみに限らせ玉はず、常

かし。又た之をついでに世上の人々の菩提心の根ざしにもなれかしと、心に浮ぶ事ども書付け參らせたるに侍り。迚も捨て果てさせ玉ふ出家遁世の御身に渡らせ玉へば、夏冬の御裝束につけても、朝な夕なの供御等につけても、萬事輕く、假令ひ八珍を御前にさゝげて陳らねたりとも、其中御心に叶はせ玉ふ一品をのみ取上げさせ玉ひ、願くば麻の御衣に綿布の御小袖にて、萬事質素に取り行はせ玉ひ、宿世の善果をも取り失はせ玉はず、來生菩提の資糧とも殘し貯へさせ玉へかしと祈る計りに侍り。御給仕の人々の一度の御膳に、五人六人宛立ち騷がせ玉ふも、いと騷々しく、凡下の人の目には如何にも時めきわたりて、いみじく目出度き事に思はんめれど、佛の御教には更に叶はせ玉ふ間敷かと恐れ入り侍り。願くば每日代る〴〵一人づゝに定め置かれ玉ひ、殘りの四人には誦經書寫、禮拜恭敬等の善事を勸めさせ玉はゞ、菩薩の威儀にも叶はせ玉ひ、下化衆生の御營みとも申さるべく侍れ。古人は往々に德を失ひ冥利を損する事

きだに、殺生を好む人は、子孫必ず斷え果つる習なりと双紙の記する處、現前の見聞く處、少しも違なきものを、多くの物の命を取りて自らも命永く、子孫も命長からんとは、西へ行く人の東へ向つて歩むが如し。義家の卿は、武運を養ふ勇士は物の命を妄りに取らぬ者なるぞとて、尋常虫螻迄もむざとは殺し給はざりける由。さる程に武運も强くおはしけるにや、目に餘りたる奥州の朝敵を安々と征伐せさせ玉ひ、至尊の宸襟を安め奉り、美名を今の世に播し、古今無雙の名將と稱せられ玉ふ。當代も宿世の善因を忘れ果て玉はず、仁徳あつくおはして、一身の驕奢を省き、四民の艱難を顧み、衆庶を憐み、鰥寡を悲み、後の世の御營みも淺からぬ國主も間々有之由。盡きせぬさきの世の善薫力なるべし。國脉の健康、枝葉の繁榮までも推し量られて貴くこそ覺え侍れ。此等の趣は、出家遁世の御身に詮なき事に思ぼさんも如何はしけれども、法門無量誓願學と申す事の侍れば、彼方此方と考へ合はさせ玉ひ、道情をも助け增し奉れ

ても、水牢に入れても、皆濟せざれば、いつまでも御免はなきぞと叫び立つれば、伏し沈むより外は爲ん方こそ無けれ。其後の苦患は筆も及ぶべきことかは。前生多少の艱難を窮め盡くして、萬善を行じ菩提を求めて、其功勳に依つて、今生は富貴自在の身に生れて、過去の善業は、露に埃に忘れ果て、美女を貯へ雅樂を張り、一身の驕奢を窮めて、多少の人を泣き苦しましむ。來生三塗の受苦身を置く處なけん。又有底は鹿狩鷹狩と稱して、朝夕農業に寸暇も得ざる細民を驅り催し、武士何十騎、步卒何千個、貝鐘を鳴らし火砲を飛ばして、山岳も崩るゝ計り、草木を分けて、喚き叫んで驅り立つる程に、麋鹿猿猪、狐兎狸狢、命限りに遁げ迷ふ底、さながら叫喚聚合、阿鼻泥梨の有様もかくこそ思ひやらるゝ計り。恐ろしき苦患を喜び勇むは、如何なる心ぞや。其身計りの罪業かは。多くの人々にも思ひもよらざる殺業を被らせ、諸共に惡趣に落入る事、皆是れ來世ある事を知らず、淺ましき無智愚蒙の族の樂みとする處なり。左な

寢ぬる時は、許多の婢妾を前後に隨へ、食する時は、多少の物命を左右に列らね、上もなき奢を極めもて行く故に、次第に萬事足らぬ風情になりて、民を貪り收斂を恣まにし、初春より耕し早苗し、一子の如く守りそだてたる稼苗の風に破られ、水に傷はれて、田面は宛ながら荒野が原になりて、五町尋ねても三町探しても、稻粒一粒をだに得ざれば、妻子の顏を打守りて、最早事窮りたるぞ。有るべき儘に刈り得てだに暮らし難き月日を、何を力に儞等が命をつなぐべきぞ。果は飢え渴えて、諸共に道路に倒れ死するより外は、せん方こそなけれと、妻子と共に泣き苦しむ處へ、黑吏の輩六七人、惡虎の目を張り、毒狼の牙を鳴らして叫んで曰く、御上よりの仰せなるぞ。田はあれても、稻粒はくさりても、賦稅は一粒も容赦は叶はぬ事なるぞ。家財を賣りても、犁鋤を代なしても、喉をしめても、眼を抉りても、泣いても笑つても、妻子を質に入れても、殘らず上納せよ。さもなき時は、手枷を打つても首枷をはめても、木馬に騎せ

然蘇息、見道得力の當位を來迎といふ。前後際斷、疑團打破の端的を往生といふ。此外別に佛を求めば、木に就いて魚を求るが如し。專唱稱名、淨業不退の人々も、唱へ〳〵て一心不亂の曉に到りて、初て決定往生の安堵は究め得ることに侍り。蓮如上人の平生往生、不來迎の往生と書かれたるも、此中を出でず。此故に知る、今生の尊貴高位、富貴自在の人々は、盡く是れ前生の難行苦修、信心堅固の後世者なることを。三塗に沈む族より遙に勝るに似たりといへども、富貴に誇り尊貴を恃んで、あらぬ樣なる惡業を重ねて、來生は必ず惡種に墮す。熟々顧ふに、見性の眼なうして、妄に成佛を勸め玉ふ人々は、畢竟三塗の媒なるべし。癡福は三世の寃とは、不易の金言ならずや。縱ひ一旦見性得悟の力ありとも、四弘の行願に依らずんば、菩薩の威儀にもはづれ、特覺小果の深坑に沈んで、法成就には到り難かるべし。昔より世人の口碑に、南山の道宣律師は、鎌倉の將軍實朝の卿に生れ、讚州の太守元英公は、法然上人の後身、尾州の太

成佛を求むる底の人々、多くは長者居士、宰官婆羅門、大名高家等の富貴自在の家に生れて、成佛を遂ぐる等の望は多くは打ちはづす事なり。何が故ぞ、夫れ成佛作祖底の大事は、疑團打破、開佛智見の一刹那にあり。見性悟道せずして成佛を遂ぐる事は、馬蛭の口に白象牙を生じ、石女の腹より黒牸牛を產し、鵜鶘口を張りて、嘉州の大像を含み去り、蚊虻觜を鳴らして陜夫の鐵牛を啄破したりとも、成佛は存じも寄らざるものなり。大覺調御の如きは、娑婆往來八千度を經させ玉ひにたれども、流轉生死の衆生に少しもたがはせ玉はず、末後雪山に入りて開佛智見を得させ玉ひてこそ、初て正覺を唱へさせ玉ひしなれ。此故に達磨大師曰く、若し人佛道を成ぜんと欲せば、先づ須らく見性すべしと。見性の眼なく、四弘の願行に依らずんば、縱令六度萬行あらゆる善事を行じたりとも、人間にては福德尊貴、大名高家の家に生れ、天上にては、四王忉利、夜摩他化等の天に生ずるより外、生すべきの淨土なく、成ずべきの佛なし。忽

處に立つが如し。百騎を放ちて千騎に對すといへども、惡虎の跛兎を打つが如し。天下を泰山の安きに置く。全身一片の眞元氣、肚裡十分の忠膽義膓、機に應じ節に當りて、能く仁に、能く義に、能く禮に、能く信なり。而して後に菩薩の威儀を學び、佛國土の因緣を成就す。之れ古人參學の樣子なり。熟々流轉常沒の衆生、死彼生此の有樣を觀ずるに、鎭なへに無間焦熱の惡趣に墮し、餓鬼飢饉の難處に沈み、畜生無智の暗區に迷ひ、修羅刀杖の苦患を受け、紅蓮の池あり、劍樹の山あり、黑繩衆合、叫喚大叫喚の巷に往來して、際限もなき苦患を受け、骨磨肉抹の災厄に罹りて、偶々人界に出頭するも、貧窮下賤の家に生れ、豺狼牛豕の心を恣にし、放逸無慚懲りも無く再び三途の舊里に歸り、或は善知識の敎化に隨ひ、或は善友の誘引に依りて、來生あることを信じ、如何なる淨土にか生じ、如何なる佛にかならんと、持戒し、持齋し、六時行道し、長坐不臥し、誦經し、諷咒し、難行し、苦行し、身臂指を錬り、多拜し多禮し、

して、四面眞暗にして、黑漆桶裏に入るが如し。電光は潮の打ちかくるが如く、迅雷は天の崩れ落つるに似たり。時に牛鬼の如き者出で來り、怒りうめきて、叔を攫みて行く。伴侶皆倒れ、生氣を失して立つことを得ず。人見て謂へらく、盡く皆死せりと。且らくありて雷止み天晴れて後、普く叔が所在を求るに得ず。堤上空しく只だ一臂を落すを見ると。寔に恐るべし、見道の聖者却て妻子を帶ぶとは、此等の部類をいへり。大圓國師の年譜幷に正三の法語及び鄕黨父老の口碑にのす。古へ慈明、眞淨、息耕、妙喜の諸老齒を切りて抵擺し、拳を握りて擯斥すといへども、本根を盡すこと能はず、當時、禪學に心を盡くしゝ士大夫は、打頭に傑烈勇猛の憤志を震つて、無明の暗窟を劈破し、生死の業根を踏斷して、正しく一回拋身捨命し了りて、再び慈明、眞淨等の惡毒の爐鞴に入り、參天の荊棘を拔却し、禪海の波瀾を併呑し、大用大機、活達脫洒、生死の恐るべきなければ、涅槃の求むべきなし。百萬亂軍の場に入るといへども、人なき

枯坐默照し、工は斧斤を抛ちて枯坐默照せば、家衰へ民悴けて、國夫れ危ふからん乎。人將た言はん、士卒の鋭氣を折しき、國家の武威を弱はます、禪は果して不祥の大兆なりと。然らば則ち佛道の光輝を味まし、禪門の樞要を破するものは、贋緇の輩に越えたるはなし。夫れ金を僞り作る者は、其罪、三族を赤うす、禪を僞り説く者は、其罪誰にか歸せんや。

承應の頃ほひ、美濃の國蜂屋といへる處に、文叔長老といふ者あり。一旦の悟解了智を恃んで、乍ち斷無の惡見を生じて、大に人家を敎壞し、天堂なく地獄なく、生死なく涅槃なしと稱して、因果を撥無し、佛像を輕賤し、經卷を破壞し、神社を沒倒し、墳墓を發き、五常も亦亂る。時に蜂屋悟りと稱して、人皆恐ぢ畏る。明曆丙申の夏、其近隣三四個の村里、疫癘大に入る。叔が說を信じ、叔が教を受くるもの、盡く疫鬼の爲めに獲らる。文叔大に恐れて、遁げて武陵に行かんとす。伴緇七八輩を率して、雷雨を衝いて行く。路、太田の渡に近く

を守護し、天下の民を安んずるの美器、誓つて王佐の才を抽んで、君を堯舜の君にし、民を堯舜の民にせんとす。安からざる大任なり。然るを後世助からんとて、輕々しく相似の禪徒に魔魅せられて、此に潜み、彼しこにかくれて、辨道工夫なりとて、徒だに日々屈まり眠りて、魂不散底の死人の如し。若夫れ天下の大事あらんに、何の氣力ありてか、一支へもさゝふることを得んや。火砲は潮の如く打ちかけ、凱歌は雷霆の群り落つるが如くならん時、具足打ちかくることは、存じもよらず、弓矢とる事さへ叶はで、日頃親しく睦じかりし君臣、父子の人々は、湯とならんも水とならんも、顧ることも打ち忘れて、はだせなる馬に這ひ乘り、當て處もなく遁げ走りて、命ばかりを生きんとす。千日養はれて、一朝の急を守るは、武士の習ひなるものを。一朝の專途をはづして、幾重の面皮ありてか、他時後日、親戚朋友の前に顏さし出だすことを得んや。是れ皆日頃の枯坐默照のなす處なり。士大夫の人々に限らず、農は犁鋤を抛ちて

暗小果の深坑に陷墜し、湛寂死水の空溝に沈溺して、自ら得たりとし、自ら足れりとす。殊に知らず、祖庭は遙に天涯を隔つることを。夢にも曾て法窟の爪牙あることを知らんや。此の寂滅の惡處に墮すれば、上下も亦た寂滅無相、四維も亦た寂滅無相、此等の輩を見泥地獄の衆生と言ふ。蚯蚓の深泥の底に潜伏して、一塵も亦た見ること得ず。首も亦動かすこと得ざるが如し。昔し鴦窟摩羅、舍利弗を指して呵して曰く、儞が智慧は蚯蚓の如しと。夫れ是れ之を特覺自了、小果の辟支佛とす。寔に恐るべきの重癖なり。韶陽老人、一生、人の爲めに拔却する底の釘楔なり。其本根を拔かんと欲せば、須らく難透難解、難信難入底の話頭に參して、見泥を洗滌すべし。見地透脫せざるときは、終に恐怖の心疾を發す。話頭とは何をか言ふや。南泉遷化の話、疎山壽塔の因緣、乾峰三種の病、五祖牛窓欞、鹽官犀牛の扇子、翠岩夏末の示衆等是なり。中に就いて士太夫の人々は、農工商の輩とは大に異なり。尋常精銳の神機を養ひ、王位

千里を遠しとせず、叢社の内に入りて頭を聚め眉を結ぶ事は、大事因緣を了畢し、荆棘林を透過し、臂に奪命の神符をかけ、大に人を利して以て佛恩を報ぜんとす、彼も亦た人の子なり。豈に彼の師長父母、軀命を損ぜんが爲めに、儞を放ちて行脚せしめんや。或は又一般あり、種姓聰利にして鹿苑草舍の所說をとらず、相似涅槃の敎を受けず、或は自己に就いて參譯し、佛祖の語話を疑着し、或は飛華落葉を觀じて、忽然として漆桶を打破り了りて、大に歡喜し、大に踊躍し、佛祖を併吞し、諸方を罵詈し、燈籠跳りて露柱に入り、佛殿走つて山門を出づ。人は橋上より過ぐれば、橋は流れて水は流れず、何んの難き事か之あらん。華嚴の四種の法界、法華の唯有一乘、今掌上を見るが如し。其餘の傳燈千七百箇の秘訣、一揑を消ずるに足らず、大安樂大解脫、度すべき衆生なければ度せらるる衆生なし。生死涅槃猶如昨夢、何をか捨て何をか求めんと、徒だに日々高談濶論、永く菩提の資糧を失し、永く涅槃の正因を破し、覺えず黑

く、はては扁倉も亦た眉を皺め、華陀も手を下すこと能はざる底の必死難治の重症とならむ。悲しむべし、佛道を成就すること能はざるのみにあらず、世路も亦廢す。偏へに是れ見もせぬ見性の法理を見たりげに說きちらし、得もせぬ佛法の奥義を得たりげに敎へだてする底の無眼の知識の敎化に依れり。此等の輩を見て、志を退く底往々に之れ有り。佛法人を得ざる事、亦た宜ならずや。此に於て眞風土を拂つて盡き、禪苑根に透つてすたる。悉く是れ最初眞正の導師に見えず、諸方婆禪の咜唾を舐りて、賴耶業識の暗窟を認め得て、禪道佛法なりと强爲し、賊を認めて子となす底の相似の禪徒のなれの果なり。古へ石霜の諸禪師のごときは、常に參徒に垂語して曰く、一念萬年にして去れ。一條白練にし去れ。古廟裡の香爐にし去れと。終に千衆と枯坐して、千僧の墳廟を列らぬ。寔に惜しむべし。夫れ良禽は樹を擇んで栖み、貞臣は主を擇んで扶く。衲子も亦た須らく行脚の眼を具し、明師を擇んで始めて得べし。大凡參玄の士は、

坐し、ひた睡りに眠りて妄念を掃除せんとす。如何かせん、元是頑鈍無明の臭袋子、死に至るまで半點の光輝も亦た得ること能はず、只居ながらにして亡びんを待つのみ。遁世出家の人は、云ふに及ばず、士太夫の人々も、道業親切なるほど、心氣次第に虚損して、鼠糞の落つるを聞きても、心肝裂くるが如く、終に自盜の二汗を引出して、百藥驗なく、衆醫手を束ねて、命根も亦た保ち難きに至る。自家の進趣を錯る事は、さしおいて論せず、他後法幢を建て宗旨を立て、三百五百の燕頷虎頭を喝走して、天下の蔭涼樹ともなるべき底の英伶の衲子を捉らへて、強て捉へて、八識頼耶の暗窟を死守せしめ、一生無智、頑賤擬議、不來底の鈍漢にしなして、月を重ねて千鍛し、歲を積んで百錬すと雖も、蟲の氣息も得ること能はず、次第に志倦み體疲れん、痞癖塊痛、五積六聚、多少の病苦を一身に集め載せたる底の、生れも付かぬ重病の廢人となりて、人を見る時は恐れすくみて、應對も亦することも能はず、胸膈は常に水磨の舂くが如

らば、祖師只だ二三行の書を漢土に送りて足れらくのみ。曰く、專唱稱名して極樂に往生せよと。豈に十萬里の波濤を凌いで、此の見性の法を傳へんや。吾が日域二十四番の諸老、何んの求むる所ありてか、軀命を萬里の鯨海に拋ち、許多の艱辛を喫して、此の透關の大事を傳ふることをせん。斯く云へばとて、淨業專修の宗趣を蔑し謾るにし侍らず。元賢上座、身は禪門に在りて、參禪害あり、稱名益ありなど說く底の贋緇は糺明せずんばあるべからず。悲い哉、大雅枯れて桑間湧き、古曲啞して鄭衛震ふ。其餘派流れて扶桑に入り、吾が東海日多の種族、大半此の流類に入る。近年處々一流の禪徒あり、彼れ又少しく異にして大に同じ。總に是れ最初鹵莽にして痛快に打發せず、見道分明ならざる故に、死に至るまで安堵の眉を開くこと能はず。常に其部屬に教へて曰く、只其儘なるが好きぞ。○學文して何にかせん。悟り求めて何んの用ぞ。山賤の白木の合子其儘に漆付けねばはげ色もなしと云つて、徒に日々目を閉ぢ頭を低れて

樂なく、退くに生死の恐れあり。此に於て名は禪門に在りて、内には專ら稱名念佛して、淨刹の往生を願ふ。彌陀經の疏鈔、竹窓隨筆を作りて以て主張し、同窠窟の老禿、鼓山の元賢永覺といふ者あり、淨慈要語を作りて以て助く。其言葉に曰く、見性入理の法門は、惡見狂解の恐れあり、稱名至誠の淨業は、往生九品の頼みありと。玆に於て四海の禪流、水の低きに就くが如し。恐るべし、禪一變して既に淨に入る。淨一變せば將た夫れ何んにか入らんや。大凡番々出世の如來、世間に出現し玉ふことは、一切衆生に佛智見道の眼を開かしめんが爲めなりと法華經の金文分明なり。さる程に、西四七、東二三、南嶽、靑原、馬祖、石頭、百丈、黄檗、南泉、長沙、臨濟、興化、南院、風穴、首山、汾陽、石霜、楊岐、黄龍、眞淨、息耕、妙喜の諸老、破口にも淨土往生の事を說き玉ふを聞かず。其餘の傳燈會元等の內、其頭角の賢聖、專唱稱名の事を傳ふるは、半箇も亦た無し。專ら見性透過の大事を以て至要とす。淨業如し佛道の大綱な

禪苑荒れすさみ、眞風墮ち衰へて、諸方の叢林、諸方の宗匠達の沙汰し申さるるを見聞はべるに、往々に化城相似の涅槃を捉らへて、自己本有の佛性なりと相心得、焦芽敗種の修證をとらへて、禪門向上の眞修とす。殊に知らず、此は是れ二乘小果の部屬なることを。二乘とは、所謂聲聞乘緣覺乘これなり。聲聞乘の人は、如來の無念無作、非修非證、是を名づけて無上正覺とすと說き玉へるを聞ては、心源湛寂の處を死執して、强て勤めて想念を剗落し、識情を滅盡して、無心の田地に到らんとす。是を默照邪禪、死獦獺の輩といふ。三四十年精錬刻苦して、揩摩淨盡すといへども、終日の無作を行して終日の有作を打し、終日の無念を求めて、想念轉々熾盛なり。此に於て從前の志業を打棄て、專唱稱名して極樂に往生せんとす。大明の末、此黨大に起る。萬曆の頃ひ、晩年の僧雲棲の珠宏といふ者あり、四十にして出家、少しく文字を解す。小智に誇り小見を恃みて、眞正の宗師に參せず、見性眼暗く、參玄力乏し。進むに寂滅の

と祈る計りに侍り。貴ぶ所は、御連枝ともに、宿の靈骨厚くわたらせ玉ひ、御智德も優かに、求法の御志も厚くおはして、近習常隨の尼僧上﨟達まで、萬事しめやかに、殊勝に見請け奉りたればこそ、御養生の一助ともなれかし、御氣力をも扶け奉れかしと、叶はぬ智力を抽んでゝ、數ならぬ繰言も繰返へし〳〵尊聽を汚し奉りしなれ。左もおはさで、世の並み〳〵の尼法師の如く、無智昏愚の風情におはさば、七旬に近く世間に望みなき木の端の、何の追從にか、召され候ふ度に罷り上り侍るべきや。返へす〴〵も隨喜し上るは、文字般若の力おはして、經に錄に尋常熟覽せさせ玉ふ御事。上求菩提の助には、是に過ぎたる勝行は侍るべからず。さる程に彌陀經にも、大乘讀誦の人を上品上生の機とすとぞ說き置かせ玉ひぬ。三世古今の間に、見性せざる佛祖なく、一文不知の賢聖は、半箇も亦なき事に侍り。悲しむ所は、澆季末代の習ひ、然るべき先達なく、甲斐々々しき法友のおはさぬこそ、御殘り多く覺え侍るなれ。近年以來、

於仁安佐美

沙羅樹下白隱老衲稽首作禮上書淨藏淨眼二大士兩宮簾下近侍之左右

草稿

過し頃は、不慮に簾下に趨謁し上りて、民間の俚語、叶はぬ辯口を張り、經に錄に數度の評唱。片腹痛く思さんも恐入り侍りにたるに、左もおはさで、結句取るべき所ありて、養生の一助ともなれりと卑棄し玉はざりつる御事。愚老が身にとりて、生涯の歡踊、之に過ぐべからず覺え侍り。罷下候刻みも、御暇乞として、餘所ながら推參致すべきかと、幾度も思ひ立侍りたれども、老來涙脆く、見苦しき風情を人々の見參に入れ奉らんも愧ぢがましく、態とひそかに罷り下り侍りき。路すがらも、歸着の今も、何とぞ御不例增々御快氣ましく〳〵て、甲斐々々しく、菩薩の威儀を學ばせ玉ひ、佛國土の因緣をも成就せさせ玉へかし

しの心に、處々勸進し申て、一字の草庵を營み、形の如く尊容を寫し奉りて、堂上に安置し奉りぬ。願くば此勝縁に答へて、我等も及び一切の人々も、諸ともに生死の魔網を破り、速かに一心不亂の田地に到りて、唯心の淨土に生じて、己心の彌陀に値遇し奉らむこと。

惟時圓融無相元年眞如滿月唯有一乘日。

本朝寛延第三庚午佛生日。

理事無碍法界不可思議郡寂滅村諸法實相寺夢幻院電光朝露弟子空華坊道入記之。

抛身捨命寺打成一片上人弟子無難坊純一訂正。

法界山一相寺諸相非相和尚徒不動院湛然書。

寳鏡窟之記終

にて渡らせ玉ふものを、如何にや憎愛差別の御心のおはすべきぞ、差別は都て我が信心の淺深にこそ依るべきものを、淺猿しくも恨み奉りしことよと思ひ定めて、從前の罪障を懺悔し、當來の苦因を恐れて、至誠に專唱稱名すること半□、再度彼の岩窟に入り、拜し申けるに、光明も相好も以前には遙に違はせ玉ひて、一際殊勝におがまれさせ玉ひける程に、感淚肝に銘じ侍りき。是より思ひ入りて、澆季末代流轉常沒の我等が爲めには、上もなき善知識にてわたらせ玉ふものを、尊容に別れ奉りて、賴みもなき露命に何地へうかれ行くべき。永く此處に在りて尊容につかへ奉りて、兎にも角にもなりはてたらむには、またなき勝緣なるべきものをと、處々の靈場に詣ふで奉るべき望も絕へはて、專唱稱名の外佗事無く打成り侍りぬ。且又國々より、みかげ拜み奉らむとて慕ひ來り玉へる人々の、浪風打つゞきたる頃しも、參りあひ玉ひて、風波の靜まるを待わび玉へる人々のいたはしさに、打寄り念佛して、浪の晴れ間を待ち玉へが

き出すもあり。一目見奉りてより、有難がりて感涙するも有り。一人は興さめ貌して、方々は何を目あてに感涙して、さは泣き玉ふぞ。おのれは唯ほのぐらき斗りにて、物こそ見つけ侍らね、如何にもして、かたしろなりとも見居け奉りて、和殿原の如く有難がり度事こそ、目おし拭ひ、首ひねりまはして、かなたこなた見廻はし、首を搔くもありけり。愚老が其時拜し奉りたるは、ほの暗き中に波の光のちら〳〵とのみして、滿月の御面も靑蓮目の御眸も見へ分ち玉はで、御佛の御影とおぼしきものみたり立ち玉へるを拜み奉りて、少しは信心もさめ心地しけるが、定て貴き事にやおはすらむと有難げに伏し拜みて佛念じ侍りにたりき。歸り來りて熟々と思ひ、かこちにけるは、七旬に近き者の遙々の旅地を三途の罪障をも懺悔し、六趣の苦患をも嘆き申度くて、さまよひ來りたる者を、御影をだにもはか〴〵しく拜まれさせ玉はぬことよと、少しは恨み申す心地もさしおこりたりしが、返して思へば、三界無比の大聖十力調御の如來

故に此處の民、念佛を以て家業の如くす。傳へて云、此魚、彌陀の化現にして、無佛世界の衆生を濟度し玉はん爲めに、斯の如きの善巧ありと。嗚呼佛菩薩の大悲善巧は、凡愚の計り知るべき事にあらず。今此寶鏡窟の如來も、行者罪障の輕重深信の精麁に隨て、品々に拜まれさせ玉ふを思へば、彼の嶋の念佛の魚に少しも違はせ玉ふ事かは。熟々思ひまはせば、身の毛起ちて恐ろしく尊くて、頻りに悲嘆の涙こそこぼるれ。愚老抔も是より遙か遠國の者に侍り。此御佛の尊き御有樣を風(ほの)かに傳へ聞き奉りて、あはれ佛神の冥助もおはせよかし、足を限りに彼の伊豆の國なる賀茂郡とかや云ふなる處までたどり行きて、彼の御佛の貴きみかげなりとも伏しおがみ奉りて、後の世の事をも嘆き申度ことよと思ひつゞけて、いつしか廻國の姿にやつし成して、こがれ來りて、同行三五輩、海士の小船のあやしげなるを請ひ借りて、諸ともに窟中に入り、念佛して伏し拜み奉りにけるに、一目見奉りて伏ししづみて、念佛しながら、ぐし〳〵と泣

云ひ、一心不亂の田地に到るを生と云ふ。如上の眞理現前して、唯有一乘の大事、目前に分明なるを來と云ふ。此時に當て行者心境不二、理智冥合するを迎と云ふ。然らば即ち來迎往生開佛智見、畢竟同一模範なるものにあらずや。須く知るべし、三身不二、不二三身、三世古今の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖なきことを。禪定誦經、念佛持戒、皆是見性の助因なるべし。彼の黃卷赤軸を執らへて佛經なりと偏執し、泥丸塑像を執らへて佛像なりと心得む人々は、夢にも曾て見ること能はじ。且又佛力の應現豈又城邑聚落をしも云はんや。彼の觀世大士の如きは、蛤蜊の胎中に身を現し、瓢の瓠の肚裡に跡を垂れ、遠境邊土、金砂灘と云へる處の馬郎が少婦と身を現し玉ひ、又海島邊鄙人多く住みける所に念佛の魚といへるありき。漁者共多く濱邊に打ち寄り、高聲念佛時を移し、皆々一心不亂に到りける時、魚ども多く海面に浮ぶ、此時網を下せば、夥しく魚を得。念佛の多少、聲の高下に隨て魚を得ることもまた多少あり。是

土、人里もつゞかぬ處に、雨をさけ風を恐れ、しばらく潮の落るをまつなる危き岩穴の中に應現し玉ふことは何ぞや。又聞く、番々出世の如來何れも開佛智見道の一事を以て本懷とし玉ふと。しかるを特り無量壽尊のみ往生淨土の事を以て、我等を引導し玉ふ事は何ぞや。予曰、佛に三身あり、法身を以て體とす。報化の二身は用なり。今寶鏡窟の如來の如きは、法身と云はんも亦得たり、報化の二身と云はんもまた得たり。天堂地獄、淨邦穢土、山河大地、佛界魔宮、草木叢林、有情非情當所をはなれず、常に湛然たりといへども、見性の上士に非ざるよりは、輙く見ること能はず。是故に諸佛報化の二身を現して、衆生を引導す。禪定誦經、念佛持戒、分に隨て進修して怠らざる時は、情念止み思想盡き、一心不亂の田地に到て、三昧發得し、圓解煥發し、乍ち如來の眞如法身に契當す。此の時に當て、五眼俄に開明し、四智立處に成就す。是即ち開佛智見道の當體にして、見性入理の一刹那なり。思想の盡き情念休する時節を往と

翁めが仕業なるぞかしなど、興さましたる者なり。是は下品の行者なりと知るべし。又彼のうろ〳〵として彼方此方見廻し冷笑(しれわらひ)けるは、無智昏愚の下郎、尋常三世を信せず、因果を知らず、少しばかり假名雙紙など讀覺へて、荒唐のみ利(き)て物知りだてする斷見外道の部類なりと知るべし。神明にも尊ばれ佛陀にも憐まれ玉ひにたりける慧心院の僧都の、大信は大佛を見、小信は小佛を見ると云ひおかれけるは、止事なく貴も覺へらるれ。彼の人々の信根の淺深、罪業の輕重に隨て所見まち〳〵なることを思ふに、毫釐も差ふことなし。譬ば明鏡の臺に當て、娟醜少しも遁れざるが如し。是故に寶鏡窟と稱し、鏡岩と名づく。俗には近頃、彌陀窟と云ふ。或人の云く、我聞く、如來は三身を具足し玉ふと。且夫れ寶窟の如來の如きは、法身と云はんか、報身とせんか、將又稱して化身と云はんか。如來既に群生を利濟せんが爲めに、世に出現し玉ふとならば、城邑聚落いかにも人たち多かる處に現じ玉ひて、多くの人を利益し玉ふべきに、何ぞや遠境邊

き起ちて、潮の落ち、洞口のひらくを待ちて、行いて瞻禮する者ひきもきらず。正に窟中に入るに當て、涕涙悲泣、感汗肌へをひたし、念佛して伏しまろぶ者あり。打見て興さめたる貌して守り居るもあり。怪しげなる貌して、彼方此方見まはし、冷笑もあり。是皆信心の淺深、罪業の輕重に隨て、所見まち〱なる故なり。彼の涕涙悲泣する底は、如來の身量或ひは三尺或は五尺乃至一丈乃至二丈、紫金光聚の中に嚴然として立せ玉ふを拜し奉りたる者なり。是上品の行者なりと知るべし。又彼の打仰ぎて混らに念佛する底は、金色の聖容或ひは五寸或ひは七寸、きら〱と照り輝きて、窟中に立せ玉ふを拜し奉る者なり。是中品の行者なりと知るべし。興さめたる貌して守り居けるは、金光をも拜せず、寶薫をもきかず、混黑にくろく、只燼木などの如くなる者、或は三寸或は五寸、目鼻の分ちもなくて三つ並びたち玉ふを見おりて、さしてもなき事をぎやうたましく云ひふらして、多くの人々を欺き賺して騒しめける事よ、憎き漁

廣さ二丈ばかりなるべし。杳に窟中を窺ひ望むに、昏々として淺深を計ること能はず。潮に隨て開閉す。滿る時は、一片の水波、窟中に充つ。一日、漁翁その潮勢のおつるを待て、畏づ〳〵彼の窟中に棹もて兩岸をさゝへて進むこと數十笏、轉た進めば轉たくらし。忽然として股戰き膽震るへ、心身驚き恐れて、正に正氣を失せむとす。越て合掌危坐して念佛すること數十聲、身心次第に平穩なることを覺ふ。少焉あつて徐々として眼をひらけば、一遍の金光、窟中に煥發して、瑞耀、膽を照らし、異香掬すつべし。熟々見れば、無量壽尊及び二大士をさへに端嚴殊特の妙相有て、紫磨金の聖容嚴然たり。窟中廣博なる、大虛の寥廓たるが如し。如來の身量何千尺と云ふことを知らず。漁翁卽ち悲泣念佛して、身心ともに消へ失せたるが如し。覺へず時を移すこと數刻、乍ち怒濤の岸を打つ聲を聞く。既にして潮の洞口を塞がんことを恐れて、泣く〳〵尊容に別れ奉て念佛しながら漕かへりぬ。扨て里人斯なん告にたりける程に、遠近驚

寶鏡窟之記

經に曰く、佛身法界に充滿して、つねに一切群生の前に示現すと。然らば即ち目の見る處、總に是れ如來の清淨法身にあらずして何ぞや。しかるを都て見奉ること能はず、慧眼既に盲たる故なるべし。又曰く、我常にこゝに住して、つねに說法して、無數億の衆生を敎化すと。しからば即ち耳の聞く處、諸佛微妙の敎體ならずして何ぞや。然るを都て聞奉ること能はず、天耳既に聾たる故ならずや。寛永の初め、豆州賀茂郡手石村の漁翁つねに產業の拙きを恨み、深く來生の苦輪を恐れ、晝夜に念佛して怠ることなし。自ら云く、漁獵は、我が家業なり、念佛は、我が私業なりと。常に船上にありても、終夜念佛して、動もすれば、網する事もまた忘るゝ斗りなりけり。いつの頃よりか貴き光の時々に海面に浮ぶを見る。漁翁是を怪みて、船して彼の光の處に到れば、岩窟あり、

遠羅天釜跋

先佛遺言。赫乎三藏存焉。乃祖玄旨。炳然五燈傳焉。蓋自利々他不ㇾ能ㇾ不ㇾ然也。於戯。如二此書一。明辨覼縷。不ㇾ墜二先規一。可ㇾ謂未聞之聞也。讃ㇾ之。則大虛生ㇾ翳。謗ㇾ之。則巨海起ㇾ漚。余亦何言。其或附二諸炬一。或上二諸紙一。其跡雖ㇾ異。其道一也。何則法門威儀。唯此是勤。向近驛二三白衣詣ㇾ余曰。頃聞。師有ㇾ示徒之長書。我曹觀覽無ㇾ便。且有ㇾ嫌二乎謄寫一。冀戮力鋟二諸梓一。以令二住菴精修之諸子免二吮墨之勞一。余曰。善哉。如有ㇾ政。雖ㇾ不二吾用一。吾其與聞ㇾ之。於是乎跋焉。

寬延己巳仲春　參學小比丘慧梁焚香稽首書二芙蓉峰下一。

遠羅天釜續集終

遠羅天釜。師平日所用茶銚也。不知爲何義而取以名此書矣。此書。師與門徒往復簡語。而其草稿命不經信宿而成也。想暗記之失必多焉。大方學者識有茶味而存焉。何以事故爲哉。辛未春。余之播與楠田某邂逅。謂余曰。子向雖編鵠林老師遠羅天釜。恨闕念佛一書。子若補之。願捨小財以助梓費。今秋京師書肆田原吉田二氏。請余乞一新遠羅天釜舊板不正。余便可之。乃得副此一本。且與豊根二道友筆之校之。又區畫之。以授之云。

寛延未仲秋吉旦　　慧梁謹識

下化之佛種。縱令得成等正覺。是咸爲顚倒二乘。與佛道迥而殊矣。如諸佛妙用。感則必有應。所應復爲感。所感復有應。則無不憑此如幻力。猶如爲國者以救凡民爲本也。是名億兆君子。當知。幻化是佛界之大寶聚。幻化是法門之大柱礎。菩薩之種子也。諸佛之本命也。然現之與卻之。未嘗無妙處也。唯自從寶珠體得上而受用將來。自從幻化識破上也。而與奪將去者也。豈亦容易哉。豈亦容易哉。若夫胡亂禪者。輕慢白衣。道之不學。敎之不明。大言放語。傚師之顰。未免誹謗如來希有威儀。孤負老師血滴親言。吾子眞思之。客唯々而退。便作答客難。

寛延四年辛未歲林鐘日　參學某甲拜識

也。陽爲慕之。又與悖之。又何取也。世之學佛者。狐疑莫之能正。雷同換難易。然則如來正法眼藏復幾于息矣。可不思哉。吾師闢之廓如。豈好辯哉。不得已也。客曰。幻化法門。我復何望。若子所言。則盡焉者歟。予曰。不然。三乘所趣法體無異。有但心大小。故爲差耳。夫以幻幻於幻。則所幻而可幻。以幻幻非幻。故雖幻而非幻。是故。涅槃經曰。善男子。或有是色。或非是色。言非色者。卽是聲聞緣覺解脫。言是色者。是卽諸佛如來解脫。善男子。是故解脫亦色亦非色。菩薩從上來設度門於谷響。修萬行於空華。前所謂種々色像。卽是淸淨寶珠。而事理不二者也。雖然若不識破幻化。則幻化上頭復逐幻化。遂爲其所魅着。抵死不能脫也。是吾老師所以爲我門昧寶珠者而痛卻之也。豈復撥無幻化而證眞實者哉。龍樹大士曰。寧可起有見如須彌山。不可起空見如芥子許。如寡聞比丘受持方等千部。生得陷墜。當知。除幻化而無佛陀。離幻化而無敎乘。儻滅燼如幻之神力。焦敗

苟憂其道之不明。惟在痛勵密進自全其德而已。奚以兼爲。華嚴觀曰。有信不信法界。信是邪。凡諸經論中。具明二行。一者無念。二者有念。而雖皆可成佛道。優劣懸殊。參禪辨道。卽無念無相念佛。此謂眞如三昧也。欣求淨土。卽存想計名念佛。此謂修習淨業。但能通達不二。便爲眞佛子矣。想道夫兼之者。蓋二本故也。觀經曰。諸佛如來法界身。是心卽是三十二相八十隨形好。是心作佛是心是佛。又曰。佛身高六十萬億那由多恒河沙由旬。彼佛圓光如百億三千大千世界。如來誠諦之語。到此顯示內證。其旨甚深。名之曰恢廓廣大超勝獨妙建立常然無衰無變之妙土。不可以形相莊嚴也。不可以金珠修飾也。故金剛般若經曰。若菩薩作是言。我當莊嚴佛土。是不名菩薩。何以故。如來說莊嚴佛土者。卽非莊嚴。是名莊嚴。又維摩經曰。隨其心淨。卽佛土淨。果如此。則參禪學道。豈非是莊嚴佛土耶。彼元明禪者欲自刷其造詣不精。故傳會以文之。甚者不過邯鄲之步

有何佛。正法即是宗。更有何經。所以調御師付金襴於大龜氏。燈々相續。血脈不斷。猶瓶水相承。實爲法中之王。譬之世之帝者。天之曆數在爾身。乃能以天下爲己任。叡哲欽明。遊刄萬機。理無不統。威無不伏。是故天下有主。則上下位焉。萬物安焉。若一日失其主。則天下壞亂。莫甚於此。大矣哉爲主也。民無得而遁焉。如事淨土者。攝取不捨於計我著相之族。巧善逗根機。蓋漚和法門也。自其珠體言之。則非幻化而何也。是故圓覺經曰。不可說恒河沙諸佛世界。猶如空華亂起亂滅。當知一切世界皆如幻而住。是以實教所明。僉以無形爲淨土。華嚴曰。依眞而住。非國土。生公亦曰。佛有形累。託土以居。佛是常住法身。何須國土。當知十方諸佛所有國土。悉是幻化而非眞實也。由是觀之。佛道必不在於玆彰然矣。不知者自謂。禪而兼淨土。虎而挾翼者也。或謂禪而無淨土。十人九蹉路。然則如彼韓墨楊申之徒。謂令帝者習國人之業乎。匪啻不能有其祚。必至亡其國焉。

蓋甞論之。大毘盧舍那五智圓明常住本體。猶如清淨摩尼寶珠。而能現種々色像。淨則淨現。穢則穢現。總是所現物也。無現而現故非無。雖現不現又非有。有既不有。則無何據。不思議之所致。不能容有無於其間。而何物不現。所以萬有森然。弗知其所以來。一虛蕭然。罔識其所以往。以色像能依。故離寶珠無色像。以寶珠所現。故離色像無寶珠。寶珠卽色像。色像卽寶珠。有人實體如此大寶珠。則能現不可說微塵數淨土。無不包羅。無不含蓄。唯是當所湛然。與彼繫念一佛國土者。奚翅霄壤哉。是故至人無往而不寶珠。光々映發。主伴無盡。愚凡反之。是故無往而不色像。法々質礙。淨穢駁雜。是由他契證與否耳。如淨土爲中下根。假緣微妙色像。而感無依珠體者也。故以希望爲之媒。得見色像斯可。寶珠不可得見也。如禪家爲上々機。直指圓明寶珠。不見有依色相者也。故以妙悟爲之則。寶珠又擊碎。何色像之有。蓋禪者傳佛心印。荷擔正法眼藏者也。佛心卽禪。更

界。故的知無方處無涯畔焉。蓋如二尊者。悲願廣大爲物前驅。謂之權著幻化衣願生幻化國乎。謂之不起此土之本土而現無生之往生乎。要之如來出世本懷。祖師應機作用。其跡萬端其致一也。但欲令一切衆生悟入佛智見也。更無餘蘊。法華經曰。諸佛世尊種々方便。種々譬喩。種々因緣。是法皆爲一佛乘。故爲諸衆生演說諸法。如是則淨土之設。豈非爲一佛乘之助耶。吾老師如上丁寧告誡豈有他哉。卻其莊飾。呈之本色。譬如以眞金止啼。苟爲黃葉。他後有悔。又爲元明之間屈辱宗旨者。有所激切。卽是屋裡鳴鼓之攻也。豈敢敎驅他信男信女願生之人。而粧重自家底者哉。有人專修稱名。忽然發得三昧。則不期然而必然。是佛道無二故也。子其好思。歷然可解。客曰。淨土幻化。何物不幻化。禪又幻化與。夫如佛者。積萬善於曠刧。蕩無始遺塵。以果報故獲其土淸淨。不可謂之幻化也。借如識禪門。爲其所短。讃於如來。則必有所長。予曰。果報之土。實是幻化也。

答客難

元明禪家流往々偏稱佛。此混武夫於明月。雜燕石於隋侯也。爾來天下叢林擎節相從。滔々乎繼踵。宗風陵夷。職是之由。當此之時。非假無畏一聲。無由令多少頑皮靼頭腦裂破。向也。鍋島侯馳書致之問。師叩兩端而竭焉。可謂視針於霧海。還珠於合浦者也。一日有客謂予曰。淨土一門。如來勝方便也。馬鳴稱之。龍樹慕之。勝妙國土似實有之。然今卻之。其他劣機聞之。則必斷望淨土。予曰。噫如事淨土。如來不可思議。莊嚴海中非無此事。只是鏡像幻化而已矣。雖然識破幻化之所以爲幻化。則無幻化之可爲幻化也。但以法身幽微法體難緣。且教念佛觀形以禮賛。是無他。愚凡障重故也。若夫大心衆生。那處不是淨土。顧子之所執者。莊嚴有餘等也。師之所示者。寂光理土也。宜哉子之生疑也。佛華嚴經曰。如來淨土。或在如來寶冠。或在耳璫。或在瓔珞。或在衣紋。或在毛孔。如此毛孔既容世

を張り、木鐘を掘ゑ、六時禮讃、四隣を驚かすに至らんと云ふて落淚せられける由。寔に恐るべし、老僧最後の親切の一着あり、眉毛を惜まず、殿下の爲めに擧揚し去らん。一喝の會を作すことなかれ。陀羅尼の會を作すことなかれ。況や崑崙に棗を呑み玉はんをや。作麼生か是れ親切の一句、僧、趙州に問ふ、狗子に還つて佛性ありや否や。州曰、無。穴賢。

志行懶惰にして、見性眼昏く、禪學力乏しくして、茫々として一生を過ぎ了つて、命日、晻曖に逼るに及んで、來生永劫の苦輪を恐れ、俄に欣求淨土の行課を勸め、在家無智の男女に對し、いかめしげに長念珠かい爪ぐり、高か念佛しながら、末代下根の我等に似合たる厭離穢土の專修に超えたることは侍らぬぞよなど、頭禿ろに齒疎なるが、動もすれば、殊勝げに打ち泣き〳〵、目をしばたゝきて口說き立てたるは、實々しけれども、從前曾て修せざる禪學、何の靈驗かあらん。これ等の族は、禪門に在りながら、禪門を誘倒す。蠹豖の蟲の梁柱より生じて、却て梁柱を割くが如し。點檢せずんばあるべからず。壯年の懶惰懈怠は、却て老來の憂惱悲嘆となんぬ。老來の憂惱悲嘆は責むるに足らず。既往をば咎めじ。壯年の懶惰懈怠は、各々宜しく恐れずんばあるべからず。大明以來、此の黨甚だ多し。盡く是れ庸才懦弱の禪徒なり。三十年前さる老宿の悲嘆せられけるは、嗟衰へたる哉、向後三百年を過ぎば、天下の禪苑盡く總盤

各々孤危の宗風を立して、臂に奪命の神符を繫け、口に法窟の爪牙を咬み鳴らして、たゞ宗風の地に墜ちんことを恐れて、晝夜に願輪に笞つて、屹々として怠ることなし。破口にも往生淨土の事を論ぜず。悲哉、時乎、命乎、大雅枯れて桑間湧き、古曲啞して鄭衛震ふ。流へて大明の末に至つて、雲棲の袾宏なる者あり、參玄力足らず、見道眼暗ふして、進むに寂滅の樂なく、退くに生死の恐あり。悲嘆押へ難く、終に遠公蓮社の遺韻を慕ふて、祖庭孤危の眞修を捨て、自ら蓮池大師と稱して彌陀經の疏鈔を造り、大に主張して後學を引く。鼓山の元賢永覺大師、淨慈要語を造つて擊節して輔け佐く。此に於て漢土に普く扶桑に溢れて、終に救ふことなきに至る。假令、今の世に當つて臨濟、德山、汾陽、慈明、黃龍、眞淨、息耕、妙喜の諸老臂を褰け齒を切ばり、手に唾して攘斥すと云ふとも、此の狂瀾を回へすこと能はじ。是れ全く淨業の宗旨を侮し、專唱の修行を輕賤するにあらず。禪門に在りながら、禪定を修せず、參禪に懶く、

須らく知るべし、疑團は道に進む羽翼なることを。法然上人の如き、道德仁義精進勇猛、暗中に聖教を披覽し玉ふに、眼の光を用ひ玉ひける程なれば、少し疑團だに在したらんには、立地に大事了畢し、往生決定し玉ふべきものを。豈に索短くして深泉を汲まざるなりと悲嘆し玉ふに及ばんや。さる程に楊岐、黃龍、眞淨、息耕、佛鑑、妙喜の諸老をさへに、およそ百千億の諸佛名あり、百千億の諸神咒あり、授與すべく擧揚すべき法門に不足もなき中に、特り此の無の字を與へて擧揚せしむ。豈に長處なからんや。顧ふに無の字は疑團起り易く、名號は起り難き故なるべし。然るに禪門に於て專唱稱名往生を希望する事は、古へ禪苑凋枯せず、眞風未だ地に墜ちざりし日は、一向になき事なり。西天の四七、東西の二三、傳燈歷代の祖師、南嶽、靑原、馬祖、石頭、百丈、黃檗、南泉、長沙、臨濟、興化、南院、風穴、首山、汾陽、慈明、黃龍、眞淨、晦堂、息耕、妙喜及び五家七宗の諸老をさへに、梁陳唐隋宋元の間、六朝の大宗匠、

とを得んとならば、靜處を好まず、動處を捨てず、我が此の臍輪氣海、總に是れ趙州の無の字、何の道理かあると、一切の情念思想を抛下して、單々に參窮せんに、大疑現前せざる底は半箇もまた無けん。如上の大疑現前、純一無雜の體裁を聞き及ばれては、怪しく恐ろしく氣味わろき事に思召さるべけれども、無量劫來、生死の重關を踏破し、大方の如來本覺の內證に徹底する程の目出度大事なるものを、左ばかりの艱辛はあらではあるべきと覺悟是れあるべし。熟ら〳〵顧ふに、無の字を參究して大疑現前し、大死一番して大歡喜を得る底は、數限りもなく是れあり。名號を唱へて少分の力を得る底は、兩三箇ならでは聞き及ばずなん侍り。慧心院の僧都も、智德と云ひ、信心力と云ひ、無の字が麻三斤の話など參究し玉ひたらんには、自身眞如なる程の事は、一月二月乃至一年半年程の中には發明し玉ふべきものを。名號誦經の功によりて、四十年の精彩を盡し玉ひたるなるべし。是れ唯だ疑團のおはすると在せざるとに依れり。

ながら、打發せざるは是れあるべからず。若し人大疑現前する時、只四面空蕩々地、虛豁々地にして、生にあらず、死にあらず、萬里の層氷裏にあるが如く、瑠璃瓶裏に坐するに似て、分外に淸涼に、分外に皎潔なり。癡々呆々坐して起つことを忘れ、起つて坐することを忘る。胸中一點の情念なくして、たゞ一箇の無の字のみあり、恰も長空に立つが如し。此の時恐怖を生ぜず、了智を添へず、一氣に進んで退かざるときんば、忽然として氷盤を擲摧するが如く、玉樓を推倒するに似て、四十年來未だ曾て見ず、未だ曾て聞かざる底の大歡喜あらん。此の時に當つて生死涅槃猶如昨夢、三千世界海中漚。一切の賢聖、電拂の如し。是れを大徹妙悟、囫地一下の時節と云ふ。傳ふることを得ず、說くことを得ず、恰も水を飮んで冷暖自知するが如けん。十方を目前に銷融し、三世を一念子に貫通す。人間天上の間、那箇の歡喜かこれに如かん。是等の得力は、學者親切に進まば、纔に三日五日の功にして必ず得ん。如何か大疑現前するこ

た忘れて、笑を朋友に惹かん。主人もまた大に瞋つてこれを擯出せん。商も又士の嚴重なるを羨み、劍を帶し鞍馬に跨つて、戎面して妄りに西東に走れば、又それ大に笑はん、家道もまた廢せん。向きに謂ゆる禪を得ずんば、命終の時淨土に生ぜんと。兩端に渉て修行せん人は、魚も得ず、熊の掌もまた得ず。却て生死の業根に培ひ、命根截斷、囫地一下の歡喜は、努め〳〵是れあるべからず。無の字と名號と兩般なしと申す中に、得力の遲速、見道の淺深に到つては、少しき子細なきにしもあらず。大凡辨道參玄の上士、情念の滲漏を塞斷し、無明の眼膜を觸破するに到つては、無の字に越えたる事は侍るべからず。さる程に五祖の演禪師の頌に、趙州露刄劍、寒霜光焰々、更擬問如何。分身作兩段と。總じて參學は疑團の凝結を以て至要とす。此の故に道ふ、大疑の下に大悟あり、疑十分あれば、悟十分有りと。又佛果和尙の曰く、話頭を疑はざるを大病とすと。參玄の人々纔に大疑現前することを得ば、百人が百人、千人が千人

とす。淨家は侏儒の長けを闘はしむるが如し。矮きを以て勝れりとす。禪門の高きを惡みて是れを廢せば、佛心向上の眞風は土を拂つて泯滅せん。淨家の矮きを嫌て是れを廢せば、昏愚無智の部屬は、惡趣を出づること能はじ。顧ふにそれ佛は大醫王の如し。八萬四千種の方劑を設けて、八萬四千種の病根を拔く。禪と云ひ、敎と云ひ、律と云ひ、淨と云ふ、各々是れ病に應ずる一方なり。譬へば世に士と云ひ、農と云ひ、工と云ひ、商と云ふ、此の四民あるが如し。士は智仁兼ね備へ、韜略並べ全ふして、王位を鎭護し、逆徒を從へ、天下を泰山の安きに置き、君を堯舜の君にし、民を堯舜の民にし、瞋らざれども、民、斧鉞よりも畏る。尤も嚴重なるを貴しとす、重んずべきの美器なり。商は大店を張り、貨財を通じ、錦繡綾羅、絹帛綿布及び粟米蔗果魚をさへに廣きを以て好しとす。緇素男女、老幼尊卑、其の求に應ぜずと云ふことなし。士若し商賣の廣きを羨み、財利を貪り行ひて商賣の態を作さば、大に射御を廢し、武藝もま

奪す。學者もまた蠱毒の鄕を過ぐが如く、水もまた他の一滴をうけず、竪に咬み横に參して、情量の窟宅を破り、智解の窠臼を拔き、理盡き詞窮まり、心死し意消して、忽然として凡に非ず聖にあらず、佛にあらず、魔にあらざる底の奇怪の鈍瞎漢を放出して、以て佛祖の眞恩を報答す。かくの如きの手段を法窟の爪牙と名づけ奪命の神符と云ふ。大に上々根機の人に利あり。中下の機は閣きて顧みず。淨家は却て是に反す。是れ又敬しつべきの一門なり。無量壽尊大慈善巧の專修にして、六八の大誓にもとづき、三四の修心を具す。專ら中下の機の爲めに設けて、無智昏愚の衆生を利し、十惡五逆の罪累を拔く。攝取不捨の金言を主として、低きが上にも轉た低きを要とし、易きが上にも轉た易きを貴しとす。此の故に言ふ、縱ひ一代の教を能く〳〵學したりとも、一文不知の愚鈍の身にして只一向に念佛せよと。澆季末代五濁亂滿の邊土に、一日も缺くべからざる善巧なり。禪門は力士の長けを闘はしむるに等し。高きを以て勝れり

すりもなく唱へ進みて、一心不亂の田地に到り玉はゞ、必定大歡喜の眉を開き玉ふべし。若しそれ無の字を打ち捨て、佛名を唱ることは、專唱稱名の力に依りて、見性分明に直に佛祖の骨髓に徹底することを得ば是れ可なり。縱ひ見性明かなることを得ずとも、稱名の功力に依りて、死後には必ず極樂に往生せん。是れ一擧兩得萬全の良策なりとの底意ならば、早速稱名の修行を放下し、純一に無の字を擧揚し玉ふべし。何が故ぞ。これは是れ二百年來禪苑を荒廢し、眞風を蠹害するの惡風俗、杜撰の禪徒、鄙俗下賤の邪見解なり。夫れ禪宗は孤危の上にも轉た孤危ならんことを要し、祖庭は嶮峻が上にも轉た嶮峻なるを貴しとす。常に要津を把定して凡聖を通ぜず、一言を出すときは、三賢魂蕩し四果眼眩す。一句を吐くときは閑神恐れ走り、野鬼悲しみ哭す。木人の膓を割き、石女の髓を敲く。棟梁の質ありて神俊の才を具する底の英伶の學者を見るときんば、難透難解難信難入底の話頭を放つて、正法眼藏を瞎却し、涅槃妙心を攙

方を指す者は方便なり。九域を簡して亂心を止む。畢命を期として名を稱せば、心眼即開の大益を得んと。心眼即開、直に是れ見性の時節なり。大凡世尊一代五千餘卷の金文ありて、頓漸秘密不定の妙義を說き演べ玉ひたれども、畢竟此の見性の大事を出でず。故に經に曰く、唯此一事實餘二即非眞と。さる程に三世古今の間に見性せざる佛祖なく、見性せざるの賢聖は必定決定なき事なり。山野七八歲より行を佛理に傾け、十五歲の時出家、十九歲にして行脚、二十四歲にして初めて此の見性の大事に撞着す。其後叢林を經、普ねく諸善知識の門閫に跨り、博く諸經論を窺ひ、略三教の經典を探り、及び諸子百家をさへに、若し一法の自性の法門に超過せるあらば、莊老列の道といへども、必ず信受し推し弘めんと誓ひ侍りき。今年六十五歲に到つて、終に見性の大事に過ぎたる法理を見ず。左も侍らずば、何しに妄りに紙墨を費して、覺えもなき事を書き付け、高覽に入れ侍るべきや。只返す〲も見性の助に便りよく侍らば、絕え

を汲まず、翼短うして長空に翔らざる心地ありと仰せ置れける由。教外の心宗とは何をか云ふや。此見性の法門に非ずや。至人の一言、毫釐も欺き玉はず、寔に恐るべく敬しつべし。神祇冥道も恭敬し尊重し玉ひける程のやんごとなき上人たるも、斯く望みふかくおはせし見性の大事なるものを。今の人々の慢り誇り玉ふは、罪深くこそ覺ゆれ。蓋し理は知り玉はぬ上には、左ばかり罪科にもならぬにこそ。慧心院の僧都の如きは、二十四歳にして自性の大圓鏡を琢磨せんとて、横川に入り玉ひしより、晝三部の法華經、夜六萬聲の念佛、中間片時も怠惰し玉はず、行年六十四歳にして、初めて自身眞如なることを識得すとの玉ひけるよし。寔に貴ぶべし。自身纔に眞如なる時、山河大地、萬象森羅、草木國土、有情非情、同時に不變眞如の全體と現出す。是れを寂滅現前、見性了悟の時節とす。高野の明遍僧正、五十餘歳の秋、深く念佛三昧に入り玉ふ時、高野大師正しく藕絲の袈裟幷に一紙の金文を授け玉ふ。其略に曰く、西方の一

る如く、皮骨連立せり。遂に臘月八夜、明星を一見して、初て見性大悟、高聲に唱へ玉はく、希有なる哉、一切衆生、如來の大智慧得相を具すと。是れより山を出て來つて、頓漸半滿の教を説き宣べ玉ふに、乏しきことなし。是に於て十號具足、果滿妙覺の如來と仰がれ玉ふ。是れ彼の善慧大士の謂ゆる、頓に心源を悟て寶藏を開き玉ふに非ずや。澆季末代壞劫法滅の末世と雖も、佛子たらん者の尊信すべき芳躅ならずや。大凡番々出世の如來、歴代傳燈の祖師及び一切の賢聖、智者高僧に至るまで、其所傳の秘訣、行持の內證を探るに、盡く自性の法門を至要とす。蓮如上人の如きも、平生往生不來迎の往生と說かれける由。顧ふに是れ亦これ見性の眞理にあらずや。深く海藏の底を探つて、五千餘卷の金文を五度まで究はめ玉ひ、王侯より庶人に至るまで、生身の如來の如く仰ぎ貴ばれ玉ひし法然上人のごときも、常に悲嘆し玉ひけるは、特り教內の理に暗からざるのみに非ず。教外の心宗願を探る先達なき故に、索短くして深泉

佛の一事のみ授け玉ひにき。破相悟性の六門を設け玉ひたれども、畢竟見性の一處に收歸せり。然れども衆生無量なる故に、法門も又無量なり。中に就て往生の一門は、韋提希獄中の患難を救はんが爲めに、假に且く設け玉ふ。若し往生の一事を以て佛法の至要なりとせば、祖師只二三の行の書を裁して、漢土へ送り玉はゞ足れるのみ。云はく、專唱稱名して淨刹に往生せよと。何ぞ煩はしく千辛萬苦の風波を凌ぎ、全身を鯨鯢の腮に懸けて漢土へ渡り玉ふべきや。如來もまた然り。初めより淨飯王の宮中におはして、耶輸陀羅、翟夷女等の妃嬪とゝもに娛樂を窮めたまひ、位、十善に登り、富、五印を有て、末後に稱名念佛して淨土に往生し玉はゞ足れるのみ。何の心ぞや、金輪の王位を振り捨て、苦行六年、安羅羅、迦摩羅の仙人に責めつかはれ、其の後雪山に入て葦蘆の股を突き貫くをも覺え玉はず、目のあたりへ雷の落て牛馬を打殺たるをも知り玉はぬ程深く大禪定に入り玉ひて、通身瘦せ衰へ玉ふ事、糸もて瓦を編みたてた

て心身共に打失す。是れ嶮崖に手を撒する底の時節と云ふ。豁然として蘇息し來れば、水を飲で冷暖自知する底の大歡喜あらん。之を往生と名づけ、見性と云ふ。只肝要は、此の專念の扶けに依りて、是非一回、自性の本源に徹底すべきぞと勵み進み玉ふべし。只千萬疑ひ玉ふべからず。見性の外に成佛なく、見性の外に淨土なきことを。三界無比の大聖、一切衆生の導師なりと渇仰せられさせ玉ふ十力調御の世尊も、雪山に入りて一回見性し玉はざりし以前は、流轉常沒の凡夫に同じく、八千度の往來は歷玉ひき。見性大悟の曉にこそ、正覺の眉を開き玉ひけるものを、見性の外に成佛ありと心得、見性の外に淨刹ありと心得たる人々は、上もなき不覺なるべし。觀世大士の世身にて渡らせ玉ふ二十八代の祖師達磨大師の如きは、遙に十萬里の鯨波を凌で、諸經諸論に不足もなき漢土へ如來直授の佛心印を傳へんとて渡り玉ふと聞及びたりければ、如何なる大事をか傳へ玉ふぞと、人々目を拭ひ襟を正して渇仰し申けるに、只見性成

の無我にはあらず、況や專唱の力に依つて淨土へ行かんと計り、佛に成らんと擬するをや。行く底これ何物ぞ。成ずる底是れ何物ぞ。我に非ずして是れ什麼ぞ。謂ふことなかれ、然らば則ち是れ斷滅の所見なりと。是れ斷なりや、是れ不斷なりや。眞正見性の上士に非ずんば、輙く知ること能はじ。眞正淸淨の無我に契當せんと欲せば、須らく嶮崖に手を撒して絶後に再び蘇りて、初めて四德の眞我に撞着せん。嶮崖に手を撒すとは何ぞや。一人あり、錯つて人迹不到の處に到つて、下、無底の斷岸に臨めり。脚底は壁立苔滑にして、湊泊するに地なし。進むことを得ず、退くことを得ず。只一個の死あるのみ。纔に賴む處は、左手に薜蘿を捉へ右手に蔓葛にすがつて、且らく懸絲の命を續く。忽然として兩手を放撒せば、七支八離枯骨また無けん。學道もまた然り。一則の話頭をとつて單々に參窮せば、心死し意消して、空蕩蕩、虛索索、萬仭の崖畔に在るが如く、手脚の着くべきなし。去死十分、胸間時々に熱悶して、忽然として話頭に和し

け、煩惱とも名づけ、陰魔とも云ふ。一實多名。子細に看來れば、畢竟我見の一法に歸せり。有我に依るが故に生死有り涅槃あり、煩惱あり菩提あり。此の故に言ふ、心生ずれば種々の法生し、心滅すれば種々の法滅すと。又若し我相、人相、衆生相あらば、卽ち菩薩にあらずと。佛、迦葉菩薩に問ひ給はく、善男子、何等の法をか修して、大涅槃の法に契當することを得る。迦葉菩薩其の時、五戒、十善、十八不共、六度、萬行、八背遮、無量の法門、逐一擧げて答ふれども、佛總に許可し給はず。迦葉、佛に問ふ、世尊何等の法門か涅槃に契ふことを得るや。佛玉はく、但だ無我の一法のみ、涅槃に契ふことを得たりと。然るに無我に兩般あり。人あり、常に心身怯弱にして、一切の人を恐れ、心氣を殺して萬緣に應じて、罵れども瞋らず、打擲すれども管せず、常に癡々呆々として一事を經ず、一智を長ぜず、我は是れ無我を得たりとして足れりとす。これは是れ一個の破飯嚢、泥猪の肥え脝れて、一切無智昏愚なるがごとし。是れ眞正

らんに、思ふ儘に艤し、順風を七合に受けて、舟歌を張り、櫓拍子を揃へて、水主楫取心を合せて、千尋の浪を押し切り、八重の鹽路を漕ぎ拔けんと、毎日勇み進むといへども、纜を切て放たざらん限りは、中々浩波を渉ること能はず。徒に日に氣力を勞すといへども、元との湊に在らんのみ。顧ふに纔の金緒なれども、大船を留むるに至つては、萬夫も及ぶべからず。學道も又然り。譬へば茲に一個有らんに、夙に靈骨ありて、英豪の氣を具し、神俊の才を備へ、剩さへ馬祖、百丈を師家とし、南泉、長沙を同伴とし、勇猛の穎氣を養ひ、打成一片に進み、純一無雜に修したりとも、命根截斷せざらん限りは、㘞地一下の歡喜は努め〳〵これ有るべからず。命根とは何をか云ふや。無量劫來相續し來る底の無明の一念子なり。天堂地獄、穢土淨刹を化出し、三途六趣を現成することは、皆是れ彼が力に依れり。夢幻空華の細念なれども、見性の大事を妨ぐる事は、百千の魔軍にも超えたり。空華の細念とも名づけ、生死の命根とも名づ

つて遠境邊土虎狼充滿の廣野に留つて、徒に日々杖の長短を爭ひ、行裝の可否を論じ、路費の多少を計りて、杖々とのみ唱ふるあり、路費々々とのみ叫ぶあり、終に一步をも進むことを知らず、空しく歲月を送りて、歲衰へ體疲れて、果は虎狼の爲めに獲られ、遠路邊境の閑神野鬼と成り果るに似たり。終に帝都に到ることを得ず。只肝心は杖子を擇ばず、行裝を論ぜず、一氣に進んで退かず、速かに京師に到るを以て賢なりとす。若し今時に傚つて、生前に佛力を賴みて死後に西方に往かんとならば、一生三昧發得往生決定すること能はじ。況や眞正見性の大事に於てをや。去る程に、眞珠菴主の歌に、行く水に數かくよりもはかなきはほとけを賴む人の行末と。蓋し斯く言へばとて、淨業を嫌ひ稱名を侮するに非ず。正念工夫相續不斷見性了義の扶にとならば、稱名はさておき、粉搜歌にても唱へ玉ふべし。相構へて見性の秘訣を捨て置き、專唱の功勳に酬へて、佛にならんと計り玉ふべからず。其の子細は、譬へば玆に萬石の大船あ

の蛙の畔にわめくに似たりなど舌長き雜言、如阿梨樹枝の金文を顧みざる愚人、皆是れ邪魔外道の所行なりと瞋り恨む。殊に知らず、法華は、阿含方等四味の階漸を蓋過し、開佛智見の至要を演ぶ。此の故に本文に曰く、開佛智見道故出現於世と。正に知るへし、圓解の煥發を以て、出世の本懷とすることを。然らば則ち參禪も念佛も及び看經誦經をさへに、盡く是れ見道の輔助にして行路の人の杖の如くなることを。杖に藜杖あり竹杖あり。藜竹品異なりといへども、其の行を扶くるに至ては一なり。言ふことなかれ、藜は可にして竹は不可なりと。若し夫れ行客心屈し體疲れて起つこと能はずば、藜杖竹杖、何の用をか成すに堪へんや。參禪も亦然り、只肝心は、行者勇猛精進の一念子に在るのみ。云ふことなかれ、話頭是にして稱名不是なりと。行人若し勇鋭の志無くんば、稱名も話頭も、瞽者の眼鏡、法師の櫛貯へ、果して何の用ぞ。玆に數百人あらんに、帝都へ行かんことを願ふて、各々糧を包んで出づ。先達好らずして、錯

ふ。豈にそれ兩般有らんや。是等の意を見徹せざる故に、禪者は淨業の行者を見ては、無智昏愚の凡夫、見性の大事有ることを知らず、妄りに唱へて、白晝に十萬億の刹土を飛び過ごして、極樂國土に往かんとす。恰も跛鼈の身つくろいして、唐土へ飛ばんとするが如し。殊に知らず、十萬億土は、十惡八邪佛知開明の曉、十惡八邪乍ち氷消して、當處卽ち極樂國土なることを知らずと云ふて輕賤す。淨業の行人は、禪門の諸子を見ては、如來他力の大誓を信ぜず、自力貢高の我慢を主張し、大悟して生死を出でんとす。片腹痛き風情ならずや。末代下根の我々が及ぶべきことかは。左ながら家鵝の朝鮮へ翔つて、鷹と羽節を較らべんと羽つくろいするに似たりと慢侮す。法華經の行者は乃ち曰く、我が經の如きは、三世諸佛出世の本懷、一切の如來成道の直路なる醍醐上味の妙經を指し置き、稱名參禪何の用ぞ。剩さへ妙經轉讀の法師を見ては、唯有一乘の圓解を發せず、諸法實相の智見を開かず、只每日わゝとのみ叫びて、偏に春

あり、一人を圓恕と云ひ、一人を圓愚と云ふ。二人志を同ふして專唱怠ることなし。圓恕は山城の人也。唱念純一、果して一心不亂の境致に到つて、忽然として三昧發得し、往生の大事を決定す。玆に於て遠の初山に上つて獨湛老人に謁す。湛問ふ、儞は是れ何れの處の人ぞ。恕曰く、山城。湛云ふ。何れの宗をか業とす。恕曰く、淨業。湛云ふ、彌陀如來年多少ぞ。恕曰く、某甲と同年。湛云ふ、儞年多少ぞ。恕曰く、彌陀と同年。湛云ふ、即今何の處にか在る。恕即ち左手を握て少く揚ぐ。湛驚て曰く、儞は是れ眞箇淨業の人なりと、圓愚も亦久しからずして三昧發得し大事決定す。元祿の初め、豆州の赤澤なる處に行者あり、即往と云ふ。彼亦た稱名の力に依り大に得力あり。予は向きに此の兩三箇の傳を記す。逐一枚擧するに暇あらず。是れ卽ち專唱稱名、得力の現證なり。須らく知るべし、話頭も稱名も、總に是れ開佛智見道の助因なることを。開佛智見は、諸佛出世の本志なり。後來且く方便を設けて、往生と名づけ見性と云

蓋し光明と世界と兩般の會を成し玉ふべからず。悟るときは、十方世界草木國土を全ふして、直に是れ如來清淨光明の眞身とし、迷ふときは、如來清淨光明の眞身を全ふして、錯つて十方世界草木國土とす。此の故に經に曰く、若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば、此の人、邪道を行して、如來を見上つること能はじと。眞正淨業の行者は卽ち然らず。生を觀ぜず死を觀ぜず、心失念せず、心顚倒せず、となへ唱へて一心不亂の田地に到つて、忽然として大事現前し、往生決定す。此の人を指して眞正見性の人とす。自身直に是れ六十萬億那由佗恒河沙由旬の彌陀、七重の寶樹、八功德池、心上に昭々として目前に煥粲たり。山河大地、萬象森羅盡く是れ微妙希有の莊嚴海たることを徹見す。專唱稱名、一念不生、放身捨命の端的を往と云ふ。三昧發得、眞智現前の當位を生と云ふ。如上の眞理煥然として當處湛然、一毫をも隔てず、涌出するを來迎とす。來迎往生、眞下不二、是れ見性の當體なり。元祿の頃に二人の淨業者

に是れ往生極樂國、豈に十聲を待たんや。此の故に佛の宣玉はく、勇猛の衆生の爲めには、成佛一念に在り、懈怠の衆生の爲めには、涅槃三祇に亘ると說き給へり。若し無の字と稱名と兩般の看を成さば、須らく知るべし、盡く是れ邪魔外道の種族なることを。悲しむ所は、今時淨業の行者、往々に諸佛の本志を知らず。西方に佛在りとのみ信じて、西方は自己の心源なりと云ふことを知らず。念佛の功課に依て、虛空を飛過して、死後、西方へ行かんとのみ覺悟す。一生苦吟して、往生の素懷を遂ぐること能はず。殊に知らず、十方佛土中唯有一乘法なることを。此の故に云ふ。佛身法界に充滿して、普く一切群生の前に現すと。若し佛、西方にのみおはさば、一切群生の前に現し玉ふこと能はじ。若し一切群生の前に現せば、特り西方に限るべからず。悲い哉、如來淸淨の眞身は、煥爛として目前に分明なること掌を見るが如くなれども、慧眼既に盲たる故に、都て是れを見上つること能はず。豈に言はずや、光明遍照十方世界と。

肯どに在るのみ。豈に勢の多少、器の長短に依らんや。工夫も亦然り。一人有り、常に趙州の無の字を擧揚し。一人有り、常に專唱稱名せんに、無の字を擧する人は、工夫純ならず、志念堅からずんば、縱ひ擧して十年二十年を經るとも、何の利益か有らん。稱名の行者は、打成一片に稱名し、純一無雜に專唱して穢土を觀ぜず、淨土を求めず、一氣に進んで退かずんば、五日三日乃至十日を待たずして三昧發得し、佛智煥發して、立地に往生の大事を決定せん。往生とは何をか云ふや。畢竟見性の一着なり。經に曰く、我が國に生れんと十念唱へたらん人の、我が國に往生せずんば、正覺を取らじと誓ひ玉ふ。我が國とは何れの處ぞ。目前歷々たる底の本具の自性に非ずや。見性の人に非ずんば、たやすく見ること能はじ。若し然らずんば、今時諸方淨業の人人、日日にとなへ唱へて、千念萬念、千億萬念す。然かして往生の大事を決定する底は、半箇も亦無し。知らず、無量壽尊正覺を取る事を廢し玉はんか。殊に知らず、一念直

際斷の處に到つて、無明の暗窟を踏飜し、五欲の凶賊を逼殺し、大圓鏡を擊碎し、四智圓明の正位を透過し、大事を成辨するに到つては、行持は縱ひ品異なれども、その所證に到つては、豈に兩般有らんや。玆に人あり、力量骨格互に相同じ。各々堅甲利兵を執つて相戰はんに、一人は志念堅からず、或は疑ひ、或は恐れ、或は戰はんとし、或は走らんとして、死生決せず、進退定まらず。眼目定動し、步驟正しからず。しどろに成りて相進まん。一人は危亡を顧みず、强弱を觀ぜず、一身を必死の地に擲着し、目を据え齒を切つて、大精神を奮つて、斷々として相進まば、此の兩箇の勝敗は、掌を見るが如けん。十騎にして千騎に對し、百騎にして萬騎に對すといへども、百戰百勝、目前に分明なり。譬へば兩陣相對せんに、一方は金銀を以て募り傭ひたる雜兵十萬。又一方は仁恕を以て志を合せ、忠義を以て錬り鍛ふたる精兵一千。此の千騎を放つて彼の十萬に當てんに、惡虎の群羊を驅るが如けん。是れ他なし。只だ大將の賢と不

遠羅天釜　續集

答下念佛與二公案一優劣如何問上書

先書に正念工夫相續不斷の助に念佛せよと勸むる者も是れ有り。如何。趙州の無字と一般なりとせんか、將た又別に仔細ありとやとの御尋。叮嚀なる思召に候。人を殺すに刀を以てするあり、鎗を以てする有り、一般なりとやせんか。將た又別に仔細有りやと問はんに、如何か答へ玉ふべきや。刀鎗器は異なりと云へども、其の殺すに到つては、豈に兩般有らんや。去る程に忠信は棊盤を振上て敵を追ひ、篠塚は船梁を引きはづして人を打ち、呂后は鴆酒を執つて如意を毒害し、玄武は琴絃を解きて妓女を縊殺し、關羽は龍刀を提げ、張飛は蛇棒を取る。刀鎗は兩般なけれども、只執る人の利鈍と眞僞との兩般に在るのみ。學道も亦然り。或は定坐し或は誦經し或は諷咒し或は念佛し、努め力めて前後

遠羅天釜卷之下終

先佛遺言。赫乎三藏存焉、乃祖玄旨。炳然五灯傳焉。蓋自利々他不能已者乎。於戲如此書者。明辨覼縷、弗墜先規。可謂未聞之聞也。讀之則大虛生翳。謗之則巨海起泡。第復何言、其或附諸炬。或上諸紙。其跡雖異。其道一也。何則法門威儀。惟以是之勤。向近驛二三白衣語予曰。聞師頃有示徒之長書。我曹觀覽無便。而且有嫌乎謄寫。請戮力鏤諸梓。以冀令往菴精修之諸子以免吮墨之勞。予曰。善哉。如有政雖不吾用。吾其與聞之。於是乎卒其業也矣、寛延第二龍舍己巳仲春日、參學小比丘慧梁焚香九拜敬題。

遠羅天釜者。師平日所用之茶鼎耳。不知何爲義也。

公案了。盡言如棒如陀羅尼。如一喝。大可笑。勉旃。諸子。佛道深遠。須知如海轉入轉深。似山轉上轉高。若人欲知自家得力當否如何。須參南泉遷化話。昔三聖教秀上座去問長沙岑禪師。南泉遷化後作麼生。沙云。石頭爲沙彌時見六祖。秀云。不問爲沙彌時。南泉遷化後作麼生。沙云。使伊尋思去。秀云。和尚雖有千尺寒松。且無抽條筍。長沙無語。秀歸擧示三聖。三聖不覺吐舌曰。勝臨濟七步。此語若得見得分明。許儞得小分相應。何故。無人處獨語者。其賤如鼠。以何爲驗。皷牙三下。合掌曰。漸。

在濃東靈松僧堂經行。忽然而打失從前多少所得。大歡喜。三十二歲住此破院。一夜夢吾母以紫絹衣附予。提起覺兩袖甚重。探之各有一面古鏡。經可五六寸。右手者光輝透徹心肝。自心及山河大地如澄潭無底。左手者全面無一點光耀。其面如新鍋未觸火氣者。忽然覺左邊光輝勝右邊百千億倍。從此見萬物如見自己面。初了知如來目見佛性。後來因取碧岩錄讀。與從前所見大異。其後一夜把法華經讀乍徹見法華圓頓眞正奧義。打破最初一團疑惑。覺得從上多少悟解了知大錯了。不覺放聲啼泣。須知參禪甚不容易。今雖放蕩老懶到毫釐無所可取。自覺四十年終不空送却光陰。是非所以張五在楊州放金艱辛哉。予亦效吾子擔一旦所見。揩磨淨盡錯一生了。與彼張六死守一鋌窮餓其身困煎其心腸何得異。此天竺言二乘長者窮子。漢土言默照邪禪流類。是皆不知菩薩威儀。不明佛國土因緣所致。今時往々擔一片空理。會佛會祖會古則

臥。氣息共盡。去死十分。動亦不得。師在檐上呵々大笑。少焉蘇息起來作禮。通身汗流。師高聲叫曰。此守藏窮鬼子。於此親參南泉遷化話。寢食共廢。一日有些省覺。入室。種々下語不契。只云。守藏窮鬼子。予心竊謂。辭去往佗方。一日往城下托鉢。有狂人欲苕帚把打予。予不覺打破南泉遷化話。其餘數段因緣疎山壽塔話大慧荷葉團々頌。自謂盡打發。歸來演所見。師總不可否。只微々笑而已。從此休言守藏窮鬼子。其後省悟大歡喜者三兩回。所恨語路有到有未到。平生如燈影裡行。歸來侍病於如何老人。一日看讀息耕老師送南浦和尙偈。相送當門有修竹。爲君葉々起淸風。大歡喜。如獲夜光於暗路。不覺高聲曰。我今日始入得語言三昧。立禮拜矣。其後行脚路歷勢陽。一日衝大雨行。雨水到膝。廓然深入得荷葉團團句中。歡喜不得立。放身倒水中。忘却起立。腰包皆浸。行人怪立扶起。予呵々大笑。人皆以爲狂矣。其冬在泉州信田僧堂。夜坐聽雪有得所。翌年

數日。乍一夜聽鐘聲發轉。如擲碎氷盤。似推倒玉樓。忽然蘇息來。自身直是岩頭和尙。貫通三世不損毫毛。從前疑惑盡底氷消。高聲叫曰。也太奇々々々。無生死可出。無菩提可求。傳灯千七百箇葛藤不足消一捏。於此慢幢如山聳。憍心如潮涌。心竊謂二三百年來如予痛快打發底不可有之。直荷一段所見。行信陽。謁正受老師。演所見。呈偈。師左手握言偈曰。者箇是學得底。那箇是見得底。伸右手。予曰。若有見得底可呈。師。須吐却作嘔吐聲。師云。趙州無字作麼生見。予曰。無字有甚麼所着手脚。師以指拗予鼻曰。多少着手脚了也。予擬議。師大笑云。此守藏窮鬼子。予不顧。師曰。儞恁麼爲足耶。予曰。有甚麼不足處。師擧南泉遷化話。予掩耳出。師曰。闍棃。予回頭。師曰。此守藏窮鬼子。從此大凡每見予。盡言守藏窮鬼子。一夕師納凉坐檐端。予亦呈偈。師曰。妄想情解。予高聲叫曰。妄想情解。師即捉住予。瞋拳二三十。終突落堂下。時五月四日夜。淋雨後也。予在泥土上僵

經窮見。除唯有一乘諸法寂滅文。餘皆因緣譬喩說也。此經若有者般功德。六經諸史百家書亦可有功德。豈特此經云哉。大失懷素。實十六歲之時也。十九而因讀正宗贊。岩頭和尙末後爲盜賊被害。叫聲徹三里外。予謂徹甚徹。如何不免盜賊戈矛。嗟如岩頭和尙者僧中麟鳳。佛海蛟龍且然也。死後豈得免獄奴杖子哉。若果而爾。參禪學道何益矣。佛法恁麼虛誕也。悔者以身投此妖邪隊裡。今夫可如何。於此大懊惱。不食三日。永絕望於佛法。見佛像經卷如泥土。專讀俗典弄詩文。少忘憂愁。二十二而往若州。交虛堂會乍省覺。其冬在豫州讀佛祖三經大猛省。晝夜提起無字。片時不休。只愁不得純一無雜打成一片。又愁不能寤寐恒一。二十四歲春在越英巖僧舍苦吟。晝夜不眠。寢食共忘。忽然大疑現前。如萬里一條層氷裡凍殺。胸裡分外淸潔。而進不得。退不得。癡々呆々只有無字而已。雖陪講筵聞師評唱。如數十步外而聞堂上議論。或如在空中行。如此者

墮在毒海者也。只執一片所見。揩磨淨盡。錯一生了。如彼張六懷一鋌金。困倦逼迫去死十分。慈明黃龍眞淨晦堂息耕大慧諸老盡力攘斥。救不得矣。老夫初七八歲之時隨母入教院。聞僧講摩訶止觀中地獄說相。其僧有辯才演叫喚無間焦熱紅蓮苦境。恰如目見。一堂緇素盡寒毛卓豎。歸來計予平生殺業。如無身所置。動止悚然肌膚粟々。竊把普門品與大悲神咒。晝夜讀誦。一日共母入浴。母求湯熱。使婢頻添薪。浸々火氣衝肌。浴盤大鳴。乍想念地獄事。放聲悲號。哀聲傷四隣。從此竊求出家。父母不許。常行寺誦經讀書。十五歲而出家。自誓曰。願不見肉身而火不能燒水不能溺底得力。死不休。晝夜孜々誦經作禮。於病惱或針炙間點檢。其痛痒無與平生異。心甚不歡。曰我既背父母出家。未見方寸功果。我聞法華一代經王。而鬼神亦欽。往々幽冥苦界人。託人求救。必言法華。熟謂佗人讀誦且拔其苦患。況自身讀誦。且又經中必有甚深妙義。於此親把法華

心肝盡氣力。實不立方寸功果。放聲哀號矣。參學亦如斯。初爾所得卽是人々本具性唯有一乘法華眞面目也。我所得亦人々本具性唯有一乘法華眞面目也。此言見性。是性初從見道終到種智成就。毫釐無變遷。如一鋌大冶精金。故言初發心地便成正覺。教家此言十住初住。轉有最後重關。誰知祖庭猶隔天涯在焉。往々擔此一片所見。乃曰。我今既向朕兆未發以前佛祖未興之處立。者裡全無生死無涅槃無煩惱無菩提。一代藏經拭不淨故紙。菩薩羅漢如屍穢。參禪學道閑妄想。古則公案眼中翳。者裡無今時無那邊。不求佛不求祖。饑飯困眠。有何所缺少。者般見解。佛祖亦不得醫。只日々求安閑之處。今日只恁麼死獦獺地去。明日亦恁麼死獦獺地去。縱恁麼歷無量劫數。依然只是一箇死獦獺。堪作什麼用。如來此比疥癩野干身。鴦掘呵爲蚯蚓智。淨名曰焦芽敗種部類。長沙此言百尺竿頭不動人。林才言湛々黑暗深坑。是言見地不脫。所謂機不離位

唇。沈吟不休。少焉曰。護非而窮餓、棄是而豐饒乎。雖後我亦棄乎。願聞棄之道。張五大笑曰。儞所捨金而劣黃葉。非不能潤身。却窮餓其身。傷賊其心膓。若包紅葉。來往不重。不須現貧寠。在茅舍裏養妻子。高枕睡臥而已。儞所護所以棄之道也。我所棄所以護之道也。我初得金別儞後。行揚州。以金輕於黃葉。放大買鹽。賣鹽不足。東其息。大買綿絮。賣綿不足。放其息。大買麻絲。賣麻絲不足。放其息。大買粟米蔬果魚肉。放人於吳楚蜀魏間。山海珍。水陸美。普載聚。開大店八九。臣商三百人。鳴鐘食鼎。大凡握錢入張五門者。糟糠菜薪鹽醋酒醬無不鬻。於此積財巨萬。陝陶朱。不屑猗頓。倉庫廩庾並甍列立。求千頃膏腴地。買得松杉山梓楠苑數十。今占居於此處。是所以吾向輕於紅葉棄金道也。六立再拜曰。我兄萬歲。欽冀無疾病乎。兄捨似捨。久勤護。小人護。似護久勤捨。捨護互勤。利害大異也。寔知入智者手。則黃葉亦眞金也。落愚者手。則眞金亦黃葉也。自恨三十年惱

宜哉見我郎當。我兄甚怪矣。顧避左右。吾有一言。密々告之。張五纔目擊。妻孥皆退。六畏々近進曰。吾豈博奕及顧花柳者乎。吾貧不失金。吾瘦爲護金。吾兄向不言哉。儞能保護。莫亂費用。吾以不負吾兄命爲足者也。張六既自得彼金。十重包裹。尊重保護如懷和珠。似持夜光。行亦携。歸亦携。蚤暮恐盜竊難。三十年未曾放心眠。恐人窺知。絶友避交。故爲貧寠人。肩掛百綴懸鶉。首穿千補烏帽。人皆棄吾不顧。吾却以此爲幸。恐費金盡。妻孥亦不養。常獨子而往。獨子歸。常竄無人緣處。尋舊舍臥。求破廟眠。終不入客店宿。曾無糟糠飽。常傍人門戶乞。久立不與。希歌而已。彼金今在此。顧左右再三。飽窺無人。頸弘（本ノマヽ）垢膩破囊。再三押戴。解十重包裹。顧左右出金示之曰。兄拾于今在麼。願出紹舊交。張五笑曰。三十年前別儞。不久而打失彼金了也。六勃如而熟見張五面。且顧吾身曰。兄失也。吾護也。吾護也。兄失也。失兄者如是尊大也。護吾如此貧凍也。或張目或攢額。板齒咬

進。屋壁麗。堂宇美。如入康藝室。似上石奴堂。魂蕩股戰不知所坐。少焉張五被婢妾扶挑錦帳出。侍女圍羅。綺羅驚魂。繡紋奪目。金爐吐千花芳。玉佩流百禽音。頭穿紅羅帽。肩掛紫錦袍。坐綠熊茵。凭紫檀机。奢眸如虎。抗肩如鳶。六一見不覺頭到地。身體委縮。啼泣不休。不能擧頭正視。張五徐徐告曰。吾弟何來晩矣。胡爲其如此郎當哉。六拭涙畏々問曰。吾兄今仕何侯受誰家恩顧。如此尊大。如此富貴哉。張五曰。我非所以爲人臣者。我非所以受人恩顧者。我者昔日拾金者也。六曰。兄所拾其數爲幾百筐金哉。大車重積者乎。巨船稛載者乎。天所墜乎地所埋乎。遺忘底爲誰耶。張五曰。不然。三十年前我與儞於何某路上所拾者也。六曰。怪哉纔一鋌金而得此富貴焉。六於此乎大惑矣。恐候白金之流亞乎。盜跖蹻之部屬乎。若果而然者。我疾辭出。出謀遁九族難。豈坐而待死亡者哉。張五誾々而笑曰。儞向所拾者。今其何處在歟。爲博奕失者乎。且罹花酒惑者乎。六曰。

師。心竊以師爲賺吾者。慊々不樂。師今又書法華眞面目事。一見怨恨乍發。故言又是包止啼金葉。又不宜哉。住菴諸子亦今往々有此歎矣。況師亦指諸人辛勤所得稱棺木裡禪焉。予曰。寔有其事。嗟子來進。儞見老松秀丘岳麼。枝柯衝九霄。根盤徹三泉。上有百尺絲。下有千歲苓。勢如蛟龍欲擭霧上長空。下有青々一寸松。猶戴甲子立。指可拔爪可截。指此二物。問佗曰。是什麼。佗必言共是松也。唯在積歲月養與不養而已。莫言歲月是可也。儞若守一箇死棺材作鬼家活計了。縱雖積重驢年。堪作甚麼用矣。古有張氏子。兄稱張五。弟曰張六。兄弟裹糧遠往百里。中路各拾得金一鋌。大歡踊。而後索居五不知死生者蓋三十歲于此矣。六思其兄事。四方尋逐。認得其兄所在。杳來相訪。望其兄室。水磨列鳴。轂車轟過。牛馬列槽櫪。家鴉滿溝瀆。簫竽遠流。歌聲抑揚。有佳賓往。有高客來。六震恐不能直越門閫。折腰屈膝。畏々出名刺。双童來迎。容貌秀麗。態度高雅。蹁踏從

林。佛閣高貴。僧舍嚴麗。二輪並轉。四事重備而不顧。何心哉。在貧困飢凍窮餓交煎巷。耳所聞師惡言垢罵。口所投佗粟麥粃糠。可心底事。一滴亦無矣。然彼亦非所以無所容五尺身輩。盡是今時叢林頭角上士也。只各急求透過。其餘總不顧者也。予聞得大歡踊而曰。且喜佛法大可得人時也。師亦宜提起向上鉗鎚。求實參實悟上士。涉隨佗意說。以第二機接人。大損人。必妨佗悟門。有蟲氣息底漢子亦不能得。如予三十年前依師提携。精錬刻苦。喫盡多少艱辛。見得本有佛性。徹了法華眞面目。於一念三千妙理三諦卽一奧義。毫釐無疑惑。師亦以吾爲見得法華眞面目。許可矣。予亦心竊謂。天下旣定矣。近頃聞師評唱碧巖錄。恰如田夫杳立階下聞中書堂上諸君公議。如瞽者張眸窺瀟水佳景。似聾者立耳聞洞庭雅樂。於此大失力。慚汗滴腋。傷涙滿胸。從前苦修。似不立尺寸功者。初謂吾得力與師一般。今以予擬師。如疲羊指駿驥稱吾父。似跛鼈指神龍道吾

老父裁此草書畢。竊看讀。時有一僧。在予傍。是予舊友僧也。讀到法華眞面目處。長吁曰。師復掃止啼金葉耶。予勃如而曰。何謂事哉。儞以吾草書爲紅葉乎。是金也。非紅葉矣。如此書汲法華本文大意書。儞指以爲紅葉。是謗法華者哉。誹謗正法罪累無所容懺悔。儞指那處乎。以爲紅葉耶。僧低頭曰。今近遠住菴諸子各懷英豪才忘枯淡。坐抛軀命修。借舊宅潛廢社。十年五歲者。甘師惡毒苦乳。不忍分離者也。今歲狂浪洗田苑。不留粒米。民家各欲携妻孥竄往佗方。予杳嗟悼。已哉。鵠林住菴緇侶無一箇留錫。禪苑荒蕪不可過之矣。近頃有一僧曰。探飽煖慕閙熱。朝秦暮楚底庸常下劣族閣不論。眞實辨道求透過底舊參上士者一箇不去。其精進勇鋭十倍前日。五箇爲黨十箇結伴。此水邊彼林下。不食不寢者。或五日或十日。盡言此是守凶年飢歲佛法格式叢林古實也。瘦者如喪考妣人。衰者似罹重病人矣。凍餒困苦。鬼神亦可落淚。波旬亦可合掌。今時諸方叢

と唱へ玉ふべし。此の外別に有難き法理の老僧が書き送るべき事有りと思さば、
上もなき錯りにて此れ有るべく候。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

延享第四丁卯曆仲冬廿五日

沙羅樹下老衲書

右管々布長書、披見も六ケ布侍るべけれども、此を序に庵居の人々も一覽せ
らるべければ、法施にも成れかしの心にて書き續けたるにて候。至極の旨は、
自心の妙法を是非々々見屆くべしと思ぼして、絕間も無く首題を唱へ玉へと
の心にて候。南無妙法蓮華經〳〵。

の指南なり、舵とは、平生の志行なり。如何して妙法の湊へは漕ぎ入るべきぞとならば、一切の行人は佛を求め、祖を求め、涅槃を求め、淨土を求めて、外へ〳〵と漕ぎ出る風情なり。故に轉た求れば、轉た遠く、轉た尋れば轉た遙なり。眞正妙法の行者は、卽ち然らず。自己本有の妙法は如何なる物ぞと推究して、佛を求めず、祖を求めず、彼の妙法は內に在りとやせん、外に在りとやせん、內外中間に在りや、青黃赤白なりや、是非々々一回見居けずば置くまじきぞと、十二時中、一切處に於て間斷なく猛く甲斐々々しき氣概を推し立て、流石の者が思ひ立たる事を遂げず置くべき、仕果ずや有るべきと、寢ても覺めても、立ても居てもすておかず、晝夜に點檢して、或る時は打返して、恁麼に尋る底、是れ何物ぞ、何物ぞとは、儞は是れ誰ぞと進み入る、是を獅子、人を咬むの法と云ふ。心の妙法は如何々々と斗り尋ねもて行くを、韓盧、塊を逐ふと云ふ。兎にも角にも萬事を抛下して、無念無心になりて、南無妙法蓮華經〳〵

唐にも間多き事なり。南岳大師の馬祖の庵前にて瓦を磨き玉ふも、馬祖に此の意を知らしめん爲めなり。去るに依て、長沙大師の偈に曰く、學道之人不﹅識﹅眞、只爲從前認識神、無量劫來生死本、癡人呼爲本來人。是故に慈明眞淨息耕大慧の祖師、齒を切つて抵排して、親切を盡されし事なり。其の外の諸子の有樣は逐一擧するに及ばず。大凡三世十方の間に見性せざる佛祖なく、見性せざるの賢聖はなきことなり。是れ萬古不易の大綱なり。見性とは、法華眞の面目を見届くる事なり。此望なくて種々の事して佛法なりと心得るは、船頭もなき大船に子供多く競ひ乘りて、何づ地へ漕ぎ着くべき湊も知らず、彼方へ漕ぐが好きぞ、此方へ漕ぐが好きぞとて、思ひ〳〵に櫓械推し立て、昨は東の方へ潮に隨ひて漕ぎ漂ひ、今日は西の方へ潮に隨て漕ぎ漂ひ、終に海中を出ること能はず。其の船中へ案內しりたる船頭乍ち打乘り、磁石を見定め、舵を把る時は、一日の內にも思ふ湊へ着くことなり。船頭とは、見性の大志なり、磁石とは、正法

事は此れ有るべからず。人は兎も有れ角もあれ、我は是非々々晝夜に間もなく首題を唱へて、眞の法華の有樣を見屆くべきぞと、親切にさへ唱へ玉はゞ、雪山には入らず、頭は腫れずとも、必定決定自性の妙法蓮華は麗はしく開け侍るべし。只干要は自心の妙法を見屆けずば置くまじきぞと、望み深き程貴き事は無きことなり。世尊如來も自心の妙法を見屆け玉はざりし間は、流轉常沒の凡夫に少しも違ひましまさで生死往來し玉ひき。末後雪山に於て自心の妙法を見付玉ひて、初て正覺を成就し玉ふ事なり。瓦を磨くとは、八識頼耶の無分別識を認めて、本來の面目なりと合點し、妄念さへ無ければ、其の迹は鏡の如くなる佛心ぞ。只鏡の萬境を映して鴉は黑く鷺は白く、楊は綠に花は紅に少しも錯らず、照せども毫釐も迹を留めぬ如く、時々に勤めて拂拭せよと敎へられて、晝夜に妄念を拂ふは、瓦を磨き粟稗の鳥を逐ふに同じ。是を識神と認むと云ふ。山河大地を照破する光明の發する事はなき事なり。此の流の修行は、昔より大

る事ぞや。蓋し佛道も上古は大に難く、今時は大に易しとするか。且つ蘿葡を煨し、芋栗を煮るが如く、初めは堅く後には輭らかなるものとするか。今時の易きが是ならば、古の難きは非ならん。古の難きが是ならば、今時の易きは非ならん。古の難きは、苦吟する事は甚だ苦吟す、纔に發轉する時は、乍ち賢聖佛祖たり。那邊を透過し今時を透過して、毫釐も觸着すれば、電轉じ星飛ぶ。今時の易きは殊勝なる事は甚だ殊勝なり。望み見る時は畫圖の賢聖僧の如し。纔に發轉する時は、依然として困魚陷に止り、跛鼈甕裡に落つ。今時を透らず那邊を透らず、撈着すれば瞎驢氷稜に上る。今時の易きを執らんか、古の難きを執らんか。如何に末世なればとて、云甲斐もなき有樣なり。古人も末々は禪法も正體もなく成り果つべきを知り玉ひけるにや、妙心を瘡紙に求め、正法を口談に付すと兼て悲み云ひ置かれたるなるべし。此の事若し紙授口傳にて濟むべくば、神光の臂を斷ち、玄沙の足を傷ひ、法身は頭腫れ、法燈の淚を落す

飢へ渇へて作法ばかりを行ずるも有り、田畑の有り處も知らで、晝夜に田畑田畑と叫ぶも有り、田地の廣大なるを、少し斗り見付て、大憍慢して、婬酒食肉、心に任せて亂行なるも有り、長者の心に契ひたる子は一人もなきが如し。田地とは、一心の妙法を指すなり。帳面とは諸經論を云ふなり。人の門戸に傍ひて乞食するとは、開佛知見の大事は自身艱難刻苦して、冷煖自知する事なるを、末世になりては、人の教を受て正體もなき事を聞覺へて大悟とする事なり。是れは法華經の窮子の中の窮子ならずや。方等部にては、四果の聖者をさへ二乘なりと呵責し玉ひしものを、人々の教へ玉ふ通りの埒も無く、たわいもなく、繩にも、かつらにも掛からぬ事ならば、何しに佛は六年まで雪山に閉ぢ籠りて、皮骨連離し絲を以て瓦を編み立てたる如く痩せ衰へ、蘆の膝を突き貫いて、臂まで穿ち拔きたるをも覺へ玉はず、目のあたり雷の落ちて牛馬を打殺したるをも御覺へましまさぬ程苦吟し玉ひて、初めて佛知見を開き玉ひたるは、如何な

ひ〳〵の有様なり。偶々有るに似たるも、此の頃は皆々教へ事に成りて、云甲斐もなき風情なり。大日經にも如法に心を知るべしと說き玉ひたるものを、顧みる人さへなけれ。法華經の教に隨はず、妙法は何つ地に在るも知らで、うろうろとして、西ぞ東ぞとて、混さわぎに騷ぎ廻りて、佛道なりとて月日を送るは、譬へば此に大福長者有らんに、初め多少の艱難を經て、限りも無き田地を切り開きて、儞等も此の田地を耕して、我が如く大福長者になれとて、大勢の子共に優劣もなく過分の田地を讓り與へたりしに、父の教に隨はずして、何れも佗國に流浪し、人の門戶に傍ひて乞食するも在り、我は鏡磨なりとて瓦を把りて磨き行くも在り、粟稗の鳥を追ひてすくみ居るもあり、長者の子なりとて自身は乞食非人の體にて、妄りに人を輕ろしむるもあり、田畑の帳面ばかり、每日繰りかへして、田地の有り處も知らぬも在り、帳面さへ有れば恐るゝことはなきぞとて、恣まゝに惡行を行ずるも有り、我は長者の作法を知りたりとて、

事、皆是れ目前に充ち溢れたる妙法の佛心、前後に澄み湛へたる眞如の法性を、及びもなき事なり、存じも寄らぬ望なりと打棄て、筋なき妄想情識の了簡を頼みて、空しく暮せるより起る事なり。惜みても惜むべきは三界無比の妙法、醍醐上味の經典なれども。教の如く修行する人なき故に、文車に稠載たる世の並並の書藉と共に有り甲斐も無く、闇々と朽果て、穢土淨刹と見違へ、三塗六趣と思ひ成す事、嘆きの中の嘆ならずや。問ふ、教の如くとは如何なる教をか指すや、四安樂の法門か、五種の法師の行持か。曰く否らず、方便品に謂ゆる開佛智見道故出現於世の本文、經中の眼目なり。番々出世の如來、無量劫沙の法を說き玉へども、何れも一切衆生に佛知見を開かしめんためなり。然らば佛知見の望なくて、如何なる法を行じたりとも、諸佛の本懷に契ふことは、努々これ有るべからず。開佛知見とは、一心の妙法を發明する事なり。悲みても悲むべきは、今、末法澆季の世の中なれば、一心の妙法の沙汰はすたれ果てゝ、思

な仕ぞ、かせぎ振見するな、一二枚ある古ぎも脱ぎすて、菰をなん被りて、我我は告る方もなく、居ど立どに迷ひたる貧窮下賤の者に侍り。哀れ助け玉ひてよとて打ち泣き〳〵行きたらんに、慈悲深き世の中なるものを、など、口一つばかりすぎ兼ぬることの在るべき。少しも疑ふ心なくて、兎せよ角せよと教へられて悦び勇みて、誰々も兼てより斯くなん思ひつることよとて、生れも付かぬ貧者に成りて一生を送るに似たり。此等の輩を自棄自暴の人と云ふ。林才は甘なつて下劣の人となると呵責せられたり。是れは左ながら魚の水中に在りながら、我等風情にて水など見んと計るは及びもなき事なりと嘆き、鳥の長空を翔りながら、今時長空などを見んと計るは存じも依らぬ望なりと悲むに似たり。殊に知らず十方法界の中、眞如ならざる國土なく、妙法ならざる衆生なきことを。惜むべし唯心の妙法寂光淨土の眞唯中に住みながら、生前には娑婆なりと偏執し、衆生なりと妄想し、死後には地獄なりと見錯り、無間なりと泣き悲む

しもて行きたらんには、必ず鎌にて水をなん呑むべきぞ、存じも依らぬ事なるぞとよ。つもりても見よや、和殿原や我等如きの疲孩子者どもが、芝野を見るが如くなる草生茂りたる田地を草刈切り立て耕すべし、水載、鋤上げ、種稼し、早苗し、植付け、耘きり刈り干し、こき上げ、糠磨、繩なひ、菰あみ、俵積み上げ、高あぐらして詠め見んずる事、安堕通途にて遂げらるべきことかは。夫れは昔物語なるぞ。在らぬ様なる端立なるぞや。夫れよりは安々とぬき入れ袖手して世渉るすべは在ることぞや。彼方此方行ても、五日三日宛の日は送らるるぞかし。肩ありて掛けずと云ふことなく、口有りて食はずと云ふことなしと聞くものを。殊更何某の國の何某の侯は仁德厚くおはして、我々如き者をば扶持し玉ふと聞くなるに、果ては其へなん行くべきぞ。斯斗り好き事のあるに、なに歎くことのあるべき。手足をなん動かして、自力にて口すぎんとかゝるは、又なき僻事なるぞ。心ばからいなしぞ、初より下手に組むが好きぞ。働きだて

自ら飢凍を苦しむが如し。末世には去る事は及ばぬ事なりと恐れ玉ひぞ。遠くは慧心院の僧都、近くは赤澤の卽往、山城の圓愚、大坂の病女、何れも稱名の力に依て、右の素懷を遂げ玉ひたるぞかし。法然上人も此の御望は深くおはしけれども、先達無き故に、翼短くして長空に翔らざる心地なりと宣玉ひき。末法澆季の驗にや、近代惡しき風俗起りて、出家も在家も見習ひ聞き習に成りて、今時妙法の佛心などを見んと計るは、鰻が木に上らんとする心地なるぞとて、闇々と一生を過ぎ往くこと淺ましき心ばへなり。是れは左ながら過分の田地を讓られたりし百姓の子共數多在るべきに、其の內一人輭弱不肖にて、而かも口利て小黠しげなるが曰く、今時我々風情の柔者共が、先祖昔の人々の眞似美仕て農業耕作などして、大勢の妻子眷屬など養育せんと計るは、及びもなき事なり。其れは左ながら家鴩が鷹の眞似して鶴と組て落んと羽づくろひする如く、鼈の鯉の眞似して瀧上りせんとて頭さし伸るに似たることぞ、片腹こそ痛けれ。左

どや七種の寶樹、八功徳池の有様を見届けずやは在るべき。眞言の人々は、陀羅尼微妙の威力に依て、是非とも阿字不生の大日輪を拜し上るべしと、禪門に於て一則の話頭を擧揚する如く、精進勇猛の憤志を震つて、繰りたらんに、高野大師も不轉肉身と唱へ玉ひたるものを、などかは彼の金剛不壞の正體を磨き出さずやは有るべき。何れも死後を待て利益に預らんと打ち延ばし玉ふは、不覺油斷の至り、覺束なきものぞかし。遠き事など嘆き玉ひぞ、八重の潮路を隔てたる唐天竺の事を見玉へ、聞き玉へと云はんにこそ、遠き事とは嘆くべけれ。自心を以て自心を見る、吾が瞳を以て吾が瞳を見るより近き事には侍らずや。深き事とな惶れ玉ひぞ。九淵の潭の底、千尋の海の中なる物を見玉へ、聞き玉へと云はんにこそ、深き事は惶るべけれ。吾が心を以て吾が心を見る、吾が鼻を以て吾が鼻を嗅ぐより近き事には侍らずや。世は末世なれども、法は更ら／＼末世ならず。末世なりとて打棄て顧み見玉はずば、寶の山にありながら、

も亦掌を撫して大笑すべきぞかし。何が故ぞ。此れ總に長沙の謂ゆる識神を認得する底の癡人ならずや。楞嚴に賊を認めて子となす、終に元淨明の體を知ること能はずと呵せられしは此等の部類なり。殊に知らず、如來は四果の聖者の阿伊越智地に至り、我法之眞理に達し、神通具足し、名稱普く聞へ玉ふをさへ、禪を知れりとは許可し玉はず。故に經に曰く、我が弟子大阿羅漢、此義を解することを能はず、只大菩薩衆のみ在て、此の義を解すべしと說き玉へるものを。見性の功さへなくて、妄りに自ら尊と稱す。是れ何の心ぞや。只人は兎も在れ、萬緣抛擲して唱ふるに越へたる事は無き事なり。去りながら、題目ばかりの利益なりと偏執し玉ふべからず、眞言に限らず、淨土に限らず、何れも優劣有るべからず。淨家の人々は、專唱稱名の功力に依りて、是非々々一回唯心の淨土己身の彌陀の妙相を見届けでや置くべきと、傑烈の大志を憤起し、頭燃を救ふが如く、間もなく唱へ進みたらんに、佛も去此不遠と說き玉ひたるものを、な

樹林念佛念法の妙莊嚴を目のあたり見屆け、娑婆卽寂光の正眼を開き、草木國土悉皆成佛の田地に至らんこと、毫釐も相違有るべからず。然らば卽ち人中天上の善果何事か是に如かんや。是れ卽ち三世の諸佛出世の本懷なり。一返の題目は、禪門一則の話頭と其功異なることなし。此等の趣、三世十方の賢聖、扶桑八萬餘座の神處もおはするものを、老僧が毫髮ばかりもあやぶむ處あらば、何れに罪作りに管々しき事を書送り侍るべきや。少しも疑ひ玉ふべからず。此の上猶々怠り玉はずば、禪門に謂ゆる左手を握て中指を咬む等の心地も次第に明なるべし。今時往々に言ふ、參禪無益なり、話頭了して什麽せん、卽心卽佛の直指なれば、念の起るをも愁へず、念の止みたるをも喜ばず、山賤の白木の合子、只生れ付きたる自性の儘がよきぞ。漆付けねば剝け色こそ無しとて、徒に日々盲龜の空谷に入るが如くし、去つて以て足れりとす。此は是れ天竺の自然外道の所見なり。恁麽にして佛心向上の宗旨なりと稱せば、七村裡の土地

へらるべし。此の首題を杖にも力にもして、是非とも法華眞の面目を見届くべしと深く望みを掛けて唱へらるべし。願くば出る息、入る息を題目にして欲しきことよと隨分親切に斷へ間もなく唱へらるべし。唱へ〳〵て怠らずんば、久しからずして心性たしかに大石などをゆり居へたる如くにて、一心不亂の心地は、ほのかに覺へ有るべし。其の時にすら置かず隨分唱へらるべし。いつしか聞き及びし正念工夫の大事に契當して、平生の心意識情都べて行はれず、金剛圈に入るが如く、瑠璃瓶裡に坐するに似て、一點の計較思想なく、忽然として大死底の人と異なることなけん。纔かに蘇息し來らば、覺へず純一無雜打成一片の眞理現前して、立處に法華眞の面目に撞着して、乍ち身心を打失し、本門壽量久遠實成の如來は目前に分明にして、推せども去らじ。此の時に當て天台の法性寂然寂而常照の寶處に投入し、眞言の阿字不生の慧日に照らされ、律宗の諸佛無上の金剛寶戒に冥合し、淨土の卽身往生極樂國土の素懷を遂げ、水鳥

見すべし。三界の秘密を學得せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし。彼の黄卷赤軸のみを把らへて法華經なりと偏執せんより、須らく眞の法華を一見すべし。口に百千萬部の法華經を讀誦せんよりは、須らく眼に一回、眞の法華を見るべし。是れ實に成實不壞の高談なり。如何して法華眞の面目を徹見すべきぞとならば、先づ須らく大疑團を起すべし。何物を指してか法華眞の面目とはするぞ。自己本有の妙法の一心なりと聞くからに、自心を見るに如かず。自心とは如何なる物ぞ。白き物とやせん、赤き物とやせん、是非々々一回見得すべきぞと猛く甲斐々々しき志を震つて、大誓願を起して晝夜に究め見るべし。自心を參究するに、行持は樣々多き中に、佗宗は知らず、法華經の行者ならば、法華三昧の行持に越へたる事や侍るべき。法華三昧の行持とは、今日より思ひ立ちて、憂きに付け、つらきに付け、悲しきに付け、嬉しきに付け、寢ても覺めても、起ても居ても、混らに法華の首題を南無妙法蓮華經〳〵と間もなく唱

存じも寄らず、自家の飢渴も亦た救ふこと能はず、彼の二利の願行に於ては、望を其の間に斷つものなり。何の用を作にか堪んや。若し又眞の法華を一見して此の經を持つ人は、彼の一椀の水を江湖に投つが如し。乍ち三萬六千頃の煙波と泯合し、德澤を大湖と共にして、飛ぶ者、走る者、翔る者、蠢く者、同じく共に行て呑まんに、盡ることとなし。眞の法華を見ざる人は、一椀の水を擎る人の如し。佗を利すること能はざるのみに非ず。自己も亦利すること能はじ。眞の法華を一見する人は、彼の一椀の水を江湖に投ずるが如し。覺へず諸佛の大寂滅海に投入して、諸佛の眞法身戒定智慧と冥合して、乍ち賴耶の暗窟を擊碎し、大圓鏡光を放出して、塵沙劫を經て大法施を行ぜんに、終に乏しきこと無し。一見法華の功德の廣大なる事、上下四維等匹無し。有人自一切の諸經論を熟讀せん。須らく眞の法華を一見すべし。無量の實塔を修造せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし。百千の佛を造立せんよりは、須らく眞の法華を一

行持あらん一日は貴ぶべき一日なり、行持なからん百年は恨むべき百年なりと宣玉ひき。寔に適受け難き人身を受けながら、何の行持の心もなくて、逢ひ難き一生を闇々と犬猫などの何の覺悟も無くて朽ち果つる如く、苦しかりし三塗の舊里へ懲りもなく立ち歸らんずること、口惜しく淺猿しき境界哉と淚を落すべき事なり。然るに難きことは甚だ難しとは、我得て疑ふことなし。易きことは甚だ易しとは、如何なる故ぞとならば、若し人、此の經を手を放ちて行住坐臥に易すくと持たんとならば、誓て一囘法華眞の面目を見屆くべしと願ひ玉ふべし。法華眞の面目を一見したらん上は、咳唾掉臂、動靜云爲、草木瓦石、有情非情、悉く皆妙法蓮華經と現成する故に、十二時中此の經と冥合す。何ぞ別に持つことを用んや。眞の法華を一見せずして法華經を持たんと擬するは、譬ば此に一人有らんに、手に一椀の水を擎げて建さじ動さじと晝夜に愼み守りて養ひ增さんと願ふが如し。縱ひ一生擎げ守りて十成なるも、養ひ增すことは

を舐りて藥なりとして病を治せんと計る者の如し。大に錯り了れり。若し人、此の經を持たんと欲せば、十二時中、胸中一點の翳曇りも無く、不思善不思惡の當體を正念工夫の眞修と云ふ。去る程に文殊大士の化身にておはせし寒山子の偈に、菩提の道を得んと欲せば、胸中絲をも掛けざれと。如斯の正修は、三世の如來も、一切の智者高僧も此處より大悟得道し玉へる事にて、萬古不易の大綱なり。一念不生、前後際斷、頓悟成佛の直路なれば、如來の此經難持と宣玉へるも理り至極ならずや。大凡そ三教の聖人も實處に至りては大段同じ。其の進趣の淺深精麁に依りて得力の高下は有るべけれども、最初の一歩は趣等し。儒門には此の處を至善と云ひ、未發の中と云ふ。道家には主一無適と云ひ、神家者は高間が原と相傳す。天台には一念萬年止觀の大事とす。眞言には阿字不生の觀法と云ひ、家々の祖師達の坐禪を勸め、誦經を勸め玉ふも、誦み〳〵唱へ〳〵て、一心不亂純一無雜の田地に至らしめん方便ならずや。永平の開祖も

經の行者とは云ふべきぞとならば、蓋し三種の根機在り。下根の行者は黄卷赤軸を把らへて讀誦書寫解說し、中根の行者は自心を觀照して此の經を受持し、上根の行者は眼に此の經を見徹して、如レ見二自心面一。是の故に涅槃經に曰く、如來は目に見二佛性一玉ふとは是れなり。法華經の行持は、大乘至極の眞修なれば、中々容易の沙汰にし非ず、易きことは甚だ易く、難きことは甚だ難し。去る程に本文にも此經難持若暫持者我卽歡喜諸佛亦然と說き玉ひて、至極大切の行持なり。天台の智者の曰く、手に卷を把らずして、常に此の經を誦し、口に言音を出さずして、徧く衆典を誦し、佛、說法し玉はずして、常に法音を聞き、心に思惟せずして、徧く法界を照すと。是れ眞正誦經の樣子なり。試に問ふ、卷を把らずして誦する底、是れ那箇の經ぞ。自心妙法に非ずや。思惟せずして徧く法界を照すと、是れ何物ぞ。眞正の蓮華に非すや。是を無字經と云ふ。徒に黄卷赤軸のみを把らへて法華經なりと偏執するたぐひは、彼の藥帖上の記

へども、外より持ち來り玉ふに非ず、凡夫にておはせし時、急度具足し玉ひし佛性の有樣を其の儘に宣べ玉ふものなり。衆生にておはせし時も成佛の本懷を遂げ玉ひて後も、一心の妙法は少しも添減なきが如く、蓮の泥中に在りし時も、咲き亂れたる夏も少しも變遷なきに等し。故に假り用ひて、且らく一心の妙法に喩へ玉ひたるものなり。是れ卽ち人々具足の佛心を妙法蓮華經と名付け玉ひたる慥かなる證據ならずや。扨て又經とは常に云へる字義にて、常住佛性の義を顯し玉ふものなり。常住佛性とは、此の心性は佛に在りても增しもせず、衆生に在りても減じもせず、天地と同根、萬物と一體にして、曠劫以後少しも變易なき處を指して經とは說き玉ひたるなり。然れば妙法は佛心の體、蓮華經は佛心の妙法を譬に設けて讚歎し玉ひたるにて、畢竟一心の唐名なり。一實二名、餅を歌賃と云つた程の事なり。然れば眞實の法華經は、手にも把られず、目にも見へざるものなるを、如何にやは受用すべきぞ、如何樣に心得たるを、法華

に向ひて尋ね求むるに、聲もなく臭も無し。然らば一向に頑空無記なる物にして木石の如くなりやと思へば、例の通り千變萬化自由自在にして、有と云はんとすれば有に非ず、無と云はんとすれば無に非ず、言語道斷、洒脱自在なる處を假りに且く妙法とは名付け玉ひたる事なり。蓮華とは蓮の泥土の底に在りても少しも泥土に汚されず、妙なる色香を具足して失はず、時を得て麗しく唉き出るは、此の妙法の佛心の衆生に在りても穢れず減らず、佛に在りても淨からず增さず、佛も凡夫にて在せし時は、一切衆生に少しも違はせ玉はで、五欲の泥土に汚され玉ふは、左ながら蓮の泥中に在るが如し。其の後、雪山に於て本具の眞性を發明し玉ひて、希有なる哉一切衆生如來の智慧德相を具すと高聲に唱へ玉ひて、頓漸半滿の諸經を說き宣べ、三界大導師と成り玉ひて、梵天帝釋に尊信せられ玉へば、蓮の泥中を出で麗しく發けたるが如し。蓮の泥中に急度具足して居たりし色香を水上に唉き出すが如く、佛も無量恒沙の法を宣べ玉

りと覺悟致さるべし。然るに妙法蓮華經の五字一心の源を指すとは、如何なる證據か在るとならば、取りも直さず、直に此の妙法蓮華經の五字、好しき慥なる證據にて侍り。如何にとなれば、妙法蓮華經とは、一心不思議の德を讃歎したる題號にて、一心本具の性德を指し顯はしたる言葉なり。子細は大凡そ手迹にもせよ、畫圖にもせよ、誰々は琴の妙を得たり、誰々は琵琶の妙を得たりと云はれんずる人も、其の妙とは、如何なる場所を申すことに侍るぞと問はれたらん時に、如何なる辯才利口の人にても、中々言葉に演ることは叶はざる事なり。去る程に父子不傳の妙とて、吾が大切なる一子にさへ敎ふること能はず。妙處に至りては、吾とても覺へず知らぬ處より働き出る事なり。人々具足の妙法の心性も左の如し。只今此文を披覽し、或は笑ひ或は談じ、緒環の絲繰り出す如く果しも無く、五人に逢ても十人に逢ても、少しも間違も無く働きもて行く事不思議なる有樣ならずや。然るに何物か斯の如く自由には働くことぞと內

至極に到りては、一切衆と三世十方の如來と山河大地と法華經と悉く不二同體なる法理を諸法實相と説き玉ひたる、是れ卽ち佛道の大綱なり。大凡そ世尊一代頓漸秘密不定の法門有つて、無量の妙義をのべ玉ひて、五千四十八巻の諸經有れども、其の中至極の旨は、法華一部八巻の裏に促り、法華一部六萬四千三百六十餘字の極意は、妙法蓮華經の五字に促り、妙法蓮華經の五字は、妙法の二字に促り、妙法の二字は、心の一字に歸す。心の一字は、却て何れの處にか歸すとならば、兎角龜毛別山を過ぐ、畢竟如何。限りなき春を傷しむ心を知らんと欲せば、盡く針を止めて語らざる時に在り。去る程に妙法の一心は展る則んば十方法界を含容し、收る則は無念無心の自性に歸す。是の故に心外無法とも説き玉ひ・三界唯心とも諸法實相とも説き玉ひぬ。其の極處に到つては、法華經と云ひ、無量壽佛と云ひ、禪門には本來の面目と云ひ、眞言には阿字不生の日輪と云ひ、律家には根本無作の戒體と云ふ。皆是れ一心の唐名な

遠羅天釜　卷之下

法華宗の老尼に贈りし書

老夫當秋より法華講演の刻、心外に法華經なく、法華經外に心無しと申し談じたりしを聞き及ばれ、怪しき事に思ぼして書通を以てなりとも、右の道理を申し越し、其の外にも有難き事どもあらば書き付遣はし候樣との御事。これによつて大略の趣書付け進じ候。何返も繰り返へし披覽致され、能く得心是れあるべくそろ。成程我等常々申し談じ候通、心外に法華經なく、法華經外に心なく、心の外に十界なく、十界の外に法華經なし。是れ卽ち決定至極の法理にて、愚老に限らず、三世の如來も十方の賢聖も、極處に到りては皆々斯の如く說き玉ふ事にて、法華本文の大意は、大段これらの趣を宣べ玉ひたる事にて、此の外にも八萬四千の法門を宣べ玉ひたれども、皆權教の說にして方便門を出でず、

遠羅天釜卷之中終

希れなることを。老僧中頃道士白幽に聞き、効驗の遲速は行人の勤と怠とに在るらくのみ。怠らざれば長壽を得。言ふことなかれ、鵠林老去つて、大に老婆禪を說くと。恐くは知音の一見して手を拍して大笑する在らん。何が故ぞ、不レ臨レ亂不レ見二貞臣操一。不レ臨レ財不レ知二義士志一。

浸々として潤下し來つて、兩肩及び雙臂兩乳胸膈の間、肺肝腸胃脊梁臀骨次第に沾注し將ち去る。此の時胸中の五積六聚疝癖塊痛、心にしたがつて降下する事、水の下におもむくが如し。歷々として聲あり。遍身を流へ潤して、下つて雙脚を溫む、足心に至つて卽ち止む。行者再び此の想念を成ずべし。彼の浸々として潤下する所の餘流積り湛へ、暖め蘸して、恰も世の良醫の種々妙香の藥物を聚め、此を煎湯して浴盤の中に盛り湛へて、我が臍輪以下を漬浸するが如しと。此の觀を成す時、唯心所現の故に、鼻根希有の香氣を聞き、身根妙好の輭觸を受け、身心調適なり。乍ち積聚を消融し、腸胃を調和し、肌膚光澤を生じ、大に氣力を增す。若し時々に此の觀を成熟せば、何れの病か治せざらん、何れの仙か成ぜざる。此れは是れ養生の祕訣にして、長生久視の妙術なり。此方始め金仙氏に起つて、中頃天台の智者大師に至つて、大に勞疲の重痾を治し、且つ其兄陳秦が必死を救ふ。澆末難遭の寶方なり。宜哉、此道今人知得する底

茲に一方あり、尤も虚弱の人に宜し。心氣の勞疲を救ふ事甚だ妙なり。上昇を引き下げ、腰脚を溫め、腸胃を調和し、眼を明にし、眞智を增長し、一切の邪智を除く事大に効あり。輭酥丸一劑、諸法實相一斤、我法二空各一兩、寂滅現前三兩、無欲二兩、動靜不二三兩、絲瓜の皮一分五釐、放下着一斤、右七味忍辱の汁に浸す事一夜、陰干して抹す。例の通り般若波羅密を以て調錬し、丸して鴨卵の大さの如くならしめて、頂上に安着す。初心の行者は藥種如何、斤兩如何を觀すべからず。只色香微妙の輭酥、鴨卵の大さの如くなる者の我が頂上に頓在すと觀ず。病者このくすりを用ひんと要する時、厚く坐物を布き、梁骨を竪起し、目を收めて端坐し、徐々として身心を淘定めて、須く思惟すべし。大凡そ生を保つの要、氣を養ふに如かず、氣盡る時は身死す、民衰ふる時は國亡ぶるが如しと、此の語を三復し畢つて、正に此の觀を成ずべし。彼の頂上に安着する輭蘇鴨卵の如くなる者の其の氣味微妙にして、遍く頭顱の間を潤し、

手引を受け玉はず．道心深からずして少斗りの會所など賴みて、口利人にも貴ばれ玉はゞ、見事なる似せ者なるべきぞ。操履を愼み、正念を守りて、事足り玉はずば、如何なる野の末、山の奥にても飢へ死、寒へ果て玉ふべし。黃金は菰に包みても黃金なれば、眞の佛祖の兒孫、神明掌を合せて尊信し、龍天頭を低うして擁護すべきぞかし。諂ひ屈みて財產を積み重ねて、千僧の葬儀、七寶の莊嚴あつて、幡蓋目を奪ひ、道場心を驚かしたりとも、閻王怒眼を張り、午頭鐵鞭を撚つて相待たんは苦々しかるべきぞなど、戌の上刻より丑三ツ頃まで物語りせられけるを、傍に侍りける兩三輩、只片た時斗りの心持にて、感淚肝に銘じ、漸汗肌を浸し侍りき。其後病中などに此の物がたり思ひ出し侍れば、乍ち慚愧の心起りて、病苦も輕く成り行く樣に覺へ候故、有ら增し書き付けて遣す事、延壽堂中の人々、病中の道情の一助ともなれかしの心にて侍り。去りながら、如上は正受老漢平生受用底の施藥にして、甚だ一味單方攻擊の冷劑なり。

老は七夜まで處々の墓原に坐し明かしたるぞ。是は彼等に圍まれ、耳の根、咽笛など吹き嗅れんずる時に、正念工夫間斷ありや否やを矯し試みん爲めなり。蛇にもせよ、水神にもせよ、男子たる者の思ひ立ち、取りかゝりたる事を遂げずや置くべき、仕果てずや在るべきと思ひ定めて、如何なる飢寒をも忍び堪へ、如何なる風雨をも堪へ凌ぎ、火の底、氷の底に浸りても、佛祖の開き玉ひたる眼を開き、佛祖の到り玉へる田地に到りて、宗門の大事を參歇し、末後の奥儀を徹了して、十方參玄の衲子を惱害し、釘を拔き、楔をうばつて以て佛祖の深恩を報答すべしと、歴劫不退の大誓願を憤發し玉はゞ、病、何れの處にか湊泊せん。古德の修行に一人として疎なるは無き事なれども、中に就て玄沙慈明などの幾多の艱辛を歷玉へるは、取り分け貴く覺ゆる事なり。油斷し玉ひたらば、果して相似の修行者になり玉ふべきぞ。但し相似とは似せ者と云ふ心なり。誰やの人か不足なき身に似せ者と成らんと思ふ人は無き事なれども、好き法友の

ひ、上も無き佛心を妄緣の塵埃に吹き埋ませて、此の招請、彼この供養には、似合はぬ綾羅絹布を惜しげも無く着莊り、得もせぬ禪道佛法を、ゑしやくも無く說き散らし、無智の白衣に對しては、孔明子房が辯口を逞うし、苦汗の財施を掠め取るには、目連鶖子の神通を得たり。暫時の名利を偷み求めて、因果を信せず、報應を恐れず、臘月三十日、孤燈獨照、半死半生の際に到て泣き吁嗟、七顚倒、八狂亂、手脚の置き處なく、跑き死にして、弟子門徒の面て伏せに成り玉はんは、違ひは有る間布きぞ。今の人々の心ばへにて、禪道修行の人と云へば、何國の誰か佛祖ならざる者の有るべきぞ。不思議の因緣にて斯る物すごき處に來りて、一夏をも明かし玉ふものを、何しに惡布き事教へ申すべきぞや。世間は知らず、老僧が破屋の内には、甘く心易き佛法は無きことなるぞ。兎にも角にも修行者は吾が身を高ぶり、吾が身を重んじ、吾が身を贔屓する程、惡布き事は無き事ぞや。一年、狼の多く來りて、此の麓の里へ寃をせし時に、愚

らん人をば、臭爛膨壞の死人とすることなり。相かまへて容易に心得べからず。寔に保ち難く、寔に守り難きは正念工夫の大事なるぞや。末代の悲さは人每、名聞の心强く、利養の心盛にして、道心在げに見せかけ莊り立つれども、正念工夫決定の人は得難き事なり。增して正念工夫相續不斷の人を求むるに、千人萬人が中に一人も無き事なるぞ。老僧十三歲にして此事あるを信じ、十六歲にして娘生の面目を打破し、十九歲にして出家、三十五歲にして此の山に遁居す。今年六十五に向とす。中間四十年、萬事を抛下し、世緣を杜絕し、專一に相守て、漸く五六年來、眞箇正念工夫の相續は得たりと覺ゆるぞ。檀那施主に輕薄追從し、利養の名聞を希望貪求しながら參禪工夫せんとは、寔に片腹痛き事なり。往々に師學ともに常住の福澤を榮耀とし、多衆閙熱を宗風とし、辯才利口を智慧と思ひ、衣食の結構を佛道に充つ。尊大美麗を道德とし、世人の信仰を法成就の時なりとす。悲んでも悲むべきは、得難き人身を名聞の奴婢に責め使

間正念工夫打失せざるを第一とすべし。大慧禪師曰く、那時か是れ打失の處、那時か是れ不打失の處と、一切處に於て如是點検せよと。是れは是從上の諸聖正念工夫親切の樣子なり。是れ則ち萬古不易の正修なり。是を直心とも佛性とも菩提とも涅槃とも無位の眞人とも云ふなり。此の眞人は空刧以前、空刧以後、少しも病氣もなく、鼻もしみたる事は無き人なるぞ。此れを法華には久遠實成の古佛と稱嘆し玉へり。南岳の隨意願行に、昔在靈山名法華、今在西方名彌陀、濁世末代名觀音と釋し玉へるも、此の道人の事なるぞかし。此の人を供養し、此の人を尊信し、此の人に親近して打失せずんば、何れの病か治せざらん、何れの道か成ぜざらん。佛法中には病み疲れたる老女、痩せ悴けたる老夫なりとも、正念工夫間斷なくんば、無病堅固の有力の人とす。縱ひ七尺八尺の身材あつて、身子の智圓かに、滿慈の辯饒かにして、三教五論を講じ得、五家七宗の奥義を究め盡して、力、周鼎を扛げ、眼、寰宇を空じたりとも、正念工夫無か

ち有情非情同時成道草木國土悉皆成佛の素懷を遂げたるぞや。小法師原が聞き知るべき事にし有らねど、斯く有難き慧日に逢ひたる目出度さに、物語りはするぞかしとて、嬉し泣きに打泣き〳〵語られけるが、後には道業比類もなくおはしける由。其外異國にも殊宏の湯厄、蒙山の痢疾、何れも病に依りて道心進み玉ひける人々は間々多きぞかし。和僧達は左ばかりの小病にけぎたなく云甲斐もなきありさまかな、なじかは昔の人々にも劣るべきや。只今死なんずとも正念工夫目出度くて死に玉はんには、眞の佛祖の兒孫たるべきぞ。斯く云へばとて重病受けんを待つて參禪工夫せよとにはあらず、快げに健かならんずる人々も、日夜に怠らず、彼の人々の如く用心したらんには、十人が十人、百人が百人ながら、學道成就せざる事は有るまじきぞ。兎にも角にも正念の工夫程貴ぶべく重んずべき事は無きことなるぞとよ。正念の端的未だ悟入なからん人人は、眞正の道師に見へて第一に決定し玉ふべし。決定あらん後は、四威儀の

どめき玉ふことよとて打ち笑ひければ、上人も打ち笑みて、やをれ小法師よ、三日以前のうめきは叫喚泥梨の苦痛、三日以後のうめきは最大微妙の法音なるぞ、慢り笑ひて誹謗正法の御罰を蒙るべきぞと云はれければ、小法師返へして、左ばかり早く手の裏を反へす如くに成佛ばし仕玉へるにこそと申しければ、去ればとよ、佛も懈怠の衆生の爲めには涅槃三祇にわたり、勇猛の衆生の爲めには、成佛一念に在りと說き玉へるぞや。去りし頃、病苦の堪へ難くて次第に性體もなく行くまゝに、來生の業苦を恐れ、生前の行體を悔みて、泣き明かしけるが、思ひ直して大日不二觀念に入り、目を閉ぢ、齒を切つて、間も無く勤め進みたれば、貴やな何つしか病惱は攪き拭ひたる如く打消へ、病に伏したる形骸は、瑜伽微妙の寶印と現し、圖らずも金剛不壞の正體を成就し、此のうなりどめく聲は、三密不思議の大陀羅と冥合し、寢たる牀は毘盧本有の大道場と打ち成り、百界千如の大曼陀羅は、心上に嚴然として目前に燦爛たり、嬉しや乍

失せたる心持にて、大安樂なるのみにあらず、眞正生死不二佛魔同體の眞理に契當し、唯有一乘金剛不壞の奧儀に徹底したるぞかし。今日より後は如何樣の逆緣重障なりとも、菩提を妨ぐる事は在らじと覺ゆるぞ。人々も少し斗りの會所得力在らんを賴み玉ひて、玆はの時に至りて、愚老などの如く輿さまし玉ひぞ。還す〳〵も健ならん時に正念工夫怠り玉ふべからず。賢しくも煩ひけることよ。箇程目出度き事や在るべき、思へば〳〵此度の腫物は愚老が爲めには、上もなき善知識ならずや。然らば則ち如何なる供養をもし、如何なる讚美をも述べ度く思ふに、次第に癒へ行き玉ふ事の名殘り惜しさよとて打笑み玉ひけるを、其時隨侍申しける僧の物語しけるを聞きたるぞかし。又或る眞言師の驗者なりと聞へ玉ふ法印の御坊の重き傷寒を惱み玉ひて、夜晝の分ちもをはさで、呼號（うなり）どめき玉ひけるを、弟子の小法師の小黠なるが打ちきゝて、あの御坊の日頃の氣情にも似玉はず、吾等を呵責し玉へる時の言葉にも似玉はで、あの忍痛（うやり）

に事缺きたる事もなく、修行に不足もなき境界なりと思ひて、修行も打ち棄て、憶念も無く供養など受け、ゑしやくも無く立ち振舞ひけるが、思はずも斯る重痾に沈みて、五體も煎り上りしが如く、骨節も碎け離るゝ斗りなれば、氣遠く、心塞がりて、黑繩衆合燒熱叫喚の苦患を纔かに形體に集め上せたる心持にて、悟りも見解も何地へや行きぬらん、半點の力をも得ずして、殘る物とては想念と苦痛とのみなりければ、穴口惜し、斯る惱み苦しみ死したればとて、誰怨むべき事にしも有らず、迚も助かるまじき命なるに、是より正念工夫にとり掛りて、苦惱や勝つべき、工夫や勝つべき、心の長けの及ばん程は、責め戰はんものをと思ひ定めて、傑烈の大志を憤起し、勇猛にはげみ進みけるに、一度も二度も苦るしく絕へ入る心地しけるが、打ち返へし取り直して間斷もなく進みける程に、何つしか戰ひ勝ちて、晝夜の堺も無くて、寐寤の隔も無くて、終には打成一片の工夫現前して、此の十四五日以來は、想念も苦惱も雲霧などの晴れ

かし。中頃、去る老和尙の重き腫物を受け玉ひて、背後は爛冬瓜の如く腫れ塞がりて、目も當てられぬ病惱なりけるに、湯藥食事進め參らするより外は、人をも近か付け玉はで、目を打ち塞ぎて惱み伏し玉ひけるに、或時、法眷の人々兩三輩見へ來りて見問ひ上りける處へ、外療の人來りて、土肉とらんとて、膏藥に藥を加へ參らせたれば、今夜は常よりは痛ませ玉ふことも侍りぬらん。斯る貴き御身に心なき腫物の出で來りて、日數多く惱ませたる御いとをしさよ。去るにても今日よりは瘉肉の上り玉ひて、目出度快氣増しまさんを待ち上る斗りなるぞやとて、撫で痛はり申しければ、上人は濃く寢入りたる人の目打ち覺めたる御貌ばせにて、人々は能くこそ見へ來り玉ふもの哉、包み果つべきことならねば、物語して聞かせ申すべきぞ、誰々も近かより玉ひてよ。扨ても此度の病惱は、愚老が爲めには貴き善知識なるぞや。腫物の影にて、二十年の非を知り、四十年の素懷を遂げたることの嬉しさよ。重病受けざりける以前は、悟

は看病の人に打ち任せて、只狗猫など惱み伏したる體にて、何の合點も無く、何の了簡も無く、只一向に蒲團上の事を忘却せず、自己の正念を打失せざるを第一として、生も亦夢幻、死も亦夢幻、天堂地獄、穢土淨土盡く抛擲下して、一念未興已前、萬機不到の處に向て、是れ何の道理ぞと時々に點檢して、正念工夫の相續を千心とせば、何しか生死の境を打越へ、悟迷の際を超出して、金剛不壞の正體を成就せんこと、是れ眞箇不老不死の神仙ならずや。人界に出生したる思出ならずや。圓顱方袍の威德ならずや。佛道微妙の靈驗ならずや。眞正參禪の人の前には、吉凶榮辱逆緣順緣、盡く道業を助くる糧と成り、懈怠惰弱人の前には、假初の塵事、芥子斗りの病氣も夥しき障りに仕なして、果ては宿業の事なり。般若に緣こそ無けれなど種々の道理を付けて、遠からぬ般若を遠ざけ、根も無き業障を種へそだてゝ、一生を錯まる程苦々しく情けなき事は無きぞとよ。古來より重病を受けながら、疑團打破の人々は間々多き事なるぞ

ばあらで、妄念に食ひ殺されたるなるべし。寔に妄念は虎狼より恐ろしきものなり。虎狼は戸牆さしたる內へは入ること叶はぬものなり。妄念の狼は坐禪靜慮の牀の上、七條九條の袈裟の中へも亂れ入るやつなり。或病人はほろ〳〵と打泣きて、吾等程薄福なる者は無きぞとよ。偶々受け難き人身を受け、貴き僧形を得ながら、辨道の功をも積まず、佛道の光をも見ずして朽ち果てんずることの口惜しさよなど泣き口說きたるは、殊勝に愛らしけれども、是れも懈怠油斷の大不覺者の成れの果なるべし。大凡辨道工夫の爲めには、病中程能きことは此れ有るべからず。古來賢達の人々の岩谷に身を寄せ、深山に形を隱し玉ふ事は、世緣を遠ざけ、塵務を捨て離れて、道業純一にはげみ勤めんが爲めなり。然るに病中を除いて別の山谷なく、病中を去けて、外の深山在るべからず。病中の人は、托鉢作務の勞倦は遁れ、使僧知客の應對も省き、廣衆雜話の喧嘖も無く、僧堂の治亂を知らず、常住の豐儉を見ず、死生は天運に投げ掛け、飢寒

の僧に對して物語りせられければ、世に智慧有る人の病中程淺猿しく物苦るしき事は無きことなるぞや。智慧ある儘に來方行末の事ども際限も無く思ひ續け、看病の人の好惡を咎め、舊識同伴の間闊を恨み、生前には名聞遂げざるを愁ひ、死後は長夜の苦患を恐れ、鄕里を思ひては、羽輪の生ぜざるを憤り、神明に祈りては、感應の晩きを瞋り、目を打ち塞ぎて臥し居たるは、殊勝に物靜なれども、胸中は九國の合戰よりも騷がしく、心上は三塗の衆生よりも苦し、三合の病に八石五斗の物思ひなるべし。斯く病み狂はれ死したらんには、後の世の有樣こそ推し量らるれ。物思ひして藥にも養生にもなるためしならば、吾々も打寄り手傳ひて、物思ひ得させせんなれども、痛く物思へば、心火逆らひ上り、肺金痛み費へ、水分枯渴し、寒熱止むことなく、自盜の二汗は次第に繁りて、果ては命根も亦持ち難きに到る。是れ皆平生の志行懶惰にして、少し斗りの病を妄想心の手傳ひて、夥しく素立上げたるものなり。然れば病に害せられたるに

遠羅天釜　卷之中

遠方の病僧に贈りし書

便の度毎に貴書並に傳語、者回、欽禪人便りに又々芳書、殊更野外珍しき水沈一封、親切の至に候。貴兄事貴境へ飛錫致され候も吾等勸め申し侍れば、何とぞ道業怠慢無く、囡地一下の歡喜をも得られよかしと好き便待入候處に、夏頃より氣分惡しく、今程、延壽堂に入られ候旨、旦夕案じ暮らし候。者回、欽禪人物語には、左程の事にもこれ無く、發足二三日以前に入堂致され候由、如何斗り嬉しく存じ候。氣分は如何樣の重病沈痾なりとも、夫れは世間に打ち任せて、自分は隨分正念工夫干要と心かけ此れ有るべく候。病中苦患の間に仕拔きたる修行は、佗後如何樣の逆緣に逢ても、退墮これ無き物の由承り及び侍り。大切の時節ぞと思ぼして、努々油斷これ有る間敷候。三十年前、去る老漢病中

遠羅天釜卷之上終

間天上の善果是れに如くべからず。宰官身得度者即現宰官の大士は、豈に其れ異人ならんや。穴賢。

延享第五戊辰曆仲夏二十五蓂

沙羅樹下闡提老衲書

は。然らば則ち强將の下に弱兵なしと申す事の侍れば、龜氏慶喜、身子滿慈等の有力の武臣は、野村、田村等の人々を初め、旗下には幾人も出來侍るべし。萬一天下の大事有らんに、大將も諸卒も通身一團の眞元氣、百騎を率して萬騎に對すと云へども、從來生有る事を見ず、豈に其れ死有るべけんや。恰も鐵石を突き立て行くが如し。靜なる事山岳の如く、迅き事飇風の如し。向ふ處破らずと云ふことなく、觸る處碎かずと云ふことなし。譬へば平治、保元の亂軍の中に有りとも、無人の廣野に立つが如けん。其れ斯れ是れを眞の丈夫の志氣と云ふ。君恩と法恩と並べ流へて士卒を撫す。誰か殿下の爲めに身命を惜まんや。生死の恐るべき無ければ、涅槃の求むべき無し。十方を目前に消融し、三世を一念子に貫通す。皆是れ彼の正念工夫の力に依れり。斯くの如くなる時は、士敬し、民懷き、君仁に臣正し。農に餘んの粟あり、婦に餘んの布有つて、上下交も〳〵好んで國脈泰山の安きが如く、萬世を經て衰滅無けん。然らば則ち人

る者に似たり。電照の後、請ふ丙丁童に與へて彼をして秘重せしめ玉へ。若し又書中取るべき處あらば、請ふ再度淸書して以て進献せん。幕下書記の人々に命じて繕寫三五册、年少穎發の近習三五輩及び和田國堅が輩に頒ち與へて、時時熟讀せしめ、閑暇の日は、殿下の股肱堤、中澤の人々及び故老の舊臣、故老の良醫六七輩を召され、圍に坐して聽受せしめ、殿下も亦蒲團上に且つ聽き且つ睡つて道情を保養し玉ひ、半日の餘閑を樂み玉はゞ、法喜禪悅の境致、自然に現前して、四王忉利の歡喜、夜摩兜率の勝界も亦羨むに足らず。況んや世間穢濁充滿の宴會、輕浮奢敖の逸遊、八音耳を蕩かし、萬舞眼を昏ます底の無義無慚の幻戲をや。豈に顧るに足らんや。此の趣を以て能く〳〵勘辨此れ有り、近習をも外樣をも我が八萬の大衆なりと思ぼして、密々に誘引し玉はゞ、何つしか上求菩提、下化衆生の本願に契つて、塵中希有衣冠の善知識、誰か知らん、劍を帶し、鞍馬に跨つて往來しながら、時々に諸佛無上の法輪を轉じ玉はんと

侯は鋤を棄て命を委ねて、以て三顧に答ふ。老僧豈に三顧に報ずるに片言を惜まんや。如何なる法理を書き送りてか、殿下勇猛の精神を増長し、圖らず宗門向上の大事を透過し、怡悅の眉を聞き玉へかしと祈る斗りに、契はぬ文章にて斯くまでは書き續けたるにて侍り。去りながら宗門向上の大事は、中々文字語言の力にて誘引すべき事にし侍らず、然れども修行の趣向錯り玉はずば、自然に大事に契當し玉はでやあるべき。專使一昨、急に回鞭を執る、貴答を裁するに暇あらず、頻りに廢禮の緩怠を恐る。幸にして昨日、宜顓、廬原に歸る事を告ぐ、歡喜に堪へず、押へ留めて鄙酬を修す。睡らざるもの一夜、晩陰より書して天明に至れば、醜書既に五百行を得ると云へども、猶ほ情實を盡すこと能はず。老來諳記の力無ふして、前に書しけるを後又書し、始め演べけるを終に又演ぶ。字々烏焉多く、行々魚魯の差有れども、再看するに暇あらず、裁封して以て顓が歸袖に附す。恰も楚鷄を籠めて丹山の鳳なりと稱して、王侯に進む

り玉ふは、近頃以て殘念なる風情ならずや。斯く大切なる場合をば遣過して、我々は仕官の身なれば、坐禪などする暇隙は、勤めの中は存じも寄らぬ事なるぞなど宣玉ふ人々は、海中に在りながら、水を尋る心地こそすれ。四十二章經に曰く、人に二十の難有り、富貴にして道を好むこと難しと。信なる哉、王侯より庶人に至るまで、榮耀富貴の人々は數限りも無きことに侍れど、來生の苦輪を恐れ、出離の要道を尋ね求むる人々は、世界を一掃して一人も見へ侍らず。是は定めて金口の所說に違はじとの心なるべし。唯だ富貴の上にも富貴を貪り、足ることを知らず、榮耀の上にも榮耀を求めて、飽くことも無き世の中に、何の善因ぞや、殿下のみ獨り富貴を見ること空華の如く、榮耀を見ること夢幻に等しく、常に無上の大道に賢慮を傾け、予が草廬を顧み玉ふこと既に三次。昔、昭烈、武侯が草廬を顧み玉ひしに等し。彼は三國を並せんことを計り、此れは三界を越んことを求む。趣は同じと云へども、志は大に異なり。昔、武

保ち玉ひ、天下の政事を扶けて萬民を憐撫し、內、法寶を衞護し、飽まで法喜禪悅の樂を究めて、法成就にも到り玉へかしと思ふ斗りの寸志にて侍り。老夫壯年より思ひ付き侍りけるは、正念工夫の勝手には、武士の身の上程好き事は有るべからず。武士は明暮に身を懦弱に持つ事は叶はず、出仕にも、附き合にも、如何にも嚴重なる者なれば、髮結ひ立て、上下か又は袴羽織にて、大小手挾み、折目高なる起居の上には、正念工夫は溢れ建るゝ程潔く打見へ、增して好き駿馬の太く逞しきに打騎り、百萬騎の敵軍をも人無き處を通る如く、騎破り〱魁け崩すべき顏色は、天晴見事なる不斷坐禪、斯く工夫しもて行きたらんには、出家は一年にて得力此れあらば、武士は一月。出家は百日にて得力此れ有らば、武士は三日にも利運は開かるべきものを。志無く案內知り玉はぬ故に、生喫・磨墨とも云ふべき大馬の背に、闇々と八石五斗の無明妄想の重荷を建建積み載せて、いかめしげなる貌曲して、邊を拂つて騎り連れ〱、打つて通

助けよかし、法門無量誓願學と申す事の侍れば、庵居の人々の佗後法施の一助ともなれかし、且つ千兵は得易く、一將は求め難しと申す事も侍れば、書中少しにても取るべき處あつて、殿下の道情をも助け增して、禪學成熟し玉はゞ、其の餘波必ず左右の人々に及ばん。左右若し其の恩波に浴せば、其の澤必ず一城の人々に及ばん。一城若し其の恩波に浴せば、其の澤必ず一國の人々に及ばん。何が故ぞ、一人の心は千萬人の心なる故に、終に天下國家に及ぼし、上、王化を佐け、下、民庶を利せん。然らば則ち宇宙の間、那箇の盛事、此れに如かんや。是れ老僧が生平の微志なり。若し然らずんば、何の追從にか、終夜孤燈を挑げ、老眼を摩挲して、果てしも無き問はず語りを繰り返へし〳〵書き送り侍るべきや。道理有る事に思ぼさば、捨て置かず熟讀し玉ひて、內觀養生の秘術に契ひ玉ひ、心身ともに健にして、速かに參禪得力、囨地一下の歡喜をも得玉へかし。次に願くば此の內観の加庇力に依て、武內宿禰、浦島が長壽をも

士卒七八箇を從へ、大馬に跨つて、兩國淺草などに等しき人立多かる處を、用在りげに馳せ廻ぐり玉ひける由。是れは動中の工夫、親疎如何、得失如何を試みん爲めなりける由。去る程に蜷川新左衞門は刀杖喧嘩の席に臨みて大省力を得、太田道灌は陣中に在つて組み布かれながら和歌を詠じ、正受老漢は其の里へ狼の數限りも無く來り集りて犫をせし時に、處々の墓原に七夜まで坐し明かしたりと。是は彼等に頸筋、耳の根など吹きかゝれんずる時に、正念工夫、相續間斷有りや否やを試みん爲めなりと申されき。書寫の性空上人は常に悲嘆し玉ひけるは、世念濃厚なれば道念輕微なり。道念濃厚なれば世念輕微なりと宣玉ひき。熟々思ふに、果てしも無く管々しき繰言と披見も六ケ布く思ぼすべきものを、世念濃厚に書き續けたるに似たれども、鵠林半死の殘喘、長庚曉月賴み無き命に、何の不足の處有てか、尾を搖して憐みを乞はんや。寵遇を權勢の門に栽るにし非ず、聲名を世波の底に釣るにし侍らず、此れを序でに人々の道情をも

大に得所在り。大圓國師の如きは、華園に入つて聖澤の庸山老師に謁して所見を演ぶ。山漫罵して打て追ひ出す。師憤然として、煩暑の日、竹林の中に入つて寸絲かけず、裸形にして枯坐す。夜に入つて蚊子百萬競ひ來つて身上に集り圍んで肌を咬む。此に於て痾痒と戰つて齒を切り、拳を握て癡坐す。正氣を打失せんとするもの殆んど數次、圖らず豁然として契悟す。昔、調御雪山に於て苦修六年、皮骨連離、蘆芽膝を穿つて臂に至り、慧可は臂を斷つて自の本源に徹し、玄沙は泣く〳〵象骨を下つて喫蹎して左脚を破つて徹骨徹髓し、臨濟は痛棒を喫して破家散宅し、是れ古今の榜樣なり。三世古今の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖なし。今時の如く徒に空しく胸臆の凡解を恃んで以て自己脚跟下の大事を了簡分別して以て足れりとせば、一生妄想の魔網を破ること能はじ。小智は菩提の妨とは、此等の徒に侍り。古、禪門の盛なりし時、正念工夫心掛け玉ひし士大夫は公より退るの間暇の日は、如何にも健なる

事紛然、七顚八倒の上に於て、譬へば勇士の大敵に取り圍まれたらん時に、匹馬單鎗、大勇猛の精神を震つて一方を突き破つて魁け拔んず時の心持にて、正念工夫絕へずりもなく、精彩を付け手脚の下すべき樣も無く、四面空洞として、心身ともに消へ失せたる心地は、時々に是れ在るものに侍り。此時恐怖を生ぜず、はげみ進み侍れば、一旦の得力は間も無く豁然たる者に侍り。總じて參學は妄念情量と戰ひ、昏沈睡魔と戰ひ、動靜違順と戰ひ、是非憎愛と戰ひ、一切の塵境と相戰ひ、正念工夫を推し立てもて行く張合にて、不慮の省覺は此れ有ることに侍り。彼の勇施菩薩の如きは、大重禁を侵し、懺悔すべきに地なし、憂悲惱亂す。乍ち自ら大誓を發し、憂惱と戰つて默坐す。忽然として無生を悟る。雲門大師は睦州に左脚を逼折せられて大悟し、蒙山の異禪師は、痢疾に患ること晝夜百次、身體苦み疲れて前面唯死あるのみ。此に於て大誓願を起し、苦痛と戰つて死坐す。少焉腸大に鳴動すること數回、痢疾は拭ふ如く平愈し、

三四年も斯くわめきあるくよと思へば、天竺へ渉りたるか唐へ行きたるか、鳶に成りたるか、筵になりたるか、果ては音も臭もなく成り行くは、幾等と云ふ數を知らず、蟲齒の藥にも成らざる底の悟なり。惜むべし、棟梁の質あつて神俊の才を具足し、參玄力を盡し、琢磨功を重ねば、佗後馬祖石頭にし去り、林才德山にし去つて、天下の蔭凉とも成り去るべき底の人々、苗にして秀でんとする肝心の時節、筋なき妄解を習ひ來つて、人の參禪學道精神を盡すを見ては、馳求の心止まずと云つて、地空を扣いて大笑す。儞が頑空無記賴耶の暗窟を認め得て歇得する底の糟見解、三日五日眉を皺めば、驅烏の童子も亦須く解すべし。況んや佗人の處より習ひ持らんをや。佛祖も手に餘したる者に成りて、初めは信ずる人も間々斯れ有れども、元來無記暗鈍の瞎凡夫、次第に在家實頭の人々にだも及ばず、果ては檀那施主にも忌み嫌はれ、行方知らず成り行くは、近年行脚の風俗なり。如何して眞正の得悟は得ることぞとならば、塵務繁多世

て透過とす。此れは是れ一等の惡風俗、難治の大禪病、錯を以て錯に就く底の不救の傳死病、總に是れ妄分別、眞正參學の上士の如きは則ち然らず、參し參して參すべき無き處に到て、理盡き詞究つて技も亦究り、天涯に手を撒して絶後に再び蘇つて而後に囦地一下の安堵は得ることに侍り。左も無くて無明の妄想、生滅の心行を以て難透難解の秘訣、換骨奪命の大事を彼此沙汰致し侍らんは、恐ろしき事なり。佛も生滅の心行を以て實相の法を說くことなかれと堅く制し玉ひたるぞとて、正受老漢は常に眉を皺められ侍りき。然るに雲水往來の僧侶十が八九は大口を開いて、傳燈千七百箇の大事に於て毫釐も疑ひ侍らずなど、ゑしやくも無く云ひ散す底多し。試に一則を擧揚すれば、拳頭を竪るあり、一喝を吐くあり、十が八九は疊を扣く者多し。輕々に拶着すれば、見性は存じも依らず、學文の功さへ無くて無筆同前。頑陋無限の人々なり。斯く恐ろしき無賴不敵の働きは、何れの智識の本より習ひ持ち來るやらん。去る程に

用可㆑還㆑汝、佛祖不傳妙難々と。菴主は息耕東海五世の孫にして、其の知見斯ぐの如く痛快なり。貴ぶべし、此時眞風猶未だ地に落ちざりしことを。今時奴郎辨ぜず、玉石分たざる底の無眼禿奴の部屬往々に言ふ、自心即是れ佛、話頭了して何か爲ん、心淨ければ淨土淨し、語錄を閱して何の用ぞと。此等の類を未㆑證謂㆑證、未㆑得謂㆑得、無慚昏愚の外道とす。竊かに彼が心と稱する所以の者を見れば、八識賴耶無智無明の暗窟なり。錯々、賊を認めて子とす。錯を以て錯につたへて、祖々傳來の妙道なりとして、人の參禪學道艱辛精苦するを見ては、彼と彼とは、圓頓の直指を知らず、二乘の根性なり。其と其とは、向上の禪を會せず、聲聞の部類なりと。彼が謂ゆる圓頓の直指點檢し見來れば、楞嚴に呵し玉ふ無明元來なり。彼の二乘聲聞の人々には、霄壤杳かに劣れり。而して逮得已利の賢聖を捉へ、妄りに輕賤す、寔に笑ふべし。或は又一般あり。無の字にもせよ、栢樹子にもせよ、一向に手脚の着かざる處を禪道なりと妄想して以

に於て逐一分明に見得徹したりとも足れりと爲ることなかれ。棄て去つて、者の疎山壽塔の因緣、南泉遷化の話、乾峰三種病、五祖牛窓欞の話、宗峰大師曰、終日肩を交ゆ、我何似生。本有圓成國師曰、栢樹子話に賊機あり。此等の話頭、毫釐も疑ひ無きことを得ば、須らく知るべし、見處、佛祖と同一模範なることを。參玄の上士と稱して、何の愧る處かあらん。何が故ぞ、參禪は各々誓て佛祖の心を明めんことを要す。若し夫れ佛祖の心を明め得ば、豈に其れ佛祖の語話を明らめざらんや。若し夫れ未だ佛祖の語話を明らめ得ずんば、須らく知るべし、未だ曾て佛祖の心を明らめ得ざることを。此の故に七賢女經に曰、佛の言はく、我が第子大阿羅漢、此義を解すること能はず、唯だ大菩薩衆のみ在つて、正に此義を解すべしと。此義とは何ぞや、西天此土祖々相傳し來る底の向上の秘訣なり。此義を了知せしめんが爲めに、此の難透の話頭を留む。此の故に眞珠菴有」偈曰、天台五百阿羅漢、身着」法衣」出」人間」。神通妙

くなる境界は、時々に是れ有るべし。是れを眞正大疑現前底の時節と申す事に侍り。此の時退かず勤め進み玉はゞ、氷盤を擲摧するが如く、玉樓を推倒するに似て、四十年來未だ曾て見ず、未だ曾て聞かざる底の大歡喜あらん。若し人、自家見性の眞僞如何、得力の精麁如何を知らんと欲せば、先づ須らく謹んで傅大士の偈を見るべし。何が故ぞ、古人言く、未透底の士は句に參せんよりは意に參すべし。已透底の士は意に參せんよりは句に參すべしと。偈に曰、空手にして鋤頭をとり、歩行にして水牛に騎る、人は橋上より過れば、橋は流れて水は流れず。又曰、燈籠をとつて露柱に入り、佛殿走て山門を出づ。又懷州の牛、禾を喫すれば、益州の馬、腹脝る。張公酒を喫すれば李公醉ふ、端的を知らんと欲せば、北斗南に向て見よ。寒山子の偈に、高山白浪起り、井底紅塵颺る。若人、見性分明なることを得ば、此等の言句は、吾が掌上を見るが如けん。若し然らずんば、言ふことなかれ、見性したりと。縱ひ又如上の言句

骨とし、其の餘の進退揖譲射御書數、皆是れ菩薩萬善同歸の妙行なりと觀念し、大勇猛の信心を抽んで、彼の內觀の眞修に和して、起居動靜の間に於て、那時か是れ打失の處、那時か是れ不打失の處と、時々に點檢する、是れ古今の賢聖眞修の正路にて侍り。去る程に孔夫子も道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非ずと宣玉ひき。里仁の篇には造次の假初にも此に於てし、顚沛とたふれふすにも此に於てすとは、片時も打失することなかれとの敎にて侍り。此道とは斯經難持若暫持者我卽歡喜諸佛亦然と說き有ひたる法華經の事にて侍り。法華經とは、正念工夫の大事を云へり。工夫とは自己本有の有樣を指すことなりと覺悟此れ有るべし。生死の大事を透脫し、佛祖の正眼を瞎却する底の眞實見性の正修にて侍れば、中々容易の事にし侍らず。唯だ千心は動靜二境の間、逆順縱橫の上に於て純一無雜、打成一片の眞理現前して、千人萬人の中に在つて、萬里の曠野に獨立したる心地有つて、彼の龐老が謂ゆる雙耳聾の如く眼盲の如

に操履堅實ならば、何ぞ林下に異ならんや。是の故に言ふ、思ひ入る心の中に道しあらば、好しや芳野の山ならずともと。兎にも角にも諸大將の心がけ玉はんずる坐禪は、此の正念工夫の不斷坐禪に越えたる事は侍るべからず。此れは是れ二百年來廢れ果てたる古實にて侍り。何をか正念工夫と云ふぞとならば、咳唾掉臂、動靜云爲、吉凶榮辱、得失是非、束ねて一則の話頭と爲して、臍輪氣海丹田の下に鐵石の如くに突き居へ、本尊には卽ち大樹君、諸侯太夫は、吾が同業影向の諸菩薩衆、近習外樣の大小の諸臣は、吾が舍利弗目連等の三乘の大弟子衆、萬民は吾が赤子の如くなる所化の衆生なりと思ぼして、專ら仁恕の心あるべし。袴肩絹は直に是れ七條九條の大法衣、兩口の打物は禪杖机案、馬鞍は一枚の坐蒲團、山河大地は一箇の大禪牀、上下四維十方法界は、自己本有の大禪窟、陰陽造化は、二時の粥飯、天堂地獄淨刹穢土、總に是れ吾が脾胃肝膽、樂府內外三百疊は、朝夕の看經誦經、千百億の須彌山を束ねて以て一片の脊梁

君子豈に其れ際限在らんや。見道各々林下の人に超過す。常に萬機の政務を佐けて肩を萬國の衣冠に交へて、銀魚金龜の朱紫貴海中に立ち、禮樂射御の間、進退揖讓の席に臨みて、片時も道情を打失することなく、遂に祖庭の玄微徹照す。是れ皆正念工夫、不斷坐禪の靈驗ならずや。佛道微妙の深恩ならずや。祖庭孤危の威德ならずや。彼の默照枯坐を足れりとし、心源靜寂を禪なりとして丘壑に餓死する底の類と、寔に霄壤の間なり。是れ謂ゆる尖兎を得ざるのみに非ず、鷹子も亦打失する者に非ずや。何が故ぞ、徒に見性すること能はざるのみに非ず、主恩も亦廢す、寔に可笑。寔に知る、得力の淺深は進趣の當否に依ることを。工夫若し一人と萬人と戰ふ底の氣力あらば、豈に其れ林下と室家とを擇ばんや。若し夫れ見道は特り林下の人のみにありと云はゞ、民の父母たると人の臣たると人の子たると、望を其の間に絕んか。縱ひ林下に在りとも、道業密ならず、志念純ならずんば、何ぞ室家に異ならん。縱ひまた室家に在りとも、志願濃厚

大に安き事を知らずと呵し玉ひき。眞正參玄の上士は、入理の淺深如何、見道の精麁如何に在るらくのみ。誰か儞が城市山林を論ぜん。古の相國光義太夫陸亘、尙書陳操、都尉李公、楊公大年、張公無盡等の諸君子の如きは、見性吾が掌上を見るが如く、參玄吾が肺腑より出るが如し。佛海の深源底を踏飜し、禪河の毒波浪を並呑す。智鑑高明、識量寛大、鬧神恐れ走り、野兎悲み潛む。各各、天下の政事を助けて、天下を泰山のやすきにおく、誰か其の堂奥を見ん。張公の如きは、官、宰輔に上り、位、人臣の頂を窮む。王佐の才豐にして、君信じ、臣貴び、士敬し、民懷く。天、膏雨を下し、君、淋字を賜ふ。壽百齡に近うして、澤を四海に流へ、民、堯年の秋に誇り、人、舜日の暄を負ふ。上、君恩に報答し、傍ら法寶を鎭護す。寔に天下の人傑なり。是の故に言ふ、家に在つて道を成ず張無盡。祿を食んで禪を究む楊大年と。寔に千歲の美談ならずや。蘇內翰、黃魯直、張子成、張天樂、郭功甫等、其の餘の老夫が未だ見聞せざる底の諸

が如き勇士なりとも、斯くの如く修行したらんには、豈にふるへざらめや。是の故に祖師大慈善行在つて、此の正念工夫不斷坐禪の正路を指す。諸侯は朝覲國務の上、士人は射御書數の上、農父は耕耘犂鋤の上、工匠は繩墨斧斤の上、女子は紡績機織の上、若し是れ正念工夫在つて、直に是れ諸聖の大禪定。此故に經に曰く、資生產業、皆與實相不相違背と。若し夫れ正念工夫無くんば、老狸の空穴に睡るが如けん。悲むべし、此道今人棄てゝ土の如くなることを。往往に我法二空の黑暗谷を認め得て、向上最上の禪なりとして、徒に日々眉を皺め額を攢めて死蠶の繭中に在るが如く、祖庭は遙に雲煙を隔つ。佛經を嫌ふこと、跛鼠の猫兒を避るが如く、祖錄を忌むこと、瞎兎の虎聲を聞くに似たり。殊に知らず、此は是れ二乘常沒の舊窠、相似の涅槃なることを。是の故に宗峰大師曰く、三十あまり吾も狐の穴に栖む、今ばかさるゝ人も理りと、悲嘆し玉ひき。去る程に肇公は此の困魚箔に止り、病鳥蘆に栖む。少き安き事を知つて、

を拙んで、君を堯舜の君にし、民を堯舜の民にし、專ら君恩に報答すべき時至つて、袖裏に密かに念珠を爪ぐり、口中幽かに名號を唱へて、出仕に懶く、公務を怠り、方寸の君恩に報答すべき心もなくて、動もすれば病と稱して退かんとす。恁麼の志行にして、縱ひ三年五歲、陰僻の處に在つて精錬刻苦し、思想盡き情念止むに似たりと云へども、肝膽傷み悴け、心上常に恐怖多く、鼠糞の落つるを聞いても、胸間裂るが如し。大將にも諸卒にも何の專途にか立つべき。萬一國家の大事あらんに、斯る人々を引いて一虎口の門戶を堅めたらんに、敵軍潮の如くに湧き、旌旗雲の如くに覆ひ、火炮は雷の落ちかゝるが如く響きわたり、貝鐘は山も崩るゝ斗り轟き鳴り、戈戟は氷の如く拔き連れたるを見聞かば、飮食咽に入らず、混震にふるへて、綱とる事さへ叶はで、鞍坪すかり平らみて、動もすれば自らふるへ落ちんとす。果は步兵の爲めに獲らる。何が故ぞ、斯くの如くなる、唯だ是れ三年五歲寂默枯坐の致す所なり。縱ひ熊谷、平山など

明を放つ底の好事有りとも、諸侯大夫士庶民家、萬般の公務、千般の家事、何の暇あつてか、片時も打坐することを得んや。此に於て病と稱して公務を遁れ、家道を廢して、五七日一室を閉ぢ、戸牖を鎖して幾枚の團蒲を重ね、一枚の香を挾んで坐すと云へども、平生の塵務に疲れて、一寸坐すれば一尺睡り、三合の坐禪に千萬石の妄想を集む。既にして眼を見張り、牙を咬み拳を握り、梁骨を竪起して坐すれば、萬般の邪境頭を競つて生ず。越て額を攢め眉を皺めて、覺へず悲泣して曰く、官途、道業を妨げ、仕途、禪定を障ふ。如かじ官を辭し、印を解て、水邊林下寂莫無人の處に在つて恣に禪觀を修し、永劫の苦輪を遁れんと。大に錯り畢れり。大凡人の臣たるの道、主君の飯を喫して主君の衣を纒ひ、主君の帶を結びて主君の刀を帶ぶ。水も亦佗處より擔ひ來るに非ず。耕さずして食ひ、織らずして纒ふ。身體手足髮毛爪齒、總に是れ君恩の所成なり。恁麼にして成長し來て、三四十歲に至つて、主君の政事を助け、專ら王佐の才

犂鋤を擲ち耕耘を止めて枯坐默照し、工匠は繩墨を捨て斧斤を抛ちて枯坐默照せば、國衰へ民疲れ、賊盜頻りに起つて國其れ危からんか。然らば則ち衆民瞋り恨みて、必ず云はん、禪は窮めて不祥の大兆なりと。殊に知らず、古へ禪門の盛なりし時、南岳、馬祖、百丈、黃檗、臨濟、歸宗、麻谷、興化、盤山、九峰、地藏等の諸聖、拽石搬土、水薪菜蔬作務普請の鼓を鳴らして、專ら動中の得力を求む。是の故に百丈大師曰く、一日なさゞれば一日食せずと。是を動中の工夫、不斷坐禪と云ふ。此の風、近代地を拂つて盡く。蓋し斯く云へばとて坐禪を嫌ひ、靜慮を謗るにし非ず。大凡一切の賢聖、古今の智者、禪定に依らずして佛道を成就する底、半箇も亦無し。夫れ戒定慧の三要は、佛道萬古の大綱なり。誰か敢て輕忽せんや。然るに向きに謂ゆる禪門の諸聖の如きは、越格超宗、眞正無上の大禪定。擬議する則は電轉し星飛ぶ。羝羊の眼、狐狸の智、如何ぞ敢て窺ひ知ることを得ん。縱ひ亦默照枯坐して立地に成佛し、立地に大光

戰ひ且つ耕す。是れ萬全の良策なりと。參學も亦爾り。工夫は且つ戰ふの眞修、內觀は且つ耕すの至要、鳥の雙翼の如く、車の兩輪の如し。內觀の秘訣は、予向きに江湖參玄の衲子の爲めに夜船閑話に書し了せり。予常に此等の趣を以て、衲子の禪病を救ふこと幾許と云ふ數を知らず。中に就いて重症必死に向とする者八九を治す。學者必ず內觀と參學と共に合せ並べ貯へて、以て生平の本志を成ぜよ。學道の人縱ひ參じて五派七流の大事を究め得るとも、若し夫れ短壽ならば、何の用を成すに堪へんや。縱ひ又內觀の力に依つて彭祖が八百の歲時を閱すと云へども、若し其れ見性の眼無くんば、唯だ是れ一箇老大の守屍鬼、何の好事かあらん。若し又枯坐默照を以て定れりとせば、抂げて一生を錯り、大に佛道に違せん。佛道に違するのみに非ず、大に世諦も亦廢せん。何か故ぞ、若し夫れ諸侯大夫は朝覲を怠り、國務を廢して枯坐默照し、武夫は射御を外にし、武術を忘れて枯坐默照し、商賈は店戸を鎖し算盤を碎いて枯坐默照し、農夫は

黄金程には貴び惜まざる者に非ずや。塵務の上、世波の間に於て、彼の黄金を遺落仕たりし人の如く專一に究明したらんには、誰か歡喜の眉を開かざらんや。是の故に妙超大師云く、見るやいかに、賀茂のきをいの駒くらべ、かけつかへすも坐禪なりけりと。眞珠菴主は此の意を述して、看經すべからず、坐禪すべし。掃地すべからず、坐禪すべし。茶の子種ゆべからず、坐禪すべし。馬に乘るべからず、坐禪すべしと。此は是れ眞正參禪底の故實なり。吾が正受老人常に云く、不斷坐禪を學ばん人は、殺害刀杖の巷、號哭悲泣の室、相撲掉戲の場、絃管歌舞の席に入りても、安排を加へず、計較を添へず、束ねて一則の話頭と作して、一氣に進んで退かず。譬へば阿修羅大力鬼に肘臂を捉へられて、三千大千世界を遶ること千回百匝すと云へども、正念工夫、片時も打失せず、相續不斷なる、是れを名けて眞正參禪の衲子とす。十二時中面皮を冷却し、眼睛を瞠却して、毫釐も人情を交へざれと。寔に貴ぶべし。兵法にも又云はずや、且つ

るとぞ。六國を併呑し四海を囊括して、八蠻の外までも震ひ恐れたりける秦の莊襄王も鬼趣に墮して苦を受け、周の武帝は鐵梁の責を受け、梟雄、天下に聞えたりける秦の白起は、糞泥獄に沈みて、後ち明の洪武の始め、吳山の三茅觀なる處に於て、雷、白蜈蚣の身の長け尺餘なるを震殺しけるに、背に白起と云へる文字ありくと記るしき由。罪業の空し難き事、知んぬべし。謂ふことなかれ、塵務繁絮にして、參禪暇なく、世事頻紛として工夫續き難しと。須らく知るべし、眞正參禪の衲子の前には、塵務なく世事なきことを。譬へば茲に一人あらんに、往來絡繹たる巷、稠人廣衆の中に於て、錯つて二三片の金を遺落したらんに、人目しげしとして、棄ててや置くべき。物騷しとて尋ねずやあるべき。多くの人々を押し分け、かいくゞりても、一回尋ね出して手に入らざらん限りは、心頭休罷すること能はじ。然らば則ち塵務繁しとて、參禪を怠たり、世事煩はしとて、工夫を廢せん人々は、諸佛無上の妙道を以て、彼の二三片の

なき人々のなれの果なり。悲みても悲しむべきは、流轉永劫の罪累、恐れても恐るべきは生死長夜の苦果。天下の三聖人なりと崇められさせ玉ふ延喜天暦の帝さへ、燒熱の冥火に黒ませ玉ふを、箏が岩屋の日藏上人は目のあたり見上りたりしに、我は粟散小國の王たることを恃み、驕慢甚だしかりし罪にて斯くなりたるぞと宣玉ひけるとぞ。敏行朝臣は漢和の才に長じ、手跡麗くおはして、法華經二百部まで書寫し玉ひたれども、正念工夫おはせざりければ、苦趣に墮ち玉ひて、紀友則が許に來りて、救ひ乞ひ玉ひけるとぞ。本朝無雙の名將なりと稱せられ玉ひて、目に餘りたる朝敵を從へ、至尊の宸襟を休め上り、南都北京の貴僧高僧も加持しあぐみたりける天子の御惱を、弓のすびきして絃音にて掻き拭ひたる如く治し上りたる程の八幡どのさへ、閻王の廳に跪き玉ひ、多田滿仲は、病中閻王の使に召されて、冥府の有樣を見了り蘇生し、殊の外恐怖し玉ひて、直に六角堂に入り入道し念佛し玉ひけるに、汗と涙と疊を打ちとほしけ

島の合戰より苦るしく、胸中は常に九國の兵亂より煩はし。恰も長者火宅の譬に等し。是を生死常沒の業海と云ふ。若し夫れ正念工夫の船筏、精進勇猛の櫓帆なくんば、識浪情波の急流におしひたされて、臭煙毒霧の暗區を越え得て、四德の彼岸に到ることを得んや。悲哉、人々如來の智慧眞相を具足して、少しも缺くことなく、箇々佛性の如意寶珠を圓備し、鎭へに大光明を放つて、娑婆卽寂光の淨刹、毘盧法性の眞土に住みながら、慧眼旣に盲たる故に、娑婆なりと見錯り、衆生なりと思ひ違ひて、得難き人身、逢ひ難き一生を闇々と牛馬などの無智昏愚なる如く、何の辨へもなく明かし暮らして、苦るしかりし三塗、悲しかりし六趣の巷を吟ひ逶りて、少しも變遷あらざる舍那常寂の眞土を把らへて、地獄なりと恐れ迷ひ、無間なりと泣き苦るしむ。是れ只尋常把るにも足はぬ斷無の小見に傲り、片腹いたき少しばかりの口耳の學解に傲りて、佛法を信ぜず、正法を聞かず、虛口をのみきゝて、正念工夫の主心を片時も守ること

主の有ずる家は、故無うして人妄りに出入すること能はず。其の家乍ち主人を失する時は、賊盜も潜み休ひ、乞兒も亦來り宿し、狐兎競ひ走り、狸狢竄れ睡る。閑神晝咽び、野鬼夜吟ず。千妖百怪群邪の窟宅となしぬ。人身も亦然り。正念工夫の主心、臍輪氣海の間に磐石などを淘居へたる如く、凛然として主張するときは、一點の妄念情量なく、半點の思想卜度なうして、天地一指、萬物一馬、厚重山の如く、寛大海の如くなる底の一員の大丈夫、佛祖も手を挾むこと能はず。魔外も窺ひ知ることを得ず。日々萬善を行して以て倦むこと無し。謂つべし、眞正報恩底の佛子なりと。其の人乍ち邪境に奪はれ、妄緣に引かれて、覺えず正念工夫の主心を打失す。是を忽然念起名爲無明と云ふ、煩惱の邪魔蜂の如くに起り、邪見の妖魅蟻の如くに競つて、四大夢幻の廢舍、五蘊空華の朽宅、乍ち化して魔魅の住居となんぬ。千態萬狀日に幾萬種の生死ぞや。外面は高蹈たる君子の風標あれども、内心は夜叉の變態多きが如し。心上は鎭へに八

民庶を塗炭にし、國脉永く斷ゆるに至る。心を下に專にする時は、常に民間の勞疲を忘るゝことなく、民肥へ國強く、令に違する臣民なく、境を侵すの敵國なし。人身亦然り。至人は常に心氣をして下に充たしむ。此の故に七凶內に動くことなく、四邪外より侵すこと能はず。營衞充ち、心神健なり。身終に鍼灸の痛痒を知らざること、强國の民の刁斗の聲を聞かざるが如し。岐伯昔し黃帝の問に答ふ。恬淡虛無なれば、眞氣これに從ふ。精神內に守らば、病安くより か來らんと。今人は此に反す。生より死に至るまで、主心片時も內を守ること なし。主心とは何づれの物と云ふことさへ知らず。無知なること、犬馬の日々に足に任せて走るが如し。危いかな。兵家に云はずや、驚悲妄りに起るは、主心定らざる故なりと。蓋し主心內に守る時は、憂悲怖恐妄りに生ずることなし。若し人、片時も主心なき時は、死人に如かず。或は放僻邪恣至らずと云ふことなし。譬へば玆に一箇の舊宅在らんに、衰朽疲困凍餒貧窶の老女たりと云へども、

百歳を閲すと云へども、鬢髪枯れず、齒牙動かず、眼力轉た鮮明にして、皮膚次第に光澤あり。是れ則ち元氣を養ひ得て神丹成就したる効驗なり。壽算限りあるべからず。但し修養の功の精麁如何にも有るらくのみ。古の神醫は未だ病ざる先を治す。能く人をして心を治めて氣を養はしむ。庸醫は是に反す、已に病むの後を見て鍼灸藥の三つを以て是を治せんとす、救はざる者多し。大凡精氣神の三つの物は、一身の柱礎なり。至人は氣を惜んで使はず。蓋し生を養ふの術は、國を守るが如し。神は君の如く精は臣の如く、氣は民の如し。夫れ其の民を愛するは、其の國を全ふする所以なり。其の氣を惜むは、其の身を全ふする所以なり。民散ずる時は國亡ぶ。氣竭くる時は身死す。是の故に聖主は常に心を下に專にし、庸主は常に心を上に恣にす。上に恣にする時は、九卿寵を恃み、百僚權に傲つて、曾て民間の窮枯を顧ることなし。歛臣貪り掠め、酷吏僞り剝ぐ、野に菜色多く、國に餓莩倒る。賢良潜み竄れ、臣民瞋り恨み、終に

ことを覺得せん。茲に於て大洋を攪いて酥酪となし、厚土を變じて黃金とす。是の故に言ふ、還丹の一粒、鐵を點じて金となすと。白玉蟾が曰く、生を養ふの要、先づ形を錬るに如かず。形を錬るの妙、神を凝すに在り。神凝る則は氣聚る。氣聚る則は丹成る。丹成る則は形固し。形固き則は神全しと。須く知るべし、丹は果して外物に非らざることを。蓋し地に玉田在り、梁田在り、玉田は珠玉を產するの地、梁田は禾稼を成ずるの場、人に氣海丹田あり、氣海は元氣を收め養ふの寶處、丹田は神丹を精錬し壽算を保護するの城府なり。古云く、蒼海の百川に長たるは、下れを以てなりと。蒼海既に萬水の下を占めて百川を含容して增減なし。氣海既に五內の下に居して眞氣を收めて飽くことなし。終に神丹を成就し仙都に入る。丹田なる者の一身三處、吾が謂ゆる丹田は、下丹田なる者なり。氣海丹田各々臍下に居す。一實にして二名在るが如し。丹田は臍下三寸氣海は寸半、眞氣常に者裏に充實して、身心常に平坦なる時は、世壽

れて、聞く世壽二百四十歲を閱すと。時の人是を稱して白幽仙人と云ふ。故の常（丈カ）山氏の師範なりと。幽が言に曰く、大凡生を養ふの術、上部は常に淸涼ならんことを要し、下部は常に溫暖ならんことを要す。須らく知るべし、元氣をして下に充たしむるは、是れ生を養ふ至要なることを。往々神丹は五行合せて鍊ると云ふことをのみ聞いて、水火木金の五行は卽ち眼耳鼻舌の五根なることを知らず、五根を集めて神丹を錬るとは、如何なることぞとならば、蓋し五無漏の法あり。眼妄りに見ず、耳妄りに聞かず、舌妄りに言はず、身妄りに觸れず、意妄りに思慮せざる時は、混然たる本元の一氣、湛然として目前に充つ。是れ卽ち彼の孟軻氏の謂ゆる浩然の一氣なり。是を引いて臍輪氣海丹田の間に收めて、歲月を重ねて是を守つて、守（主カ）一にし去り、是を養つて無適にし去る時は、覺へず丹竈を掀飜して、內外中間八紘四維、總に是れ一枚の大還丹。自己卽ち是れ天地に先達つて生ぜず、虛空に後れて死せざる底、長生久視の大神仙なる

を決定し玉ひけるとぞ。寔に貴き芳躅ならずや。熟ら人界の始終を思ふに、天上生ずべきには福力定らず、三塗に墮すべきには罪業足らず、終に此の娑婆穢土の生を感得す。其中國王大臣長者居士等の人々は、前生多少の善緣を修し、許多の勝因を種へ來れども、天上へ生ずべきには、福力足らずして、大饒富貴の家に生れて、臣妾を前後に從へ、寶財を左右に束ねて、何の辨へも無く、萬民を憐まず、士庶を惠まず、只憍奢の心のみ多くて、今日も惡業惡因、明日も亦殺業苦種、多少の福德を擔い來て、徒に空華の榮耀をのみ窮めて、限りも無き惡業に仕へて、擔いもて果しも無き惡趣の巷へ立ち歸り玉ふは、世間に限りも無き事に侍り。只返すぐ〳〵も內觀の秘要捨て置かず、熟錬これあるべし。內觀の眞修は、第一養生の秘術にして、仙人錬丹の大事に契へり。其の初、金仙氏に起つて、中頃、天台の智者大師に至つて、摩訶止觀の中に精しく筆記し玉へり。壯年の頃ひ、我是を道士白幽先生に聞けり。白幽は城の白川の巖窟に隱

恩を報答す。是を佛國土の因緣、菩薩の威儀と云ふ。此れは萬夫に傑出する底の大丈夫兒、生平の懷素なり。彼の寂靜無事の處に在て、識神を認得して見性なりと相心得、揩磨淨盡して以て足れりとする底の無眼禿奴の族は、夢にも曾て見ることを得んや。此等の族は、終日無爲を行して、終日有爲を打し、終日無作を行して、終日の有作を打せず、何が故ぞ、見道分明ならず、親しく法性の實際を窮めざる故に。惜むべし、再び得難き一生を盲龜の空谷に入るが如く、鬼棺木を守るに似て、闇々と過去りて、苦しかりし三塗の舊里へ懲りも無く立ち歸らん事、皆是れ進趣の指南惡しく、見性本より眞ならざる故に、一生空しく心力を勞し盡して、終に方寸の功を立ること能はず、寔に憐むべし。去る程に時宗一遍上人の如きは鉦子を頸に打かけ、念佛しながら、一度三塗に入りぬれば、再び歸ることぞ無きと打泣き〳〵、東は奧州出羽の果、西は筑紫潟、博多の浦の奧までも告げ廻り玉ひけるが、終に由良の開祖に見へて、往生の大事

在ると、咳唾掉臂、寤時寐時、男子たる者の思ひ立てたる事を、遂げずや置くべき、仕果てずや有るべきと、傑烈勇猛の大憤志を震つて、間も無く進み玉はば、平生の心意識情すべて行はれず、胸襟分外に清凉に、分外に皎潔にし、萬里の層氷裏に在るが如く、縱ひ亂軍の場に入り、歌舞遊宴の歌吹海に入ると云へども、人無き處に在るが如く、雲門大師氣宇王の如しと云ふ底の大機は、求めざるに煥發せん。此の時に當つて、諸佛衆生元と是れ幻、生死涅槃猶如昨夢、天堂地獄を徹見し、佛界魔宮を消融し、佛祖の正眼を瞎却し、恣に百千無量の法門、微塵恒沙の妙義を說き宣べ、一切の含識を利益し、塵沙劫を經て退屈せず、永劫大法施を行して曾て乏しきことなく、空華の萬行を展開、谷響の度門を建立し、臂に奪命の神符を掛け、口、法窟の爪牙を咬み鳴らして、十方參玄の衲子を惱害し、釘を拔き楔を奪て、毫釐も假すことなく、一箇半箇、牙、劍樹の如く、口、血盆に似たる底、凶惡無義の鈍瞎漢を打出して、以て佛祖の深

に於て猛く精彩を着け、純一無雜打成一片にして、毫釐も錯らず、彼の何百兩の黃金を亂世の時送り屆けし人の如く、猛く甲斐〳〵布氣性を推し立て、片時も間斷なく勵み進みたらんには、乍ち自心の源底を掀飜し、生死の命根を踏斷して、虛空消隕し、鐵山碎る底の大歡喜在らん。彼の火裏より咲き出たる蓮華の火氣に逢て、轉た色香を增すが如けん。何が故ぞ、火氣卽ち蓮華、蓮華卽ち火氣なる故に。只返す〳〵も、內觀眞修寔に放過すべからざる至要なり。內觀の眞修とは、吾が此の臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總に是れ趙州の無字。無字何の道理かある。吾が此の臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總に是れ自己本來の面目。面目の鼻孔何れの處にか在る。吾が此の臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總に是れ吾が唯心の淨土。淨土何の莊嚴か在る。吾が此の臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總に是れ吾が己身の彌陀、彌陀何の法をか說く。吾が此の臍輪以下丹田氣海及び腰脚足心、總に是れ吾が本分の家鄉。家鄉何の消息が

る底と得力霄壤の間を隔てん。火裏の蓮とは世間希有の行者なりと賞歎し玉ふにし非ず。永嘉は天台三諦卽一の堂奥に達し、止觀修行は精しく修錬し玉ひたれば、傳中にも四威儀に常に禪觀に冥ずと賞嘆したる程なれば、片言隻字と云へども、中々容易の事にし非ず。四威儀に常に禪觀に冥ずとは、四儀卽禪觀々々卽ち四儀なるに冥合したる境界を云へり。彼の菩薩は道場を立ずして諸の威儀を現すと說き玉ひしと同一模範なり。夫れ蓮は水中に咲ける華なる故に、火邊に近付くる時は、立處に枯れ凋む事なり。然れば火氣は蓮には上も無き敵藥ならずや。然るに火裏より咲き出たらん蓮は烈火に向ふ程彌々色香を增して麗はしかるべし。彼の五欲を避け嫌て、最初より修行したらん人は、縱ひ我法の二空に通じ、見道如何斗り明かなりとも、靜中をはなれて動中に向ふ時は、蜆蝦の水を失へるに等しく、獼猴の林樹を離れたるに似て、半點の氣力無うして、左ながら水中の蓮の火氣に逢ふて、乍ち凋枯するが如けん。若又平生六塵の上

を得んと欲せば、六塵を惡むことなかれと。是亦六塵を數寄好めとには非ず。水鳥の水に入れども、少しも翼の濕はざる如く、平生六塵の上に於て取らず捨てずして、間斷なく正念工夫相續せよとの心にて侍り。若し又一向に六塵をさけ、八風を恐るれば、覺へず二乘の臼窠に墮して、永く佛道を成ぜじとなり。永嘉大師は欲に在て禪を行す知見の力、火裏に蓮を生ず終に壞せずとの玉ひき。是亦五欲に耽着せよとの心には侍らず。六塵五欲の上に在ても、蓮の泥上に汚されざる如く、純一に受用せよとの心にて侍り。然るに山林野外に在て、一食卯齋し六時行導する人さへ、道業純一なること能はず。況や夫婦昆弟の間に交り、塵務紛然たる巷をや。若し其れ見性の眼無くんば、毫釐も相應ずること能はじ。是故に達磨大師云。若人佛道を成ぜんと欲せば、須く見性すべしと。若亦乍ち諸法實相唯有一乘の智見を開かば、六塵卽禪定．五欲卽ち一乘なる故に、語默動靜常に禪定中なるべし。若し果して然らば、彼の山林に在つて禪を行ず

の金を持して、何某の處まで送り屆けよと命ぜられたらんに、彼の男、膽氣在つて、大劍を挾み、脛高く褰け、彼の金を取つて棒頭に突き掛け打ち傾けて、一交もせで、彼の所へ送り屆けて、少しも恐るゝ氣力なくんば、天晴甲斐〳〵しき働き大丈夫の氣象とも賞歎すべき事なり。是を圓頓菩薩の上求菩提下化衆生の眞修に比す。何百兩の黄金とは、正念工夫堅固不退の大志を云へり。群盜蜂の如く凶黨蟻の如しとは、十纏五蓋五欲八邪の妄念を云へり。彼の男とは眞正參禪圓頓窮竟の上士を云へり。何某の處とは、常樂我淨の四德具足大寂彼岸の實所を云へり。是の故に云ふ、眞正參玄の衲子、聲色堆裏に向つて坐臥すべしと。往々に古への二乘聲聞なりとて輕ろしむれども、見道の力も智德の光も、今の人々の及ぶべき事にし侍らず。只修行の趣向惡しく、空閑の處をのみ好みて、都て菩薩の威儀を知らず、佛國土の因緣なき故に、如來は疥癩野干の身に比し、淨名は、焦芽敗種の部類なりと呵責し玉ひき。三祖大師の玉はく、親切

ありて、卑怯の働きも間々多き者に侍り。然らば則ち何を指してか得力と云はんや。去る程に大慧禪師も動中の工夫は靜中に勝ること百千億倍すと申し置かれ侍り。博山は動中の工夫成し上らざる事、一百二十斤の重擔を荷つて羊額嶺頭に上るが如しと申されき。蓋し斯く云へばとて、靜中を捨て嫌つて、故意に動所を求め玉へと云ふには非ず。只動靜の二境を覺へず知らぬ程工夫純一なるを貴とす。所以に言ふ、眞正參禪の衲子は、行いて行くことを知らず、坐して坐することを知らずと。中に就いて眞實自性の淵源に徹底して、一切處に於て受用する底の氣力を得んとならば、動中の工夫に越へたる事は侍るべからず。譬へば玆に何百兩の黃金在らんを、人をして守護せしめんに、室を閉ぢ扉を鎖して、其の傍に坐し守りて、人にも取られず奪はれずとて、中々氣力在らんずる者の手柄とも働とも申さるべき事にし非ず。是を二乘聲聞の自了偏枯の修行に比す。又一人在り、群盜蜂の如く起り、凶黨蟻の如くに馳せ廻らんず中を、彼

が如く、次第に消融し、宿昔齒牙を挾む事を得ざる底の難信難透難解難入底の惡毒の話頭は、病に和して氷消し、今歳從心の齢を經と云へども、三四十歳の時より氣力十倍し、心身ともに勇壯にして、脇席を濕さす、恣に偃臥せざるもの動もすれば二三七日を經る事間々此れ在れども、心力衰減せず、三百五百の燕頷虎頭に圍繞せられて、經論を評唱して、三旬五旬を經れども、曾て疲倦の色なき者は、自ら覺ふ、此の內觀の力に依ることを。初め養生を第一とし、內觀工夫の間、求めざるに不慮の省悟得力幾度と云ふ數を知らず、只動靜の二境を嫌はず取らず、密々に進修しもて行く事第一の行持に侍り。往々に靜中の工夫は思ひの外墓行く樣に思はれ、動中の工夫は一向に墓行かぬ樣に覺へらるる事に侍れど、靜中の人は必ず動中には入る事を得ず。偶動境塵務の中に入る時は、平生の會所得力は、迹形もなく打失し、一點の氣力無うして、結句尋常一向に心がけ此れ無き人よりは芥子計りの事にも動轉して、思ひの外に臆病なる心地

上の古實に達せず、眞修の秘訣を諳せず、妄りに自ら悟解了知を求めて、觀理度に過ぎ、思念節を失する時は、胸膈否塞し、心火高ぶり上ぼり、兩脚氷雪の底に浸すが如く、雙耳、溪聲の間を行くに齊うして、肺金痛み悴け、水分枯渇して、終に難治の重症を發して、命根も亦保ち難きに至る。是れ只眞修の正路を知らざる故なり。寔に悲むべし。蓋し摩訶止觀の中に假緣止諦眞止と申す事の侍り。只今申し談ずる內觀の法とは、彼の假緣止の大略にて侍り。老夫も若かりし時、工夫趣向惡しく心源湛寂の處を佛道なりと相心得、動中を嫌ひ、靜處を好んで、常に陰僻の處を尋ねて死坐す。假初の塵事にも胸塞がり、心火逆上し、動中には一向に入ることを得ず。擧措驚悲多く、心身鎭へに怯弱にして、兩腋常に汗を生じ、雙眼斷へず淚を帶ぶ。常に悲歎の心多く、學道得力の覺へは、毛頭侍らざりき。何の幸ぞや、中頃好き知識の指南を受けて內觀の秘訣を傳授し、密々に精修する者三年、從前難治の重痾はいつしか氷雪の朝曦に向ふ

部に於て右の趣を精しく教諭此れ在り。天台の智者大師も其の大意を汲んで、摩訶止觀の中に丁寧に書き置かれ侍り。書中の大意は、縱ひ何分の聖教を披覽し、何分の法理を觀察し、或は長坐不臥し、或は六時行道すと云へども、常に心氣をして臍輪氣海丹田腰脚の間に充しめ、塵務繁絮の間、賓客揖讓の席に於ても、片時も放退せざる時は、元氣自然に丹田の間に充實して、臍下瓠然たる事、未だ篠打ちせざる鞠の如し。若人養ひ得て斯くの如くなる時は、終日坐して曾て飽かず、終日誦して曾て倦ます、終日書して曾て困せず、終日說て曾て屈せず、縱ひ日々に萬善を行すと云へども、終に退墮の色なく、心量次第に寬大にして、氣力常に勇壯なり。苦熱煩暑の夏の日も扇せず汗せず、堅凍疎雪の冬の夜も襪せず爐せず、世壽百歲を閱すと云へども、齒牙轉た堅剛なり、怠らざれば長壽を得。若し其れ果して斯くの如くならば、何れの道か成ぜざる、何れの戒か持たざる、何れの定か修せざらん、何れの德か充たざらん。若し又如

遠羅天釜　卷之上

答₂鍋島攝州殿下近侍₁書

日之昨は、遠路御使札、增々御勇健にて、朝鮮人御馳走、首尾よく相濟み御安堵の旨、一段の御事に候。草廬恙なく罷り在り候。是又高慮を勞せらる間布そろ。且つ又動靜二境の上に於て御工夫怠慢なく御心掛なされ候條珍重の御事にそろ。其の外に書中に諭せ越され候件々逐一老僧が野情に相契ひ御奇特千萬の御事、如何斗り悅び入り候。總じて一切の修行者精進工夫の間に於て心掛惡しく侍れば、動靜の二境に障へられ、昏散の二邊に隔てられ、心火逆上し、肺金痛み悴（かしけ）、元氣虛損して、難治の病症を發するも間々多き事に侍り、又內觀の眞修に依りて、能々修錬いたし侍れば、至極養生の秘訣に契つて、心身堅剛に氣力丈夫にして、萬事輕快に、法成就にも到る事に候。去る程に大覺調御も阿含

寛延己巳歳初春日

炷香拜書

遠羅天釜序

體圓之鏡。鑑古無始。高懸性空則萬象是寶鏡哉。照三世則三世是寶鏡。輝六塵則六塵是寶鏡。從平等法界一面寶鏡。生佛二影分焉。二影亦寶鏡也。我師使善男信女磨鏡。有旨哉。垢盡明現則衆生之面非佛面耶。因與修體一寶鏡。阿鼻無間。日面鏡焉。月面鏡焉。明矣無背面也。所以令磨鏡有在也。肥之前州攝津君扣師籌室。書問往復。參友不傳與角田氏言思再歎付剞劂氏。其餘隨自意隨他意集以鏤梓。使人知有磨鏡眞修。名謂遠羅天釜。分爲三帙。遠羅天釜者。火爐頭之人知焉。必付焦頭爛額。其秘妙易見難知也。玆有一語。擧其半邊曰。妙達於方。卽是眞秘。此語近矣。此書以盡則登大寶藏殿。而一切衆生唯一眞如寶鏡也。不傳此刻不出於此。以爲序。

音して絶へ入りぬ。邊の人立ちさわぎて水など洒き、灸治などして、漸々人心地付て、初終りを語りけるが、日々は二度三度づゝ絶入〳〵して、廿日斗り煩ひ苦しみて死にけるとぞ。

右

獨妙禪師假名因緣法語一卷、眞蹟無疑候也。

文政十丁亥歳初夏吉祥旦

阿鼻窟　大觀叟謹識花押

君澤檢校老秘重之一卷、阿鼻老師證書の如く鵠林老漢之眞蹟、世上見聞する所の實錄分明也。後代之兒孫必疎意在らしむる事なかれ。珍重。

通　應　誌　之花押

假名因緣法語終

泣きながら、世には心强き人こそ有るめれ、身まからざりし時、嫁しまいらせて、二とせも立ぬ中に、風雨の凌事、草室家の營有りければ、柱の葦木の耻かしき女の業ならぬ事迄進みはげみて、辛ふじて斯まで育立てたるぞや。朝な夕なの品々の調度、小袖樣な物までも、夏は煩暑を忘れ、冬は苦寒を凌ぎて、皆我が手より出でたるを、心に任かせて玉ふ上は、我等が爲めには、如何なる追善も仕立玉ふべきに、御身は老いず死せずして、閻王の朝に召され、府君の庭に跪き、銀鏡鐵札の御誡に逢ひ玉はざる覺へばし候か。寔に鎭庫の銀の玉に出るかげろうや、大凡南閻浮の内に、今日の夕暮于蘭盆の營み知らぬ人や有ると打恨みければ、はね起きて、荒ら管々布き屈言やな、佛ならば御法の端をも演玉ふべきに、心しふねき乞食法師の齋糧乞ひかねて、雜言云ふに能くも似させ玉ふ物哉。賴みたる人の歸り玉ふべき設けに、萩の花二枝か三枝手折り置きて候が、夫をこそ心掛け玉ふなるめれ、いで〳〵參らせんとて立ちけるが、わつと云ふ

立て苦しげなる吐息(といき)の聲して、立ち出でまいらせてより、一粒の餉(かしい)一滴の手向だに請けまいらする事無く、御經の一と音をも聞きまいらせねば、冥々たる闇路に飢饉の苦みは、氷の苦患にも勝さり申候ぞや。疾(とく)物給はせ候へかしとて、絲悲しく打ち泣きぬ。女、荒ら氣味惡るの乞食の物ごしやな、物乞ふ六法こそ在るめれ、日暮れて人の家居に打ち入り、聞き知らぬ唐ら言云て打ち泣きたればとて、哀み起すべき事にしあらず、物知りの女乞食は片腹痛きに、疾出て去りてよとて取り合はぬ氣色成りけり。無情な事を承はるもの哉。我は先室の靈妙泉にて候ぞや、御許されにて、無明の牢獄を暫が程たどり出でたるにて候。相馳せ參らせずとも、先後の名染みなれば、哀れとも玉ひね、露ばかりの物も手向け玉へかし。女、荒ら興さめたる事哉。一度死し玉へる人の歸り玉ふも不思議なれ。歸り玉へばとて、音信も無きに結構して待ち申すべき事にもあらず。兄子の本へなりとも行きて乞ひ玉へとて、枕引きよせて打伏しぬ。亡女は打ち

て、時待貌なる浦山しさよ。我等が宿には來り玉はん御佛の覺へ社なけれ、佛より神より賴みたる人の來り玉はぬ社待遠なれ。人は盃を打てば、双六を打やら、三界を打やら、荒ら胸こそ苦しく候へとて、魂祭の氣色は思ひ絕へてぞ見へける。人々諫て、覺へなきはとはの玉へども、先室の無き魂は此のおん家ならでは何づ地へ歸り玉ふべきや、事なをし玉ひぞ、御阿伽參らする程の事は營み玉へかし、人のおん爲めにも惡し樣の事には成り申すまじきぞなど物語りければ、穴な心得ずの繰り言をの玉ふ物哉。打見たる事だに無き物を忌はしや、斯る佛の來り玉はんには、阿伽の手向に沸湯をや打ちそゝぎ參いらせん、燒き栗にははねさせて、榊の枝にて神拂に拂ひ出し申さんか。否、山椒の木のめぐりも可ㇾ形候か、方々よ世に持つまじき物は目だちたる男にて候ぞや。朝な夕なの心使には腹だつ事のみ多くてなど、狂語云ひながら打ち臥しぬ。斯て暮方に及びて、誰とも知らず遠路に打ち草臥たる有樣にて、杖つきながら、そぼろ

程生きて死に侍るとぞ。

後妻先妻の靈と口論する事

駿東の戸倉と云所に平八郎と云者ありけり。先妻既に死して、後妻を伊豆の口野と云ふ所より迎ふ。彼女腹黑く慳貪にはあれども、嫉妬の心人に勝れたる女にぞ在りける。平八家業の事ありて、常は內浦と云所へ往きけり。享保八辰の七月十三日の事なりけるに、人々魂祭の御棚、心の長けに相營み、火など打ち淸めて、潔齋の心ばへいと艷（やさしく）見へけるに、彼の女は目冷布（めざましく）化粧（けわひ）立てて、待つ人あるに今日に限て肴商人の來らざるこそ心憂けれ、優曇華はから及ばねば、見馴れし萩の花にやせまし、香仙花は恥ぢがましきに、女郎花粟飯が疊算の面はよけれど、鴉鳴きの心惡くさよなど、物の狂はしき事のみ云ひ散らせり。邊の人來りて、押し付け、御佛の來り玉ひけんに、何とて香華をば求め玉はぬにや、御棚の心がけはましまさぬ社と尋（き）けば、穴騷々しの人々やな、佛の來り玉ふと

に成りて、寄る方なさに、近き頃ろ御邊に彳亍參らせて、捨て玉ふ糧の物を申し請る斗りにて、異狀の振舞は夢々無き物ぞ、下部なる女の斯くまで瑕付けたる社心得ね。是れ見玉へとて肩さし出しければ、五六寸ばかり燒け爛れて、虫の湧き出る事こぼるゝ斗り、淺猿布く見へけり。斯くては久しく生き侍るべきにても侍ず、誰を賴むべき覺へも無き身にて侍れば、後世の事賴み參らするにて候ふ。寔に口惜成りゆく身の果てにては侍らずや。哀とも問はせ玉ひねと打泣くと見て、白き狗の來りたるをやあると尋ねければ、未だ知ろし召さざるに社、此の廿日餘りが程、何方より參り候やらん、御尋の通り狗の舂屋の邊りに打伏して居求いけるが、飯燒の女が熱湯打かけたる由にて、舂屋の裏に打ち惱みて侍るを、食物など與へ候ひても、更に給べ申すべき氣色にも見へず候と云。さてはとて尋ね行きて見ければ、夢の中に少しも違はず、穴あさまし、此の狗は疑ひもなき妃子が生れかはりたるなるぞやとて、樣々に勞りけれども、二日

者哉、其の馬は我等が馬にて、此曉、盜まれたるにてそろ。是におん待ち候へ、押し奪ひ返して、能き樣に相計ひ申すべきぞとて、馳せ行きけるが、頓て立ち歸りて、敵は最早や云ひがいなく成りてそろ。御身は何方よりの人ぞや、親御の元へ送り届けまいらせんとて、甲斐〴〵しく相計ひ送り届けぬ。まことに大慈大悲の守護ならずや。

栗田氏の娘白狗と成る事

天和の頃、尾州の牢人に栗田傳右衞門と云ふ人、由緣(ゆかり)有りて沼津の荻生何某の人の本に寄寓す。久からずして逝去す。一女子を留む。稚名を妃子(ひめこ)と云へり。幼より疾病に罹り、嫁する事なくして死しぬ。有る時、荻氏が夢に白き狗來りて告げて云く、〳〵是れ知り玉はざるこそ御理にて侍べし。愧ケ布や、我こそ妃子がなれの果にて候ぞかし。知らせ玉ふ如く、生前には露ちりも成せる善根もなく、佛の御名をさへ碇々唱へ參らせたる覺へもなき身にて侍れば、淺猿しき體

なる櫻の古木を根こぎに仕たる勢にて、あれに荒れて魁出しければ、谷とも崖とも云はせばこそ、六尺由高の大男をそのつ間もなく、ひこずり行く程に、岩に打ち當て、木の根に摺付け、頭破作七分、阿利樹の枝に石榴の笑る如くにて、霜も洒かぬ山道を、紅葉の錦綾にくの欲の鶚矩かけし膽も魂も行きかた更に知らずなりぬ。女性は夢とも思ひ別かで、峰の嵐も溪水も、泣くが如く咽ぶが如く音に聞く鬼魅魍魎とやらんも、貌さし出すべき氣色にて、觀音大士の寶號唱へ上つるより外爲ん方なく、伏し沈みけるに、不思議や谷際に人音して、熊手鳶口など打ちかたげたる達者のものども六七輩、四方に賦る目の鞘の、玉の大汗、大裸成るが、女性を見付け興ざめたる貌にて、是は何國何方への裸まいりの女中にて增在やらん、此の所を虎髯生へて猿眼、帷子着たる曲せ者の、栗毛なる馬に女中を乘せて通りたるをごぞんじや候と尋ねければ、迚も遁れまじき身なれば、何をか包み可ㇾ申とて、碇々の樣を語りければ、是は一方ならぬあぶれ

らふぞかし。其の義は混御免蒙るべきにて候。寔とに左思し召され侍らば、自ら縊れ死し玉へよかし、道しるべ仕りたる馴染みに、究竟の物參らせんとて、荷繩外してさし出しぬ。女性は泣く〳〵推し戴きて、縊れ死すと云ふ事は兼ねて音には聞き及び侍らへども、身にとりて斯る憂き目見んとは露知らず候に、迚もの御情けに教へて給べ候へかし。盜人聞て、荒かいしよなの女中やな、然らば教へ申すべし。抑も縊の法と云つぱ、浮世は夢中の家の如く、身は秋の野の霜露と思ひ定めて打捨て、譬へば數萬の財寶を非道に人に奪はれても、瞋る事なく恨る事なく、崇る樣な分別が些と有ても禁物ぞや。只一筋に此索を西方教主攝取の御手、弘誓の綱と觀念して、あれなる松の下枝へ打ちかけ、端をば斯の如くにわなぐり、首に纒ひて、目を閉て念佛申しながら、小高き處より飛び玉へと、自らの首に打ちかけ、兎角教化しける中に、如何したりけん、萩艸に牧立てられたる鬼栗毛、鐵咬ならし高嘶して、彼の鬼麾（本ノマヽ）が横山殿の下馬さき

候。今日午未の間には容易く罷付くべきにて候とて、谷合のしるき細道を辰巳に當りて、半道ばかりも歩ませ行と思ひけるが、木の間漏日の影さへ恐布くて、虎や伏すらん、狼や出づべき抔、心使るゝ斗り物すごき處へ促ひ行きて、依酌もなく馬より引き下ろして、衣裳も調度も殘らず剝ぎ奪ひとりて、果ては二布物ばかり、目も當られぬ有樣に仕なして、打ち捨て行んとす。女性は目もくれ心塞りて、絕へ入る斗り伏し沈みけるが、情け無の人の振舞やな。是とても前生多少の業因の成す事、さなれば努々恨み參らするにはあらずながら、此上の芳心には疾く命をとりて、殼をば人の知らぬ所に隱し置きて、恥さらさぬ樣の事をば計ひて給へよかしとて泣き口說きければ、盜人行きもやらず歸りて、痛はしの御申し事を承る物哉。誰々も有り果つべき世の中ならねば、おん仰せは去る事なれども、家業にて盜人をば相勤め候へども、女性のおん命を取りまいらする程の惡人にては候はぬぞや。子孫の事迄も思ひ像られて、恐ろしくさむ

華まいらするにも人目に立つ程の信者也けるが、十五六歳にて一里程隔りたる處へ嫁りけり。先の男の心に叶はざりけるにや、世の無常を觀じけるにや、鎌倉の尼寺を心がけて、夜に紛れて遁げ去り、又明る頃ほひ、五十斗なる男の柿の帷子着たるが、栗毛なる馬の太く逞しきに横さまに打乗り、高念佛しながら馳せつき、女中は何つ方へ御通り在やらん、馬には召され候はずや、安すく乗せ參らせて道の案内可仕など、やさしげに聞へければ、嬉しやな鎌倉の尼寺へ參る者にて候が、足よわの心斗り急ぎて、行き惱たる折しも、御佛の引合せ玉ふにや有りけん、お足は如何程も參らすべきに、隨分急ぎてたべ候へかし、浮き世を思ひ切りたる身なれば、片時も早く彼の處へ參り附きて、髮をも下ろして樂々と成り度こそ候へ。追手も心元なきに、いざとて打乗り、又斯くて道すがら物語り仕けるは、尼寺への道は、廻れば十里、近道は六七里にて候。三里程、人とが見も無き所を通り候が、苦からず思し召され候はゞ、近道をさすべく

ふ者也と云高札在り。能々見れば、長左衛門は乳の下より肩先き迄突き串かれて、全身赤に成りて、青くうるみたる顔も、二目と見あぐべき有樣にも非ず、通身より汗流れて、二町斗りも響く斗りに、音打上げて男泣きにながく\と泣きける。妻子共打驚き、穴淺猿、物厭玉ふにこそとて、兎角して呼覺しければ、はね起て打泣ながら、手を合せて大悲の名號二十返斗り唱て、穴貴とやな嬉しやと尊なりける目出度さよ、食事調へよ、夜路なるに馬にて行くべきぞ、誰々は供せよとて、夜中に起打、田方へ馳せ行きて、仲間にも異見などして、今まで借し續たる金子は打ち捨て、證文も燒捨てゝ立歸る。又一月も立たぬ内に、武州より穿鑿ありて、彼の二人の者は磔に掛り、其外仕置きせられたる者も多かりける由。目の邊り見たる人の語りけるを書付て侍り。

驛馬害盜賊事

享保の初めの頃、相模の國去る者の息女、幼少より觀音大士を信じ申して、香

長左衛門を語らひ金本に頼みて、米穀夥布く買ひ込みたる故、彌々飢へ死する者の多かり　或る夜、長左衛門夢中に出家一人來りて云く、我は駿東赤野山の邊より汝が爲に來りたる僧也。汝が富み榮る事　信心堅固の力ならずや。家のため身の爲めにならば、猶々信心を勵まし、慈悲深くこそ計ふべきに、此程惡き人の勸めに依りて　萬民の苦患を顧ず、米穀多く買ひ込み玉ふこそ恐ろしけれ。天理に背きて利德付たる人の末へ久布きためしは、古へよりなき事なるをや。思ひ止り玉はずば、近き中に憂き目見玉はんこそ、いと惜しけれとて細々と語り玉ふと見て覺めぬ。赤野山よりの御告なれば、疎には思はずながら、金借したる迄の事に、左のみ重き罪にも成るまじき事に思ひて、兎角しける中に、又次ぎの夜の夢に、彼の僧來て云く、持ち溢れたる財寶に、何事缺き玉へば、斯く迄は欲には迷ひ玉ふやらん。是れ見玉へとて、長け五六寸ばかりなる礫木の後に、曾我長左衛門、凶年に米の買ひ置て、金本したる罪過に依て、如レ此行

鉢に出で玉ふを伏し拜む人も多かり。一日竹の杖に高き木履はきて墓々しからぬ體にて、東を指して行き玉ふを見たる人も有けるが、如何成り玉ひけるやらん、行方も知れず成り玉ひけるとぞ。寔に又なき遁世者ならずや。諸寺諸山の貴僧高僧に斯る希代のためしあらば、九重の雲の上へ、蠻夷の浦迄も聞へ渉るべけれども、遁世の人の曲なれば、名をさへ知る人なければ、隣の里の人だにも知る事なくて打過ぬ。我等も五六才の時、目の邊り見聞たる芳躅なれば、打ち捨て難くて書留め侍り。

赤野山観世音菩薩利生の事

駿東の柳澤と云處に小栗長左衞門と云者在りけり。幼少より赤野山の觀音を信じ申して、參籠怠る事なかりき。中頃伊豆の三島に引き越して住みけるが、並びもなき福人になりぬ。寛文八年戊申の大飢饉に、道路に倒れ死する者數限も無く、目も當てられぬ折しも、同國の田方なる所に、穀物商ふ人二人在しが、

尊容をまもりまいらせ、上人をもむたいに引き出し奉りて、永く此の所の寶にもせよかしと泣き悲しみけれども、目にあまりたる焰は、百千の左義長の一度に爆するが如く、餘焰天を焦がし、火氣眉を燒くばかりはげしければ、阿の磬の鳴り止みたらん時にこそ、彼の上人の往生淨刹の際なるべけれと、焰の内を目枯れもせで詠め居けるに、奔馬の馳せ通る如くなる早や手なれば、次第に火勢も弱はり、煙も薄く成り行きけるに、定休庵は本の打ち傾きたる底にて、少しも燒け髒(ふすぼり)たる迹もなくて、灰燼の裏に儼然としてさうばんの響きも念佛の音も、尋常ね初夜靜定抔と勤め玉ふに少しも替らで、妙へに貴く聞へければ、人々烈焰を隔てて伏し轉び、感涙徹レ骨、悲嘆銘レ肝、上古にも聞き及ばざる希代のためしにぞ有ける。譬ば金鐵を以て劉り成し、石壁を以て刻みたてたる庵室なりとも、斯る烈火の内に立こらうべき事にしも非らず。增して數十年住み荒したる柴の戸の、風雨をだにも凌ぎ兼たるをや。其の後ち鄉民歸命し渴仰して、托

へかしとて、背打て扣きて呼び驚けれども、深入禪定如須彌山とかや、思ひ切りたる有樣にて、念佛も鐘磬も彌々殊勝に聞へければ、力なくて泣く／＼立ち出でぬ。其の邊の父老は燒け殘りたる調度とる事をも打ち忘れて、彼の焰の內打ち守りて、痛はしや此の人は如何なる貴介公子の後世助からんとて斯く成り玉ふにや有りけん。如何なる文臣武夫の安養の望み深くて、世の中を打ち捨て玉ふにや。宿緣のおはするにこそ、斯る薄福の處に留り玉ひて、思ひ出もなき月日を二年や餘り住み玉ふ事も久しからで、世の中を斯く見捨て玉ふ心强さよ。强（なまじひ）に處の者も斯る憂き目を見せ玉ふ事よ。彼の御佛の端嚴殊特の聖容の此の處に住まり玉ふは、寔に淤泥の底に摩尼寶の輝き、枳殼の園に優鉢華の開きたる心地して、目出度く覺へ侍るものを、目のあたり灰燼と成し參せん事の淺猿さよ。彼の大悲薩埵に附き隨ひ玉へる八千夜叉、恒河沙數の護法の神祇は、何國に渡らせ玉ふやらん。如何なる勇猛の人も在れかし、阿の煙の內へ馳せ入り、

と立ちけるが、目を塞ぎ掌を合せて打ち口說きければ、是は口惜しき老人が心ばへ哉。七旬に及びて、末の露、本のしづくにも劣りたる身の、住み飽きたる火宅の中に、何を待とて永らへんとは、斯迄鬧布やらん。生き延びたらんには、老い增さる程、心もたゆみて、往生の大事をも打ち忘るゝ斗り、本意なき事もやあるらん。迚も住み果つまじき浮世なるに、彼の晋の芥子が義氣を學ぶにしあらず、藥王菩薩の貴き芳躅に合もやすらん。尊像と共に燒て失せ參いらせて、白華山の本土蓮華世界の御遊びの御供も申したらん社、目出度かるべけれと思ひ定めて、香華奉り磬打鳴らし、高聲に念佛して思ひたる顏は、彼の大白牛車に種々の翫好を積み重ねて門外に引きかけたりとも、中々動くべき樣にもあらず。斯くて猛火次第に近より、臭煙四方に打纏たる中に、さう盤の聲も聞へければ、日頃相知りたる者二三人編み戸押し開きて馳せ入り、此の上人は物に狂ひけるにや、行持も勤めも時にこそ依れ、最早や事急に飛ぶ、疾く〳〵出で玉

假名因緣法語

休心坊逢二火難一事

元祿の初めの頃、浮き島が原に休心坊と云へる遁世者居しけるが、何處れの人と云事を知らず。觀音大士の聖像御長け五尺ばかりなるが、類もなく妙へに貴く在御佛を護りまいらせて、町並みに定休庵とて庚申の堂の荒れ傾きたるに移し參せて、朝夕の煙の絕へ間勝ちなるをも愁へず、心ばへも打見たる體も賤からぬ人にて、世の中も打ち忘れたるばかり思ひたる後世者にぞ見へける。元祿庚午の春二月六日の夜、三町斗り隔りたる所より燒亡出來りて、沙を飛すばかり強き西風に、烈焰猛火、潮の打ち懸るが如し。老たるを負ひ、幼きを携へて、西東に泣き叫ぶ聲、焦熱の苦しみ黑繩の責も斯くや有けんと思ひ像るゝ斗りいぶかりけり。聖りも尊像を供しまいらせて、表へや出づべき、裏へや開くべき

冷汗。口惜しや昨日までは同穴の語らひ深き夫婦の中、今はそれには引きかへて、同じ家居に在りながら、言葉を懸合すことだにも、叶はぬ中と成り行くは、空華の枝に幻菓を結ぶ心地なり。親子の中の恩愛は、十夜も一夜の短夜に、狐に食なで鷄の、まだきに泣きて母をやる、野寺のかねの數々に、恨を籠て狼も、名殘惜しげに起き上り、吾が子の貌をつく〴〵と詠めては行き、行きては歸り、別れ兼ねたる有樣は、實に猛々しき虎狼の身にも、愛別離苦は遁れ無き。むざんやな、狼は夫の家に行きながら、夫の目をも忍び地の度重なれば、恐ろしや獵人に見認られ、羆に非ず熊にも非ず、究竟の獲とねらひ寄り、天も崩る火砲の響、肩先を射ぬかれて、三塗に歸へる苦みも、是れも不孝の罪と知るべし。

再鞔布鼓終

宵も里に焦れ來る。人も咎めぬ吾が家を畏々忍び匍上りて、苦しげなる息をつき、耳元まで裂けたる口を半ば明き、紅の舌を垂し、水精の牙、劍の如くするどげに、明星の照り亘りたる眼を張り、恨めしげに四方を見廻し身ぶるひして立ちたるは、昔の姿に引きかへて、寒毛卓竪斗りなり。住み荒らしたる吾がねやを畏ろしげに拔き足し、匍ひ寄りて、吾が子の額に貌推し當て、音を吞み泣くこそ哀れなり。扨て抱き寄せ、乳ぶさを含め、後れ髮を嘗廻すは、哀にも亦氣遣はし。夫は物の陰に泣き沈みて居たりしが、唯心所現と聞きながら、變り果てたる有樣かな。最愛かりし女房の是程まで畏ろしきは、定めなき世の驗なるめり。心の底には飛びたつ斗り懷かしく、吾が女房かと唯だ一言、言葉がかけて見度けれど、肝も魂も消へ果て、息さへ惡くせられねば、泣く音を吞むばかりなり。漸々心を取り直し、山の犬でも狼でも、上皮ばかり佗人にて、心も腔も吾が女房恐るゝこと有るべきやと、性根を居ても靜めても、目には淚、額は

某が妻なりける者は、母を畏すとて狼の皮なん被りて、其皮直に離れざれば、爲方なくて狼になりて、晝は山路に隱れて、夜々來りて吾が子に乳をなん與ふるなる、是れ不孝の天罰なりと取沙汰隱れもなかりけり。夫も今は夜々來りて吾が子に乳ぶさなん含むとは、大略計り知りにたりければ、吾が子を獨りなん寢させて、其側に食事をなん設け置きにたりければ、一粒も殘さず皆食ひ盡して、其次の夜は兎をなん一つ持ち來りて吾が子の側に捨て置きにたりけり。或る時は雉をなん捉へ來る時も有りけり。夫も悲しさは身に餘りにたりけれども、人にも云はれず泣かれもせず、流石に夫婦の別れなれば、吾が妻の成り果てたる姿なりとも見ばや思ひ、燈幽かに挑げて赤子の側に指し置き、戸ぼそを少し明けかけて、己れは暗き處を打かこいて、住み馴れたりし吾が母家を餘所の家ぞと忍び來る昔の妻を待ち居たりけり。斯くとは知らで、狼は吾が子を慕ふ愛執の生繩に引かれ迷ひ來るたつきも知らぬ山中を、今は吾が家と住みなして今

わと咬み付ぬべき勢して、衆態を盡くせども、畏れたる氣色は少もなく、いとど靜まり返りて唱名の音いと殊勝に聞ゆる、耳もとに雉のほろ〳〵の音高く横雲も靉（たな）びき渉りて明方になりにたりければ、見咎られじと、狼は竹の小篠のしげみが中へごそ〳〵と竄入りにたりけり。母も徐々と起き上りて御堂の方を念頃に伏し拜みて、稱名しながら家居に歸りにたりけり。女房も明け離れぬ間に歸らんとしけるが、狼の皮の通身に纒ひ付きて離れざりければ、周章騷ぎて、種々悶焦（あだへあせ）るれども叶はず、爲方もなく、よゝと打泣きて伏し顚にたりけるが、口惜しや今は早や見事なる狼になりたれば、兎にも角にも爲方こそなけれ。夜は白々と明け亘りて、日は高山の頂を照しければ、其日は終日小篠の中に泣き暮らして、夜に入り家居に立ち歸へりて、竊に忍び入り、夫の懷中に吾が子を抱き伏しけるを、畏々（おづ〳〵）偷み出し、終夜、乳をなん含めて、明方になりにたりければ、をゝと泣きつづけて山路になん歸りにたりけり。誰が云ふともなく、何

百度頼みたりとも叶ふべきやは。母子の如く、いらへもなき佛に、雨にも晴にも、危き山路を目ざすも暗き夜も、ひた上りに上りて、あの如く頼み玉ふこそ心得ね。子どもの身に取りては、案じ煩ふて夜こそ寢られね。兎角夜ごとに上り玉ふ事は、せんこそなけれ、思ひ止り玉ひて、相かまへて上り玉ひぞと勸めにたりけれども、聞き入るべくも無ければ、女房も持て餘して、寢つ起きつ思ひ案じけるが、屹と思ひ付きて、其邊なる者の近き頃狼をなん殺して、まだ皮の生しかりけるを盗み出して、山路へなん持て行きて、彼の皮をなん引き被りて道路に待ち伏せし、母の歸へるを窺つて、狼のわめく眞似してかゝりにたりけるに、母は見るより少しも騷がず、地上に端坐し、目をひしき掌を合せて、大士の名號をなん混すらに唱へて、恐るる氣色は少しも無くて、靜まりかへりて、深く禪定に入りたる人の如くなりければ、女房は是非々々畏どし驚かさんと哆き呼びて飛びまはりて、背中頭を突き當て、咽ぶへをふゝと嗅き廻りて、

び初めて、打泣き〱暮方まで呼びければ、母も堪へかねて、左な呼び玉ひぞ、人の聞きたらんには、心狂ひけるにやなど怪むべきぞ。我も餘りに呼ばるれば、氣上りして苦きに、最早靜まり玉ひてよとて宥めにたりければ、女房居直りて、襟もとかいつくろいて、母子の左宣ふを待ちてこそ侍るなれ。然らば尋ね申し度事の侍るぞとよ、左程まで人のよぶを苦しく思ぼさば、など雞鳴くを待ち兼ねて山路へ馳せ上りて、佛のみなをば呼び玉ふぞ、嘸ぞな佛の氣上りして苦しく思ぼすらん。佛と衆生とは同體なりと聞くからに、そこの喧ましと思ぼさば、など佛も喧ましと思ぼさざらめや、今迄の如く毎夜行きて呼び玉ひたらんには、必ず御咎に逢ひ玉ふべきぞ。相かまへて今日より、ふつと思ひ止りて、山路へ上り玉ひぞ。佛に賴み玉ふ事の侍らば、一二度にても、事は濟み侍るぞかし。譬へば人に事を賴まんに、如何なる愚なる人なりとも、一度二度賴まんに叶ふべき事ならましかば、叶へぬ者や有るべき。叶ふまじき事ならましかば、千度

て、自ら起きて、付けねらひて御堂の片邊に竄潜みて窺ひ探りにたるに、母は斯くとは知らで心靜に鐃鳴らして、涙を流して高聲に大慈の名號を唱へながら禮拜すること四五百禮して、伏し沈みて罪障消滅後生善處のことを繰り返し繰り返し、良久しく信實に願ひ申して、漸にして起き上りて、打泣き〲名號を唱へて、南無大悲薩埵、命あらば明日また詣で申すべきぞ、縱ひ六趣の街にさまよひ、三塗の底に沈みたりとも、必ず引導ましましてよとて、御暇申し涙を落して下向しけり。女房は案の外なりければ、力なげにてすご〲と立還りて、引きかつぎ伏し居たりけるが、屹と思ひ付きたる底にて、はね起きて、母ごぜ母ごぜと混呼に呼びかけたりければ、母も何にやはと答ゆれども、かまはで母ごぜ母ごぜとのみ云けり。夫も怪みて、女房の貌打守りて、喧しきに何事を云ふぞ、母人も六ケ布思ぼすべきぞと制すれども聞き入れず。母も初めの程は打笑みて返事も仕けるが、後には返事も仕疲かれて、默りてなんありけり。早朝より呼

は獨言して、世には心得ぬことこそあるめれ。六十なる人の佛には夜々如何なる用事やは有る。末世なれば、佛も精進おち仕玉ひて、彼の業平の中將の情深かりしを慕ひ玉ひて、つくも髪結ひ合せたる睦言やある。但し中將身得度者卽現中將而爲說法の御誓かは。其說法こそ聽聞し度けれ。母御よ曉ごとに吾が子の御迹を慕ひ申して尋ねむづかる時は、夫婦の者が持てあぐみ侍るぞとよ、夜々餘處へな行き玉ひぞ。慈悲と思ぼして、彼が心を透して給べ。佛は慈悲を貴び玉ふと聞くものを、結句詣で玉ひたるよりは御惠は深かるべきぞ。又去此不遠と聞くからに、爐の端に在りても、佛は拜まるるになど種々勸めけれども、いらへも無かりければ、如何樣指し置き難き用こそ有るめりと、彌々怪しみにたりけり。女房が斯く制するは、二つ子なれば、迹追ひと云ふことはなけれど、赤子は多くは曉方には泣くものなり。其時、母の方へ押しやりて、已れは思ふ儘に朝寢せんずる料に、斯く制するなるめり。次の夜は吾が子をば夫に懷かせ

夫を使令して憚ることなし。去る程に女房は主の如く、母と夫は從者の如くなん見へけり。母は心麗はしき者にて、後世の營みも淺からぬ者にて、里より七八町高き處に千手大悲の立せ玉ふを信じ奉りて、晝は世事暇なかりければ、鷄鳴いて詣し申して、夜中に歸りにたりければ、夫婦の者は露知らずなんありけり。何つしか夫婦が中に一子ありて、夜中泣きむづかるには、母を呼び覺まして、此の子を取りてたべ、火をなん燒き付けて見せ玉へとて、呼び驚かせども、音臭もせざりければ、夫婦怪しみ驚きて、兎角する內に、頓て母は歸りにたりけり。每夜の事なりければ淺猿や本の露末の涓にも劣り玉ふ老らくの何づ地を姪れ行き玉ふやらん。さそふ水ありてならば、憂き名を流がし玉ふべきぞ。相かまへて夜な行るき玉ひぞ。鬼一口と云ふこともあるものを抔と制しければ、母はいらへもせで打伏して居たりければ、彌々怪しみて、夫をなん起して付け窺はしめたりければ、思ひの外に山地なる御堂へ參り玉ふにぞありける。女房

は覺へぬことぞ。あら苦しや堪へ難たやとて、手を合せ〳〵許し玉へ助け玉へとて泣き悲みけるが、次第に弱りて、後は泣く音も聞へず、ぐゞと斗り言ひしが、其の翌日の暮方には事切れにけり。玄偉が死すると、土袋は己がでに地に落ちける由。聞く人、眉を皺めけるとなん。玄偉も不孝の人の果は、必ず斯ることなん有りと見もし聞もし教へる人もありて、露ばかりも恐れ愼む心あらば、孝行は叶はずとも、不孝の子となり、斯る非業の死はせまじきものを、返す返すも殘り多きことにこそあれ。去る程に、ケ樣の物語は幼稚き時より幾度も云ひ聞かするが、賢き親の子を敎ゆる道なるべし。

不孝の娶、狼と化する事

常州秩父なる處に母と夫婦となん住みけるが、萬づ倒にのみ暮しにたりけり。母は晨起きて下部にありて世事し、よめなりける者は、帳內にありて辰巳の時まで枕を高ふして寢ねけり。夫は常に女房に從ひて、恐れ仕かへ、女房は常に

けも無かりければ、誰々は無きか何某は居らざるか、よれや者どもと叫び呼ひける程に、家中俄に騒立つて、土袋に取りつき、矢聲を出せども、少しも動かず。玄偉男泣に泣き叫びて、人々よ恐ろしや土袋の上には畏ろしき鬼とかや云へる者にやはある、見馴れぬ異形の者が踞居て、兩の手をかけて、無體に推し着る故に、袋は動かぬぞとて泣き苦みければ、勝立てたる達者ものども五六人ひし〳〵と立ち並び、鬼にもせよ蛇だいにもせよ、此の御家に斯る健か者どもも有りとは、嘸ぞな耳にも聞き及びぬらん。今は目にも見よかし、我々が斯く在りながら助けまいらせぬことやあるべき。そこのき玉へ、人々よ、手並の程を見せ申さんとて、腕まくりし手に唾して立ちかゝり、矢聲をかけて撥除けんと大汗を流がして跑狂へども叶はず、土袋はいとど重くこそなれ、一寸も動かずなんありけり。玄偉は苦しげに打泣き、さなせぞ若者ども、只幾重にも異形の者に託言して、をこたり申して助けてくれよや、斯くては中々生き延ぶべしと

りける。人々恐れ入て、すくみかへりて音もせずなん伏し居たりけり。斯くとは知らで、玄偉は思ふ儘にねらひ寄りて、件の土袋を目より高くさし上げ、小聲になりて如何に二人の曲者ども、能くも〳〵言ひ合せて、あれ程には我らは折檻したりけるよな。今こそ思ひ知らするなるぞ、覺悟せよとて、二人の頭の上に和と打つけたりけるが、物の兩手を以て支へ上げたる如くにて、二人の面へは二三寸も際ありて、思ふ儘には落ちつかざりけり。玄偉は怪しく思ひ、心せきて牀上へはね上りて、兩手をかけて、ぐゞと壓しかゝりけるを、後より襟首をつかんで、がわと引き倒すよと覺へけるが、玄偉は眞仰けに成りて、土袋は乍ち腹の上に落ちかゝりて、大盤石をゆり居へたる如く一寸も働かせず。玄偉は目口を張り、手足を悶へて、ぐゝめき合へりにたりけり。父母は驚き覺めて、是は有らぬ樣なる吾が子のけしきやな。いで助けんとて立ちかかり、土袋を引き下さんとさわぎ迷ひて、推しつ挽きつ、種々力を盡せども、中々ゆるぎ

置きては、何れの日か鬱憤を散ぜんや。去ながら父が此程の働きを見るに、中々容易吾が手に殺さるべき者とも覺へず、却て吾を打殺さんずる顔色なりければ、夜に入り忍び入りて、奴原が濃寢入りたる處をねらひ濟して、一刀兩斷せんには如かじと、一筋に思ひ入りたりけるが、返して思へば、若し戈戟を以て是れを害せば、官必ず點檢して、罪吾が身に歸せん。究竟の事こそあんなれ、土袋を以て壓し殺したらんには、死屍少しも疵無けん。斯く働きすまして、天明けて後、吾が親、今夜二人ともに牀上に並死す、是れ胡爲の故と云ふことを知らずと云て、天に仰て慟哭して、近隣に告げ知らせば、誰か吾が所爲なりとせん。是れ卽ち一擧兩得萬全の上策なりと思ひ定めたるにぞ有りける。其折しも不思議や屋中陰々と屋鳴りし、外面にはどゞと蹈み鳴らし來る足音して、扃を、つとおし明けて走り入る者あり。能く〱見れば、長け一丈ばかりの赤き鬼の車輪の如くなる眼をいらゝげ、齒を咬み鳴らして奧の方へ亂れ入るにぞあ

に打殺して、上帝の御瞋をも休め上るこそ、父がせめて情けなるぞ。いろうな者どもとて、ひた打に打ちたるを、人々取すがりて、漸々として押し隔て、玄偉をば一間なる處へ抱き入れて介抱しけり。斯くて玄偉は半死半生の體にて頭を上ることも叶はで、面にはしたたか疵付けたりければ、晝夜瞋り恨みて伏し居たりけるが、常に曰く、吾が手足、本の如く快復し健かに成りたらんには、思ひ立ちたる事こそ有るめれなど云ひけるを、定めて心をも取り直して、入學德行の志も起りたるなめりと、人々私語(さゝやき)あへりけるに、斯くて二十日餘も門戶も出でずなん有りしが、一夜、大布囊を取りて土を盛ること三五斗、輕々と打傾けて、父母の寢處に忍び入りて、父母牀上に並び伏して、濃(こく)寢入りたるや否やを窺ひ探つて、拔き足し、ねらひ寄りて、眞闇き處に眼を張り、氣をつめ齒を切(くひしばつ)て立ちたるは、寒毛卓(みのけよだ)つ斗り、畏ろしき有樣にぞ有りける。玄偉が心に竊かに謂らく、吾が恨、骨髓に徹て寃を報ぜん方便を知らず、只二人の者を生けて

至極せり。逐一吾が心に叶ひにたり。我豈に彼を誡め正すこと叶はざらめやは。只今までは、誰々が子も幼稚かりつる時は、斯くこそあんなれ。十四五歳にもなりて、物の心しりたらんには、いつしか長しく成るべきものを、骨も堅からぬ者を仕置だてせんも、むご〳〵しげなど思ひて打すて置きたるぞ。實々此程の有樣を見れば、兎にも角にも持てあぐみたる者に成りたるぞ。只今見玉ひてよ、彼が目をさます程の事仕て性根を入れかへて見せんずるぞ。天道の御憤をも休め上るべきぞとて、頓て彼の曲者を呼び付け、散々に罵り誡めたりければ、玄偉も大に瞋て、あら心得ずの今日の父が雜言やな。日頃心に叶はぬ事のみ多かりつれども、假令にも親なる者をと堪宥みて赦し置きたるぞ。斯くては中々父なりとて容し置かるべきかは。いで、その瘦骨蹈折ってくれんずものをとて、立ち上りければ、父も兼て思ひこうだる事なりければ、しないおつとり散々に打擲す、鞭うつこと五十杖、終に打伏せたりけるが、斯る曲者をば、ものの序

る。此に於て孝悌忠信、教へざれども、自ら中に充つ。是れ君子、子を憐むの仁慈なり。小人は夫れとは引き違へて最愛味のみ深くして、萬事彼が心に任せて足らざらんことを恐る。左ばかりも無き事仕たるをも夥しく譽め上げ、佳賓高客有る時に、指し出口して、筋なき事言ひ散らせば、天晴我が子なりけり、憶面せぬ奴なりとて、撫で摩り、頭に上りても重からず、目に入りてもゐずからず、果は父母をも奴僕の如く見下す斗、仕餘したる者に素立成し、終に人禍天刑を蒙り、在らぬ樣なる死を遂る事也。我聞く父の瞋り睨みたる子は、佗人瞋り睨むること無く、父の責め鞭うちたる子は、天の責め鞭うつことを免るとなん云へり。天にも地にも獨り持ちたる男子なるを、今日や天罰を蒙る、明日や冥罰を受くべきと待つより外は、爲方も無き者に素立上げたる恨みしさよ。是れ皆吾が子の科にし非ず、二人の親が仕事ぞやと斷へ入る斗り泣き悲みけり。父も目をしばたたきて、熟々聞き居たりしが、勃然として曰く、和御女の言、寔に

とを顧み玉はず。彼が如きは、常に父母の肺肝を傷敗、動もすれば鄕黨朋友の心膓を惱まし痛たむ。天の罪、人にして刀鋸の質なり。資財は縱ひ五老九疑の頂を見下す斗に積み上げたりとも、彼天誅を蒙りて、遠からずして泉下の物と成らんに於ては、官に收められ、人の爲めに奪はれて、何の用をか成すに堪へんや。彼久く世に壽へて、夫婦が兎にも角にも成りたらん迹をも見屆くべき者と思ひ玉ふは、上もなき不覺悟にておはすぞとよ。吾は彼が神明の御罰を蒙り、刑戮にかからん事の目のあたりなることを恐れて、豫め哀慟するものなり。君は彼が天誅を蒙りて打斃されんずる時に、俄に嘆き苦み玉ふべきぞ。爲方も無き我が子の身の上やな。是れとても佗人の過ならめやは。皆夫婦が仕なしたることにて侍るぞかし。大凡人の子を養ふの道、父たらん者は、尋常嚴重にして、笑へども齦露はすに至らず、言へども顏色を假すことなし。一寸怠れば一尺誡め、一尺錯れば一丈責む。是故に其子常に愼み惶れて、其過多からんことを恐

く、威風の凛々たるは、南山の猛虎の如く、兒女子の容儀あるを持たる親は隱し潛めて、人をして見せしめず。彼が慕ひ來らんを恐れてなり。人の子弟の才俊なるを持たる親は謹み誡めて、妄に門閫戸庭を出さず、彼がつけねらつて、あだせんことを恐れてなり。母導けども隨はず、父誡むれども恐れず、千態萬狀只膽冷へ股戰くことのみ多かり。其母悲泣して食せざること三日、父なりける者慰喩して曰く、など斯くまでは嘆き悲み玉ふぞ。吾が子の賴もしげなきを恨み託ち玉ふなるめれ。熟々我が倉庫の積める所を計るに、彼縱ひ心に任せて一生花柳に費し盡したりとも、左のみ乏しき事も有るまじきぞ。左な嘆げき玉ひぞ。我が心初めより彼が終始を計り知ること斯の如し。彼が如きは容易急には教へ導き難し。何事も唯だ吾に任せ玉ひね。左し玉へば、吾が心も堪へ難く苦しきに抔眞成に語りにたれば、母は打泣きて、嗟已哉、吾が子既に究まんぬ。君が賴み玉ふ所は只財產の有無をのみ計り玉ひて、吾が子の災厄、身に逼るこ

萬事心の儘なりけるに、玄偉ばかりの男子なりければ、最愛ふかく、其の寵賞類も無くて、乳母なりける者三五人、侍從の女五六人、同じ年頃の童子六七人、晝夜に打圍みて、左ながら天人抔の希に下界に下りたるを、人々打寄りて渇仰し供養する如くにて大切に守素立にたりけり。次第に成人しもて行く儘に、奢の眸虎の如く、高ぶる鼻象の如く、人は瓦石たり、我は珠玉たり、人は樗櫪たり、我は樟楠たり、人は痴牛たり我は祥麟たり、人は鴟鴞たり我は鳳鸞たり。不羈無頼の惡少どもを前後に從へ、人の婦人の容色あるを見ては、故無きに其家に込み入り、酒を買ひ肉を求て、終日の飲噉笑敖す。看侍せざれば大に寇す。人の子弟の才能秀發なるを聞いては、左せる恨も無きに徒黨を率いて道路に待ち伏せして、根も無き口論を仕かけ、打擲して耻辱を與ふ。五日一妾、十日一婦、鄉黨瞋り恨みて、親戚遙に隔れり。母哭し父悲むは、家產を惜めるなり。兄疎み弟遠かるは、後難を恐れてなり。衣帶の赫々たるは、晝にある官女の如

けり。天晴れて後見けるに、桶は七八町傍に打すてありけり。死骸は二里程なる處の濱邊に首足手皆引拔きて捨て置きたりけり。其の邊の人々見つけて、是れは阿蘭陀の使ひ者なる崑崙奴（くろんぼ）と云へる者の不孝なるを雷のつかみて引きさき棄てたるなりと云へるもあり。或者の云く、頸の細く腹の脹れたるを見れば、左ながら、くろんぼとも一定し難し。是れは多分がきあみの子の色黒く不孝なるを火車のさらひ來りて、斯く計らひたるなるめり。阿蘭陀にても餓鬼阿彌にても、不孝なる者は天道の御免は無きことと相見へたり。是は能き見せしめなるぞ。人の子たらん者は皆行きて見よやとて、往來の男女引きも切らず群り來りける由。予が舊友の和尚の行脚して結城の華藏寺と云へるに逗留しける時の事にて、直に見聞きたりと物語せられけるを書留め侍べり。

河南の玄偉、土袋を以て父母を壓し殺さんとせし事

周の時、河南の富人の一子姓は王、字は玄偉なる者ありけり。其父富榮へて、

時を窺ひ、動もすれば、ずる〳〵と匍出で、薪多く取くべて、夥しく燒き上げ、
甘露の涌き出るぞ。嬉しや思ふままに給べきとて、諸手さし入れて、したたか
に燒所して、ひゝと泣き苦しむこと多かり。邊の人、燒亡や仕出すべきとて、
太麻綱もて腹を結へて、常に柱に繋付けて置きけり。斯く一年餘り苦しみ惱み
て、次第に疲れゆきて、わゝと泣きながら狂死にけり。今は女房も殊の外に乏
しかりければ、野べの送りも叶はで、健なる乞食二人傭ひて古き桶に屈め入れ
て、引導の僧もなくて、野べ送りする人も一人も無かりければ、乞食二人ばか
りにて、すご〳〵と舁き出しけるに、一町も行かぬ内に、天色俄に變じて、は
たたがみ夥しく鳴りわたりて、黑雲舞下りて、何國ともなく、つかみ行きけり。
乞食ども迯還りて、件の物語しければ、或人の云く、古來より不孝の人の死せ
るをば、必ず火車と云ふもの舞下りて、つかみもて行くことなりと耳には聞及び
にたりけれども、目のあたり打見たる事は是れぞ初なりけりとて震惶れにたり

事も有ると餅ひきちぎりて口もとへ指しつけたれば、女房の手をしたたかに打拂つて、斯る惡人やはある、夜も晝も吾が側には無くて、好からぬ方を姪行きて、偶近付くよと思へば、堅木の炭火を持て、我が口に燒き付けたるは、如何なる心ぞ。口惜しや己れが勸に依りて、母を疎みたる罰にて、斯る苦患を受けたるぞ。己れ程惡き奴は無きなど泣き叫びければ、女房怪しく思ひて、水もて與へたりければ、女よ、など左はするぞ。又茶碗に火を盛りて吾をだまして呑ませんとするか、此度は赦すまじきぞと齒を咬み鳴らして匍廻りける。女房恐れず、おことの目には火とは見ゆるめれど、寔は水なるぞ。證據には一口呑みて見玉ひねとて、むたいに口へさし付にたれば、わと叫び倒れにけるが、口の端、火ぶくれの樣にしたたかに燒き脣れにたりけり。夫れより朝湌夕湌は營みて火強く燒くを見ては悅び、匍寄りて嬉しや天の御與にて、吾が家の爐中には甘露の涌き出るぞ、目出度き事なりとて、杓もて汲み呑まんとす。女房の在らざる

ろ〳〵としたる事多くなん有りけり。女房は例の無頼の曲者なりければ、夫の斯くなりたるを、左のみ嘆きもせで、しれ笑て、吾が夫などの煩はんずるには、斯る病こそ天道の御恵なるめれ。姑子にてなんおはしける人の如くに物ほしがりて、事もせで、ひた食に行ひたらんには、二人ともに渴へ死ぬべきぞ。迚もの事に息の音の出ざらん樣の病をなん加味して欲しくこそあんなれ。夜晝の分ちもなくて、はいよ〳〵と呼ばるゝこそつらけれ。夜咄に出ても、そりの合ひたらん處には永居することも世間には間々あることとなるに、心も無げに、はいよ〳〵と哆叫ぶには飽き果て、業の沸きかへれば、立歸り來て、懲しの爲めに突き倒すことも間々多かり。近き程は人々も聞馴れ玉ひて、聞咎むる人も無ければ、打捨て置くなりとて、夜晝も思ふ儘に婬行きにたりけり。はいや〳〵とは女房の名を春となん云しを、混呼に呼びて唱へ失へるなり。夜も晝も餘りに物の欲しとて哆にたれば、もはや三十日あまりも物の與へねば、若しや通ずる

べく覺ゆるぞなど、類を集むる人も多かり。斯くて惡人は人に扶けられて、漸漸として家居に歸りたりけるが、疫熱などの如く夥しく發熱して目も明かで手足を悶へ、三日斗り惱みて苦みけるが、果ては癘症とかや云へる病を受けて、湯も水も咽に通ぜず、物の口に入れば、少し咬て呑み入れんとするに、むたいに通らず、一品の物の口中に入れては、一時も二時も呑まん〳〵と苦しみ悶へて、眼を白黒すれども叶はで、吐き出しては、わゝと泣き叫び、又つかみ拾ひて口に入れて呑まんとし、吐き出しては、わゝと泣き叫び、一頓の物に終日かかり、苦しみ跑けども、露ばかりも通はで、わゝと泣き暮しけり。次第に痩せ黑みて、咽は細く腹は脖れて、黑き德利に頭の付きたる如くなん見へけり。女房も初めの程は兎角して物與へにたりけるが、迚も通はざる物に詮も無きことなりけりとて、打捨て置きけり。惡業の所感にやありけん、一月過ぎても二月過ぎても死にもやらず、物言ふことも泣き叫ぶ聲も少しも替らで、性の根はう

りともかけて給へ、恨みしの母人やと、地空を扣きて泣き叫びけるが、近き程に乞食の法師のありけるを招き、古き唐櫃の破れ朽ちたるに屈め入れて、眞似形斗りの葬送や。內は喜び外は虛泣、泣々送り出しけるが、不思議やな家と野べとの間にて、六度まで打倒れ〳〵しけるを、見る人哀れがりて、七兵衞程の者が、流石親子の別なれば足の踏所も覺へざりつるぞや。實にや親は泣き寄りとかや。斯る時こそ眞の姿は顯はるるめれ。婆がひた泣きに泣くより、彼が泣かぬが哀れは深きぞかしなど、涙を落すも多かり。又或者は否とよ奴原程畏ろしき心の底の量り難きは無きぞとよ。縱ひ泣きても笑ひても、顚びても起きても、心元無きは夫婦が身の上なるぞや。兎にも角にも日頃積み重ねたる不孝の罪は、五度や七度顚びたる分際にて償はるべきことかは。仕合も惡しくば無間の底へも顚び入るべきぞ。世間には彼等に似たる曲者は次第に多く成り勝さることとなり。曹參閔子が面影に似たる者も無きことなるぞ。無間焦熱の張り出しの普請初まる

無くて、早くも替り玉ふ御有樣かな。何の不足のおはすれば、夫婦の者を見すて玉ひて、斯くはならせ玉ひけるぞや。げにもはれにも獨りなりける老母に捨てられ上りて、如何なるべき夫婦が身の果ぞや。今日よりは何を恃怙に永き月日を送るべきぞ。常に此の隍の邊を慰み行き玉ひにたれば、夫婦が目には寔に深き淵、薄き氷を踏み玉ふ如く見請け申しにたりければ、重ねて忘れ玉ひても、此の隍の端へ來り玉ひぞ。踏はづして落ち入り玉ひたらんには、御命は有るまじきぞ。左あらん時は夫婦の者は如何になれとの御心ぞや。相かまへて重て此へな來り玉ひぞと制し申したりしは、幾度の事ぞや。御おぼへも侍るべきぞ。然るを御聞入もおはさで、果して斯る目に逢ひ玉ひて、子共にもあらぬ憂目を見せ玉ふぞや。左無きだに親子は一世と聞くものを、あら力無の我が身の上やな。賴無の世の中やな。行かで叶はで玉はずば、夫婦の者をも具し玉ひてよ。夫れも叶はせ玉はずば、せめての事に今一度、夫婦の者か去らばよと言葉な

知りにたりければ、物おこすことは止みて、兎角して老母をなん竊に招き寄せて物與ゆるも多かり。斯くて永き月日を充ち足るべきことにしあらねば、次第に痩せ衰へて、餘所へ出ることさへ叶はで打伏してなんありけり。一夜老母は何地ともなく搔きて失せにたりしを、尋ねもせで、そこらさまよい行きて、煎茶の質に夫婦が噂物語して、日をなん暮すなるめれ。已れも噂仕あき、人も聞きあきたらんずる時は、己が手に歸りこそせめ。尋ね求めて詮なきことなるぞとて捨て置きにたりけり。何しか裏なりける隍の一丈ばかりなるに落ちて、最早事切果てにたりけり。是れは斯く堪へ難く苦しき世の中に、何つを待つとて、堪へ忍びて生き延びたりとも、老の深山の埋木に花さく春も無きものをと、浮世の中を思ひ切りて、隍の中へ身を投げて自ら死したんなるめり。夫婦は見つけ、傍へも依らで、少し引き離れ踞まり居て、痛はしや百年も生き延び玉ひても夫婦が後見をも仕玉ひてよとて、明暮大切に勞はり參らせしものを、其甲斐も

なんありけり。母は次第に老い朽ちて、手足さへ思ふ儘には叶はざりけれども、打臥し居けるには物與へぬが苦しさに、うゝとうめきながら水汲み米淅しなどして、朝飡夕飡の營みけるは、見る目も哀れにぞありける。月を添へ日を重ぬるに隨ひて、弱りもて行く老の身の物欲くて打臥しける日は次第に多くなん成りにたりけるに、此の母若き時より心ざま麗しき者なりければ、其の邊の人も最愛深く思ひければ、打伏して有りける時は、母子に參らせよとて、物送る者なん有れば、枕もとに持て行きて誰〳〵の許より母子に參らせよとて、斯る物をなんおこし侍りにたれども、老い衰へたる人に覺束なき物參らせんも、子供の身になりては、心惡くて、得參らせられこそ侍られ。吾々行ひ侍るべきぞ。御身は常の物進め給ひてよとて、朝飡の殘にたりけるを末の合子に少し斗をなん盛りて指しつけ、彼の餘所よりおこしける物をば、水もたまらずなん、夫婦して行ひ濟しにたりけり。邊の人々も夫婦の者どもが斯る働きするをなん探り

結城大工町の七兵衛、生きながら餓鬼になる事

野州の結城なる所に大工町の七兵衛となん云へる者ありけり。七兵衛は愚痴蒙味にはあれども、人に勝れて邪見なる者にぞありける。女房なりける者は、慳貪にはあれども、腹黒く情も知らぬ恐ろしき女にぞありける。老母の一人ありしを、婢妾の如く責め使ひて、朝夕の世事も皆老母の手より營み、手洗の湯までも老母の勞にぞありける。彼の女房は朝も日の貴くるまで休みて、老母の辛して營みたるを、したたか行ひすまして、扨て引き籠りて目覺ましく化裝立て、邊り八間思ふ儘に媱れ行きて、水の一提にても汲みたることは覺へこそ無けれ。只人の身の上の好惡の噂、凶事など聞き出だしては、物の設けしたる樣に喜び勇みて、一言をば十言にも云ひ添へてそこら觸れ廻りなんして、是のみ樂みて常は暮しにたりけり。偶老母の勞はる事の在りて惱み臥したる日は、傭人なん仕て世事營ませて、夫婦思ふままに行ひすまして、老母の方をば目も見やらず

り戰ひしも、儞を奪ひ返さん爲めぞかし。心を盡し名をすてゝ、儞が在り家は知りながら、儞が心一つにて、空しく歸る口惜しさ。哀れとも見よ人々と編笠とつて打ちかたげ、すご〳〵立出でけるを、見る人袖をしぼりけり。其の暮方に天色俄かに變じて畏ろしく震動し、黑雲一村彼の屋敷の上を蓋ひ籠めて、礫の如くなる運ひ雨頻りに打洒ぎて、霹靂夥だしく鳴りわたり、屋の中眞暗に成りて、一人も生きたる心地は無かりけるが、電光潮打かくる如くなる內に虛空も裂くる如くなる大雷一聲、只今落ちかゝる如くなりけるが、不思議や空中に聲ありて、天帝の勅に依て、不孝の曲者を召しとつたりと云ふ聲して、空は乍ち掃きちぎりたる如く晴れわたり、恐ろしや彼の娘なりける者は、雷火の爲めに燒かれて炭の如くに成りて失せけり。優婆なりける者も打たれて死し、近從なる女房も半死半生になりけり。是れは昨諫め導いて父に對面させざる御咎なるべしと人々膽を冷しけるとなん。

りしは皆是れ孝子の心ぞや。愚老などは、か程に郎當侍れども、犬にも馬にもならざれば、知るまじと思はんめれと、國境を出るまで、こにだの櫃にかくされしも、夫に見へける時に、守を夫に渡せしも、聞き知つて居るものを。己れが名利を飾らんと、人違での狂人での、休息も叶はぬのと、斯る不孝の心にて、日月の下に片時も立たるべしとは不覺ぞや。あしかれとは思はねど、天理は宥し給ふまじ。其の時父を恨むなよ。勇士の娘なる者が、勇士の心は持たざるや。貧しき父を持ちたりとて、夫があなどり追ひ出さば、老人が手を引もて乞食しても叶はずば飢死なんとは思はずや。斯くけぎたなき娘をば、吾が子と思ひひかされて心をくだきし悔しさよ。儞が母にてありし者の儞を出生せし時に、間もなく空しく成りし故、後室なくては叶はじと人々勸めたりけれども、更々聞き入れざりつるは、儞を繼母の手にかけじと思ひ定めし故ならずや。多くの敵を切り拔けしも、儞に逢はん爲めならずや。其後多勢に割つて入り、火出る斗

が欲目か、百人にも千人にも類も無き氣高生れ。是れが一つも相違あらば、親でもない、子でおしやらぬ。人達とおもしやつても少しも恨に存じ侍らず。去りながら女房たち、人達に決定し親子でないに究つても、老らくの身の杳々と是れまで迷ひ來りし故、以ての外に疲れ果て氣力も盡きて侍るぞかし。たとひ長屋の端になりとも一夜も二夜も取り持つて休息させて歸してたべ。此上の情ぞや。能き樣に云ひなして逢はりやうものなら、逢はせてたべ。老人が心にも成り代つても見玉へと手を束ね頭を下げ、咽びかへりて泣き居たりしに、且らくあつて女房立出で、老人が耳本に口さし寄せてつぶやきしが、何〳〵一つとして聞き入れず、休息も叶はぬとや。それ聞くまで、思ひ切つた、逢ひたうおじやらぬ。見たうない。女房たち聞き給へ。昔々去る者の母正しく犬になりけるを、愧とも思はず、包みもせず、抱きかゝへて生身の母の如くに孝養し、又去る者の父、生身の馬となりて生れしを禮儀を盡し孝養し、包みも隱しもせざ

彼は多勢、是れは無勢、吾が子の有りか知ればこそ、是非もなや、縦ひ此圖ははづしたりとも、世靜まりて後、野の末、山の奥までも尋ねさがし、我が子の有りかを見屆け、娘が貌を一目見て、夫れからは了簡次第と、二三百里が其の中を愧をさらし名をけがし、成程、娘が申す通り、左ながら狂人同前にて三年以來尋ね廻り、神明に祈り諸天に訟へ、漸〳〵として御屋敷に有りけることを聞き付け、取るものも取あへず迷ひ來りは來けれども、御覽の通りの有樣、扇一本、笠一かい、左ながら乞食同前の出立。有りかを聞きしが嬉しさに、吾が子の面ぶせなるも、一向辨へ侍らざりしぞ愧かしや。馬瘦せて毛長く人貧にして智短しとは愚老が事を申すなるめれ。只肝心は、老人が事は、江南に於ては、舒州の萬戸趙何某、年既に六十四歲、母は文林郎李何某が娘、父方の伯父趙何某、母方の伯父李誰々。乳母なりける者は、家臣王何某が女房、娘は今年二十二歲己亥の歲、左の肩先に疱瘡有つて、目の中、人に勝れ額付あでやかに、父

るぞ。先達ておとづれも仕玉はで、御使には誰かの武士か來りたるぞ。否とよ輿にも車にも御使者にも奏者にも只御年寄御一人と申し上げ侍りにたれば、御氣色惡しくて、夫れは定めて人違ひか、左なくば狂人なるべきぞ、相手にな成りぞ、斷り云て追返せと苦々布御挨拶、老らくの身の痛はしや。傍をも尋ね見玉ひねと云ひ舍て入らんとせしを引留め、辛勞には侍べるべけれども、とても の御情けに今一度申してたべ。成程娘が申す通り、我等も昔は輿にも車にも事缺く樣な者でもなし、使者も奏者も前後に從へ侍りけれども、聞きも及び玉はん、去ぬる廣運の戰に身方散々利を失ひ、知行にも別れ俸祿にも離れ、一方を切り開いて命ばかりは助かりたれども、身方は殘らず討死にす。我等も其時腹搔き破り死すべしと思ひ定め侍りしかども、只一人の娘を失ひ、途方にくれ、是非とも一度奪ひ返し一目見たらん其後は、兎にも角にも成るべしと思ひ直して、究竟の者どもを前後に從がへ智勇を振ひ、大勢を追立〳〵尋ねけれども、

日、老人あり、顏色憔悴せるあり。竊に來りて案内して曰く、誰ぞ御一人女中衆に見參致度侍べりと云ひ入れたりければ、年頃長げなる女房立出て、何國よりにて侍べる、何用のおはするにぞと尋ねにたりければ、去れば密々窺ひ申し度事の侍べり。卒爾ながら、此の御家の奥にて渡らせ玉ふ御方は、去ぬる廣運の兵亂に江南の方より殿の具し來り玉ひて、奥には備らせ玉ふにて侍らめ。中中の事、左は承り及びたんなれども、自らも今參なれば、しかぐの事は存ぜずなん侍べり。左候はゞ申してたべ、江南の方より父にて候なる者が三年以來尋ね迷ひて、漸く此の御屋形を聞き付け、三百里あなたより老人が杳々と迷ひ來りて侍べり。御覽の如く、斯く落ぶれて侍れば、面伏に思さば、夜に入りてなりとも一目逢ふてたべと好きに御申し玉ひねと腰かけに編笠打布き、賴母布に待ち居たり。且らく有りて、女房立出て、仰せ候ひける趣有增申し上げ侍れば、我が父の來らせ玉ひたらんには、輿にてか車なるか、御同勢は何程と見ゆ

なるぞとよ。傳教が付き添ひまいらせし時さへ、朝夕の煙は斷間勝なりしものを、傳教斯く成り果て侍れば、今は何にか命露をなんかけ玉ふべきやは。見舍て玉ひぞよ、人々。見舍て給はずば、傳教が在りしに違ひやは在るべき。名殘惜しや方々よ。又何つの世にか相見へつるべきやは。行かで叶はねば苦しかりし三途へ懲りもなく歸るぞかし。念佛して吾が後を助け玉へやとて、わゝと泣きながら湯壺の底に沈み入りけり。守り居ける者ども、繿の袖をしぼらざるやはある。傳教が永物語に日は能く暮にたれば、山谷も崩るゝ斗同音に念佛して、泣く〳〵歸りにけり。寔に人の子たらん者には、幾度も聞かせ度物語にぞ有りける。

父杳々尋ね來りたるを顧みざりける女、雷に打たるゝ事

宋の廣陵の探題歐陽氏何某、前年廣運の戰に婦人の容色勝れたるを見付け、促(つれ)歸て其室とす。數年の間その室の親屬なりとして尋ね來る者なかりけるに、一

の法理なるぞ。罪過は不孝に超へたるはなし。來生無間に墮する故に。德行は孝養に超へたるはなし、十方の如來を供養するに同等なる故に。衆惡は殺生に超へたるはなし、況んや人を殺さんをや。祭祀は室家の和樂なるに超へたるはなし、善神來り集る故に。不祥は夫婦別離より甚だしきはなし、天神皆瞋る故に。佛事は定坐に超へたるなし、諸天來り護する故に。善根は菩提心に超へたるはなし、諸佛摩頂し玉ふ故に。惠施は法施に超へたるはなし、同じく種智を圓にする故に。尊貴見道の人に超へたるはなし、福諸佛と等しき故に。果報は見性に超へたるはなし、量法界を包ぬる故に。是を不超の十法と云ふ。最も苦しきは見性の法理の那須の山中に今衰へたることよ。此等の趣能々記持して行て告げよ。其賞には無間永劫の苦報を宥めて、大焦熱の獄處へ遣るべきぞ。罷り立てと宣玉ふ御音は、山の崩るる如くなりければ、乍ち膽も魂も消へ入る心地なりけるが、覺へず此處へは出でたるぞかし。返すぐもいとをしきは傳教が母人

わつと見開き、雷の如くなる御音あらゝげ、なに〳〵大不孝の者那須の傳教とは儞がことよな。儞一生修したる善事は露ばかりも無く、頭は沙門に似て法文の一句をも覺へず、終に一返の經陀羅尼讀みたるためしも無く、五六歲より逆らひ戾りて母の心を痛めたるは數限も無きことなり。右罪簿に記したる條、毫釐も違ひ有るべからず。若し爭へば業鏡に映し罪秤に掛くべきぞ。積み重ねたる不孝の重罪、剩へ此曉、母を打擲しける條、言語道斷、立處に無間の底に沈むべけれども、且ばし暇を給はつて閻浮に返へし遣はすなり。儞が鄕里に歸へりたらば、吾が云ひやらんずる條、能々憶持して告げ來るべし。儞が鄕里は佛法を聞くことなき故に、殘らず三途に墮在するなり。三界の間に不孝の罪ほど重きことは無きことなるぞ。去る程に一回、父母を孝養すれば、十方の諸佛を供養し上るにも勝り、一回父母の心を破れば、四果の聖者の頭を切るよりも恐ろしき罪なり。念頃に告げ知らせよ。扨又不超の八法と云ふ事あり。此又大事

事のみ云ひ散らすぞと慢り輕したりし勿體なさよ。妻子眷屬にも上の如く云ひ消し教へ置きたれば、佛事作善營みて甲斐〴〵しく我等が菩提を問ひ弔ふことも有らじ。然らば則ち何れの月日にか斯る處を遁れ助かることの有るべき。淺猿しの今の有樣やなど口說き悲むも多かり。見渡せば、十箇所の檢斷には冥官各々威儀堂々たり。傳奏所もあり算勘所もあり。業鏡懸日月。罪秤責毫釐。苦具の列り立つことは、廣野の蘆葦の如く、火車の轟き過ることは、屠所の蒼蠅の如し。黑火の坑、紅蓮の池、心も言葉も及ぶべきことかは。思ひ出せば寒毛も卓斗(よだつ)りぞ。悲しや傳教は中央なる閻羅大王の御前に引き居へらる。大王は玉の冠、袞龍の錦の御衣大樣に、眼は臺上百錬の古鏡の如く、面は霜後一顆の熟棗に似たり。其の畏しきこと、二目と見上げらるべきことかは。冥官頭を地に付て、南閻浮提日本の邊土常州那須野の原の傳教召し捕て參つてそろと高聲に言上して、罪簿を指上げ奉れば、大王照覽まし〳〵車輪の如くなる御目をく

是れこそ彼の無間焦熱の烈火の餘焰なるぞ。かの蚊の夥く集りて群り鳴く如く、わゝと聞ゆるは、罪人どもの苦患に堪へかねて泣きわめく聲なり。押し付け儞もあの中へ交入りて、あの如くわゝと泣き苦しむべきぞ。逐一問ふに及ばぬ事ぞ。物な云ひぞ急げとて追ひ立てられて、斯る處を過ぎ行きけるに、十丈斗りも組み上げたる鐵の城門に着きぬ。仰ぎ見けるに、閻羅大城となん云へる大きなる額を打ちたれば、身の毛もよだちて恐しかりき。けたたましき獄卒の種々の罪人を引つ立て〳〵出で入るは引きも切らず。扨て彼の城門に打入りけるに、見かすむ斗り廣き大庭に罪人のこごり居たるは、百千の市野を一所に驅り集めたるが如し。貴人も高位も乞食非人も一つに追ひ込められて、其の中には出家なども多かり。透間もなく、くれ石の上に跪き居て泣き悲しむこと、目も當てられずなんあり。彼者ども口々に云へるは娑婆にて斯る恐しき處ありと露知らざりし悔しさよ。法談などに說き敎ゆるをば、尼法師の物もらはんとて筋なき

かせよとて、暫時の暇玉はりて、且らく歸り來たるなるぞ。扨ても傳教既に閻王の御使に縛れ奉りて、引立られて廣野が原を行き過ぎ、方百里も有るべき河原を通りけるに、黑く燒炭の如くなる物、或は三尺或は二尺、木にも非ず石にも非ず、透間も無く並び立ちて悲しき聲にて、ひゝと泣く聲しければ、さしのぞき見けるに、何れも目口ありて飢渴へたる底にて、手足ふるへて蠢きあへり。此れは如何なる物にて侍るぞと問へば、是れこそ偏娑婆にて聞きも及びたらん、餓鬼と云へる者なり。國王大臣長者居士にもせよ、慳貪邪見にして、父母師長を孝養せず、遁世の出家を敬まはず、乞食非人を憐まず、偏が如く指せる罪なきは地獄へは行かねど、斯る者に成りて、拘留孫佛の時より水一滴さへ呑まぬも多かり。其東西南北にどろ〳〵と鳴り轟く聲は百千の雷の如し。彼の燃へ上る焰は天を焦す斗り夥し。此所は日月の光は無けれど、皆其の焰の光にて晝よりも猶赤かり。あの轟き鳴りはためき侍るは、如何なる聲にて侍るぞと問へば、

敎が身の果やと泣き口說くも多かり。又年寄たる男女は一所に寄りつどひて、今は傳敎が後世を助くるより外は爲方こそ無けれとて、同音に念佛するも多かり。其日は皆々山の事も里の事も打忘れて騷ぎ迷ひけれども、湯壺の內は靜まりかへりて、何の音臭もなくて日は晚景に傾きにたりければ、爲方なくて皆すて歸らんとしけるに、不思議やな煙一むら湯壺の上へふす〳〵と上りけるが、湯の底恐しく鳴りとどめきて、湯玉の涌き上ること七八尺もしける中より、傳敎忽然として現はれ出でければ、皆々悅びあへりて歸りたるか傳敎、今まで生きて有るべしとは思ひ寄らざることとなるぞかし。此方へ上がれ、彼方へ來よとて周章騷ぎけるに、傳敎は息も續ぎあへず、悲しげなる聲にてさめ〴〵と打泣き、あら苦しや、堪へ方なや。傳敎は此曉母を打擲したりし罪に依りて、此儘泥梨底に沈みて、永劫の苦患を受くるぞかし。極善極惡に中有なければ、卽時に閻王の廳に赴き、直に無間に落つべけれども、儞が里の者どもに此事云ひ聞

仕けるが、如何か思ひけん、湯壺へざぶと飛び入り掉りかへり打見て、にこにこと笑つて、つと沈み入りて音も臭もせざりければ、樵ども立騒ぎて、浅猿しや興さめたる傳教が有樣かな。其儘にて最早歸らざる事にや、出でよ傳教、山路へ晩きに、永湯な仕ぞ、傳教とて叫び呼べども、更に其甲斐こそ無けれ。皆皆目を見合せて、此は如何にやはすべきぞ。山へや上るべき、里へや下るべき。母なりける人の、傳教はと問ひたらん時、如何にやは答ふべきぞと、あきれ果て凝り合て居たりけり。兎角しける内に、里人も次第に寄りつどひ指しのぞきて聲を限りに、出よや傳教〳〵返し玉ひてよなど呼び叫ぶもあり。健なる者どもは打寄り助くべき法やはある。尋常の淵瀨ならば、吾も人も打浸て尋ねさがしても見るべかりけれども、恐ろしや此湯壺は底さへ無くて、無間焦熱の釜の上まで打ち續きたりと聞き傳へたる熱湯なるものを。誰やの人か飛び入り、さがし求むる人の在るべき。「兎にも角にも可愛は傳教なるぞとよ。」爲方もなき傳

儀なるに、傳教よ迹より來よや、徐かに上るべきぞ、追ひ付きてよとて打捨て通りにたりけり。傳教は腹立ちくねりて、今日は難所の山路なるものを。伴もなくて獨りやは上らるべき、者どもよ先づ待て、只此儘にて行くべきぞとて走り出でけるを、母は立塞がりて、やをれ傳教よ、且ばし待ちてよ。山深く分け入りて、山仕業せん者が、朝支度せぬのみか、晝割子さへ持たで叶ふべきやは。今日は家に在りて骨休めせよや、其儘やりては、母も幾程か苦しきにとて、鎌刀など、もぎ取らんと仕けるを、ゑしやくもなく突き倒して、をうことり延べ、散々に打擲して、山路へ馳せ上りにたりけり。彼の山の半途なる地獄と云ふ處に湯の涌き出る處なんありけるに、今朝に限りて、夥しく湯氣の上りけるを、伴ども立ち留りて詠め居ける處へ、傳教も取り亂したる底にて追ひ付き、涌き湯呑まんとて手さし入れけるが、手引き出せば堪へ難く熱くて、手さし入るれば左も無かりければ、引き出しては指入れ、さし入れては引き出し、二三度も

の蛇つとはね上りて、張民が首に巻き纏ひければ、其外の蛇ども殘らず、ずるずるとはひ上つて、張民が通身に盡くまとひ付て、團々たる一箇の蛇の丸かせと成り、頭ばかり殘し苦みぬ。里人打寄り、解き放し得させんとて、立迷ひけれども、蛇ども目を張りて、手さしたらん者に飛びかゝるべきけしきなりければ、叶はで二日程が內、目口ばかりむぐめきて死にける由、恐るべき事なり。

那須の傳教、生きながら奈落に沈む事

近き頃、常州那須の山里に傳教となん云へる者ありけり。是れは中頃より在るなる妻帶の坊主の子なりける由。常は樵をなんして、一人の母をなん養ひけるに、一日、山へ薪に上りける朝、母寢忘れて、朝飯のおそかりけるを瞋り、呟き居る處へ伴(つれ)どもの來りて促しけるを、母はかけ出て、今朝は母が寢忘れて傳教はまだ認めざるぞ。且(しば)しは待ち合せて伴ひ行きて呉よや。最早出來たれば、今少しの間なるぞなど賴みければ、今日は遠山するに、永待仕ては、大勢の難

べき夫婦が貧しかるべきやは。魚一つ母にかくしたればとて、貧しかるべき夫婦が富み榮ゆべきやは。そこの心ばへにて、末目出度からんと計り玉ふは及びもなきことなるぞかし。神明の冥慮も在るものを、末頼もしくも覺へぬ人の心やな、面白からぬ世の中やな、爲方もなき吾が身の上やなと泣き口說きければ、張民俄に氣色替りて、あら聞度からずの管々しき繰言やな。左ばかりの事を、儞に習ふべきかは。堪へ宥みて物云はすれば、方對もなきゑせ者かな。其舌引拔きて、息の根ほさせて見すべきぞとて、取つて引き寄せけるが、不思議や生け簀の中どろ〳〵と鳴りわたりて、吃々と鳴く聲しけるが、指しのぞき見けるに、怪しやな、數多の海鰻ども皆五六尺ばかりなる蛇になりて、ひろ〳〵と舌指し出し、鎌首掉上げて、張民を見つめたりければ、張民しれ笑つて蛇にもせよ、蝦にもせよ、もと吾が海中に網打下して得たる海鰻なるもの、化したりともばけたりとも、其手や食ふべきとて生け簀の蓋引き寄せんと仕けるが、七尺斗り

のを、など斯くまではけぎたなく心強く生れ付き玉ふやらん。末頼もしくこそ覺へねと泣き口說きければ、夫の曰く、女よ小黠しく口な聞きぞ。母に得させんとて苦勞して得る海鰻ならばこそ、儞が心に任すべけれ。儞と吾と肩にも掛け口にも食にと、辛ふじて得たるものを、闇々と母に與ふる法やあるべき。去りながら、おことの母の來り玉ひたらんに、吾若し斯る働仕たらば瞋り恨み玉はんも理りなるめれ。彼は吾が母なるものを、そこの管玉ふべきことかは。やをれ女房よ、さな泣きぞ。今は母も歸りにたれば、一つも二つも得さすべきぞ。晝餉の量に捉へ行きて、煮て吾にも與へねと背打扣きけれども、聞きも入れず、御身の母にておはさば、豈に吾が母ならずやは。昨にも一つ二つ吾に給ひたらんには、綾綸子樣の物、二卷三卷たびたらんより、うれしかるべきぞ。母には隱し置きて、すご〳〵と歸へり玉ひて後、煮たらんずる物を、人心地あらん者が、一箸にても食はるべきことかは。魚一つ母に參らせたればとて、富み榮ゆ

で釣り留め置きけるぞや。夫の心も知らで小敏げに斯る働きする女やはある。實は海鰻と云へる魚を數多得たれども、母の招きもせざるに來りたるが憎さに、裏なる生け簀に藏し置きたるぞ。おことに得させ度て、母の歸るを待ちかねたりしぞ。促行きて見んとて、生け簀の許へ伴ひ行きて、生け簀の蓋を引き除きたれは、長け二三尺斗の海鰻の數限りもなく、生け簀の內に蠢き居たりけり。妻は打泣きて、あら嬉しからずの吾が夫の心根やな。此内一をだに昨にも吾に與へ玉ひたらんには、老母に幾度にも進め奉りて、悦ばせ參らすべきものを。悲しやな老らくの魚見んとて來り玉ふを、すご〳〵と歸しまいらせたる恨めしさよ。魚まいらせんとて五日まで留め置き上りて、小鮮一つをだに見せ上らで歸しやり申したりし心の內、突き裂く如く、如何ばかり苦しかりけるぞや。冥の照らしもおはしますべきぞ。昔は老母の筍欲しと宣玉ひたれば、嚴冬素雪の冬の日に篁むらの中へ分け入り、雪掻分けて泣き明したる人さへ在りと聞くも

間多きことなるぞかし。吾が子の家なるものを、人になかまい玉ひぞ。いつ迄もねまり玉ひね。張民が具したる者に侍れば、餘所にな見玉ひぞ。心使ひは無き事なるぞ。夫婦が給んずる荒々しき物も、吾が子の物なれば、甜しと思してよ。其内好き魚得ざる事やあるべき、好き魚得たらんには、熟し參らすべきぞ、人の見る目もあるものぞ。吾が斯く在りながら、容易歸へし參らする事は、努々叶ふまじきぞなど泣き口說きければ、母も其志を感じて留ること四五日すれども、終に嘉魚一つをだに母に進めず、濱よりかけり來りて、毎日虛籠をなん抛出して、如何にや此程は魚のえ難きやらん、母のおはする故にやはある。先づ今日は歸り玉ひね。重て魚のよく取れんずる時に、妻にて候者を迎ひに參らすべきぞ。其時にこそ魚をば幾等も進め參らすべきぞ。先づ此度は歸へり玉ひてよとて、母をば空しく送り歸して、杳々見送り、仕濟したる貌にて立歸りて、女房よ嬉しや母は歸へりたるぞ、何の心ぞや、向きに能く歸りける母を五日ま

母に藏しける海鰻の蛇と化して不孝の子を捲き殺す事

宋に張民となん云へる者ありけり。極めて不孝なる者なり。常に漁をなし家業として妻を養ひけるに、老母の衰へて、其兄の許に在れども、一錢の顧みもせずなん有りけり。或時、母は風と思ひ起ちて、吾が子の魚とるを見んとて、張民が家に來りけるを、張民甚だ心に悅びず。母其の志を察して家に歸らんとす。妻なりける者の曰く、あらけしからずの事やな。老らくの杖をたのみ、遙々の所をわざ〳〵來り玉ひながら、などや斯く騷々しくし玉ふやらん。思ふ儘ならば、身まからせ玉はぬ內に、二三年も四年もかけ奉りて、忠成(まめやか)に給事申し度きことよ。緣にしあればこそ、親や子とも成り參らせたる者をなど、明暮願ひ侍りけるに、自ら來り玉へるこそ嬉しけれ。張民縱ひ貧しければとて、二年三年かけ奉らする事の叶ふまじきことかは。一生かけ上りたればとて、否と云はん人やはあるべき。朝夕の煙の斷へ間勝なる家にさへ、二親かけまいらする事は

らるるは久左が行末なるぞや。頓て見玉へ人々よ。有らぬさまなる苦患を請けて餓死ぬべきぞがしとて、皆人、爪彈きしけり。其後一年も立たぬ中に、久左が半身に怪しき腫物多く出來て、痛み苦みけるが、父が身のくぼみ入りける處も數も少しも違はで、右の肩より股腰に至るまで、半身くさり入りて、膿血は間もなく流れて近づくべくもなく臭くて、譬へば死したる牛馬を犬どもの引き散らしたる邊を通る心地しけり。去る程に久左が伏しけるあたりは路行く人も息をつめ目をふさぎて驅け通りけり。晝夜苦痛に堪へかね、悲々と泣きもて、乞食しあるきけるが、ひた腐にくさりて、果ては半身みな腐りけるを、犬どものかぎつけて、好もしかりけるにや、時々食付きて泣きわめかせけり。斯くて三年ばかりも泣き苦みて死にけるとぞ。縱ひ稜石は布かず親は飢へ死なずとも、孝慈の心もなくて、博奕し、酒を呑み、婦妾を私して、父母の心を傷めたらん人は、久左が罪に違ひやう有るべき。罪同くは報も亦など同じからざらめやは。

たれば、寢られこそせね、背にて簀の竹は數へらるゝぞかし。老らくの身の苦しさは、誰が身の上にか來らすも在るべきなど恨み呟きければ、久左は立聞して、去らばとて蒭芥をびただしく抱き入れて、其上に缺け石の菱の如く稜々しきを打散らして、又其上に虛莚布きけり。老父は打泣きて口惜しの成り行く身の果てやな。斯る畜類にも劣りたる者を杖柱とも頼みて素立上げたりける悔しさよ。是は定めて吾が若かりし時、親に孝行せざりし報にや有るらん。老いさらぼいたる露の身のいつを待つとて、斯る堪へ難き月日を思ひ出もなく送るべきぞ。唯だ此儘にて朽果つべきものをと思ひ切りて打伏し、湯水も呑まず寢がへりもせで渴へ死にけり。あたりの者聞き付け、野邊の送りせんとて引き起し見けるに、彼の稜の石の當りたる處は、二三十處もくぼみ入りて、紫色に成りて死にけり。人々驚き目を見合せ、いとをしや餓死しけるも斷りなるぞや。是れ皆久左が仕わざなるぞかし。恐ろしや斯る事して報はでや在るべき、思ひや

し寄り背撫摩りて、腹な立ち玉ひぞ。御志の厚くおはするこそ嬉しけれ。母は充ち足りて給ふたるも同じ心なるぞやなど、宥め慰めけるに、朱緒は舌打して、母は吾が幼なかりしより、好き物皆吾に給ひて悦び玉ひけるぞや。母の志に任せ上るが君子百行の第一なるぞなど、ゑせ笑ひけるが、如何したりけん、風と咽び出しけるが、咽びに咽せて、ねつ起きつ苦みもがきける程に、母も妻も打驚きて、背打扣きて、湯よ水よなど周章騒げども叶はず、目口より血を流して狂ひ死にけるとぞ。

富士郡の久左、不孝の罰の事

近き頃、富士郡の中里なる處に久左となん云へる無頼の曲者ありけり。父の伏處にとて一間なる處仕つらいけるが、得も云はぬ計りに葬鹵なりけり。或る時老父の獨言に老いたる者の伏處には疊蒲團こそ及びもなけれ。蒭芥（わらくつ）など、寝好からん程の事は難からめやは。情けなの者の仕成したる事よ、虚簀（からすのこ）に虚莚敷き

したるは、如何なる物ぞ。斯る働きする女やはある。其の物見ずや置くべきとひしめきければ、去ればとよ、御事のいろひ玉ふべき事にしあらず。母御久しく乞ひ好み玉へば、菰嚢作りて進め參らするなるぞ。左のみ咎め玉ひぞ。外面へ行きて事仕玉へとて推し出しければ、否とよ。そこの母ならばこそあらめ。吾が母なるものを、いろはではあるべき。病み衰へたる人に卒爾なる物參らする法や在るべき。先づ甞めて而後進むるは、孝子の道なるぞかし。其物甞めずに進めまいらする事は叶はぬ事なるぞとて、突き除け、奪ひとりて一箸食ふては、思案ありげに首打傾け、二箸食ふては首打掉り。終に殘らず食盡くしぬ。妻は打恨みて、なにも甲斐〴〵しく物を食ひ玉はぬが悲くて、辛ふじて買ひ求めたる物を、食盡したる淺猿しさよ。恐ろしの孝子の志やな。孝ならば自ら買ひ求めて熟し進め參らすべきに、さはなくて人の漸やく買ひ調へたる物を奪ひとるなる孝行やある。末賴みなの人の心やなど打口說き泣き居たるを、母は指

にどろ〳〵屋鳴しけるが、眞暗に成りて　何國ともなく七尺ばかりの靈蛇一つ躍り出て、彼の婦の首にぐる〳〵と巻き纏いて頭は口に指し入れ、ぐくとしめつけて、尾をもて面をひた〳〵と打きければ、女は目口を張り、手足の置き處もなくもだへ苦みけり。遠近群り來りて爭ひ見けるに、男夫老者の見る時は蛇尾動かず、少婦少女の來り見る時は、蛇首左右に掉つて、彼の婦の面を打つ。婦苦みもがく事、目も當られずなん在りけり。鉗もて拔き出さんとすれば、苦痛して叶はず、目口より血を流して三日にして死しける由。

母に進むる菰羹を奪ひ食て咽び死する事

南北朝の時、秣陵と云ふ處に朱緒となん云へる者ありけり。其母病み衰へて、はか〴〵しく物も食はでありしが、日頃、菰羹となん云へる物を好みて食ひければ、朱緒が妻なりける者の兎角して菰を買ひ求めて、羹作つて母に進めんとす。朱緒、外より歸りて曰く、夫の來るを見付けて、煮熟したる物を推しかく

年も生き延び玉へかしと祝ひ呟きて、鑽火（きりび）せぬ計りに洗ひ淨めて營みたるぞや。物體なや。斯る穢き事仕たらん者が、月日の下に片時にても立たるべき事かは。敵の末になりとも、斯る忌はしき事計らふ女やはあるべき。恨みしきは母御前にて社（こそ）おはすれ。吾が進めまいらする時に、心には合ひ玉はずとも、夫の來ぬ前に迅く進め玉ひたらば、斯る喧しき事やあるべき。實の母にておはさば、幾重の事も隱くしくるめて、今の難儀はよも見せ玉はじ。世に人の娶なりける者程、淺猿しき者は無きぞとよ、身に應はぬ無實の難儀を云ひかけられても、泣より外に爲方こそなけれ。恐ろしや佛神も照覽し玉ふべきぞ。情けも無き事な宣玉ひぞ、疑ひ玉はゞ、如何なるけたたましき誓言も立つべきぞ。あら恨みしの世の中やな。畏ろしの人の心やな。苦しきものは吾が身の上なりけりなど、地空を扣いて諍かいければ、夫も餘りに泣き狂れて、あきれ果てけるにや、爲方なげに母の貌を打守りて、ほろ〱と涙をこぼしけるに、不思議や其家俄か

し付け、夫れは年寄り玉ひて口の味も違ひ臭の能も失せたるなるべし。何しに悪しき物の參らすべきぞ。夫の歸り玉はぬ内に目をねぶりて、一口に食ひ玉へ。兎角して煮たる物を參らせずやはあるべき。去るにても是非〳〵進め玉はずば爲方こそなけれ。今にも夫の來りて如何にや猪胃をば快く進め玉ひけるにやと尋ねんずる時には、相構へて忘れ玉ひぞ。姉が熟し進めにたりける程に、思ふ儘に給ひにたるぞ。久くて好き物與へにたれば、嬉しかりつるぞやなど、眞成(まめやか)にいらひ玉ひてよ。左もおはさねば、夫に對しても云ひ分こそなけれなど責めはたりける處へ、彼民歸り來りて熟々と打見て、穢らはしやな、物體なや、老い朽て目もはか〲しく見へ玉はず明日をも知らぬ人に、斯る物參らする事や在るべき。忌はしや是は正しく儞が產後の胎衣ならずや、天命も知らぬ曲者やなとて、瞋り罵りたりければ、妻は貌打赤めて、是は心得ずの事宣玉ふものかな。父にも母にも一人おはする姑御にてまし在すものを。快く進め玉ひて、百

れ程まで祈り申しつるに驗なかりしも怪しけれ。此の者の母なりける人の身に成りたらんには、起ても居ても在らるべき事かは。如何なる惡緣にや船も多きに此船に乘り合せて、堪へ難き哀れを見ける事よとて、凝り合ひて沈みけり。是より彼の船は纜を切り放ちたる如く安々と難波に着きける由。此等の事を思ふに、舟には乘らず、あやかしは付かずとも、父母の心を痛めたらんには、品こそかはれ、相應の難儀は是れ有るべき事なり。

胎衣を煮て母に進て、靈蛇口に入りける事

明の嘉靖の頃、細民あり、母の老い衰へたりけるを悲み、猪胃となん云へる物を買ひ求めて、煮て母に進め參らせよとて、妻なりける者に渡したりけるに、其妻、近頃出產しけるが、母には進めず己れなん皆食盡して、母には產後の胎衣となん云へる物の干乾してありけるを煮て熟して進めたりければ、母は貌打ち皺めて、あら氣味わるの臭の惡しさよとて打守りて居けるを、妻は彼椀をさ

拭は相違なく流れ行きけるに、彼の母を惡口したりし三津の船頭が笠ばかり引き留められて、二三返水面を廻りて、ぶる〳〵と震へて水中に入りぬ。其時、船頭、天に仰いで男泣に泣き叫びけるが、涙を押へて方々よ、男子二十六、終に指せる罪作りたる覺へこそなけれ、只一つ思ひ當りたる事の在るぞ。此曉門出しける時詮もなき雜言して母の心を痛めまいらせたりし悔しさよ。斯る事ありと知りなば、何しに母に逆ふべきぞ。悲しや天罰の早くも運り來りたる事よ、今は爲方こそ無けれ、吾獨り海底に入りて惡魚の腹の中に葬られて多くの人々を助け參らすべきぞ。痛はしや、吾が母の聞き付け玉ひたらんには、幾程の嘆なるべきぞ。去らばとよ人々と念佛して、吾が後を助け玉へやとて、泣々水中へざぶと飛び入りぬ。人々あきれて水中を打守りて、不孝の人には、斯ること在りとは聞き及びたんなれども、目のあたり甲斐〳〵しき若者を闇々と水中へ沈めたりける淺猿さよ。不孝の人は神の綱も佛の綱も切れ果つるものにや。あ

ず、船中大に驚轉して、此船にあやかしが付いたるぞや。油斷なせぞとて恐れ戰きけるに、或る者の曰く、淺猿やな人々よ、寔に一期の大事なるぞや。是は鰐と云へる曲者の船中の人を見入れたるなるぞ。斯る時には御鬮下して殘りの者は助かる樣に計ふものなるぞ。左なくては大勢の人々、一人も助かる者は有るまじきぞ。是れ船中の故實なるぞ、急げや者どもとて、船端にひし〳〵と立ち並びぬ。扨て船御鬮とは、船中の習、斯る時には乘合の人々の笠にもせよ手拭にもせよ、次第を追つて思ひ〳〵に海中へ投げ入る事なり。是は見入れられたるや見入れられざるやを試みん爲めなり。左もなき人の笠手拭は潮に隨て、寸々と流れゆき、見入れられたる人の笠手拭は引き留められて、水上を二三遍渦まき廻りて、ずぶと引き入る。此に於て人々打寄、彼の者を捉へて海底へ無對に推し入る。左なければ五日にても十日にてもぐる〳〵とぐるめき廻りて、果ては船覆て船中の人殘らず溺死する事なり。然るに不思議や餘の人々の笠手

母が錯りて猫兒の爲めに取られたるなるぞ。大事の門出なれば、何をかなと思ひけるものを、穴惡くの猫兒の仕わざやな。相構へて腹な立ちぞ。斯る時には心を取り直すが、船路の祈禱なるぞ。人の親の習ひ、纔かの陸路の門出をさへ、品々の禰祇言して巫しく祝ひ淸むる世の中なるものを、増して千尋の浪の上八重の潮路を漕行く船路なるものを、親たる者の心に疎にや思ふべき。二人とも在る子ならばこそおことが日頃賢き心にて思ひ廻して、吾が身にも成りて見よかし。如何計心苦しきに、居直りて物食ふてくれよがしなど種々宥めけれども、耳にも入れず荒心得ずの猫兒やな、大形紛も無き頭の黒き猫兒なるべきぞ抔と惡口してわめき出でぬ。斯くて海上四五里ばかりも漕出して、鼻緒の瀨戸と云へる難處にて海面俄かに畏しく成りて、眞帆七合に掛けたる大船の帆柱をも折る計强き追風に、船は碇を下したる如く、一寸も動かず、兎角する内にぐるぐると廻り出て、次第に茶臼などの廻る如くなれども、後へも前へも一尺も進ま

置く事、佛の態とやせん、神の力とや云はん。天の瞋ならんか、鬼の責ならんか。或る人曰く、鬼に非ず神に非ず、唯愚夫不孝の一念子の成す事なりと、寔に恐るべし。

不孝の船頭、鰐に見入れらるゝ事

天和の頃、豫州三津濱の船頭、大坂へ荷物積み送りける出船の宵に、船門出祝はんとて、鰺となん云へる鮮魚を調へ置きけるに、母錯りて猫兒の爲めに偷まれぬ。母は爲方なくて豆腐ばかりを煮て居たりければ、船頭曰、あら忌まはしやとて尾ひれ付きたる物こそ、船路の門出なるものを、しら豆腐煮て如何なる咒詛ぞや。吾が死にたらんにこそ、齋佛事して斯く計らひ玉へ、昨夕に調へたりつる物は、如何なる者の偷み食ひ盡しけるやらん、あら氣味わるの今朝の門出やな、斯くせられては、中々生きて還るべき事とも覺へず抔、種々曲癖云ひ散らして物も食はで起ちにたりければ、母の曰く、堪へ宥みて心好くせよや、

許へは行くべきぞ。寔は此程の心いせに吾が子の敵をとりて、せめては慰む方もやと、儞を此處へは連來りたるぞ。此處にて儞を打殺して、底の水芥と成すぞ、念佛でもせよとて、手に唾して後に廻りければ、母は目を塞ぎ手を合せて、慈悲なるぞ、助け得させよや、乞食して何つ地へも行くべきぞ。家にも在るまじきとて泣き沈みけるに、不思議や晴れわたりたる空に旱雷一聲落ちかかる如く聞へけるが、其後人臭もせざりければ、畏々眼を開き見けるに、乍ち惡人の所在を失ひつ。舟にはすご〳〵と母一人ぞ在りける。母は奇異の思をなし、茫然として途方を失ひけるが、斯くて在り果つべきにしあらねば、櫓楫取直して、泣々漕戻りぬ。漸々にして歸り來れば、屋後の李樹の下に人多く群り居て嫑なりける者の泣き叫ぶ聲しけるを、立寄り見れば、吾が子の頭に大斧打込みて捨置きたるにぞありける。熟々思ふに、究竟の男二人にては中々舁ぎ得まじき大男を音臭もせで、五六十反沖なる船中より安々と提げ持ち來つて其屋後に舍て

にか此罪の消へ盡る事のあるべき。幾重にも懺悔し詫び侍るぞ。子故の闇に迷ひたる者の事と思して、容し玉へ母人。今日よりは不通と御心に背く事は有るまじきぞ。吾が子の事も云ひ出すまじきぞ。女房よ、母に物參らせよ、此曉、好き大魚を得たれば、此程に愁ひ忘れに、いざ玉へ。舅の許へ參るべきぞ。女房よ留守せよや、暮方には母を具して歸るべきぞ抔、兎角して母を舟に駕せ漕ぎ出しぬ。船路二十反ばかり漕離れて、安二俄に氣色かはりて、舟底より大斧とり出して、母の膝元なる舟板を二ツ三ツ碎る計り打扣きて曰く、儞は能くも能くも吾が子をば、むげに殺したりしな。吾が子が生きては、儞が爲めには、幾程の障なるぞ。吾が子に如何なる恨やはある。吾が子の可愛は、儞が以前、吾を愛せしに違やはあるべき。然るを思ひきや、儞が手に掛て闇々と殺さるべしとは。吾が胸裂が如し。寢ても覺ても在るべきことかは。東西も辨ぜざる者を、如何なる罪のあればぞ、斯く計らひける、怪しさよ。何の悅ありてか舅の

猿しきなれの果なりけるとぞ。

姑蘇村の安二、自ら頭を打割る事

勸善書と云へる文に、宋の姑蘇村なる處に、安二となん云へる曲者の在りける。常に漁して家業となん仕けり。一子を得て甚だ愛鍾しけるに、其母錯りて地に落したりければ、子は立處に死にけり。安二大に瞋りて、死したる子を母が膝上に指し付けて、只今此子を生けて返すべし。左なくば儞を生けては置くまじきぞとて責はたりければ、母は泣き沈みて、食せざる事三日。如何したりけん、安二、一日和らぎ笑て、母にておはする人よ、左までになな嘆き玉ひぞ。安二終夜心を靜めて熟と思ひ連ね侍るに、命だにあらば、子は又も一人も二人も逢つべし。母にてましますす人は、一度去り玉ひにたらんには、二度見奉る事は、如何嘆きたりとも叶ふべき事かは。然るを物體なくも此程、子に思ひかへ上りて疎み申したりし悔さよ。嘸な天道も憎しと思し召すべし。何れの日何れの時

拽けども拔かず、剰へ斧の柄は愚夫が兩手に焦付たる如く付き纏いて離れず、如何がはせんと狂ひ跑けども叶はず、あきれ果てたりけり。今は爲方なさに、いかにや父にておはする人よ、少し賴み參すべきぞ。立寄りて此手をもぎ放して給、斧の柄の手に煎へ付きて如何にも離れず、思ふ樣に働かれずなん侍り。我が帶をなん把らへて後ろの方へ力の及ぶだけ、強く引き玉へ、我も力を合せて、はげみ申すべきぞとて、父子心を合せて吽き叫びて、引くに肱は拔け切るべけれども、中々離るべき樣こそ無けれ。口惜〳〵とて聲打上げて、男泣きに泣吽けり。里人打寄り助け得させんとて、走り惑ひ、種々もがけども叶はず、左て在るべきにあらねば、爲方なくて斧柄の手に握りたる後さき鋸もて引き切り連れ歸りぬ。斯くて一月二月を經るまで百端を究めて、こじ離せども離れず。後には妻も見限りて舍て去りぬ。果ては老父に手を拽れて、泣く〳〵此彼(ここかしこ)乞食して行きけるが、終に野犬の爲めに咬殺せられて、骸を道路に晒しける由。浅

大斧振り上げけるを、老父周章制して云く、卒爾な仕ぞ。我、儞が爲めに云べき事のあるぞ。我今儞が手に死なんずる事、七旬に近き身の如何にや惜む事の在るべきぞ。去りながら、儞今此處にて我を害せば、官必ず探り知つて、畏しや儞をば牛裂にすべきぞ。願くば今少し堪へ宥みて、夜に入り人靜まりて後、人知らぬ樣に計へがし。儞は吾を見る事、寃讎の如くすれども、吾が子なるものを、何しに惡しき事教ゆべきぞ。縱ひ死して骸は荒野に舍てられたりとも、吾が子の辛き責に逢はんを草露の影にて見るに忍ぶべけんやなど、理を盡して教へ導きければ、打領きて止みぬ。斯くて夜に入り人靜まりて後、最早期限は好かりけりとて、件の大斧を小脇に挾み、老父の小肱とつて引つ立ち、忽しやくもなく、ひこずり行きけるが、古き社の深沈たる老樹の下に取つて突居、此こそ儞が天命落謝の處なるぞ、覺悟せよとて、大斧振上げ、矢聲出して打ちかけけるに、如何か仕たりけん、老樹の太腹に六七寸切り込、押せども動かず、

再鞔布鼓

父を害しける斧柄、兩手に焦付く事

隋の大業年中に長安縣なる處の民、夫婦ともに天理を恐れず、因果を信せず、七旬に近き老父と五六歳なる男子と在りけり。父は老い衰へたれども、奴僕の如くになん責め使ひ、一子は色黒く見苦しけれども、如意珠の如くなん鍾愛しけり。一日、老父は、鋤打傾けて門田をなん立ち廻りけるに、彼の一子慕ひ行きて橋より落ちて溺死しぬ。老父驚き、馳せ歸り、水中に飛び入り、追ひ付き抱き上げたれども、最早事切れにたりけり。老父は爲方なくて、空しき屍を貌に推し當て泣き沈みける處へ、彼の愚夫聞き付け、大斧振り傾け、瞋り喚きて、夜叉の如くに成りて馳せ來り、老父を引起して、儞は能く〱吾が子をば害しけるよな、吾が子の敵なるものを、儞を生きてや置くべき、微塵になれと、

劫を心掛け候こそ、至極の孝行とは申す事に侍り。又好き諫を聞きては、先きの人をば見ざる習ひにそろ。去るに依て古への大禹は負販商酤牧漁奴隷の語といへども、善言を聞く時は悦び貴びて、只聞く事の晩きを憂ひ玉ひき。萬一至極の道理と思さば、秘め藏して置き、今日より前非を悔ひ惶れ、透と御改め候へば、纔かの文にても目出度寶と申すものに候。縱ひ萬兩の寶珠にもせよ、人の惑を解く事は叶はざる事にそろ。重て又手前も貴殿の如くなる惡しき癖持ちたる者の有るまじきものにても此無くそろ。此文に嗜み置き御見せ成さるべくそろ。又筋なき事に思さば、一覽の後、早速火中、其上は兎にも角にも貴殿一分の了簡次第にそろ。穴賢。

正德第四甲午歲上巳之日書

泉州信田蔭涼蘭若に於て書す

りもこれなく、年の寄るをも打忘れて、育素立て（はぐくみそだて）、近年漸く隱居いたされ、心靜に佛事の營もこれあるべき時至りて、昨の煤掃には益も無き事云散らして心に當たり氣を破ぶり、今歲越には筋なきこと思ひ立ちて、憤りの媒とならるる事、苦々しき事にそろ。世間の人は、孝行の爲めには金銀を惜まず、其詣には駕籠こそ然るべく候へ。彼佛事には某もおんとも仕るべきなど笑ひ和らぎ睦じく打見へ侍るは、外より見聞ても左も有りつべく心床しく浦山しきものに侍り。縱ひ隱居達、何程長命にそろとも、夢の浮世に如何計り年月を一處送るべしと思され候や。古より勇略兼ね備はりたる武士、孝心内に充ち、道德並びなき出家は孝慈心に備るものの由承り及びそろ。貴殿の心には人事とて筆まめに書き送りたれども、自分は七旬に餘りたる老父を持ちながら、遠國を立ち廻りて、文の便だにせざる事よと可笑思すべけれども、出家一分に取りては、とても捨て果てたる身なれば、善き知識を尋ねて晝夜に怠らず修行鍛錬し、父母未來永

以て身を亡すに足らずと申す事の侍り。總じて善事も惡事も、少しの事積りて、禍も福も罷り成る事に侍り。上の事どもは、遠方の事にて疑しくも思ほざるべく候へども、目のあたり其邊の東澤田なる處に佐次兵衞と申す者の是れ有り。若き時斧柄にて母を打擲し、即時に亂心致し、今年七十に餘り、狂人にて東澤田の十二天と申す森に淺猿しき體にて罷り在りそろ。善事何程と仕募りても後悔無之、惡事は少分の事にても後悔これあるものにそろ。諸經の中にも若し人七寶を以て二千由旬の寶塔を立て、其の中に佛舍利を安置し、十方の羅漢僧を供養すとも、ふとも一念の瞋の火起る則は、乍ち瞋火の爲めに燒かれて、焦熱大焦熱の焰を加ると社聞き及び侍り。又一切功德の林を燒く物は、瞋の火是れなりとこそ侍れ。然るに母儀には今迄指せる善根もこれなく、貴賤幼少の時より、夏冬の裝束、刀脇指の事まで心を盡くされ、解後に持佛堂に向はれ看經誦咒いたされ候にも、貴殿の息災延命をのみいのりて、後生善所の營には露ばか

孝行なる人、天の冥加を得て天紅錦囊を落し、庭に紫石英を擎け、金の釜、氷の魚、雪の笋、庭の泉、隱れも無き事どもにそろ。縱ひ孝道を修し盡くして、天の御惠を蒙る程の事は叶はずとも、不孝を盡して、天の御憎染を受けざる樣には有まじ欲しき事に候。如是の道理、目前に分明なるを見つ聞きつしながら、知らぬ貌にて心に任せて行ひもて行く人を社、愚人とも惡人とも申す事に侍り。上に書き載せたりし七八人の人々も、此等の道理を見もし聞きもし侍らば、箇程の事にも及び申すまじく。箇計の事は罪にもならじ報もあらましなど思ひて、終には神罰冥罰を蒙り、在らぬ樣なる死を遂げ、不孝の名を千載の後まで流す樣も、是只だ神慮の恐るべく天命の愼むべき事を知らざる故に侍れば、寔に殘念の事にそろ。去冬に津久美の樣子聞き付け、貴殿事、頻りに思ひ出し、驚き入り、早速申し聞けたく存じ暮し侍りしかども、然るべき便これなく、只今まで打延び罷在そろ。易に善積まざれば以て名を成すに足らず、惡も積まざれば

り今よ明よと待ち受けたる事にて侍れば、心晴しに彼が燒け黑みたるを打見ん事よと、今程は待ち兼ね□まり候ぞやと笑ひながら答へければ、何つ地にも左樣の者の多く候ぞやと語りすてゝ通りけるが、果して其の曉、雷火の爲めに打たれたる者のありける由。其外父を害せんとて振上げたりし斧の柄、兩の手に焦げ付きて死に至るまではなれざるもあり。母を害せんとて振り上げたりし斧を已れが頭打き込みたるもあり。蚯蚓羹につくりて、母に進めて、乍ち雷に打れて、頭、白猪に變じたるもあり。小兒の糞を餠にぬりて盲母に進めて、全身豚となりたるもあり。母に參らせよとて、羊の肉を買て渡しけるに、肉は已れ食ひ盡して、母には產婦の胎衣と云へる物を煮て進めて、雷に打れて死し、母を害せんとて、山路に隱し置きたりける刀の乍ち毒蛇と化して、頸に纒ひ付きて、しめ殺されたるも在り。父母を壓し殺さんとて支度したりし土袋に却て壓されて死するもあり。諸書の載するところ、際も限りも無き事に侍り。殊に又

ど呟きもて、終夜はらひ淨めければ、其の僧立寄り、如何にや斯く鬧しく事ありげに掃ひ淨め玉ふやらんと尋ねければ、さればとよ、今日此處を不孝の者の通りければ、あれ見玉へ、瑞籬の裏を蹈みたる土をば七尺八尺掘すて候ぞや。去ながら此者も近き內に天帝の御罰を蒙るべく社侍れなど物語しける內に、夜明け近く成り行きければ、彼の者ども迹形もなく成り失せける由。其後、間もなく其邊に雷火の爲めに打たれたる者有りけるとぞ。

又或る修行者、古き社の內に通夜しけるに、夜更人靜りて後、群馬の行き過ぐる聲聞へけるに、間近くなるまゝに、彼の者ども立ち留りて、澁枯たる聲にて、如何にや社の內へ申し候。兼て約諾し侍りき通り、打連れまいり候ぞや。速く御出あるべきに社と聞へければ、社の內より今夜は老人が事は御免蒙るべきに社候へ。何とて左宣給ひ候ぞ。中々の事、此處に不孝の者の候なるが、泰山府君の詔にて、此の曉、雷火の爲めに燒かるゝ筈にて侍り。此者の事は、三年あま

をと飛び出さんと仕けるが、土の中きより踵を定と捉へたる如くにて、足少しも働くこと得ず、小砂交りの土なれば、腰より下は埋まりぬ。此は如何にせんと跑けども、身體しびれわたりて動かず。あまり爲方なさに、如何に母御よ、少し賴み參らすべきぞ、吾が手を取りて引き上げて給へ。此の穴の中は土も砂も皆熱氣にて堪へ難く苦しく侍るぞやとて泣き悲みければ、母も驚き引き上げんと立迷ひけれども、次第に熱氣強く黑煙もへいで、里人ども走り付き、扶け得させんとて馳せめぐりけれども、餘焰、天を焦すばかりもへ上りければ、容易近付く事得ず。其の時、恕亮泣き叫ぶ聲、七八町が間聞へて、三日三夜苦痛して死しぬ。火靜りて後、里人ども立寄り見けるに、穴の間の土も草も生き〲として、恕亮ばかり炭の如くになりける由。

又或る僧、夜ふけて大きなる社の邊を通りけるに、長く高く怪げなる形の人、數多く頭を黃なる絹にて包み、榊の枝にて道掃ふありけり。穴忌はし、穴穢しな

教へよやとて抱上ければ、母が方へ指し、又頓て妻を取つて引き伏せ、膝の下に押し敷き、我が子は儞が爲めには敵なりけるにや、疵付けたる奇怪さよと號叫びければ、妻の曰、左な卒爾な仕玉ひぞ、老母の錯りてと漸くに云分ければ、穴腹立やな、死なぬだに晩しと忌はしかりしに、吾が子に疵付ける奇怪さよ、吾が子は母が爲めには寃(あだ)なりけるにやとて狂ひ出でけるが、翌日、弟の許へ行きて、さらぬ體にて、いかにや母御は是に御わたりましますやらん。究竟の事社(こそ)侍れ、物詣仕玉へ。恕亮が御迎に參りたるぞやとて誘ひければ、母は心に疑はしく思ひながら、畏々伴なひ出でぬ。恕亮道にて申しけるは、母御よ悦び玉へ、恕亮此處にて目出度寶物多く掘出し侍れば、明よりは福人とも有德人とも仰がれ申すべきぞやとて、山際の畏ろしき處を六尺ばかり堀窠めたる處を指して、是見玉へ、さしのぞき玉へとて、頓て母を捉へて押し落さんと仕けるが、如何に仕たりけん、自身穴の中へ落ち入り、口惜しや儞をこそ此内へ入るべきもの

もなく云ひ滅して歸り侍り。寔に苦々布事どもにそろ。此頃の風說は、佛神の加護にて命に障も無く、氣分も能く成り侍れど、目も腐り耳も聞へず、何の生甲斐も無き者に成り果て侍る由。

漢陰の恕亮、生ながら火坑に墜入る事。

昔し唐土の漢陰と云處に恕亮となん云へる者有けり。殊の外に不當なる者にて、母も妻も尋常心を苦め、三歲になりける男子をなん一人持て平生寵愛しけるに、或る時、恕亮が留守に彼の子の面に、妻錯りて疵をなん付けたりけるが、穴淺猿、恕亮歸り玉ひたらんには、如何なる憂目をか見んずらん、如かじ如何なる淵瀨にも身を沈めんにはと泣き悲みければ、老母の云く、左な嘆き玉ひぞ、老母の錯とてと云ひ玉はゞ、左程の事も有るまじきぞ。併しながら吾は且らく弟の許に行きて隱れ忍び候はんとて出でぬ。恕亮外より歸りて、彼の疵を見付て怪しや、如何にして儞が面には疵付けたりけるぞ、何者の態なるぞ。吾が子よ

赤く燒き立て、焰の飛び散る計なるを、靑き色の鎚にて、吾が肩へ打込み候。其時に社、目も暗み息も斷へ、言ふ計りなく苦しく覺へ侍り。是れ見玉へ、今とても痛みほめき候ぞやとて、肩さし出しければ、回り四寸四方程、紫色にて、內一寸四方も黑く、灸の如くなりければ、穴淺猿、如何なる祟にや、斯る苦患受ける事よとて泣き悲み、藥よ祈よなど驚き合へりけるに、其夜も亦昨夜に少しも替らで相煩ひ、此より每夜の事なりければ、肩の紫色なるは、段々に廣く痛みも次第に强く、熱氣餘りに强かりければ、舌も焦れ息も臭、髮毛も拔け果て、目も當てられぬ體に成り行き、有德なる者に侍れば、醫者も驗者も夥布く金銀を入れ侍れど、其驗さへ無くて、我等罷在ける寺へも祈禱賴參りければ、寺中打寄、終夜秘術を盡し祈念し、翌朝洗米とりに老夫に、如何にや昨夜は快かりけるにやと尋たりければ、否とよ昨夜はとりわけ煩ひけるぞや。親の罸うけたる者には祈も祭も驗無き習なるぞや。左のみ汗水出して祈玉ひぞと、何げ

立てけるに、何事をか言募りけん、母と口論いたし、母の髪の毛など少々引き抜き、剩へ母儀の肩先きへ物の縫針推立、彼れ此れ仕ける内に、母は折死しけるを、人々打寄り貌に水洒ぎなどして、漸くに人心地付きたり。去れども親子の間なれば何事なく靜りき。其の夜四ツ半時分に、彼の一子俄かに泣き叫び、戰栗、穴畏布、御免在るべきにて社候へ。全く某甲が錯にて社候へとて、夥しく泣き悲み全體より大汗を流がして相煩ひ、夜深る程强く、折々節死しける程に、村中殊の外騷動す。然れども翌朝は少し熱も醒たりければ、人々打寄り、如何にや夜前はあれ程には煩み苦み玉ひけるぞと尋ねければ、去ればとよ、昨夜夢現ともなく衣冠正しき老人、白き直垂に黑き履着たるが、見苦しく畏ろしき異形の者ども、數多具し來り、御使なるに、心に任せて計ひ候へと下知しければ、彼の者ども靑き團扇にて扇ぐよと見へしが、其の風の熱き事燒け付く如く苦布く堪へ難く覺へ侍り。又一人鬼形の者來りて、八寸も有るべき鐵の釘の

贈不孝子書

道號記、吾等まかりかへりそろ刻、持參可仕候へども、老人の事、片時も早く御目に掛度先達指下し候、氣遣しく存じ候は、貴殿例の癖にて候へば、年寄の似合はざる道號法名益も無き事に侍り抔と申さるべき歟と、是のみ心元なく存じ候。萬一左樣にては、道號の記にては是無く、却て惡業の基と申す物に候。大形、達は是れ有るまじくそろ。貴殿は近年惡布曲出來そろて、動すれば不孝なる事云募り、隱居達の心を痛められ候事、寔以苦々しき事に候。貴殿の如くなる惡き癖持たる人を社、惡人とも不孝人とも申す事にそろ。天命と云事も神罰と云事も此有る事と思召さるべくそろ。我等當春まで罷在そろ處は、泉州信田と申す處にて候。其の近き里に津久美とかや云へる處の富人の一子、去年十九歲、器量も勝りし發明の生付き侍れば、一家の人々寵愛し、大切に護り素立侍りけるに、父は二三年前相果て、去冬祝言の用意これあり、夜着蒲團など仕

結城大工町の七兵衞、生ながら餓鬼になる事。

河南の玄偉、土袋を以て父母を壓し殺さんとせし事。

不孝の娶、狼と化する事。

布鼓目錄

延享第四丁卯小春廿五日。

り、父母旦暮に憂惱す。予時に泉州信田の僧廬に在り。長書を裁して是に投ず。渡氏甚感激して、忽ち不孝を改めて孝子と成る。嘉時吉日には衣を改め机を拂て、彼文を出して大賓に對するが如く、謹で是を看讀す。予が歸國の後、親む事、骨肉の如くす。予、彼の文を入れける袋に布鼓といへる二字を題しき。渡氏、一日物語しけるは、布つゞみの文字、初の程は怪き事に思ひ侍りき。ひたすらに熟讀して、此程は至極貴く目出度事に覺へ侍りとて、歡喜のいろ面に溢れ□□ければ、予も又諸とも悦びあへりき。彼の息今此文を家寶の如くす。吉例にも侍れば、借よせ寫させ、是を序でに、人々の勸善懲惡の助けにも成れかしとて、予が草廬へ往來の老人達の望に任せ、此度又々思ひ當りたる事ども書添爲ㇾ寫遣候。面白思さば、彼渡氏が如く時々熟讀して、目出度孝道を修せらるべく候。布つゞみの秘調、與ㇾ風、耳に入る事もこれ有るべく候。さも無き事に侍らば、早速此方へ返進可有之候。穴賢。

此惑ひ、賢愚共に免れざる大患なり。然るに利き者の惑ひは、猛虎などのあやまりて陥穽の中におち入るべきに、筋力健なる故に、立地に躍出して、皮毛をも損せず。愚者の惑へるは、疲倦の野干などの陥井の中におち入が如し。筋力乏しき故に、超過する事得ず。終に坑中に顚死す。利き者もまた然り。一旦不孝の惑ひ有りといへども、長者の誡を恐れ、善人の教に随て、忽ち其行を改め、終に孝悌忠恕人と成りて、天道の愛顧を蒙り、神明の冥助を受け、天是に賜ふに多福を以てし、地是に與るに長壽を以てして、果して賢良の名を全ふす。愚者は是に反す。一旦不孝の惑ひに墜ち入る時は、長者の誡を恐れず、善人の諫を容れず。日に戻て月に逆て、終に天刑を蒙り、神誅を招いて、起つ事なきに到る。賢愚は初め隔て有る事なし。唯諫に隨ふと隨ざるとにあるらくのみ。吾子もまた近頃少しく此惑に罹つて、親戚の人々眉を皺るに到ると。寔に透過し難き關鎖なるべし。四十年前、予が童形の友渡氏なる者あり。此重痾におち入

布鼓

布つゞみの序

譬へば十圍の木を截るが如し。一斧斤にして倒るゆゑむの者にあらず。丁々休まざる時は、俄然として倒る。其たほるゝ時に當て、近隣の子弟を傭て是を拄といへども、拄へ起す事能はず。六尺の身を亡すが如し。一不善にして亡るゆゑむの者にあらず。行々息まざる時は、忽乎としてほろぶ。其亡る時に當て、上下の神祇に祈て是を救ふといへども、扶け得る事能はず。是故に易に曰、善もつまざれば、以て名をなすに足らず、惡も積まざれば、以て身を亡すに足らず。小人は小善を以て益なしと念てせず。小惡を以て傷ひなしと念て去けず。故に惡つむで掩べからず。罪大にして解くべからず。大凡人の子弟の身を亡すわけを見るに、多くは不孝の罪に依れり。不孝の罪は必ず華酒の惑ひによれり。

第五卷目次終

口繪目次　（七頁）

目次

白隱和尚全集　第五卷

目次

白隠和尚作『三聖の圖』

（東京 石井光雄氏藏）

遠羅天釜　卷之上

答鍋嶋攝州殿下近侍書

月之昨八遠路御使札增取御
勇健ニテ朝鮮人御馳走首尾ヨク相
濟ミ御安堵ノ旨一段御喜ニ候草
盧恙ナク罷リ在リ候是又高慮ヲ

白隱和尙自筆刻本『遠羅天釜』初丁

（東京石井光雄氏藏）

邊鄙以知吾　卷之上

何某の國何城の大主
何姓何某侯の閣下草稿
近侍の需めに應ぜし
先回も久しふまもて高の
面謁を鋪綫へ增道中

白隱和尙自筆刻本『邊鄙以知吾』初丁

（東京石井光雄氏藏）

白隠和尚自筆刻本『夜船閑話』序の末葉並に本文初丁（東京石井光雄氏蔵）

白隱和尙作『お福の土像』

（伊豆 深澤貞吉氏藏）

〔上圖〕白隱和尙筆木額（伊豆 龍澤寺藏）

〔下圖〕白隱和尙筆木額（駿河 松蔭寺藏）

伊豆國龍澤寺禪堂

駿河國松蔭寺本堂（右）と開山堂（左）

白隱和尚全集編纂會編

白隱和尚全集

第五卷

東京

龍吟社版